

芥川龍之介 短篇輯

装幀 大賀 肇

目次

[illegible]

芋粥

(新字旧仮名)

芥川龍之介

初出 大正五年九月

1、芋粥

元慶ぐわんぎやうの末か、仁和にんなの始にあつた話であらう。どちらにしても時代はさして、この話に大事な役を、勤めてゐない。読者は唯、平安朝と云ふ、遠い昔が背景になつてゐると云ふ事を、知つてさへゐてくれれば、よいのである。――その頃、摂政藤原基経もとつねに仕へてゐる侍の中に、某なにがしと云ふ五位があつた。

これも、某と書かずに、何の誰と、ちゃんと姓名を明にしたいのであるが、生憎旧記あいにくには、それが伝はつてゐない。恐らくは、實際、伝はる資格がない程、平凡な男だつたのであらう。一体旧記の著者などと云ふ者は、平凡な人間や話に、余り興味を持たなかつたらしい。この点で、彼等と、日本の自然派の作家とは、大分ちがふ。王朝時代の小説家は、存外、閑人ひまじんでない。――兎に角、摂政藤原基経に仕へてゐる侍の中に、某と云ふ五位があつた。これが、この話の主人公である。

五位は、風采の甚はなはだ揚あがらない男であつた。第一背が低い。それから赤鼻で、眼尻が下つてゐる。口髭は勿論薄い。頬が、こけてゐるから、頤あごが、人並はづれて、細く見える。唇は――一々、数へ立ててゐれば、際限はない。我五位の外貌はそれ程、非凡に、だらしなく、出来上つてゐたのである。

この男が、何時いつ、どうして、基経に仕へるやうになつたのか、それは誰も知つてゐない。が、余程以前から、同じやうな色の褪さめた水干すゐかんに、同じやうな菱なえなえ々した烏帽子ゑぼしをかけて、

同じやうな役目を、飽きずに、毎日、繰返してゐる事だけは、確である。その結果であらう、今では、誰が見ても、この男に若い時があつたとは思はれない。(五位は四十を越してゐた。)その代り、生れた時から、あの通り寒むさうな赤鼻と、形ばかりの口髭とを、朱雀大路おほぢちまたかぜの衢風に、吹かせてゐたと云ふ氣がする。上は主人かみの基經から、下は牛飼しもの童児すざくまで、無意識ながら、悉ことごとくさう信じて疑ふ者が無い。

かう云ふ風采を具へた男が、周囲から受ける待遇は、恐らく書くまでもないことであらう。侍所さむらいどころにゐる連中は、五位に対して、殆ど蠅程はへの注意も払はない。有位無位うゐむゐ、併せて二十人に近い下役さへ、彼の出入りには、不思議な位、冷淡を極めてゐる。五位が何か云ひつけても、決して彼等同志の雑談をやめた事はない。彼等にとつては、空氣の存在が見えないやうに、五位の存在も、眼を遮さへらないのであらう。下役でさへさうだとすれば、別当とか、侍所の司つかさどとか云ふ上役たちが頭から彼を相手にしないのは、寧ろ自然むしの数すうである。彼等は、五位に対すると、殆ど、子供らしい無意味な悪意を、冷然とした表情の後に隠して、何を云ふのでも、手真似だけで用を足した。人間に、言語があるのは、偶然ではない。従つて、彼等も手真似では用を弁じない事が、時々ある。が、彼等は、それを全然五位の悟性に、欠陥があるからだと思つてゐるらしい。そこで彼等は用が足りないと、この男の歪んだ揉烏帽子もみの先から、切れかかつた藁草履わらぢうりの尻まで、万遍なく見上げたり、

1、芋粥

見下したりして、それから、鼻で哂ひながら、急に後を向いてしまふ。それでも、五位は、腹を立てた事がない。彼は、一切の不正を、不正として感じない程、意気地のない、臆病な人間だつたのである。

所が、同僚の侍たちになると、進んで、彼を翻弄しようとした。年かきの同僚が、彼れの振はない風采を材料にして、古い洒落を聞かせようとする如く、年下の同僚も、亦それを機会にして、所謂興言利口の練習をしようとしたからである。彼等は、この五位の面前で、その鼻と口髭と、烏帽子と水干とを、品隠して飽きる事を知らなかつた。そればかりではない。彼が五六年前に別れたうけ唇の女房と、その女房と関係があつたと云ふ酒のみの法師とも、屢彼等の話題になつた。その上、どうかすると、彼等は甚、性質の悪い悪戯さへする。それを今一々、列記する事は出来ない。が、彼の篠枝の酒を飲んで、後へ尿を入れて置いたと云ふ事を書けば、その外は凡、想像される事だらうと思ふ。

しかし、五位はこれらの擲揄に対して、全然無感覚であつた。少くもわき眼には、無感覚であるらしく思はれた。彼は何を云はれても、顔の色さへ変へた事がない。黙つて例の薄い口髭を撫でながら、するだけの事をしてすましてゐる。唯、同僚の悪戯が、嵩じすぎて、髭に紙切れをついたり、太刀の鞘に草履を結びつけたりすると、彼は笑ふのか、泣くのか、わからないやうな笑顔をして、「いけぬのう、お身たちは。」と云ふ。その顔を見、

その声を聞いた者は、誰でも一時或いぢらしさに打たれてしまふ。（彼等にいぢめられるのは、一人、この赤鼻の五位だけではない、彼等の知らない誰かが――多数の誰かが、彼の顔と声とを借りて、彼等の無情を責めてゐる。）――「さう云ふ氣が、おぼろ臃げながら、彼等の心に、一瞬の間、しみこんで来るからである。唯その時の心もちを、何時までも持続ける者は甚少い。その少い中の一人に、或無位の侍があつた。これは丹波たんばの国から来た男で、まだ柔かい口髭が、やつと鼻の下に、生えかかつた位の青年である。勿論、この男も始めは皆と一しよに、何の理由もなく、赤鼻の五位を輕蔑けいべつした。所が、或日何かの折に、「いけぬのう、お身たちは」と云ふ声を聞いてからは、どうしても、それが頭を離れない。それ以来、この男の眼にだけは、五位が全く別人として、映るやうになつた。榮養の不足した、血色の悪い、間のぬけた五位の顔にも、世間の迫害にべそを搔いた、「人間」が覗いてゐるからである。この無位の侍には、五位の事を考へる度に、世の中のすべてのが急に本来の下等さを露あらはすやうに思はれた。さうしてそれと同時に霜げた赤鼻と数へる程の口髭とが何となく一味いちみの慰安を自分の心に伝へてくれるやうに思はれた。……

しかし、それは、唯この男一人に、限つた事である。かう云ふ例外を除けば、五位は、依然として周囲の輕蔑の中に、犬のやうな生活が続けて行かなければならなかつた。第一彼には着物らしい着物が一つもない。青鈍あをにびの水干と、同じ色の指貫さしぬきとが一つつつあるのが、

1、芋粥

今ではそれが上白^{うはしろ}んで、藍^{あゐ}とも紺^{くろ}とも、つかないやうな色に、なつてゐる。水干はそれでも、肩が少し落ちて、丸組の緒や菊綴^{きくとしち}の色が怪しくなつてゐるだけだが、指貫になると、裾のあたりのいたみ方が一通りでない。その指貫の中から、下の袴もはかない、細い足が出てゐるのを見ると、口の悪い同僚でなくとも、瘦公卿の車を牽^ひいてゐる、瘦牛の歩みを見るやうな、みすばらしい心もちがする。それに佩^はいてゐる太刀も、頗る覺束^{おぼつか}ない物で、柄^{つか}の金具も如何^{いか}はしければ、黒鞘の塗も剥げかかつてゐる。これが例の赤鼻で、だらしく草履をひきずりながら、唯でさへ猫背なのを、一層寒空の下に背ぐくまつて、もの欲しさうに、左右を眺め眺め、きざみ足に歩くのだから、通りがかりの物売りまで莫迦^{ばか}にするのも、無理はない。現に、かう云ふ事さへあつた。……

或る日、五位が三条坊門を神泉苑の方へ行く所で、子供が六七人、路ばたに集つて、何かしてゐるのを見た事がある。「こまつぶり」でも、廻してゐるのかと思つて、後ろから覗いて見ると、何処^{どこ}かから迷つて来た、彪犬^{むくいぬ}の首へ縄をつけて、打つたり殴^{たた}いたりしてゐるのであつた。臆病な五位は、これまで何かに同情を寄せる事があつても、あたりへ気を兼ねて、まだ一度もそれを行爲に現はしたことがない。が、この時だけは相手が子供だと云ふので、幾分か勇氣が出た。そこで出来るだけ、笑顔をつくりながら、年かさらしい子供の肩を叩いて、「もう、堪忍してやりなされ。犬も打たれれば、痛いでのう」と声をかけ

た。すると、その子供はふりかへりながら、上眼を使つて、蔑^{さげ}すむやうに、ぢろぢろ五位の姿を見た。云はば侍所の別当が用の通じない時に、この男を見るやうな顔をして、見たのである。「いらぬ世話はやかれたうもない。」その子供は一足下りながら、高慢な唇を反らせて、かう云つた。「何ぢや、この鼻赤めが。」五位はこの語^{ことば}が自分の顔を打つたやうに感じた。が、それは悪態をつかれて、腹が立つたからでは毛頭ない。云はなくともいい事を云つて、恥をかけた自分が、情なくなつたからである。彼は、きまりが悪いのを苦しい笑顔に隠しながら、黙つて、又、神泉苑の方へ歩き出した。後では、子供が、六七人、肩を寄せて、「べつかつかう」をしたり、舌を出したりしてゐる。勿論彼はそんな事を知らない。知つてゐたにしても、それが、この意気地のない五位にとつて、何であらう。……

では、この話の主人公は、唯、軽蔑される為にのみ生れて来た人間で、別に何の希望も持つてゐないかと云ふと、さうでもない。五位は五六年前から芋粥^{いもがゆ}と云ふ物に、異常な執着を持つてゐる。芋粥とは山の芋を中に切込んで、それを甘葛^{あまづら}の汁で煮た、粥の事を云ふのである。当時はこれが、無上の佳味として、上は万乗^{ばんじよう}の君の食膳にさへ、上せられた。従つて、吾五位の如き人間の口へは、年に一度、臨時の客の折にしか、はいらない。その時でさへ、飲めるのは僅に喉^{のど}を沾^{うるほ}すに足る程の少量である。そこで芋粥を飽きる程飲んで見たいと云ふ事が、久しい前から、彼の唯一の欲望になつてゐた。勿論、彼は、それを誰

1、芋粥

にも話した事がない。いや彼自身さへそれが、彼の一生を貫いてゐる欲望だとは、明白に意識しなかつた事であらう。が事實は彼がその為に、生きてゐると云つても、差支ない程であつた。——人間は、時として、充されるか充されないか、わからない欲望の為に、一生を捧げてしまふ。その愚を哂ふ者は、畢竟、人生に対する路傍の人に過ぎない。

しかし、五位が夢想してゐた、「芋粥に飽かむ」事は、存外容易に事實となつて現れた。その始終を書かうと云ふのが、芋粥の話の目的なのである。

或年の正月二日、基経の第に、所謂臨時の客があつた時の事である。（臨時の客は二宮の大饗と同日に摂政関白家が、大臣以下の上達部を招いて催す饗宴で、大饗と別に vari がない。）五位も、外の侍たちにまじつて、その残肴の相伴をした。当時はまだ、取食みの習慣がなくて、残肴は、その家の侍が一堂に集まつて、食ふ事になつてゐたからである。尤も、大饗に等しいと云つても昔の事だから、品数の多い割りに碌な物はない、餅、伏菟、蒸鮑、干鳥、宇治の氷魚、近江の鮎、鯛の楚割、鮭の内子、焼蛸、大海老、大柑子、小柑子、橘、串柿などの類である。唯、その中に、例の芋粥があつた。五位は毎年、この芋粥

を楽しみにしてゐる。が、何時も人数が多いので、自分が飲めるのは、いくらもない。それが今年は、特に、少かつた。さうして気のせるか、何時もより、余程味が好い。そこで、彼は飲んでしまつた後の椀をしげしげと眺めながら、うすい口髭についてゐる滴を、掌で拭いて誰に云ふともなく、「何時になつたら、これに飽ける事かのう」と、かう云つた。

「大夫殿は、芋粥に飽かれた事がないさうな。」

五位の語が完らない中に、誰かが、嘲笑つた。鏑のある、鷹揚な、武人らしい声である。五位は、猫背の首を挙げて、臆病らしく、その人の方を見た。声の主は、その頃同じ基経の恪勤になつてゐた、民部卿時長の子藤原利仁である。肩幅の広い、身長みのたけの群を抜いた遅たぐましい大男で、これは、煤栗ゆでぐりを噛みながら、黒酒くろきの杯さかずきを重ねてゐた。もう大分酔がまはつてゐるらしい。

「お気の毒な事ぢやの。」

利仁は、五位が顔を挙げたのを見ると、軽蔑と憐憫れんぴんとを一つにしたやうな声で、語を継いだ。

「お望みなら、利仁がお飽かせ申さう。」

始終、いぢめられてゐる犬は、たまに肉を貰つても容易によりつかない。五位は、例の笑ふのか、泣くのか、わからないやうな笑顔をして、利仁の顔と、空からの椀とを等分に見比

べてゐた。

「おいやかな。」

「……」

「どうぢや。」

「……」

五位は、その中に、衆人の視線が、自分の上に、集まつてゐるのを感じ出した。答へ方一つで、又、一同の嘲弄を、受けなければならぬ。或は、どう答へても、結局、莫迦ばかにされさうな氣さへする。彼は躊躇ちうちよした。もし、その時に、相手が、少し面倒臭めんどくさいそうな声で、「おいやなら、たつてとは申すまい」と云はなかつたなら、五位は、何時いつまでも、腕と利仁とを、見比べてゐた事であらう。

彼は、それを聞くと、慌あわただしく答へた。

「いや……かたじけな 忝うづぢや。」

1、芋粥

この問答を聞いてゐた者は、皆、一時に、失笑した。「いや……忝うづぢや。」——か
う云つて、五位の答を、真似る者さへある。所謂、橙黄橘紅とうくわうきつこうを盛つた窪坏くぼつきや高坏の上に多

くの揉烏帽子もみや立烏帽子たてが、笑声と共に一しきり、波のやうに動いた。中でも、最もつとも、大きな声で、機嫌よく、笑つたのは、利仁自身である。

「では、その中に、御誘ひ申さう。」

さう云ひながら、彼は、ちよいと顔をしかめた。こみ上げて来る笑と今飲んだ酒とが、喉で一つになつたからである。

「……しかと、よろしいな。」

「忝うござる。」

五位は赤くなつて、吃どもりながら、又、前の答を繰返した。一同が今度も、笑つたのは、云ふまでもない。それが云はせたさに、わざわざ念を押した当の利仁に至つては、前よりも一層可笑をかしさうに広い肩をゆすつて、哄笑こうせうした。この朔北さくほくの野人は、生活の方法を二つしか心得てゐない。一つは酒を飲む事で、他の一つは笑ふ事である。

しかし幸さいはひに談話の中心は、程なく、この二人を離れてしまった。これは事によると、外の連中が、たとひ嘲弄にしろ、一同の注意をこの赤鼻の五位に集中させるのが、不快だつたからかも知れない。兎に角、談柄だんべいはそれからそれへと移つて、酒も肴さかなも残少のこりすくなになつ

1、芋粥

た時分には、某なにかしと云ふ侍学生がくしやうが、行膝むかばきの片皮へ、両足を入れて馬に乗らうとした話が、一座の興味を集めてゐた。が、五位だけは、まるで外の話が聞えないらしい。恐らく芋粥の二字が、彼のすべての思量を支配してゐるからであらう。前に雉子きぎすの炙やいたのがあつても、箸をつけない。黒酒の杯があつても、口を触れない。彼は、唯、両手を膝の上に置いて、見合ひをする娘のやうに霜に犯されかかつた鬢びんの辺まで、初心うぶらしく上気しながら、何時までも空になつた黒塗の腕を見つめて、多愛もなく、微笑してゐるのである。……

それから、四五日たつた日の午前、加茂川の河原に沿つて、栗田口あはたぐちへ通ふ街道を、静に馬を進めてゆく二人の男があつた。一人は濃い縹はなだの狩衣かりぎぬに同じ色の袴をして、打出うちでの太刀を佩はいた「鬚黒く鬢びんぐきよき」男である。もう一人は、みすばらしい青鈍あをにびの水干に、薄綿ようめんの衣きぬを二つばかり重ねて着た、四十恰好の侍で、これは、帯のむすび方のだらしのない容よう子すと云ひ、赤鼻あなはなでしかも穴のあたりが、洩はなにぬれてゐる容子と云ひ、身のまはり万端のみすばらしい事夥おびただしい。尤も、馬は二人とも、前のは月毛つきげ、後のは蘆毛あしげの三歳駒で、道をゆく物売りや侍も、振向いて見る程の駿足である。その後から又二人、馬の歩みに遅れま

いとして随ついて行くのは、調度掛と舎人とねりとに相違ない。――これが、利仁と五位との一行である事は、わざわざ、ここに断るまでもない話であらう。

冬とは云ひながら、物静に晴れた日で、白けた河原の石の間、潺湲せんくわんたる水の辺ほとりに立枯れてゐる蓬よもぎの葉を、ゆする程の風もない。川に臨んだ背の低い柳は、葉のない枝に飴あめの如く滑かな日の光りをうけて、梢こずえにゐる鵲せきれいの尾を動かすのさへ、鮮かに、それと、影を街道に落してゐる。東山の暗い緑の上に、霜に焦げた天鷲びろうど絨のやうな肩を、丸々と出してゐるのは、大方、比叡ひえいの山であらう。二人はその中に鞍くらの螺鈿らでんを、まばゆく日にきらめかせながら鞭をも加へず悠々と、栗田口を指して行くのである。

「どこでござるかな、手前をつれて行つて、やらうと仰せられるのは。」五位が馴れない手に手綱をかいくりながら、云つた。

「すぐ、そこちや。お案じになる程遠くはない。」

「すると、栗田口辺でござるかな。」

「まづ、さう思はれたがよろしからう。」

利仁は今朝五位を誘ふのに、東山の近くに湯の湧いてゐる所があるから、そこへ行かう

1、芋粥

と云つて出て来たのである。赤鼻の五位は、それを真まにうけた。久しく湯にはいらないので、体中がこの間からむづ痒がゆい。芋粥の馳走になつた上に、入湯が出来れば、願つてもない仕合せである。かう思つて、予あらかじめめ利仁が牽かせて来た、蘆毛の馬に跨またがつた。所が、轡くつわを並べて此処まで来て見ると、どうも利仁はこの近所へ来るつもりではないらしい。現に、さうかうしてゐる中に、粟田口は通りすぎた。

「粟田口では、ござらぬのう。」

「いかにも、もそつと、あなたでな。」

利仁は、微笑を含みながら、わざと、五位の顔を見ないやうにして、静に馬を歩ませてゐる。両側の人家は、次第に稀になつて、今は、広々とした冬田の上に、餌からすをあさる鴉からすが見えるばかり、山の陰に消残つて、雪の色も灰ほのかに青く煙つてゐる。晴れながら、とげとげしい櫺はじの梢が、眼に痛く空を刺してゐるのさへ、何となく肌寒い。

「では、山科やましな辺でもござるかな。」

「山科は、これぢや。もそつと、さきでござるよ。」

成程、さう云ふ中に、山科も通りすぎた。それ所ではない。何かとする中に、関山も後にして、彼是かれこれ、午少ひるしすぎた時分には、とうとう三井寺の前へ来た。三井寺には、利仁の懇

意にしてゐる僧がある。二人はその僧を訪ねて、午餐ひるげの馳走になつた。それがすむと、又、馬に乗つて、途を急ぐ。行手は今まで来た路に比べると遙に人煙が少ない。殊に当時は盜賊が四方に横行した、物騒な時代である。――五位は猫背を一層低くしながら、利仁の顔を見上げるやうにして訊ねた。

「まだ、さきでござるのう。」

利仁は微笑した。悪戯いたづらをして、それを見つけられさうになつた子供が、年長者に向つてするやうな微笑である。鼻の先へよせた皺しわと、眼尻にたたへた筋肉のたるみとが、笑つてしまはうか、しまふまいかとためらつてゐるらしい。さうして、とうとう、かう云つた。

「実はな、敦賀つるがまで、お連れ申さうと思つたのぢや。」

笑ひながら、利仁は鞭を挙げて遠くの空を指さした。その鞭の下には、的躰てきりきとして、午後の日を受けた近江あふみの湖が光つてゐる。

五位は、狼狽らうばいした。

「敦賀と申すと、あの越前えちぜんの敦賀でござるかな。あの越前の――」

利仁が、敦賀の人、藤原有仁ありひとの女婿むよせになつてから、多くは敦賀に住んでゐると云ふ事も、

1、芋粥

日頃から聞いてゐない事はない。が、その敦賀まで自分をつれて行く気だらうとは、今の今まで思はなかつた。第一、幾多の山河を隔ててゐる越前の国へ、この通り、僅二人の伴人ともびとをつれただけで、どうして無事に行かれよう。ましてこの頃は、往來の旅人ゆきぎが、盜賊の爲に殺されたと云ふ噂うはささへ、諸方にある。――五位は歎願するやうに、利仁の顔を見た。

「それは又、滅相な、東山ぢやと心得れば、山科。山科ぢやと心得れば、三井寺。揚句が越前の敦賀とは、一体どうしたと云ふ事でござる。始めから、さう仰せられうなら、下人共なりと、召つれようものを。――敦賀とは、滅相な。」

五位は、殆どべそを掻かないばかりになつて、呟つぶやいた。もし「芋粥に飽かむ」事が、彼の勇気を鼓舞しなかつたとしたら、彼は恐らく、そこから別れて、京都へ独り帰つて来た事であらう。

「利仁が一人居るのは、千人とも思ひなされ。路次の心配は、御無用ぢや。」

五位の狼狽するのを見ると、利仁は、少し眉を顰しかめながら、嘲笑あざわらつた。さうして調度掛を呼寄せて、持たせて来た壺胡籙つばやなぐひを背に負ふと、やはり、その手から、黒漆こくしつの真弓まゆみをうけ

取つて、それを鞍上に横へながら、先に立つて、馬を進めた。かうなる以上、意気地のない五位は、利仁の意志に盲従するより外に仕方がない。それで、彼は心細さうに、荒涼とした周囲の原野を眺めながら、うろ覚えの観音経くわんおんぎやうを口の中に念じ念じ、例の赤鼻を鞍の前輪にすりつけるやうにして、覚束ない馬の歩みを、不相変あひかはらずとぼとぼと進めて行つた。

馬蹄の反響する野は、茫々たる黄茅くわうぼうに蔽おほはれて、その所々にある行潦みづたまりも、つめたく、青空を映したまま、この冬の午後を、何時かそれなり凍つてしまふかと疑はれる。その涯はてには、一帯の山脈が、日に背いてゐるせゐか、かがやく可き残雪の光もなく、紫がかつた暗い色を、長々となすつてゐるが、それさへ蕭条せうてうたる幾叢いくむらの枯薄かれすすぎに遮さへぎられて、二人の従者の眼には、はいらない事が多い。――すると、利仁が、突然、五位の方をふりむいて、声をかけた。

「あれに、よい使者が参つた。敦賀への言づけを申さう。」

五位は利仁の云ふ意味が、よくわからないので、怖々こはこはながら、その弓で指さす方を、眺めて見た。元より人の姿が見えるやうな所ではない。唯、野葡萄のぶだうか何かの蔓つるが、灌木の一むらにからみついてゐる中を、一疋の狐が、暖かな毛の色を、傾きかけた日に曝さらしながら、

のそりのそり歩いて行く。――と思ふ中に、狐は、慌ただしく身を跳らせて、一散に、どこともなく走り出した。利仁が急に、鞭を鳴らせて、その方へ馬を飛ばし始めたからである。五位も、われを忘れて、利仁の後を、逐つた。従者も勿論、遅れてはゐられない。しばらくは、石を蹴る馬蹄の音が、憂々として、曠野の静けさを破つてゐたが、やがて利仁が、馬を止めたのを見ると、何時、捕へたのか、もう狐の後足を掴んで、倒に、鞍の側へ、ぶら下げてゐる。狐が、走れなくなるまで、追ひつめた所で、それを馬の下に敷いて、手取りにしたものであらう。五位は、うすい髭にたまる汗を、慌しく拭きながら、漸、その傍へ馬を乗りつけた。

「これ、狐、よう聞けよ。」

利仁は、狐を高く眼の前へつるし上げながら、わざと物々しい声を出してかう云つた。

「其方、今夜の中に、敦賀の利仁が館へ参つて、かう申せ。」

『利仁は、唯今俄に客人を具して下らうとする所ぢや。明日、巳時頃、高島の辺まで、男たちを迎ひに遣はし、それに、鞍置馬二疋、牽かせて参れ。』よいか忘れるなよ。」

云ひ畢ると共に、利仁は、一ふり振つて狐を、遠くの叢の中へ、抛り出した。

「いや、走るわ。走るわ。」

やつと、追ひついた二人の従者は、逃げてゆく狐の行方を眺めながら、手を拍つて囃し立てた。落葉のやうな色をしたその獣の背は、夕日の中を、まつしぐらに、木の根石くれの嫌ひなく、何処までも、走つて行く。それが一行の立つてゐる所から、手にとるやうによく見えた。狐を追つてゐる中に、何時か彼等は、曠野が緩い斜面を作つて、水の涸れた川床と一つになる、その丁度上の所へ、出てゐたからである。

「広量の御使でござるのう。」

五位は、ナイイヴな尊敬と讃嘆とを洩らしながら、この狐さへ願使する野育ちの武人の顔を、今更のやうに、仰いで見た。自分と利仁との間に、どれ程の懸隔があるか、そんな事は、考へる暇がない。唯、利仁の意志に、支配される範囲が広いだけに、その意志の中に包容される自分の意志も、それだけ自由が利くやうになつた事を、心強く感じるだけである。――阿諛は、恐らく、かう云ふ時に、最自然に生れて来るものであらう。読者は、今後、赤鼻の五位の態度に、幫間のやうな何物かを見出しても、それだけで妄にこの男の人格を、疑ふ可きではない。

抛り出された狐は、なぞへの斜面を、転げるやうにして、駈け下りると、水の無い河床

1、芋粥

の石の間を、器用に、ぴよいぴよい、飛び越えて、今度は、向うの斜面へ、勢よく、すぢかひに駆け上った。駆け上りながら、ふりかへつて見ると、自分を手捕りにした侍の一行は、まだ遠い傾斜の上に馬を並べて立つてゐる。それが皆、指を揃へた程に、小さく見えた。殊に入目を浴びた、月毛と蘆毛とが、霜を含んだ空氣の中に、描いたよりもくつきりと、浮き上つてゐる。

狐は、頭をめぐらすと、又枯薄の中を、風のやうに走り出した。

一行は、予定通り翌日の巳時みのときばかりに、高島の辺へ来た。此処は琵琶湖に臨んだ、ささやかな部落で、昨日に似ず、どんよりと曇つた空の下に、幾戸の藁屋わらやが、疎まばらにちらばつてゐるばかり、岸に生えた松の樹の間には、灰色の漣漪さざなみをよせる湖の水面が、磨くのを忘れた鏡のやうに、さむぎむと開けてゐる。――此処まで来ると利仁が、五位を顧みて云つた。

「あれを御覧ごらんじろ。男どもが、迎ひに参つたげでござる。」

見ると、成程、二疋の鞍置馬を牽いた、二三十人の男たちが、馬に跨がつたのもあり徒歩ちのもあり、皆水干の袖を寒風に翻へして、湖の岸、松の間を、一行の方へ急いで来る。やがてこれが、間近くなつたと思ふと、馬に乗つてゐた連中は、慌ただしく鞍を下り、徒歩の連中は、路傍に蹲踞そんきよして、いづれも恭々しく、利仁の来るのを、待ちうけた。

「やはり、あの狐が、使者を勤めたと見えますのう。」

「生得しやうとく、変化へんげある獣ぢやて、あの位の用を勤めるのは、何でもござらぬ。」

五位と利仁とが、こんな話をしてゐる中に、一行は、郎等らうどうたちの待つてゐる所へ来た。

「大儀ぢや。」と、利仁が声をかける。

蹲踞してゐた連中が、忙しく立つて、二人の馬の口を取る。急に、すべてが陽氣になつた。

「夜前、稀有けうな事が、ございましてな。」

二人が、馬から下りて、敷皮の上へ、腰を下すか下さない中に、檜皮色ひはだいしよの水干を着た、白髪の郎等が、利仁の前へ来て、かう云つた。

「何ぢや。」

利仁は、郎等たちの持つて来た篠枝ささえや破籠わりごを、五位にも勧めながら、鷹揚おうやうに問ひかけた。

1、芋粥

「さればでございまする。夜前、戌時いぬのときばかりに、奥方が俄に、人心地ひとこころをお失ひなされましてな。

『おのれは、阪本の狐ぢや。今日、殿の仰せられた事を、言伝ことづてせうほどに、近う寄つて、よう聞きやれ。』

と、かう仰有おつしやるのでございまする。さて、一同がお前に参りますると、奥方の仰せられまするには、『殿は唯今俄に客人を具して、下られようとする所ぢや。明日巳時頃、高島の辺まで、男どもを迎ひに遣はし、それに鞍置馬二疋牽かせて参れ。』と、かう御意遊ぎょいばすのでございまする。」

「それは、又、稀有けうな事でござるのう。」

五位は利仁の顔と、郎等の顔とを、仔細らしく見比べながら、両方に満足を与へるやうな、相槌あひづちを打つた。

「それも唯、仰せられるのではございませぬ。さも、恐ろしさうに、わなわなとお震へになりましてな、『遅れまいぞ。遅れれば、おのれが、殿の御勘当をうけねばならぬ。』と、しつきりなしに、お泣きになるのでございまする。」

「して、それから、如何いかした。」

「それから、多愛なく、お休みになりましたな。手前共の出で参りまする時にも、まだ、

お眼覚にはならぬやうで、ございました。」

「如何でござるな。」

郎等の話を聞き完ると、利仁は五位を見て、得意らしく云つた。「利仁には、獣けものも使はれ申すわ。」

「何とも驚き入る外は、ござらぬのう。」

五位は、赤鼻を掻きながら、ちよいと、頭を下げて、それから、わざとらしく、呆れたやうに、口を開いて見せた。口髭には、今飲んだ酒が、滴しづくになつて、くつついてゐる。

その日の夜の事である。五位は、利仁の館やかたの一間ひとまに、切燈台の灯を眺めるともなく、眺めながら、寝つかれない長の夜をまちまちして、明あかしてゐた。

すると、夕方、此処へ着くまでに、利仁や利仁の従者と、談笑しながら、越えて来た松山、小川、枯野、或は、草、木の葉、石、野火の煙のほひ、——さう云ふものが、一つづつ、五位の心に、浮んで来た。殊に、雀色すずめいろ時の霽もやの中を、やつと、この館へ辿たどりついて、長櫃ながびつに起してある、炭火の赤い焰を見た時の、ほつとした心もち、——それも、今かうして、

寝てゐると、遠い昔にあつた事としか、思はれない。五位は綿の四五寸もはいつた、黄いろい直垂ひたれの下に、楽々と、足をのびしながら、ぼんやり、われとわが寝姿を見廻した。

直垂の下に利仁が貸してくれた、練色ねいろの衣きぬの綿厚わたあつなのを、二枚まで重ねて、着こんでゐる。それだけでも、どうかすると、汗が出かねない程、暖かい。そこへ、夕飯の時に一杯やつた、酒の酔が手伝つてゐる。枕元しとみの蔀しとみ一つ隔てた向うは、霜の冴えた広庭だが、それも、かう陶然としてゐれば、少しも苦にならない。万事が、京都の自分の曹司ざうしにゐた時と比べれば、雲泥の相違である。が、それにも係はらず、我五位の心には、何となく釣合のとれない不安があつた。第一、時間のたつて行くのが、待遠い。しかもそれと同時に、夜の明けると云ふ事が、——芋粥を食ふ時になると云ふ事が、さう早く、来てはならないやうな心もちがする。さうして又、この矛盾した二つの感情が、互に剋し合ふ後には、境遇の急激な変化から来る、落着かない気分が、今日の天氣のやうに、うすら寒く控へてゐる。それが、皆、邪魔になつて、折角の暖かさも、容易に、眠りを誘ひさうもない。

1、芋粥

すると、外の広庭で、誰か大きな声を出してゐるのが、耳にはいつた。声がらでは、どうも、今日、途中まで迎へに出た、白髪の郎等が何か告ふれてゐるらしい。その乾ひからびた

声が、霜に響くせるか、凜々^{りんりん}として、凧^{こがらし}のやうに、一語づつ五位の骨に、応へるやうな氣さへする。

「この辺の下人、承はれ。殿の御意遊ばさるるには、明朝、卯時^{うのとき}までに、切口三寸、長さ五尺の山の芋を、老若各^{おのおの}、一筋づつ、持つて参る様にとある。忘れまいぞ、卯時までにぢや。」

それが、二三度、繰返されたかと思ふと、やがて、人のけはひが止んで、あたりは忽ち^{たちま}元のやうに、静な冬の夜になつた。その静な中に、切燈台の油が鳴る。赤い真綿のやうな火が、ゆらゆらする。五位は欠伸^{あくび}を一つ、噛みつぶして、又、とりとめのない、思量に耽^{ふけ}り出した。――山の芋と云ふからには、勿論芋粥にする氣で、持つて来させるのに相違ない。さう思ふと、一時、外に注意を集中したおかげで忘れてゐた、さつきの不安が、何時の間にか、心に歸つて来る。殊に、前よりも、一層強くなつたのは、あまり早く芋粥にありつきたくないと云ふ心もちで、それが意地悪く、思量の中心を離れない。どうもかう容易に「芋粥に飽かむ」事が、事実となつて現れては、折角今まで、何年となく、辛抱して待つてゐたのが、如何にも、無駄な骨折のやうに、見えてしまふ。出来る事なら、突然何か故障が起つて一旦、芋粥が飲めなくなつてから、又、その故障がなくなつて、今度は、やつとこれにありつけると云ふやうな、そんな手続きに、万事を運ばせたい。――こんな考

へが、「こまつぶり」のやうに、ぐるぐる一つ所を廻つてゐる中に、何時か、五位は、旅の疲れで、ぐつすり、熟睡してしまつた。

翌朝、眼がさめると、直に、昨夜の山の芋の一件が、気になるので、五位は、何よりも先に部屋の蔀しとみをあげて見た。すると、知らない中に、寝すごして、もう卯時うのとぎをすぎてゐたのであらう。広庭へ敷いた、四五枚の長筵ながむしろの上には、丸太のやうな物が、凡そおよ、二三千本、斜につき出した、檜皮葺ひだふぎの軒先へつかへる程、山のやうに、積んである。見るとそれが、悉く、切口三寸、長さ五尺の途方もなく大きい、山の芋であつた。

1、芋粥

五位は、寝起きの眼をこすりながら、殆ど周章に近い驚愕きやうがくに襲はれて、呆然とばうぜん、周囲を見廻した。広庭の所々には、新しく打つたらしい杭の上に五斛納釜ごくなふがまを五つ六つ、かけ連ねて、白い布の襖あわを着た若い下司女げすをんなが、何十人となく、そのまはりに動いてゐる。火を焚きつけるもの、灰を掻くもの、或は、新しい白木の桶をけに、「あまづらみせん」を汲んで釜の中へ入れるもの、皆芋粥をつくる準備で、眼のまはる程忙しい。釜の下から上る煙と、釜の中から湧く湯気とが、まだ消え残つてゐる明方の靄と一つになつて、広庭一面、はつきり物も見定められない程、灰色のものが罩こめた中で、赤いのは、烈々と燃え上る釜の下の焰

ばかり、眼に見るもの、耳に聞くもの悉く、戦場か火事場へでも行つたやうな騒ぎである。五位は、今更のやうに、この巨大な山の芋が、この巨大な五斛納釜の中で、芋粥になる事を考へた。さうして、自分が、その芋粥を食ふ為に京都から、わざわざ、越前の敦賀まで旅をして来た事を考へた。考へれば考へる程、何一つ、情無くならないものはない。我五位の同情すべき食慾は、実に、此時もう、一半を減却げんきやくしてしまつたのである。

それから、一時間の後、五位は利仁や舅しうとの有仁ありひとと共に、朝飯の膳に向つた。前にあるのは、銀しろがねの提ひさげの一斗ばかりはいるのに、なみなみと海の如くたたへた、恐るべき芋粥である。五位はさつき、あの軒まで積上げた山の芋を、何十人かの若い男が、薄刃を器用に動かしながら、片端から削るやうに、勢よく切るのを見た。それからそれを、あの下司女たちが、右往左往に馳せちがつて、一つのこらず、五斛納釜へすくつては入れ、すくつては入れするのを見た。最後に、その山の芋が、一つも長筵の上に見えなくなつた時に、芋のほひと、甘葛あまづらのほひとを含んだ、幾道いくだうかの湯気の柱が、蓬々然ほうほうぜんとして、釜の中から、晴れた朝の空へ、舞上つて行くのを見た。これを、目のあたりに見た彼が、今、提に入れた芋粥に対した時、まだ、口をつけない中から、既に、満腹を感じたのは、恐らく、無理もない次第であらう。――五位は、提を前にして、間の悪さうに、額の汗を拭いた。

1、芋粥

「芋粥に飽かれた事が、ござらぬげな。どうぞ、遠慮なく召上つて下され。」

舅の有仁は、童児たちに云ひつけて、更に幾つかの銀の提を膳の上に並べさせた。中にはどれも芋粥が、溢れんばかりにはいつてゐる。五位は眼をつぶつて、唯でさへ赤い鼻を、一層赤くしながら、提に半分ばかりの芋粥を大きな土器かはらけにすくつて、いやいやながら飲み干した。

「父も、さう申すぢやて。平に、遠慮は御無用ぢや。」

利仁も側から、新な提をすすめて、意地悪く笑ひながらこんな事を云ふ。弱つたのは五位である。遠慮のない所を云へば、始めから芋粥は、一椀も吸ひたくない。それを今、我慢して、やつと、提に半分だけ平げた。これ以上、飲めば、喉を越さない中にもどしてしまふ、さうかと云つて、飲まなければ、利仁や有仁の厚意を無にするのも、同じである。そこで、彼は又眼をつぶつて、残りの半分为三分の一程飲み干した。もう後は一口も吸ひやうがない。

「何とも、忝うござつた。もう十分頂戴致したて。—— いやはや、何とも忝うござつた。」

五位は、しどろもどろになつて、かう云つた。余程弱つたと見えて、口髭にも、鼻の先にも、冬とは思はれない程、汗が玉になつて、垂れてゐる。

「これは又、御少食ぢや。客人は、遠慮をされると見えたぞ。それぞれの方ども、何を致して居る。」

童児たちは、有仁の語につれて、新な提の中から、芋粥を、土器かはらけに汲まうとする。五位は、両手を蠅でも逐ふやうに動かして、平に、辞退の意を示した。

「いや、もう、十分でござる。……失礼ながら、十分でござる。」

もし、此時、利仁が、突然、向うの家の軒を指して、「あれを御覧ごらんじろ」と云はなかつたなら、有仁は猶なほ五位に、芋粥をすすめて、止まなかつたかも知れない。が、幸ひにして、利仁の声は、一同の注意を、その軒の方へ持つて行つた。檜皮葺ひだふぎの軒には、丁度、朝日がさしてゐる。さうして、そのまばゆい光に、光沢つやのいい毛皮を洗はせながら、一疋の獣が、おとなしく、坐つてゐる。見るとそれは一昨日をととひ、利仁が枯野の路で手捕りにした、あの阪本の野狐であつた。

「狐も、芋粥が欲しさに、見参したさうな。男ども、しやつにも、物を食はせてつかはせ。」

1、芋粥

利仁の命令は、言下^{ごんか}に行はれた。軒からとび下りた狐は、直に広庭で芋粥の馳走に、与^{あづか}つたのである。

五位は、芋粥を飲んでゐる狐を眺めながら、此処へ来ない前の彼自身を、なつかしく、心の中でふり返つた。それは、多くの侍たちに愚弄されてゐる彼である。京童^{きやうわらべ}にさへ「何ぢや。この鼻赤めが」と、罵られてゐる彼である。色のさめた水干に、指貫^{さしぬき}をつけて、飼主のない彪犬^{むくいぬ}のやうに、朱雀大路をうろついて歩く、憐む可き、孤独な彼である。しかし、同時に又、芋粥に飽きたいと云ふ欲望を、唯一人大事に守つてゐた、幸福な彼である。――彼は、この上芋粥を飲まずにすむと云ふ安心と共に、満面の汗が次第に、鼻の先から、乾いてゆくのが感じた。晴れてはゐても、敦賀の朝は、身にしみるやうに、風が寒い。五位は慌てて、鼻をおさへると同時に銀^{しろがね}の提に向つて大きな嚏^{くさめ}をした。

(大正五年八月)

鼻

(新字新仮名)

芥川龍之介

初出 大正五年二月

『新思潮』

2、鼻

禅智内供の鼻と云えば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から顎の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。云わば細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っているのである。

五十歳を越えた内供は、沙弥の昔から、内道場供奉の職に陞った今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。これは専念に当来の浄土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしていると云う事を、人に知られるのが嫌だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よりも惧れていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。――一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食えば、鼻の先が鉢の中、の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。しかしこうして飯を食うと云う事は、持上げている弟子にとつても、持上げられてゐる内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるえて、鼻を粥の中へ落した話は、当時京都まで喧伝された。――けれどもこれは内供にとつて、

決して鼻を苦に病んだ重^{おも}な理由ではない。内供は実にこの鼻によつて傷つけられる自尊心のために苦しんだのである。

池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禪智内供のために、内供の俗でない事を仕合せだと云った。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中にはまた、あの鼻だから出家^{しゅつけ}したのだらうと批評する者さえあつた。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に煩^{わづらわ}される事が少くなつたと思つていない。内供の自尊心は、妻帯と云うような結果的な事実^{じじつ}に左右されるためには、余りにデリケートに出来ていたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損^{きそん}を恢復^{かいふく}しようと試みた。

第一に内供の考^{かんが}へたのは、この長い鼻を実際以上に短く見せる方法である。これは人のいない時に、鏡へ向つて、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫^{くふう}を凝^こらして見た。どうかすると、顔の位置を換^かえるだけでは、安心が出来なくなつて、頬杖^{ほおづえ}をついたり頤^{あご}の先へ指をあてがったりして、根気よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも満足するほど、鼻が短く見えた事は、これまでにただの一度もない。時によると、苦心すればするほど、かえつて長く見えるような氣さえた。内供は、こう云う時には、鏡を箱へしまいながら、今更のよう^{きようづくえ}にため息をついて、不承不承にまた元の経机^{きんぎよう}へ、観音經をよみに帰るのである。

2、鼻

それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、僧供講説そうぐこうせつなどのし
ばしば行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎
に湯を沸かしている。従つてここへ出入する僧俗の類たぐいも甚だ多い。内供はこう云う人々の
顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかつ
たからである。だから内供の眼には、紺の水干すいかんも白の帷子かたびらもはいらぬ。まして柑子色こうじいろの
帽子や、椎鈍しいにびの法衣ころもなどは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人
を見ずに、ただ、鼻を見た。

——しかし鍵鼻かぎばなはあつても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度
重なるに従つて、内供の心は次第にまた不快になった。内供が人と話しながら、思わずぶ
らりと下つてゐる鼻の先をつまんで見て、年甲斐としがいもなく顔を赤らめたのは、全くこの不快
に動かされての所為しよゐである。

最後に、内供は、内典外典ないてんげてんの中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめて
も幾分の心やりにしようと思つた事がある。けれども、目連もくれんや、舍利弗しゃりほつの鼻が長かつ
たとは、どの経文にも書いてない。勿論竜樹りゆうじゆや馬鳴めみようも、人並の鼻を備えた菩薩ぼさつである。内
供は、震旦しんたんの話の序ついでに蜀漢しよくかんの劉玄德りゆうげんたくの耳が長かつたと云う事を聞いた時に、それが鼻
だつたら、どのくらい自分は心細くなるだらうと思つた。

内供がこう云う消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに云うまでもない。内供はこの方面でもほとんど出来るだけの事をした。烏瓜からすうりを煎せんじて飲んで見た事もある。鼠いばりの尿を鼻へなすって見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと唇の上にぶら下げているではないか。

所がある年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上った弟子でしの僧が、知己しるべの医者から長い鼻を短くする法を教わって来た。その医者と言うのは、もと震旦しんたんから渡って来た男で、当時は長楽寺ちやうらくじの供僧ぐそうになつていたのである。

内供は、いつものように、鼻などは氣にかけないと云う風をして、わざとその法もすぐにやって見ようとは云わずにいた。そうして一方では、気軽な口調で、食事の度毎に、弟子の手数をかけるのが、心苦しいと云うような事を云った。内心では勿論弟子の僧が、自分を説伏しきふせて、この法を試みさせるのを待つていたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに対する反感よりは、内供のそう云う策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであろう。弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧め出した。そうして、内供自身もまた、その予期通り、結局この熱心な勧告に聴従ちやうじゆうする事になつた。

その法と云うのは、ただ、湯で鼻を茹^ゆでて、その鼻を人に踏ませると云う、極めて簡単なものであった。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしている。そこで弟子の僧は、指も入れられないような熱い湯を、すぐに提^{ひさげ}に入れて、湯屋から汲んで来た。しかしじかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷^{やけど}する惧^{おそれ}がある。そこで折敷^{おしき}へ穴をあけて、それを提の蓋^{ふた}にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸^{ひた}しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云った。

——もう茹^ゆつた時分でござろう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだろうと思っただからである。鼻は熱湯に蒸^むされて、蚤^{のみ}の食ったようにむず痒^{がゆ}い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気の立っている鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのぼしながら、弟子の僧の足が上下^{うへした}に動くのを眼の前に見ているのである。弟子の僧は、時々気の毒そうな顔をして、内供の禿^はげ頭を見下しながら、こんな事を云った。

——痛^せうはござらぬかな。医師は責^せめて踏めと申したで。じゃが、痛^せうはござらぬかな。

内供は首を振って、痛くないと云う意味を示そうとした。所が鼻を踏まれているので思うように首が動かない。そこで、上眼うわめを使つて、弟子の僧の足に輝あかぎれのきれているのを眺めながら、腹を立てたような声で、

—— 痛うはないて。

と答えた。實際鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりもかえつて気もちのいいくらいだったのである。

しばらく踏んでいると、やがて、粟粒あわつぶのようなものが、鼻へ出来はじめた。云わば毛をむしった小鳥をそっくり丸炙まるやきにしたような形である。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようにこう云つた。

—— これを鑷子けぬきでぬけと申す事でござつた。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙つて弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者の手術をうける患者のような顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子けぬきで脂あぶらをとるのを眺めていた。脂は、鳥の羽の莖くきのような形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたような顔をして、

——もう一度、これを茹でればようござる。

と云った。

内供はやはり、八の字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧の云うなりになっていた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、いつになく短くなっている。これではあたりまえの鍵鼻と大した変りはない。内供はその短くなった鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極りが悪るそうにおずおず覗いて見た。

鼻は——あの顴の下まで下つていた鼻は、ほとんど嘘のように萎縮して、今は僅に上唇の上で意気地なく残喘を保っている。所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏まれた時の痕であろう。こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに眼をしばたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりはいしないかと云う不安があつた。そこで内供は誦經する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そつと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まつているだけで、格別それより下へぶら下つて来る景色もない。それから一晚寝てあくる日早く眼がさめると内供はまず、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書写の

2、鼻

功を積んだ時のような、のびのびした気分になった。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しそうな顔をして、話も碌々せずに、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。そのみならず、かつて、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがつた時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふつと吹き出してしまった。用を云いつかつた下法師たちが、面と向っている間だけは、慎んで聞いていても、内供が後さえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。

内供ははじめ、これを自分の顔がわりがしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないようである。――勿論、中童子や下法師が晒う原因は、そこにあるのにちがいない。けれども同じ晒うにしても、鼻の長かつた昔とは、晒うのにとことなく容子がちがう。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えると云えば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

――前にはあのようにつけつけとは晒わなんだて。

内供は、誦しかけた経文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々こう呟く事があつた。愛すべき内供は、そう云う時になると、必ずぼんやり、傍にかけた普賢の画像を眺めなが

2、鼻

ら、鼻の長かった四五日前の事を憶い出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまうのである。――内供には、遺憾ながらこの間に答を与える明が欠けていた。

――人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこつちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいような氣にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。――内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍觀者の利己主義をそれとなく感づいたからにほかならない。

そこで内供は日毎に機嫌が悪くなった。二言目には、誰でも意地悪く叱りつける。しまいには鼻の療治をしたあの弟子の僧でさえ、「内供は法慳貪の罪を受けられるぞ」と陰口をきくほどになった。殊に内供を怒らせたのは、例の悪戯な中童子である。ある日、けたたましく犬の吠える声があるので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木さの片をふりまわして、毛の長い、痩せたや彪犬むくいぬを逐いまわしている。それもただ、逐いまわしているのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囃しながら、逐い

まわしているのである。内供は、中童子の手からその木の片をひったくつて、したたかその顔を打った。木の片は以前の鼻持上げの木だったのである。

内供はなまじいに、鼻の短くなったのが、かえって恨めしくなった。するとある夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音が、うるさいほど枕に通つて来た。その上、寒さもめつきり加わったので、老年の内供は寝つこうとしても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしていると、ふと鼻がいつになく、むず痒いのに気がついた。手をあてて見ると少し水気が来たようにむくんでいる。どうやらそこだけ、熱さえもあるらしい。

—— 無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花を供えるような恭しい手つきで、鼻を抑えながら、こう呟いた。翌朝、内供がいつものように早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や椴が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたように明るい。塔の屋根には霜が下りているせいである。う。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光っている。禅智内供は、蓐を上げた縁に立つて、深く息をすいこんだ。

ほとんど、忘れようとしていたある感覚が、再び内供に帰つて来たのはこの時である。内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上か

2、鼻

ら顎^{あご}の下まで、五六寸あまりもぶら下っている、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、また元の通り長くなつたのを知った。そうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じような、はればれした心もちが、どこからともなく帰つて来るのを感じた。

—— こうなれば、もう誰も晒^{わら}うものはないにちがいない。

内供は心の中でこう自分に囁^{ささや}いた。長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら。

(大正五年二月)

羅生門

（旧字旧仮名）

芥川龍之介

初出 大正六年五月 阿弥陀書房

3、羅生門

或^{ある}日の暮^ひ方の事である。一人の下人^{しもやうもん}が、羅生門^{らしようもん}の下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外^{ほか}に誰もゐない。唯、所々丹塗^{にぬり}の剥げた、大きな圓柱^{まるばしら}に、蟋蟀^{きりぎりす}が一匹とまつてゐる。羅生門^{らしようもん}が、朱雀大路^{すじやくおおち}にある以上^{いじやう}は、この男の外^{ほか}にも、雨^{あめ}やみを^{いちめがさ}する市女笠^{いちめがさ}や揉烏帽子^{もゑがさ}が、もう二三人^{にん}はありさうなものである。それが、この男の外^{ほか}には誰も^{たれ}ゐない。

何故^{なぜ}かと云ふと、この二三年、京都には、地震^{ちしん}とか辻風^{つじふう}とか火事とか饑饉^{うきうき}とか云ふ災^{わざはひ}がつづいて起つた。そこで洛中^{らくちゆう}のさびれ方^{かた}は一通りでない。舊記によると、佛像や佛具^{ぶつぐ}を打碎^{うちくだ}いて、その丹^にがついたり、金銀の箔^{はく}がついたりした木を、路^{みち}ばたにつみ重ねて、薪^{たきぎ}の料^{しろう}に賣つてゐたと云ふ事である。洛中^{らくちゆう}がその始末^{はつまつ}であるから、羅生門^{らしようもん}の修理^{しゆり}などは、元より誰も捨て、顧^{かへりみ}る者がなかつた。するとその荒^あれ果^はてたのをよい事にして、狐狸^{こり}が棲^{すむ}む。盗人^{ぬすびと}が棲^{すむ}む。とうとうしまひには、引取^{ひきと}り手のない死人^{しにん}を、この門へ持つて来て、棄て、行くと云ふ習慣^{しふくわん}さへ出來た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味^{きみ}を惡るがつて、この門の近所^{きんじよ}へは足^{あし}ぶみをしない事になつてしまつたのである。

その代り又鴉^{からす}が何處^{どこ}からか、たくさん集つて來た。晝間^{ひるま}見ると、その鴉^{からす}が何羽^{なんば}となく輪を描いて高い鴟尾^{しび}のまはりを啼^なきながら、飛びまはつてゐる。殊に門の上の空が、夕焼^{ゆふや}けであかくなる時^{とき}には、それが胡麻^{ごま}をまいたやうにはつきり見えた。鴉^{からす}は、勿論、門の上に

ある死人しにんの肉を、啄みに來るのである。――尤も今日は、刻限こくげんが遅いおそいせいか、一羽も見えない。唯、所々ところどころ、崩れかゝつた、さうしてその崩れ目くづに長い草のはへた石段いしだんの上に、鴉からすの糞くそが、點々と白くこびりついてゐるのが見える。下人げにんは七段ある石段の一番上の段だんに洗ひざらした紺こんの襖あをの尻しつを据ゑて、右の頬に出來た、大きな面皰にきびを氣にしながら、ぼんやり、雨あめのふるのを眺ながめてゐるのである。

作者さくしやはさつき、「下人が雨やみを待つてゐた」と書いた。しかし、下人げにんは、雨がやんでも格別かくべつどうしようと云ふ當てはない。ふだんなら、勿論もちろん、主人の家へ歸る可き筈である。所ところがその主人からは、四五日前に暇ひまを出された。前にも書いたやうに、當時京都の町は一通りならず衰微すいびしてゐた。今この下人が、永年ながねん、使はれてゐた主人から、暇ひまを出されたのも、この衰微の小さな餘波に外ならない。だから「下人が雨やみを待つてゐた」と云ふよりも、「雨にふりこめられた下人が、行き所どころがなくて、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適當てきとうである。その上、今日の空模様そらもやうも少からずこの平安朝の下人の Sentimentalisme に影響えいきやうした。申の刻下りからふり出した雨は、未あがに上るけしきがない。そこで、下人は、何を措さいても差當り明日の暮くれしをどうにかしようとして――云はゞどうにもならない事ことを、どうにかしようとして、とりとめもない考かんがへをたどりながら、さつきから朱雀大路すじやくおほぢにふる雨の音を、聞くともなく聞いてゐた。

3、羅生門

雨は、羅生門^{らしやうもん}をつゝんで、遠く^{とほ}から、ざあつと云ふ音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上^{みあ}げると、門の屋根が、斜につき出した葺^{いらか}の先に、重たくうす暗い雲^{くも}を支へてゐる。

どうにもならない事を、どうにかする爲には、手段^{しゅだん}を選んでゐる違^いはない。選んでゐれば、築土^{ついち}の下か、道^{みち}ばたの土の上で、饑死^{うゑじ}をするばかりである。さうして、この門の上へ持つて来て、犬^{いぬ}のやうに棄^すてられてしまふばかりである。選^{えら}ばないとすれば――下人の考へは、何^{なん}度も同じ道を低徊^{あへく}した揚句^{あげく}に、やつとこの局所^{はうちやく}へ逢着^{ほうちやく}した。しかしこの「すれば」は、何時^{いつ}までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段^{しゅだん}を選ばないといふ事を肯定^{こうてい}しながらも、この「すれば」のかたをつける爲に、當然^{たうぜん}、その後に来る可^{ぬすびと}き「盗人^{ぬすびと}になるより外に仕方^{しかた}がない」と云ふ事を、積極^{せきぎ}的に肯定^{こうてい}する丈の、勇氣が出ずにゐたのである。下人は、大きな嚏^{くさめ}をして、それから、大儀^{たいぎ}さうに立上^{たか}つた。夕冷^{ゆふひ}えのする京都は、もう火桶^{ひをけ}が欲しい程の寒さである。風は門の柱^{はしら}と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗^{にぬり}の柱にとまつてゐた蟋蟀^{きりぎりす}も、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸^{くち}をちぢめながら、山吹^{かざみ}の汗衫^{あめかぜ}に重ねた、紺^{ばん}の襖^{ぼんちやく}の肩を高くして門のまはりを見まはした。雨風^{あめかぜ}の患^{あへ}のない、人目^{ひとめ}にかゝる惧^{おそ}い、一晚^{ばん}樂^{らく}にねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜^よを明^あかさうと思つたからである。すると、幸門^{こうもん}の上の樓^{ろう}へ上る、幅

の廣い、之も丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がゐたにしても、どうせ死人ばかりである。下人は、そこで腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないやうに氣をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の樓の上へ出る、幅の廣い梯子の中段に、一人の男が、猫のやうに身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺つてゐた。樓の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしてゐる。短い鬚の中に、赤く膿を持つた面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にゐる者は、死人ばかりだと高を括つてゐた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其處此處と動かしてゐるらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、ゆれながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともししてゐるからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、守宮のやうに足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這ふやうにして上りつめた。さうして體を出来る丈、平にしながら、頸を出来る丈、前へ出して、恐る恐る、樓の内を覗いて見た。

見ると、樓の内には、噂に聞いた通り、幾つかの屍骸が、無造作に棄てゝあるが、火の光の及ぶ範圍が、思つたより狭いので、數は幾つともわからない。唯、おぼろげながら、

3、羅生門

知れるのは、その中に裸^{はだか}の屍骸と、着物^{きもの}を着た屍骸とがあると云ふ事である。勿論^{もちろん}、中には女も男もまじつてゐるらしい。さうして、その屍骸は皆、それが、嘗、生きてゐた人間だと云ふ事實^{じじつ}さへ疑はれる程、土を捏ねて造つた人形^{にんぎやう}のやうに、口を開^あいたり手を延ばしたりしてごろごろ床^{ゆか}の上にくろがつてゐた。しかも、肩とか胸^{むね}とかの高くなつてゐる部分^{ぶぶん}に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなつてゐる部分の影を一層暗くしながら、永久に唾^{おし}の如く黙^{だま}つていた。

下人は、それらの屍骸の腐爛^{ふらん}した臭氣に思はず、鼻^{はな}を掩つた。しかし、その手は、次の瞬間^{しゆんかん}には、もう鼻を掩ふ事を忘れてゐた。或る強い感情^{かんじやう}が、殆悉この男の嗅覺を奪つてしまつたからである。

下人の眼は、その時、はじめて、其屍骸^{そのしがい}の中に蹲つてゐる人間を見た。檜肌色^{ひはだいろ}の着物を著た、背の低い、痩せた、白髪頭^{しらがあたま}の、猿のやうな老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松^{まつ}の木片を持つて、その屍骸^{しがい}の一つの顔を覗きこむやうに眺^{なが}めてゐた。髪の毛の長い所を見ると、多分^{たぶん}女の屍骸であらう。

下人は、六分の恐怖^{きやうふ}と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸^{いそ}をするのさへ忘れてゐた。舊記^{きよき}の記者^{きしや}の語を借りれば、「頭身^{とうしん}の毛も太る」やうに感じたのである。すると、老婆^{らうば}は、松の木片を、床板の間に挿^さして、それから、今まで眺めてゐた屍骸の首に兩手^{りやうて}をかけ

ると、丁度、猿の親が猿の子の虱しらみをとるやうに、その長い髪かみの毛けを一本づゝ抜きはじめた。髪は手に従したがつて抜けるらしい。

その髪かみの毛けが、一本づゝ抜けるのに従したがつて下人の心こころからは、恐怖が少しづつ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に對するはげしい憎惡ぞうをが、少しづゝ動いて來た。

——いや、この老婆らうばに對すると云つては、語弊ごへいがあるかも知れない。寧ろ、あらゆる惡に對する反感はんかんが、一分毎に強さを増して來たのである。この時、誰たれかがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、餓死うゑじをするか盗人になるかと云ふ問題を、改めて持出もちだしたら、恐らく下人は、何の未練みれんもなく、餓死を選んだ事であらう。それほど、この男の惡を憎む心は、老婆の床ゆかに挿した松の木片のやうに、勢よく燃え上り出あがしてゐたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人しにんの髪かみの毛けを抜くかわからなかつた。従つて、合理的がふりてきには、それを善惡の何れに片づけてよいかわからなかつた。しかし下人にとつては、この雨あめの夜よに、この羅生門の上で、死人の髪かみの毛けを抜くと云ふ事が、それ丈で既に許ゆるす可らざる惡であつた。勿論、下人は、さつき迄自分が、盗人になる氣でゐた事などは、とうに忘れてゐるのである。

そこで、下人は、兩足りやうあしに力を入れて、いきなり、梯子はしじから上へ飛び上つた。さうして聖柄ひぢりづかの太刀に手をかけながら、大股おおまたに老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは、云ふ迄

3、羅生門

もない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩^{いしゆみ}にでも弾かれたやうに、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が屍骸^{しがい}につまづきながら、慌^{あは}てふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵^{ののし}った。老婆は、それでも下人をつきのけて行かうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は屍骸^{しがい}の中で、暫、無云^{むごん}のまゝ、つかみ合つた。しかし勝敗^{しょうはい}は、はじめから、わかつている。下人はとうとう、老婆の腕^{うで}をつかんで、無理にそこへ扭^ねぢ倒^{たほ}した。丁度、鶏^{とり}の脚のやうな、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしてゐた。さあ何をしてゐた。云へ。云はぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆^{らうば}をつき放すと、いきなり、太刀^{たち}の鞘^{さや}を拂つて、白い鋼^{はがね}の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙つてゐる。

両手^{りやうて}をわなわなふるはせて、肩^{かた}で息^{いき}を切りながら、眼を、眼球^{がんきう}が眶^{まぶた}の外へ出さうになる程、見開いて、唾^{つば}のやうに執拗^{しうね}く黙つてゐる。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志^{いし}に支配されてゐると云ふ事を意識^{いしぎ}した。さうして、この意識^{いし}は、今^{いま}まではげしく燃えてゐた憎惡^{あつし}の心を何時^{いつ}の間にか冷^さましてしまつた。後^{あと}に残つたのは、唯、或^{ある}仕事^{しごと}をして、それが圓滿^{ゑんまん}に成就した時の、安らかな得意^{とくい}と満足とがあるばかり

りである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し聲を柔げてかう云つた。

「己は檢非違使の廳の役人などではない。今し方この門の下を通りかゝつた旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようと云ふやうな事はない。唯、今時分、この門の上で、何をして居たのだから、それを己に話しきへすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いてゐた眼を、一層大きくして、ぢつとその下人の顔を見守つた。眶の赤くなつた、肉食鳥のやうな、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、殆、鼻と一つになつた唇を、何か物でも嚙んでゐるやうに動かした。細い喉で、尖つた喉佛の動いてゐるのが見える。

その時、その喉から、鴉の啼くやうな聲が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ傳はつて來た。

「この髪を抜いてな、この女の髪を抜いてな、鬢にせうと思うたのぢや。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。さうして失望すると同時に、又前の憎惡が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはいつて來た。すると、その氣色が、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ屍骸の頭から奪つた長い抜け毛を持つたなり、墓のつぶやくやうな聲で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

成程、死人の髪の毛を抜くと云ふ事は、悪い事かも知れぬ。

しかし、かう云ふ死人の多くは、皆、その位な事を、されてもいゝ人間ばかりである。現

3、羅生門

に、自分が今、髪を抜いた女などは、蛇を四寸ばかりづゝに切つて干したのを、干魚だと云つて、太刀帶の陣へ賣りに行つた。疫病にかゝつて死ななかつたなら、今でも賣りに行つてゐたかもしれない。しかも、この女の賣る干魚は、味がよいと云ふので、太刀帶たちが、缺かさず菜料に買つてゐたのである。自分は、この女のした事が悪いとは思はない。しなければ、餓死をするので、仕方がなくした事だからである。だから、又今、自分のしてゐた事も悪い事とは思はない。これもやはりしなければ、餓死をするので、仕方がなくする事だからである。さうして、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、自分のする事を許してくれるのにちがひないと思ふからである。――老婆は、大體こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさへながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持つた大きな面皰を氣にしながら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて來た。それは、さつき、門の下でこの男に缺けてゐた勇氣である。さうして、又さつき、この門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反對な方向に動かうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに迷はなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云へば、餓死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出来ない程、意識の

外に追ひ出されてゐた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな聲で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に、右の手を面炮から離して、老婆の襟上をつかみながら、かう云つた。

「では、己が引剥をしようと恨むまいな。己もさうしなければ、餓死をする體なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く屍骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を數へるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜肌色の着物をわきにかゝへて、またゝく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、屍骸の中から、その裸の體を起したのは、それから間もなくの事である。老婆は、つぶやくやうな、うめくやうな聲を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盜を働きに急いでゐた。

4、戲作三昧

戲作三昧

(新字旧仮名)

芥川龍之介

大正六年十一月

天保二年九月の或午前である。神田同朋町の銭湯松の湯では、朝から不相変客が多かつた。式亭三馬が何年か前に出版した滑稽本の中で、「神祇、釈教、恋、無常、みないりごみの浮世風呂」と云つた光景は、今もその頃と変りはない。風呂の中で歌祭文を唄つてゐるかかあ唄たばね、上り場で手拭をしぼつてゐるちよんまげほんだ髷本多、文身の背中を流させてゐる丸額の大銀杏、さつきから顔ばかり洗つてゐる由兵衛奴、水槽の前に腰を据ゑて、しきりに水をかぶつてゐる坊主頭、竹の手桶と焼物の金魚とで、余念なく遊んでゐるあぶはちとんぼ虻蜂蜻蛉、——狭い流しにはさう云ふ種々雑多な人間がいづれも濡れた体を滑らかに光らせながら、濛々と立上る湯煙と窓からさす朝日の光との中に、模糊として動いてゐる。その又騒ぎが、一通りではない。第一に湯を使ふ音や桶を動かす音がする。それから話し声や唄の声がする。最後に時々番台で鳴らす拍子木の音がする。だから柘榴口の内外は、すべてがまるで戦場のやうに騒々しい。そこへ暖簾をくぐつて、商人が来る。物貰ひが来る。客の出入りは勿論あつた。その混雑の中に——

つつましく隅へ寄つて、その混雑の中に、静に垢を落してゐる、六十あまりの老人が一人あつた。年の頃は六十を越してゐよう。鬢の毛が見苦しく黄ばんだ上に、眼も少し悪い

4、戯作三昧

らしい。が、痩せてはゐるものの骨組みのしつかりした、寧むしろいかついと云ふ体格で、皮のたるんだ手や足にも、どこかまだ老年に抵抗する底力が残つてゐる。これは顔でも同じ事で、下顎骨したあごぼねの張つた頬のあたりや、稍やや大きい口の周圍に、旺盛わうせいな動物的精神力が、恐ろしい閃ひらめきを見せてゐる事は、殆ほとんど壮年の昔と變りがない。

老人は丁寧に上半身の垢を落してしまふと、止め桶との湯も浴びずに、今度は下半身を洗ひはじめた。が、黒い垢すりの甲斐絹かひきが何度となく上をこすつても、脂氣あぶらけの抜けた、小皺の多い皮膚からは、垢と云ふ程の垢も出て来ない。それがふと秋らしい寂しい氣を起させたのであらう。老人は片々かたかたの足を洗つたばかりで、急に力がぬけたやうに手拭の手を止めてしまった。さうして、濁つた止め桶の湯に、鮮かに映つてゐる窓の外の空へ眼を落した。そこには又赤い柿の実が、瓦屋根の一角を下に見ながら、疎まばらに透いた枝を綴つてゐる。

老人の心には、この時「死」の影がさしたのである。が、その「死」は、嘗かつて彼を脅おびやかしたそのやうに、忌いまはしい何物をも蔵してゐない。云はばこの桶の中の空のやうに、静ながら慕はしい、安らかな寂滅じやくめつの意識であつた。一切の塵勞を脱して、その「死」の中に眠る事が出来たならば——無心の子供のやうに夢もなく眠る事が出来たならば、どんなに悦よろこばしい事であらう。自分は生活に疲れてゐるばかりではない。何十年来、絶え間ない創作の苦しみにも、疲れてゐる。……

老人は慚然^{ふぜん}として、眼を挙げた。あたりではやはり賑^{にぎやか}な談笑の声につれて、大ぜいの裸の人間が、目まぐるしく湯気の中に動いてゐる。柘榴口の中の歌祭文にも、めりやすやよしこのの聲が加はった。ここには勿論、今彼の心に影を落した悠久なものの姿は、微塵^{みぢん}もない。

「いや、先生、こりやとんだ所で御眼にかかりますな。どうも曲亭^{きよくてい}先生が朝湯にお出でにならうなんぞとは手前夢にも思ひませんでした。」

老人は、突然かう呼びかける声に驚ろかされた。見ると彼の傍には、血色のいい、中背^{ちゆうぜい}の細銀杏^{ほそいんぎよう}が、止め桶を前に控へながら、濡れ手拭を肩へかけて、元氣よく笑つてゐる。これは風呂から出て、丁度上り湯を使はうとした所らしい。

「不相変御機嫌で結構だね。」

馬琴滝沢瑣吉^{ばきんたきざはさきち}は、微笑しながら、稍皮肉^{やや}にかう答へた。

二

「どう致しまして、一向結構ぢやございません。結構と云や、先生、八犬伝^{はつけんでん}は愈^{いよいよ}出でて、愈^{いよいよ}奇なり、結構なお出来でございますな。」

細銀杏は肩の手拭を桶の中へ入れながら、一調子張上げて弁じ出した。

4、戯作三昧

「船虫^{ふなむし}が贅婦^{ぜいふ}に身をやつして、小文吾^{こぶんご}を殺さうとする。それが一旦つかまつて拷問^{がうもん}された揚句^{さうすけ}に、莊介^{さうすけ}に助けられる。あの段どりが実に何とも申されません。さうしてそれが又、莊介小文吾再会の機縁になるのでございますからな。不肖ぢやございますが、この近江屋^{あふみや}平吉^{へいきち}も、小間物屋こそ致して居りますが、読本^{よみほん}にかけちや一かど通^{つう}のつもりでございます。その手前でさへ、先生の八犬伝には、何とも批^ひの打ちやうがございません。いや全く恐れ入りました。」

馬琴は黙つて又、足を洗ひ出した。彼は勿論彼の著作の愛読者に対しては、昔からそれ相当な好意を持つてゐる。しかしその好意の為に、相手の人物に対する評価が、変化するなどと云ふ事は少しもない。これは聡明な彼にとつて、当然すぎる程当然な事である、が、不思議な事には逆にその評価が彼の好意に影響すると云ふ事も亦殆どない。だから彼は場合によつて、輕蔑^{けいべつ}と好意とを、完^{まった}く同一人に対して同時に感ずる事が出来た。この近江屋平吉の如きは、正にさう云ふ愛読者の一人である。

「何しろあれだけのものをお書きになるんぢや、並大抵な骨折ぢやございますまい。先づ当今では、先生がさしづめ日本の羅貫中^{らくわんちゆう}と云ふ所でございますな——いや、これはとんだ失礼を申上げました。」

平吉は又大きな声をあげて笑つた。その声に驚かされたのであらう。側^{かたはら}で湯を浴びて

ゐた小柄な、色の黒い、^{すがめ}眇の小銀杏が、振返つて平吉と馬琴とを見比べると、妙な顔を流しへ痰を吐いた。

「貴公は不相変^{ほつく}発句にお凝りかね。」

馬琴は巧に話頭を転換した。がこれは何も眇の表情を氣にした訳ではない。彼の視力は幸福な事に（？）もうそれがはつきりとは見えない程、衰弱してゐたのである。

「これはお尋ねに預つて恐縮至極でございますな。手前のはほんの下手^{へた}の横好きで今日も運座、明日も運座、と、所々方々へ臆面もなくしやしやり出ますが、どう云ふものか、句の方は一向頭^{あたま}を出してくれません。時に先生は、如何でございますな、歌とか発句とか申すものは、格別お好みになりませんか。」

「いや私は、どうもああ云ふものにかけると、とんと無器用でね。尤も一時はやつた事もあるが。」

「そりや御冗談^{ごじやうだん}で。」

「いや、完く性^{しやう}に合はないとみえて、未だにとんと眼くらの垣覗きさ。」

馬琴は、「性に合はない」と云ふ語^{ことば}に、殊に力を入れてかう云つた。彼は歌や発句が作れないとは思つてゐない。だから勿論その方面の理解にも、乏しくないと云ふ自信がある。が、彼はさう云ふ種類の芸術には、昔から一種の輕蔑を持つてゐた。何故かと云ふと、歌

4、戯作三昧

にしても、発句にしても、彼の全部をその中に注ぎこむ為には、余りに形式が小さすぎる。だから如何に巧に詠みこなしてあつても、一句一首の中に表現されたものは、抒情なり叙景なり、僅に彼の作品の何行かを充す丈の資格しかない。さう云ふ芸術は、彼にとつて、第二流の芸術である。

三

彼が「性に合はない」と云ふ語に力を入れた後には、かう云ふ輕蔑が潜んでゐた。が、不幸にして近江屋平吉には、全然さう云ふ意味が通じなかつたものらしい。

「ははあ、やつぱりさう云ふものでございますかな。手前などの量見では、先生のやうな大家なら、何でも自由にお作りになれるだらうと存じて居りましたが——いや、天二物を与へずとは、よく申したものでございます。」

平吉はしばつた手拭で、皮膚が赤くなる程、ごしごし体をこすりながら、稍遠慮するやうな調子で、かう云つた。が、自尊心の強い馬琴には、彼の謙辞をその儘語通り受取られたと云ふ事が、先づ何よりも不満である。その上平吉の遠慮するやうな調子が愈又氣に入らない。そこで彼は手拭と垢すりとを流しへ抛り出すと半ば身を起しながら、苦い顔をして、こんな氣焰をあげた。

「尤も、当節の歌よみや宗匠位には行くつもりだがね。」

しかし、かう云ふと共に、彼は急に自分の子供らしい自尊心が恥づかしく感ぜられた。自分はさつき平吉が、最上級の語を使つて八犬伝を褒めた時にも、格別嬉しかつたとは思つてゐない。さうして見れば、今その反対に、自分が歌や発句を作る事の出来ない人間と見られたにしても、それを不満に思ふのは、明^{あきら}に矛盾である。咄嗟^{とつさ}にかう云ふ自省を動かしした彼は、恰^{あたか}も内心の赤面を隠さうとするやうに、慌しく止め桶の湯を肩から浴びた。

「でございませう。さうなくつちや、とてもああ云ふ傑作は、お出来になりますまい。して見ますと、先生は歌も発句もお作りになると、かう睨んだ手前の眼光は、やつぱり大したもののでございますな。これはとんだ手前味噌になりました。」

平吉は又大きな声を立てて、笑つた。さつきの眇^{すがめ}はもう側にゐない。痰^{たん}も馬琴の浴びた湯に、流されてしまつた。が、馬琴がさつきにも増して恐縮したのは勿論の事である。

「いや、うつかり話しこんでしまつた。どれ私も一風呂、浴びて来ようか。」

妙に間の悪くなつた彼は、かう云ふ挨拶と共に、自分に対する一種の腹立しきを感じながら、とうとうこの好人物の愛読者の前を退却すべく、徐^{おもむろ}に立上つた。が、平吉は彼の気焰によつて寧ろ愛読者たる彼自身まで、肩身が広くなつたやうに、感じたらしい。

「では先生その中に一つ歌か発句かを書いて頂きたいものでございますな。よろしうござ

4、戯作三昧

いますか。お忘れになつちやいけませんぜ。ぢや手前も、これで失礼致しませう。お忙しうもございませうが、お通りすがりの節は、ちと御立ち寄りを。手前も亦、お邪魔に上ります。」

平吉は追ひかけるやうに、かう云つた。さうして、もう一度手拭を洗ひ出しながら、柘榴口の方へ歩いて行く馬琴の後姿を見送つて、これから家へ歸つた時に、曲亭先生に遇つたと云ふ事を、どんな調子で女房に話して聞かせようかと考へた。

四

柘榴口の中は、夕方のやうにうす暗い。それに湯気が、霧よりも深くこめてゐる。眼の悪い馬琴は、その中にゐる人々の間を、あぶなさうに押しわけながら、どうにか風呂の隅をさぐり当てると、やつとそこへ皺だらけな体を浸した。

湯加減は少し熱い位である。彼はその熱い湯が爪の先にしみこむのを感じながら、長い呼吸をして、徐に風呂の中を見廻した。うす暗い中に浮んでゐる頭の数、七つ八つもあらうか。それが皆話しをしたり、唄をうたつたりしてゐるまはりには、人間の脂を溶した、滑な湯の面が、柘榴口からさす濁つた光に反射して、退屈さうにたぶたと動いてゐる。そこへ胸の悪い「銭湯の匂」がむんと人の鼻を衝いた。

馬琴の空想には、昔から羅曼的ロマンティックな傾向がある。彼はこの風呂の湯気の中に、彼が描かう

とする小説の場景の一つを、思ひ浮べるともなく思ひ浮べた。そこには重い舟日覆ふなひおひがある。

日覆の外の海は、日の暮と共に風が出たらしい。舷ふなべりをうつ浪の音が、まるで油を揺るや

うに、重苦しく聞えて来る。その音と共に、日覆をはためかすのは大方蝙蝠かうもりの羽音であら

う。舟子かこの一人は、それを気にするやうに、そつと舷から外を覗いて見た。霧の下りた海

の上には、赤い三日月が陰々いんいんと空に懸つてゐる。すると ……

彼の空想は、ここまで来て、急に破られた。同じ柘榴口の中で、誰か彼の読本よみほんの批評を

してゐるのが、ふと彼の耳へはいったからである。しかも、それは声と云ひ、話様はなしやうと云

ひ、殊更彼に聞かせようとして、しやべり立ててゐるらしい。馬琴は一旦風呂を出ようと

したが、やめて、ぢつとその批評を聞き澄ました。

「曲亭先生の、著作堂主人のと、大きな事を云つたつて、馬琴なんぞの書くものは、みん

なありや焼直しでげす。早い話が八犬伝は、手もなく水滸伝すゐこでんの引写しぢやげせんか。が、

そりやまあ大目に見ても、いい筋がありやす。何しろ先が唐からの物でげせう。そこで、まづ

それを読んだと云ふ丈でも、一手柄さ。所がそこへ又づぶ京伝きやうでんの二番煎じにばんせんと来ちや、呆れ

返つて腹も立ちやせん。」

馬琴はかすむ眼で、この悪口を云つてゐる男の方を透すかして見た。湯気に遮さへられて、はつ

4、戯作三昧

きりと見えないが、どうもさつき側にゐたすがめ眇の小銀杏でもあるらしい。さうとすればこの男は、さつき平吉が八犬伝を褒めたのに業を煮やして、わざと馬琴に当りちらしてゐるのであらう。

「第一馬琴の書くものは、ほんの筆先一点張りでげす。まるで腹には、何にもありやせん。あればまづ寺子屋てらこやの師匠でも云ひさうな、四書五経ししよごきやうの講釈だけでげせう。だから又当世の事は、とんと御存じなしさ。それが証拠にや、昔の事でなけりや、書いたと云ふためしはとんとげえせん。お染久松そめひさまつがお染久松ぢや書けねえもんだから、そら松染情史しやうせんじやうしあきのななくさ秋七草さ。こんな事は、馬琴大人たいじんの口真似をすれば、そのためしきはに多かりでげす。」

憎悪の感情は、どつちか優越の意識を持つてゐる以上、起したくも起されない。馬琴も相手の云ひぐさが癪にさはりながら、妙にその相手が憎めなかつた。その代りに彼自身の軽蔑を、表白してやりたいと云ふ欲望がある。それが実行に移されなかつたのは、恐らく年齢が齒止めをかけたせゐであらう。

「そこへ行くと、一九や三馬さんばは大したものでげす。あの手合ひの書くものには天然自然の人間が出てゐやす。決して小手先の器用や生嚼なまかしりの学問で、捏でつちあげたものぢやげえせん。そこが大きな蓑笠軒さりふけんいんじや隠者なんぞとは、ちがふ所さ。」

馬琴の経験によると、自分の読本の悪評を聞くと云ふ事は、単に不快であるばかりでな

く、危険も亦少くない。と云ふのは、その悪評を是認する為に、勇氣が沮喪そさうすると云ふ意味ではなく、それを否認する為に、その後の創作的動機に、反動的なものが加はると云ふ意味である。さうしてさう云ふ不純な動機から出発する結果、しばしば屡しばしば畸形な芸術を創造する惧おそれがあると云ふ意味である。時好に投ずることのみを目的としてゐる作者は別として、少しでも氣魄きはくのある作者なら、この危険には存外陥り易い。だから馬琴は、この年まで自分の読本に対する悪評は、成る可く読まないやうに心がけて来た。が、さう思ひながらも亦、一方には、その悪評を読んで見たいと云ふ誘惑がないでもない。今、この風呂で、この小銀杏の悪口を聞くやうになつたのも、半なかばはその誘惑に陥つたからである。

かう氣のついた彼は、すぐに便々べんべんとまだ湯に浸つてゐる自分の愚を責めた。さうして、癩かんだか高い小銀杏の声を聞き流しながら、柘榴口を外へ勢ひよく跨またいで出た。外には、湯氣の間に窓の青空が見え、その青空には暖く日を浴びた柿が見える。馬琴は水槽みづぶねの前へ来て、心静に上り湯を使つた。

「兎に角、馬琴は食はせ物でげす。日本の羅貫中もよく出来やした。」

しかし風呂の中ではさつきすかめの男が、まだ馬琴がゐるとでも思ふのか、依然として猛烈なフイリツピクスを発しつづけてゐる。事によると、これはその眇めがめに災わざはひされて、彼の柘榴口を跨いで出る姿が、見えなかつたからかも知れない。

五

しかし、錢湯を出た時の馬琴の気分は、沈んでゐた。眇の毒舌は、少くともこれだけの範囲で、確に予期した成功を収め得たのである。彼は秋晴れの江戸の町を歩きながら、風呂の中で聞いた悪評を、一々彼の批評眼にかけて、綿密に点検した。さうして、それが、如何なる点から考へて見ても、一顧の価のない愚論だと云ふ事実を、即座に証明する事が出来た。が、それにも関らず、一度乱された彼の気分は、容易に元通り、落着きさうもない。彼は不快な眼を挙げて、両側の町家を眺めた。町家のものは、彼の気分とは没交渉に、皆その日の生計を励んでゐる。だから「諸国銘葉」の柿色の暖簾、「本黄楊」の黄いろい櫛形の招牌、「駕籠」の掛行燈、「卜筮」の算木の旗、——さう云ふものが、無意味な一列を作つて、唯雑然と彼の眼底を通りすぎた。

「どうして己は、己の輕蔑してゐる悪評に、かう煩わづらはされるのだらう。」

馬琴は又、考へつづけた。

「己を不快にするのは、第一にあの眇すかめが己に悪意を持つてゐると云ふ事実だ。人に悪意を持たれると云ふ事は、その理由の如何いかんに関らず、それ丈で己には不快なのだから、仕方がない。」

彼は、かう思つて、自分の氣の弱いのを恥ぢた。實際彼の如く傍若無人な態度に出る人間が少かつたやうに、彼の如く他人の惡意に対して、敏感な人間も亦少かつたのである。さうして、この行為の上では全く反對に思はれる二つの結果が、実は同じ原因——同じ神經作用から來てゐると云ふ事實にも、勿論彼はとうから氣がついてゐた。

「しかし、己を不快にするものは、まだ外にもある。それは己があのだと、對抗するやうな位置に置かれたと云ふ事だ。己は昔からさう云ふ位置に身を置く事を好まない。勝負事をやらないのも、その為だ。」

ここまで分析して來た彼の頭は、更に一步を進めると同時に、思ひもよらない變化を、氣分の上に起させた。それは緊くむすんでゐた彼の唇が、この時急に弛んだのを見ても、知れる事であらう。

「最後に、さう云ふ位置へ己を置いた相手が、あのだと云ふ事實も、確に己を不快にしてゐる。もしあれがもう少し高等な相手だつたら、己はこの不快を反撥する丈の、反抗心を起してゐたのに相違ない。何にしても、あのだと云ふ相手では、いくら己でも閉口する筈だ。」

馬琴は苦笑しながら、高い空を仰いだ。その空からは、朗かな鳶の聲が、日の光と共に、雨の如く落ちて來る。彼は今まで沈んでゐた氣分が次第に軽くなつて來る事を意識した。

「しかし、眇がどんな惡評を立てようとも、それは精々、己を不快にさせる位だ。いくら

4、戯作三昧

鳶が鳴いたからと云つて、天日の歩みが止まるものではない。己の八犬伝は必ず完成するだらう。さうしてその時は、日本が古今に比倫ひりんのない大伝奇を持つ時だ。」

彼は恢復くわいふくした自信を勞いたはりながら、細い小路を静に家の方へ曲つて行つた。

六

内へ歸つて見ると、うす暗い玄関の沓脱くつぬぎの上に、見慣れたばら緒の雪駄せつたが一足のつてゐる。馬琴はそれを見ると、すぐにその客ののつぺりした顔が、眼に浮んだ。さうして又、時間をつぶされる迷惑を、苦々しく心に思ひ起した。

「今日も朝の中はつぶされるな。」

かう思ひながら、彼が式台へ上ると、慌しく出迎へた下女の杉すぎが、手をついた儘、下から彼の顔を見上げるやうにして、

「和泉屋いづみやさんが、御居間でお歸りをお待ちでございます。」と云つた。

彼は頷うなづきながら、ぬれ手拭を杉の手に渡した。が、どうもすぐに書斎へは通りたくない。

「お百ひやくは。」

「御仏参ごぶつさんにお出でになりました。」

「お路も一しよか。」

「はい。坊ちやんと御一しよに。」

「倅は。」

「山本様へいらつしやいました。」

家内は皆、留守である。彼はちよいと、失望に似た感じを味つた。さうして仕方なく、玄関の隣にある書齋の襖を開けた。

開けて見ると、そこには、色の白い、顔のてらてら光つてゐる、どこか妙に取り澄ました男が、細い銀の煙管を啣へながら、端然と座敷のまん中に控へてゐる。彼の書齋には石刷を貼つた屏風と床にかけた紅楓黄菊の双幅との外に、装飾らしい装飾は一つもない。壁に沿うては、五十に余る本箱が、唯古びた桐の色を、一面に寂しく並べてゐる。障子の紙も貼つてから、一冬はもう越えたのであらう。切り貼りの点々とした白い上には、秋の日に照された破芭蕉の大きな影が、婆娑として斜に映つてゐる。それだけにこの客のぞろりとした服装が、一層又周囲と釣り合はない。

「いや、先生、ようこそお帰り。」

客は、襖があくと共に、滑な調子でかう云ひながら、恭しく頭を下げた。これが、当時八犬伝に次いで世評の高い金瓶梅の版元を引受けてゐた、和泉屋市兵衛と云ふ本屋で

4、戯作三昧

ある。

「大分にお待ちなすつたらう。めづらしく今朝は、朝湯に行つたのでね。」

馬琴は、本能的にちよいと顔をしかめながら、何時もの通り、礼儀正しく座についた。

「へへえ、朝湯に。成程。」

市兵衛は、大に感服したやうな声を出した。如何なる瑣末な事件にも、この男の如く容易に感服する人間は、滅多にない。いや、感服したやうな顔をする人間は、稀である。馬琴は徐おもむろに一服吸ひつけながら、何時もの通り、早速話を用談の方へ持つていった。彼は特に、和泉屋のこの感服を好まないのである。

「そこで今日は何か御用かね。」

「へえ、なに又一つ原稿を頂戴に上りましたんで。」

市兵衛は煙管きせるを一つ指の先でくるとまはして見せながら、女のやうに柔やさしい声を出した。この男は不思議な性格を持つてゐる。と云ふのは、外面の行為と内面の心意とが、大抵な場合は一致しない。しない所か、何時でも正反対になつて現れる。だから、彼は大に強硬な意志を持つてゐると、必ずそれに反比例する、如何にも柔しい声を出した。

馬琴はこの声を聞くと、再び本能的に顔をしかめた。

「原稿と云つたつて、それは無理だ。」

「へへえ、何か御差支でもございますので。」

「差支へる所ぢやない。今年は読本を大分引受けたので、とても合巻の方へは手が出せさうもない。」

「成程それは御多忙で。」

と云つたかと思ふと、市兵衛は煙管で灰吹きを叩いたのが相図のやうに、今までの話はすつかり忘れたと云ふ顔をして、突然鼠小僧次郎太夫の話をしやべり出した。

七

鼠小僧次郎太夫は、今年五月の上旬に召捕られて、八月の中旬に獄門になつた、評判の高い大賊である。それが大名屋敷へばかり忍び込んで、盗んだ金は窮民へ施したと云ふ所から、当時は義賊と云ふ妙な名前が、一般にこの盗人の代名詞になつて、どこでも盛に持て囃されてゐた。

「何しろ先生、盗みにはいつた御大名屋敷が七十六軒、盗んだ金が三千百八十三両二分だと云ふのだから驚きます。盗人ぢやございますが、中々唯の人間に出来る事ぢやございません。」

馬琴は思はず好奇心を動かした。市兵衛がかう云ふ話をする後には、何時も作者に材料

4、戯作三昧

を与へてやると云ふ己惚れがひそんでゐる。その己惚れは勿論、よく馬琴の癩にさはつた。が、癩にさはりながらも、やつぱり好奇心には動かされる。芸術家としての天分を多量に持つてゐた彼は、殊にこの点では、誘惑に陥り易かつたからであらう。

「ふむ、それは成程えらいものだね。私もいろいろ噂には聞いてゐたが、まさかそれ程とは思はずにゐた。」

「つまりまづ賊中の豪なるものでございませうな。何でも以前は荒尾但馬守様の御供押しか何かを勤めた事があるさうで、お屋敷方の案内に明いのは、そのせみださうでございませう。引廻しを見たものの話を聞きますと、でつぷりした、愛嬌のある男ださうで、その時は紺の越後縮の帷子に、下へは白練の単衣を着てゐたと申しますが、とんと先生のお書きになるものの中へでも出て来さうぢやございせんか。」

馬琴は生返事をしながら、又一服吸ひつけた。が、市兵衛は元より、生返事位に驚くやうな男ではない。

「如何でございませう。そこで金瓶梅の方へ、この次郎太夫を持ちこんで、御執筆を願ふやうな訳には参りますまいか。それはもう手前も、お忙しいのは重々承知致して居ります。が、そこをどうか枉げて、一つ御承諾を。」

鼠小僧はここに至つて、忽ち又元の原稿の催促へ舞戻つた。が、この慣用手段に慣れて

ゐる馬琴は依然として承知しない。のみならず、彼は前よりも一層機嫌が悪くなつた。これは一時でも市兵衛の計に乗つて、幾分の好奇心を動かしたのが、彼自身莫迦莫迦しくなつたからである。

彼はまづさうに煙草を吸ひながら、とうとうこんな理窟を云ひ出した。

「第一私が無理に書いたつて、どうせ碌なもの出来やしない。それぢや売れ行きに関するのは云ふまでもない事なのだから、貴公の方だつてつまらなからう。して見ると、これは私の無理を通させる方が、結局両方の為になるだらうと思ふが。」

「でございませうが、そこを一つ御奮発願ひたいので。如何なものでございませう。」

市兵衛は、かう云ひながら、視線で彼の顔を「撫で廻した。」（これは馬琴が和泉屋の或眼つきを形容した語である。）

さうして、煙草の煙をとぎれとぎれに鼻から出した。

「とても、書けないね。書きたくも、暇がないんだから、仕方がない。」

「それは手前、困却致しますな。」

と云つたが、今度は突然、当時の作者仲間の事を話し出した。やつぱり細い銀の煙管を、うすい唇の間に啣へながら。

八

「又種彦^{たねひこ}の何か新版物が、出るさうでございますな。いづれ優美第一の、哀れつぱいものでございませう。あの仁^{じん}の書くものは、種彦でなくては書けないと云ふ所があるやうで。」

市兵衛は、どう云ふ氣か、すべて作者の名前を呼びすてにする習慣がある。

馬琴はそれを聞く度に、自分も亦^{また}蔭では「馬琴が」と云はれる事だらうと思つた。

この輕薄な、作者を自家の職人だと心得てゐる男の口から、呼びすてにされてまでも、原稿を書いてやる必要がどこにある？

—— 癩^{たか}の昂^{たか}ぶつた時々には、かう思つて腹を立てた事も、稀ではない。

今日も彼は種彦と云ふ名を耳にすると、苦い顔を愈^{いよいよ}苦くせずにはゐられなかつた。が、市兵衛には、少しもそんな事は氣にならないらしい。

「それから手前どもでも、春水^{しゅんすゐ}を出さうかと存じて居ります。先生はお嫌ひでございますか、やはり俗物にはあの辺が向きますやうでございますな。」

「ははあ、左様かね。」

馬琴の記憶には、何時か見かけた事のある春水の顔が、卑しく誇張されて浮んで來た。

「私は作者ぢやない。お客様の望みに従つて、艶物^{つやもの}を書いてお目にかける手間取りだ。」

——かう春水が称してゐると云ふ噂は、馬琴も夙に聞いてゐた所である。

だから、勿論彼はこの作者らしくない作者を、心の底から輕蔑してゐた。が、それにも関らず、今市兵衛が呼びすてにするのを聞くと、依然として不快の情を禁ずる事が出来ない。「兎も角あれで、艶つばい事にかけては、達者なものでございますからな。それに名代の健筆で。」

かう云ひながら、市兵衛はちよいと馬琴の顔を見て、それから又すぐに口に啣へてゐる銀の煙管へ眼をやつた。その咄嗟の表情には、恐る可く下等な何者かがある。少くとも、馬琴はさう感じた。

「あれだけのものを書きますのに、すらすら筆が走りつづけて、二三回分位なら、紙からはなれないさうでございます。時に先生なぞは、やはりお早い方でございますか。」

馬琴は不快を感じると共に、脅されるやうな心もちになつた。彼の筆の早さを春水や種彦のそれと比較されると云ふ事は、自尊心の旺盛な彼にとつて、勿論好ましい事ではない。しかも彼は遅筆の方である。彼はそれが自分の無能力に裏書きをするやうに思はれて、寂しくなつた事もよくあつた。が、一方又それが自分の芸術的良心を計る物差しとして、尊みたいと思つた事も度々ある。唯、それを俗人の穿鑿にまかせるのは、彼がどんな心もちでゐようとも、断じて許さうとは思はない。そこで彼は、眼を床の紅楓黄菊の方へやりな

4、戯作三昧

がら、吐き出すやうにかう云つた。

「時と場合でね。早い時もあれば、又遅い時もある。」

「ははあ、時と場合でね。成程。」

市兵衛は三度感服した。が、これが感服それ自身に了る感服でない事は、云ふまでもない。彼はこの後で、すぐに又、切りこんだ。

「でございますが、度々申し上げた原稿の方は、一つ御承諾下さいませんか。春水なんぞも、……」

「私と為永さんとは違ふ。」

馬琴は腹を立てると、下唇を左の方へまげる癖がある。この時、それが恐しい勢で左へまがつた。

「まあ私は御免を蒙らう。——杉、杉、和泉屋さんのお履物を直して置いたか。」

九

和泉屋市兵衛を逐ひ帰すと、馬琴は独り縁側の柱へよりかかつて、狭い庭の景色を眺めながら、まだをさまらない腹の虫を、無理にをさめようとして、骨を折つた。

日の光を一ぱいに浴びた庭先には、葉の裂けた芭蕉や、坊主になりかかった梧桐が、楨

や竹の緑と一しよになつて、暖かく何坪かの秋を領してゐる。こつちの手水鉢てうづばちの側にある芙蓉ふようは、もう花が疎まばらになつたが、向うの袖垣の外に植ゑた木犀もくせいは、まだその甘い匂が衰へない。そこへ例の鳶とびの聲が遙はるかな青空の向うから、時々笛を吹くやうに落ちて来た。

彼は、この自然と対照させて、今更のやうに世間の下等さを思出した。下等な世間に住む人間の不幸は、その下等さに煩わづらはされて、自分も亦下等な云動を余儀なくさせられる所にある。

現に今自分は、和泉屋市兵衛を逐おひ払つた。逐ひ払ふと云ふ事は、勿論高等な事でも何でもない。が、自分は相手の下等さによつて、自分も亦その下等な事を、しなくてはならない所まで押しつめられたのである。

さうして、した。

したと云ふ意味は市兵衛と同じ程度まで、自分を卑くしたと云ふのに外ならない。つまり自分は、それ丈墮落させられた訳である。

ここまで考へた時に、彼はそれと同じやうな出来事を、近い過去の記憶に発見した。

それは去年の春、彼の所へ弟子入りをしたいと云つて手紙をよこした、相州朽木さうしゆくち上新田かみしんでんとかの長島政兵衛ながしまさへゑと云ふ男である。この男はその手紙によると、二十一の年に聾つんぼになつて以来、廿四の今日まで文筆を以て天下に知られたいと云ふ決心で、専もっぱら読本よみほんの著作に精を出

4、戯作三昧

した。八犬伝や巡島記じゆんたうきの愛読者である事は云ふまでもない。就いてはかう云ふ田舎あなにゐては、何かと修業の妨さまたげになる。だから、あなたの所へ、食客に置いて貰ふ訳には行くまいか。それから又、自分は六冊物の読本の原稿を持つてゐる。これもあなたの筆削ひつさくを受けて、然るべき本屋から出版したい。――大体こんな事を書いてよこした。向うの要求は、勿

論皆馬琴にとつて、余りに虫のいい事ばかりである。が、耳の遠いと云ふ事が、眼の悪いのを苦にしてゐる彼にとつて、幾分の同情を繋ぐ楔子くさびになつたのであらう。折角だが御依頼通りになり兼ねると云ふ彼の返事は、寧むしろ彼としては、鄭重ていぢようを極めてゐた。すると、折返して来た手紙には、始から仕舞まで猛烈な非難の文句の外に、何一つ書いてない。

自分はあなたの八犬伝と云ひ、巡島記と云ひ、あんな長たらしい、拙劣よみほんな読本を根気よく読んであげたが、あなたは私のたつた六冊物の読本に眼を通すのさへ拒こばまれた。以てあなたの人格の下等さがわかるではないか。――手紙はかう云ふ文句ではじまつて、先輩

として後輩を食客に置かないのは、鄙吝ひりんの爲す所だと云ふ攻撃で、僅に局を結んでゐる。馬琴は腹が立つたから、すぐに返事を書いた。さうしてその中に、自分の読本が貴公のやうな軽薄児に読まれるのは、一生の恥辱だと云ふ文句を入れた。その後査えうとして消息を聞かないが、彼はまだ今まで、読本の稿を起してゐるだらうか。さうしてそれが何時いつか日本中の人間に読まれる事を、夢想してゐるだらうか。……………

馬琴はこの記憶の中に、長島政兵衛なるものに対する情無さと、彼自身に対する情無さとを同時に感ぜざるを得なかつた。さうしてそれは又彼を、云ひやうのない寂しさに導いた。が、日は無心に木犀もくせいの匂を融とかしてゐる。芭蕉や梧桐も、ひつそりとして葉を動かさない。鳶とびの声さへ以前の通り朗ほがらかである。この自然とあの人間と——十分の後、下女の杉が昼飯の支度の出来た事を知らせに來た時まで、彼はまるで夢でも見てゐるやうに、ぼんやり縁側の柱に倚よりつづけてゐた。

十

独りで寂しい昼飯をすませた彼は、漸やうやく書齋へひきとると、何となく落着がない、不快な心もちを鎮しづめる為に、久しぶりで水滸すみこ伝を開いて見た。偶然開いた所は豹子頭林冲が、風雪の夜に山神廟さんじんべうで、草秣場まぐさばの焼けるのを望見する件くだりである。彼はその戲曲的な場景に、何時もの感興を催す事が出来た。が、それが或所まで続くと反かへつて妙に不安になつた。

仏参ぶつさんに行つた家族のものは、まだ歸つて来ない。内の中は森しんとしてゐる。彼は陰気な顔を片づけて、水滸伝を前にしながら、うまくもない煙草を吸つた。さうしてその煙の中に、ふだんから頭の中に持つてゐる、或疑問を髣髴はうふつした。

それは、道德家としての彼と芸術家としての彼との間に、何時も纏綿てんめんする疑問である。

4、戯作三昧

彼は昔から「先王せんわうの道」を疑はなかつた。彼の小説は彼自身公言した如く、正に「先王の道」の芸術的表現である。だから、そこに矛盾はない。が、その「先王の道」が芸術に与へる価値と、彼の心情が芸術に与へようとする価値との間には、存外大きな懸隔がある。従つて彼の中にある、道德家が前者を肯定すると共に、彼の中にある芸術家は当然又後者を肯定した。勿論此矛盾を切抜ける安価な妥協的思想もない事はない。實際彼は公衆に向つて此煮切らない調和説の背後に、彼の芸術に対する曖昧あいまいな態度を隠さうとした事もある。しかし公衆は欺かれても、彼自身は欺かれない。彼は戯作げさくの価値を否定して「勸懲くわんちやうの具」と称しながら、常に彼の中に磅礴ぱうはくする芸術的感興に遭遇すると、忽ち不安を感じ出した。——水滸伝の一節が、偶たま彼の気分の上に、予想外の結果を及ぼしたのにも、実はこんな理由があつたのである。

この点に於て、思想的に臆病だつた馬琴は、默然として煙草をふかしながら、強ひて思量を、留守にしてゐる家族の方へ押し流さうとした。が、彼の前には水滸伝がある。不安はそれを中心にして、容易に念頭を離れない。そこへ折よく久しぶり、華山渡辺登くわざんわたなべのぼるが尋ねて来た。袴羽織に紫の風呂敷包を小脇にしてゐる所では、これは大方借りてゐた書物でも返しに來たのであらう。

馬琴は喜んで、この親友をわざわざ玄関まで、迎へに出た。

「今日は拝借した書物を御返却^{かたがた}旁、御目にかけたいものがあつて、参上しました。」
華山は書齋に通ると、果してかう云つた。見れば風呂敷包みの外にも紙に巻いた絵絹^{ゑぎぬ}らしいものを持つてゐる。

「御暇なら一つ御覧を願ひませうかな。」

「おお、早速、拝見ませう。」

華山は或興奮に似た感情を隠すやうに、稍^{やや}わざとらしく微笑しながら、紙の中の絵絹を披^{ひら}いて見せた。絵は蕭索^{せうさく}とした裸の樹を、遠近^{をちこち}と疎^{まばら}に描いて、その中に掌^{たなごころ}を拊^うつて談笑する二人の男を立たせてゐる。林間に散つてゐる黄葉と、林梢^{りんせう}に群^{むら}つてゐる乱鴉^{らんあ}と、――画面のどこを眺めても、うそ寒い秋の気が動いてゐない所はない。

馬琴の眼は、この淡彩の寒山拾得^{かんざんじつとく}に落ちると、次第にやさしい潤^{うるほ}ひを帯びて輝き出した。

「何時もながら、結構な御出来ですな。私は王摩詰^{わうまきつ}を思ひ出します。食随^{はし}鳴磬^に巢烏^り下、行踏^テ空林^バ落葉^ヲ声^{アリ} 《しよくはめいけいにしたがひさううくだり、ゆいてくうりんをふめばらくえふこゑあり》 と云ふ所でせう。」

4、戯作三昧

「これは昨日描き上げたのですが、私には気に入ったから、御老人さへよければ差上げようと思つて持つて来ました。」

華山は、鬚の痕の青い頤を撫でながら、満足さうにかう云つた。

「勿論気に入つたと云つても、今まで描いたものの中ではと云ふ位な所ですが——とて
も思ふ通りには、何時になつても、描けはしません。」

「それは有難い。何時も頂戴ばかりしてゐて恐縮ですが。」

馬琴は、絵を眺めながら、呟くやうに礼を云つた。

未完成の儘になつてゐる彼の仕事の事が、この時彼の心の底に、何故かふと閃いたからである。

が、華山は華山で、やはり彼の絵の事を考へつづけてゐるらしい。

「古人の絵を見る度に、私は何時もどうしてかう描けるだらうと思ひますな。木でも石でも人物でも、皆その木なり石なり人物なりに成り切つて、しかもその中に描いた古人の心もちが、悠々として生きてゐる。あれだけは実に大したものです。まだ私などは、そこへ行くと、子供程にも出来て居ません。」

「古人は後生恐るべしと云ひましたがな。」

馬琴は華山が自分の絵の事ばかり考へてゐるのを、妬ましいやうな心もちで眺めながら、

何時になくこんな諧謔かいぎやくを弄した。

「それは後生も恐ろしい。だから私どもは唯、古人と後生との間に挟はさまつて、身動きもならず、押され押され進むのです。尤もこれは私どもばかりではありませんまい。古人もさうだつたし、後生もさうでせう。」

「如何にも進まなければ、すぐに押し倒される。するとまづ一足でも進む工夫が、肝腎かんじんらしいやうですな。」

「さやう、それが何よりも肝腎です。」

主人と客とは、彼等自身の語ことばに動かされて、暫くの間口をとぎした。

さうして二人とも、秋の日の静な物音に耳をすませた。

「八犬伝は不相変あひかはらず、搦はかがお行きですか。」

やがて、華山が話題を別な方面に開いた。

「いや、一向搦はかどらんで仕方ありません。これも古人には及ばないやうです。」

「御老人がそんな事を云つては、困りますな。」

「困るのなら、私の方が誰よりも困つてゐます。併しどうしても、之で行ける所迄行くより外はない。さう思つて、私は此頃八犬伝と討死の覚悟をしました。」

かう云つて、馬琴は自ら恥づるもののやうに、苦笑した。

4、戯作三昧

「たかが戯作げさくだと思つても、さうは行かない事が多いのでね。」

「それは私の絵でも同じ事です。どうせやり出したからには、私も行ける所までは行き切りたいと思つてゐます。」

「御互に討死ですか。」

二人は声を立てて、笑つた。

が、その笑ひ声の中には、二人だけにしかわからない或寂しさが流れてゐる。

と同時に又、主人と客とは、ひとしくこの寂しさから、一種の力強い興奮を感じた。

「しかし絵の方は羨ましいやうですな。公儀の御咎おとがめを受けるなどと云ふ事がないのは何よりも結構です。」

今度は馬琴が、話頭を一転した。

十二

「それはないが——御老人の書かれるものも、さう云ふ心配はありますまい。」

「いや、大にありますよ。」

馬琴は改名主あらためなぬしの図書検閲が、陋ろうを極めてゐる例として、自作の小説の一節が役人が賄賂わいろをとる箇条のあつた為に、改作を命ぜられた事実を挙げた。さうして、それにこんな批評

をつけ加へた。

「改名主など云ふものは、咎め立てをすればする程、尻尾の出るのが面白いぢやありませんか。自分たちが賄賂をとるものだから、賄賂の事を書かれると、嫌がつて改作させる。又自分たちが猥雑な心もちに囚はれ易いものだから、男女の情さへ書いてあれば、どんな書物でも、すぐ誨淫の書にしてしまふ。それで自分たちの道徳心が、作者より高い気でゐるから、傍痛い次第です。云はばあれは、猿が鏡を見て、齒をむき出してゐるやうなものでせう。自分で自分の下等なのに腹を立ててゐるのですからな。」

華山は馬琴の比喻が余り熱心なので、思はず失笑しながら、

「それは大きにさう云ふ所もありませう。しかし改作させられても、それは御老人の恥辱になる訳ではありませんまい。改名主などが何と云はうとも、立派な著述なら、必ずそれだけの事はある筈です。」

「それにしても、ちと横暴すぎる事が多いのでね。さうさう一度などは獄屋へ衣食を送る件を書いたので、やはり五六行削られた事がありました。」

馬琴自身もかう云ひながら、華山と一しよに、くすくす笑ひ出した。

「しかしこの後五十年か百年経つたら、改名主の方はゐなくなつて、八犬伝だけが残る事になりませう。」

4、戯作三昧

「八犬伝が残るにしろ、残らないにしろ、改名主の方は、存外何時までもゐさうな気がしますよ。」

「さうですか。私にはさうも思はれませんが。」

「いや、改名主はゐなくなつても、改名主のやうな人間は、何時の世にも絶えた事はありません。焚書坑儒^{ふんしよかうじゆ}が昔だけあつたと思ふと、大きに違ひます。」

「御老人は、この頃心細い事ばかり云はれますな。」

「私が心細いのではない。改名主どものはびこる世の中が、心細いのです。」

「では、益働^{ますます}かれたら好いでせう。」

「兎に角、それより外はないやうですな。」

「そこで又、御同様に討死ですか。」

今度は二人とも笑はなかつた。笑はなかつたばかりではない。馬琴はちよいと顔を堅くして、華山を見た。それ程華山のこの冗談のやうな語^{ことば}には、妙な鋭さがあつたのである。

「しかしまづ若い者は、生きのこる分別をする事です。討死は何時でも出来ますからな。」

程を経て、馬琴がかう云つた。華山の政治上の意見を知つてゐる彼には、この時ふと一種の不安が感ぜられたからであらう。が、華山は微笑したがり、それには答へようともしなかつた。

十三

華山が帰つた後で、馬琴はまだ残つてゐる興奮を力に、八犬伝の稿をつぐべく、何時ものやうに机へ向つた。先を書きつづける前に、昨日書いた所を一通り読み返すのが、彼の昔からの習慣である。そこで彼は今日も、細い行の間へべた一面に朱を入れた、何枚かの原稿を、氣をつけてゆつくり読み返した。

すると、何故か書いてある事が、自分の心もちとぴつたり来ない。字と字との間に、不純な雑音が潜んでゐて、それが全体の調和を至る所で破つてゐる。彼は最初それを、彼の癪が昂ぶつてゐるからだと解釈した。

「今の己の心もちが悪いのだ。書いてある事は、どうにか書き切れる所まで、書き切つてゐる筈だから。」

さう思つて、彼はもう一度読み返した。が、調子の狂つてゐる事は前と一向変りはない。彼は老人とは思はれない程、心の中で狼狽し出した。

「このもう一つ前はどうかだらう。」

彼はその前に書いた所へ眼を通した。すると、これも亦徒らに粗雑な文句ばかりが、糅然としてちらかつてゐる。彼は更にその前を読んだ。さうして又その前の前を読んだ。

4、戯作三昧

しかし読むに従つて拙劣な布置と乱脈な文章とは、次第に眼の前に展開して来る。

そこには何等の映像をも与へない叙景があつた。何等の感激をも含まない詠歎があつた。さうして又、何等の理路を辿らない論弁があつた。彼が数日を費して書き上げた何回分かの原稿は、今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌ぜうぜつとしか思はれない。彼は急に、心を刺されるやうな苦痛を感じた。

「これは始めから、書き直すより外はない。」

彼は心の中でかう叫びながら、忌々いまいましさうに原稿を向うへつきやると、片肘かたひぢついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。

彼はこの机の上で、弓張月ゆみはりづきを書き、南柯夢なんかのゆめを書き、さうして今は八犬伝を書いた。

この上にある端溪たんけいの硯すずり、蹲螭そんちの文鎮ひき、螭ひきの形をした銅の水差し、獅子と牡丹ぼたんとを浮かせた青磁せいじの硯屏けんびやう、それから蘭を刻んだ孟宗もうそうの根竹の筆立て――さう云ふ一切の文房具は、

皆彼の創作の苦しみ、久しい以前から親んでゐる。それらの物を見るにつけても、彼はおのづか自ら今の失敗が、彼の一生の労作に、暗い影を投げるやうな――彼自身の実力が根本的に怪しいやうな、忌いまはしい不安を禁じる事が出来ない。

「自分はさつきまで、本朝ほんてうに比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると、人並に己惚うぬぼれの一つだつたかも知れない。」

かう云ふ不安は、彼の上に、何よりも堪へ難い、落莫たる孤独の情を齎した。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜である事を忘れるものではない。が、それ丈に又、同時代の屑々たる作者輩に対しては、傲慢であると共に飽迄も不遜である。その彼が、結局自分も彼等と同じ能力の所有者だつたと云ふ事を、さうして更に厭ふ可き遼東の豕だつたと云ふ事は、どうして安々と認められよう。しかも彼の強大な「我」は「悟り」と「諦め」とに避難するには余りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横へた儘、親船の沈むのを見る、難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、静に絶望の威力と戦ひつづけた。もしこの時、彼の後の襖が、けたたましく開放されなかつたら、さうして「お祖父様唯今。」と云ふ声と共に、柔かい小さな手が、彼の頸へ抱きつかなくなつたら、彼は恐らくこの憂鬱な気分の中に、何時までも鎖されてゐた事であらう。が、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供のみが持つてゐる大胆と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上つた。

「お祖父様唯今。」

「おお、よく早く帰つて来たな。」

この語と共に、八犬伝の著者の皺だらけな顔には、別人のやうな悦びが輝いた。

十四

茶の間の方では、癩^{かんたか}高い妻のお百^{ひやく}の声や内気らしい嫁のお路^{みち}の聲が賑^{にぎやか}に聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から伴^{せがれ}の宗伯^{そうはく}も帰り合せたらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましでもするやうに、わざと真面目な顔をして天井を眺めた。外気にさらされた頬が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが、息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅^{くりうめ}の小さな紋附を着た太郎は、突然かう云ひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐^{こら}へようとする努力とで、壓^{おさ}が何度も消えたり出来たりする。——それが馬琴には、自^{おのづか}ら微笑を誘ふやうな気がした。

「よく毎日^{まいにち}。」

「うん、よく毎日？」

「御勉強なさい。」

馬琴はとうとう噴き出した。が、笑の中ですぐ又語^{ことば}をつぎながら、

「それから？」

「それから——ええと——癩癩^{かんしやく}を起しちやいけませんつて。」

「おやおや、それつきりかい。」

「まだあるの。」

太郎はかう云つて、糸鬢奴いとびんやつこの頭を仰向けあふむながら自分も亦笑ひ出した。眼を細くして、白い歯を出して、小さな靨をよせて、笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて、世間の人間のやうな憐れむべき顔にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながら、こんな事を考へた。さうしてそれが、更に又彼の心をくすぐ擽つた。

「まだ何かあるかい？」

「まだね。いろんな事があるの。」

「どんな事が。」

「ええと——お祖父様ぢいはね。今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりますから？」

「ですからね。よくね。辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」馬琴は思はず、真面目な声を出した。

「もつと、もつとよく辛抱なさいつて。」

「誰がそんな事を云つたのだい。」

「それはね。」

4、戯作三昧

太郎は悪戯^{いたづら}さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑った。

「だあれだ？」

「さうさな。今日は御仏参に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて来たのだらう。」

「違ふ。」

断然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から、半分腰を擡^{もた}げながら、顎^{あご}を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「浅草の観音様がさう云つたの。」

かう云ふと共に、この子供は、家内中に聞えさうな声で嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛び退いた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに小さな手を叩きながら、ころげるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に、厳肅な何物かが刹那^{せつな}に閃^{ひらめ}いたのは、この時である。

彼の唇には幸福な微笑が浮んだ。それと共に彼の眼には、何時か涙が一ぱいになつた。

この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふ所ではない。

この時、この孫の口から、かう云ふ語ことばを聞いたのが、不思議なのである。

「観音様がさう云つたか。勉強しろ。癩癩いらいを起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」
六十何歳かの老芸術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷うなづいた。

十五

その夜の事である。

馬琴は薄暗い円行燈まるあんどうの光の下で、八犬伝の稿をつぎ始めた。執筆中は家内のものも、この書齋へははいつて来ない。ひつそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀こほろぎの声と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

始め筆を下した時、彼の頭の中には、かすかな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と、筆が進むのに従つて、その光のやうなものは、次第に大きさを増して来る。経験上、その何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意をして、筆を運んで行つた。神来の興は火と少しも変りがない。起す事を知らなければ、一度燃えても、すぐに又消えてしまふ。……

「あせるな。さうして出来る丈、深く考へろ。」

馬琴はややもすれば走りさうな筆を警いましめながら、何度もかう自分に囁ささやいた。が、頭の

4、戯作三昧

中にはもうさつきの星を砕いたやうなものが、川よりも早く流れてゐる。さうしてそれが刻々に力を加へて来て、否応なしに彼を押しやつてしまふ。

彼の耳には何時か、蟋蟀の音が聞えなくなつた。彼の眼にも、円行燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生じて、一気に紙の上を^{すべ}りはじめた。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書きつづけた。

頭の中の流は、丁度空を走る銀河のやうに、滾々^{こんこん}として何処からか溢れて来る。

彼はその凄じい勢を恐れながら、自分の肉体の力が万一それに耐へられなくなる場合を気づかつた。さうして、緊く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。

「根かぎり書きつづける。今己^{おれ}が書いてゐる事は、今でなければ書けない事かも知れないぞ。」

しかし光の霽^{もや}に似た流は、少しもその速力を緩めない。反つて目まぐるしい飛躍の中に、あらゆるものを溺らせながら、澎湃^{はうはい}として彼を襲つて来る。

彼は遂に全くその虜^{とりこ}になつた。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を駆つた。

この時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀誉^{きよ}に煩はされる心などは、とうに眼底を払つて消えてしまつた。あるのは、唯不可

思議な悦びである。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作^{げさく}三味の心境が味^{あじ}到^とされよう。どうして戯作者^{おどし}の厳かな魂が理解されよう。ここにこそ「人生」は、あらゆるその残滓^{ざんし}を洗つて、まるで新しい鉦石のやうに、美しく作者の前に、輝いてゐるではないか。……

*

*

*

その間も茶の間の行燈のまはりでは、姑^{しやうと}のお百と、嫁のお路とが、向ひ合つて縫物を續けてゐる。太郎はもう寝かせたのであらう。少し離れた所には^{わうじやく}疍弱らしい宗伯が、さつきから丸薬をまろめるのに忙しい。

「お父様^{とつさん}はまだ寝ないかねえ。」

やがてお百は、針へ髪^{かみ}の油をつけながら、不服らしく^{つふや}呟いた。

「きつと又お書きもので、夢中になつていらつしやるのでせう。」

お路は眼を針から離さずに、返事をした。

「困り者^{こまりもの}だよ。碌^{ろく}なお金にもならないのにさ。」

お百はかう云つて、倅と嫁とを見た。宗伯は聞えないふりをして、答へない。

お路も黙つて針を運びつづけた。蟋蟀はここでも、書斎でも、変りなく秋を鳴きつくして

4、戯作三昧

ゐる。

(大正六年十二月)

地獄變

(旧字旧仮名)

芥川龍之介

大正八年一月 新潮社『傀儡師』

5、地獄變

一

堀川の大殿様のやうな方は、これまでは固より、後の世には恐らく二人とはいらつしやいますまい。噂に聞きますと、あの方の御誕生になる前には、大威徳明王の御姿が御母君の夢枕にお立ちになつたとか申す事でございますが、兎に角御生れつきから、並々の人間とは御違ひになつてゐたやうでございます。でございますから、あの方の爲なさいました事には、一つとして私どもの意表に出てゐないものはございません。早い話が堀川のお邸の御規模を拜見致しましても、壯大と申しませうか、豪放と申しませうか、到底私どもの凡慮には及ばない、思ひ切つた所があるやうでございます。中にはまた、そこを色々とあげつらつて大殿様の御性行を始皇帝や煬帝やうだいに比べるものもございますが、それは諺に云ふ群盲の象を撫でるやうなものでもございませうか。あの方の御思召は、決してそのやうに御自分ばかり、榮耀榮華をなさらうと申すのではございません。それよりはもつと下々の事まで御考へになる、云はば天下と共に楽しむとでも申しさうな、大腹中の御器量がございました。

それでございますから、二條大宮の百鬼夜行に御遇ひになつても、格別御障りがなかつたのでございませう。又陸奥の鹽竈の景色を寫したので名高いあの東三條の河原院に、夜

なく、現はれると云ふ噂のあつた融とほろの左大臣の靈でさへ、大殿様のお叱りを受けては、姿を消したのに相違ございませんまい。かやうな御威光でございますから、その頃洛中の老若男女が、大殿様と申しますと、まるで權者ごんじやの再來のやうに尊み合ひましたも、決して無理ではございません。何時ぞや、内の梅花の宴からの御歸りに御車の牛が放れて、折から通りかゝつた老人に怪我をさせました時でさへ、その老人は手を合せて、大殿様の牛にかけられた事を難有がつたと申す事でございます。

さやうな次第でございますから、大殿様御一代の間には、後々までも語り草になりますやうな事が、随分澤山にございました。大饗おほみうけの引出物に白馬あをうまばかりを三十頭、賜つたこともございますし、長良ながらの橋の橋柱はしばしらに御寵愛の童わらべを立てた事もございますし、それから又華陀の術を傳へた震旦しんたんの僧に、御腿もがさの瘡を御切らせになつた事もございますし、――

一々數へ立てゝ居りましては、とても際限がございません。が、その數多い御逸事の中でも、今では御家の重寶になつて居ります地獄變の屏風の由來程、恐ろしい話はございますまい。日頃は物に御騒ぎにならない大殿様でさへ、あの時ばかりは、流石に御驚きになつたやうでございました。まして御側に仕へてゐた私どもが、魂も消えるばかりに思つたのは、申し上げるまでもございません。中でもこの私みなどは、大殿様にも二十年來御奉公申して居りましたが、それでさへ、あのやうな凄じい見物みものに出遇つた事は、ついぞ又となか

つた位でございます。

しかし、その御話を致しますには、豫め先づ、あの地獄變の屏風を描きました、良秀よしひでと申す畫師の事を申し上げて置く必要がございます。

二

良秀と申しましたら、或は唯今でも猶、あの男の事を覚えていらつしやる方がございませう。その頃繪筆をとりましては、良秀の右に出るものは一人もあるまいと申された位、高名な繪師でございます。あの時の事がございました時には、彼是もう五十の阪に、手にとづいて居りましたらうか。見た所は唯、背の低い、骨と皮ばかりに瘦せた、意地の悪さうな老人でございました。それが大殿様の御邸へ参ります時には、よく丁字染ちやうじぞめの狩衣もみに揉烏帽子ゑぼしをかけて居りましたが、人からは至つて卑しい方で、何故か年よりらしくもなく、脣の目立つて赤いのが、その上に又氣味の悪い、如何にも獸めいた心もちを起させたものでございます。中にはあれは畫筆を舐なめるので紅がつくのだと申した人も居りましたが、どう云ふものでございませうか。尤もそれより口の悪い誰彼は、良秀の立居振舞たちゐふるまひが猿のやうだとか申しまして、猿秀と云ふ譚名あだなまでつけた事がございました。

いや猿秀と申せば、かやうな御話もございます。その頃大殿様の御邸には、十五になる

良秀の一人娘が、小女房こねうぼうに上つて居りましたが、これは又生みの親には似もつかない、愛嬌のある娘こでございました。その上早く女親に別れましたせゐるか、思ひやりの深い、年よりはませた、伶俐な生れつきで、年の若いのにも似ず、何かとよく氣がつくものでございますから、御臺様を始め外の女房たちにも、可愛がられて居たやうでございます。

すると何かの折に、丹波の國から人馴れた猿を一匹、献上したものがございまして、それに丁度惡戯いたづらさか盛りの若殿様が、良秀と云ふ名を御つけになりました。唯でさへその猿の容子が可笑をかしい所へ、かやうな名がついたのでございますから、御邸中誰一人笑はないものはございません。それも笑ふばかりならよろしうございますが、面白半分に皆のものが、やれ御庭の松に上つたの、やれ曹司の疊をよごしたのと、その度毎に、良秀々々と呼び立てゝは、兎に角いぢめたがるのでございます。

所が或日の事、前に申しました良秀の娘が、御文を結んだ寒紅梅の枝を持つて、長い御廊下を通りかゝりますと、遠くの遣戸やりどの向うから、例の小猿の良秀が、大方足でも挫いたのでございませう、何時ものやうに柱へ駆け上る元氣もなく、跛びつしを引きく、一散に、逃げて參るのでございます。しかもその後からは楚すばえをふり上げた若殿様が「柑子かうじ盗人ぬすびとめ、待て。待て。」と仰有りながら、追ひかけていらつしやるものではございませんか。良秀の娘はこれを見ますと、ちよいとの間ためらつたやうでございますが、丁度その時逃げて來た猿

5、地獄變

が、袴の裾にすがりながら、哀れな聲を出して啼き立てました——と、急に可哀さうだと思ふ心が、抑へ切れなくなつたのでございませう。片手に梅の枝をかざした儘片手に紫句の桂むらさきにほひうちぎの袖を輕さうにはらりと開きますと、やさしくその猿を抱き上げて、若殿様の御前に小腰をかゞめながら「恐れながら畜生でございます。どうか御勘辨遊ばしまし。」と、涼しい聲で申し上げました。

が、若殿様の方は、氣負きおつて驅けてお出でになつた所でございますから、むづかしい御顔をなすつて、二三度御み足を御踏鳴おふみならしになりながら、

「何でかばふ。その猿は柑子かうじ盗人ぬすびとだぞ。」

「畜生でございますから、……」

娘はもう一度かう繰返しましたがやがて寂しさうにほほ笑みますと、

「それに良秀と申しますと、父が御折檻を受けますやうで、どうも唯見ては居られませぬ。」と、思ひ切つたやうに申すのでございます。これには流石の若殿様も、我がを御折りになつたのでございませう。

「さうか。父親の命乞いのちごひなら、枉かたがげて赦してとらすとしよう。」

不承無承にかう仰有ると、楚すばえをそこへ御捨てになつて、元いらしつた遣戸の方へ、その儘御歸りになつてしまひました。

良秀の娘とこの小猿との仲がよくなつたのは、それからの事でございます。娘は御姫様から頂戴した黄金の鈴を、美しい眞紅しんくの紐に下げて、それを猿の頭へ懸けてやりますし、猿は又どんな事がございまして、滅多に娘の身のまはりを離れません。或時娘の風邪かぜの心地で、床に就きました時なども、小猿はちゃんとその枕もとに坐りこんで、氣のせゐるか心細さうな顔をしながら、頻に爪を嚙んで居りました。

かうなると又妙なもので、誰も今までのやうにこの小猿を、いぢめるものはございせん。いや、反つてだんく可愛がり始めて、しまひには若殿様でさへ、時々柿や栗を投げて御やりになつたばかりか、侍の誰やらがこの猿を足蹴にした時などは、大層御立腹にもなつたさうでございます。その後大殿様がわざ／＼良秀の娘に猿を抱いて、御前へ出るやうと御沙汰になつたのも、この若殿様の御腹立になつた話を、御聞きになつてからだとか申しました。その序に自然と娘の猿を可愛がる所由いはれも御耳にはいつたのでございませう。

「孝行な奴ぢや。褒めてとらすぞ。」

かやうな御意で、娘はその時、紅くれなゐのあこめ柏を御褒美に頂きました。所がこの柏を又見やう見眞似に、猿が恭しく押頂きましたので、大殿様の御機嫌は、一入よろしかつたさうでござ

5、地獄變

ざいます。でございますから、大殿様が良秀の娘御を蟲屑になつたのは、全くこの猿を可愛がつた、孝行恩愛の情を御賞美なすつたので、決して世間で兎や角申しますやうに、色を御好みになつた譯ではございません。尤もかやうな噂の立ちました起りも、無理のない所がございますが、それは又後になつて、ゆつくり御話し致しませう。こゝでは唯大殿様が、如何に美しいにした所で、繪師風情の娘などに、想ひを御懸けになる方ではないと云ふ事を、申し上げて置けば、よろしうございます。

さて良秀の娘は、面目を施して御前を下りましたが、元より伶俐な女でございますから、はしたない外の女房たちの妬ねたみを受けるやうな事もございません。反つてそれ以來、猿と一しよに何かといとしがられまして、取分け御姫様の御側からは御離れ申した事がないと云つてもよろしい位、物見車の御供にもついぞ缺けた事はございませんでした。

が、娘の事は一先づ措きまして、これから又親の良秀の事を申し上げます。成程猿の方は、かやうに間もなく、皆のものに可愛がられるやうになりましたが、肝腎の良秀はやはり誰にでも嫌はれて、相不あひかはらず變陰へまはつては、猿秀呼りをされて居りました。しかもそれが又、御邸の中ばかりではございません。現に横川よかはの僧都様も、良秀と申しますと、魔障にでも御遇ひになつたやうに、顔の色を變へて、御憎み遊ばしました。（尤もこれは良秀が僧都様の御行状を戯畫ざれゑに描いたからだなどと申しますが、何分下さまの噂でございます

から、確に左様とは申されますまい。兎に角、あの男の不評判は、どちらの方に伺ひましてもさう云ふ調子ばかりでございます。もし悪く云はないものがあつたと致しますと、それは二三人の繪師仲間か、或は又、あの男の繪を知つてるだけで、あの男の人間は知らないものばかりでございませう。

しかし實際、良秀には、見た所が卑しかつたばかりでなく、もつと人に嫌がられる悪い癖があつたのでございますから、それも全く自業自得とでもなすより外に、致し方はございません。

四

その癖と申しますのは、吝嗇で、慳貪^{けんどん}で、恥知らずで、怠けもので、強慾で——いやその中でも取分け甚しいのは、横柄で高慢で、何時も本朝第一の繪師と申す事を、鼻の先へぶら下げてゐる事でございませう。それも畫道の上ばかりならまだしもでございしますが、あの男の負け惜しみになりますと、世間の習慣^{ならはし}とか慣例^{しきたり}とか申すやうなものまで、すべて莫迦に致さずには置かないのでございます。これは永年良秀の弟子になつてゐた男の話でございしますが、或日さる方の御邸で名高い檜垣^{ひがき}の巫女^{みこ}に御靈^{ごりやう}が憑^ついて、恐しい御託宣があつた時も、あの男は空耳^{そらみ}を走らせながら、有合せた筆と墨とで、その巫女^{みこ}の物凄い顔を、

5、地獄變

丁寧に寫して居つたとか申しました。大方御靈の御祟りも、あの男の眼から見ましたなら、子供欺し位にしか思はれないのでございませう。

さやうな男でございますから、吉祥天を描く時は、卑しい傀儡の顔を寫しましたり、不動明王を描く時は、無頼の放免の姿を像りましたり、いろ／＼の勿體ない眞似を致しましたが、それでも當人を詰りますと「良秀の描いた神佛がその良秀に冥罰を當てられるとは、異な事を聞くものぢや」と空嘯いてゐるではございせんか。これには流石の弟子たちも呆れ返つて、中には未來の恐ろしさに、勿々暇をとつたものも、少くなかつたやうに見うけました。――先づ一口に申しましたなら、慢業重疊とでも名づけませうか。兎に角當時天が下で、自分程の偉い人間はないと思つてゐた男でございます。

従つて良秀がどの位畫道でも、高く止つて居りましたかは、申し上げるまでもございませう。尤もその繪でさへ、あの男のは筆使ひでも彩色でも、まるで外の繪師とは違つて居りましたから、仲の悪い繪師仲間では、山師だなどと申す評判も、大分あつたやうでございませう。その連中の申しますには、川成とか金岡とか、その外昔の名匠の筆になつた物と申しますと、やれ板戸の梅の花が、月の夜毎に匂つたの、やれ屏風の大宮人が、笛を吹く音さへ聞えたのと、優美な噂が立つてゐるものでございませうが、良秀の繪になりますと、何時でも必ず氣味の悪い、妙な評判だけしか傳はりません。譬へばあの男が龍蓋寺の門へ

描かきました、五趣しゆしやうじ生死の繪に致しましても、夜更よふけて門の下を通りますと、天人の嘆息ためいきをつく音や啜り泣きをする聲が、聞えたと申す事でございます。いや、中には死人の腐くつて行く臭氣を、嗅いだと申すものさへございました。それから大殿様の御云ひつけで描かいた、女房たちの似繪にせゑなども、その繪に寫されたゞけの人間は、三年と盡たない中に、皆魂の抜けたやうな病氣になつて、死んだと申すではございませんか。悪く云ふものに申させますと、それが良秀の繪の邪道に落ちてゐる、何よりの證據ださうでございます。

が、何分前にも申し上げました通り、横紙破りな男でございますから、それが反つて良秀は大自然で、何時ぞや大殿様が御冗談に、「その方は兎角醜いものが好きと見える。」と仰有つた時も、あの年に似ず赤い脣でにやりと氣味悪く笑ひながら、「さやうでござりまする。かいなでの繪師には總じて醜いものゝ美しさなどと申す事は、わからう筈がございませぬ。」と、横柄に御答へ申し上げました。如何に本朝第一の繪師に致せ、よくも大殿様の御前へ出て、そのやうな高云が吐けたものでございます。先刻引合に出しました弟子が、内々師匠に「智羅永壽ちらえいじゆ」と云ふ諱名をつけて、増長慢を譏そしつて居りましたが、それも無理はございません。御承知でもございませうが、「智羅永壽」と申しますのは、昔震旦しんたんから渡つて參りました天狗の名でございます。

しかしこの良秀にさへ——この何とも云ひやうのない、横道者の良秀にさへ、たつた

一つ人間らしい、情愛のある所がございました。

五

と申しますのは、良秀が、あの一人娘の小女房をまるで氣違ひのやうに可愛がつてゐた事でございます。先刻申し上げました通り、娘も至つて氣のやさしい、親思ひの女でございましたが、あの男の子煩惱は、決してそれにも劣りますまい。何しろ娘の着る物とか、髪飾とかの事と申しますと、どこの御寺の勸進にも喜捨をした事のないあの男が、金錢には更に惜し氣もなく、整へてやると云ふのでございますから、嘘のやうな氣が致すではございませんか。

が、良秀の娘を可愛がるのは、唯可愛がるだけで、やがてよい聲をとらうなどと申す事は、夢にも考へて居りません。それ所か、あの娘へ悪く云ひ寄るものでもございましたら、反つて辻冠者つじくわんじゃばらでも驅り集めて、暗打位やみうちは喰はせ兼ねない量見でございます。でございますから、あの娘が大殿様の御聲がゝりで小女房に上りました時も、老爺おやぢの方は大不服で、當座の間は御前へ出ても、苦り切つてばかり居りました。大殿様が娘の美しいのに御心を惹かされて、親の不承知なにもかまはずに、召し上げたなどと申す噂は、大方かやうな容子を見たものゝ當推量あてずみりやうから出たのでございませう。

尤も其噂は嘘でございまして、子煩惱の一心から、良秀が始終娘の下るやうに祈つて居りましたのは確でございます。或時大殿様の御云ひつけで、稚兒ちごもんじゅ文殊を描きました時も、御寵愛の童わらべの顔かほを寫しまして、見事な出来でございましたから、大殿様も至極御満足で、「褒美にも望みの物を取らせるぞ。遠慮なく望め。」と云ふ難有い御云が下りました。すると良秀は畏まつて、何を申すかと思ひますと、

「何卒私の娘をば御下げ下さいまするやうに。」と臆面もなく申し上げました。外のお邸ならば兎も角も、堀河の大殿様の御側に仕へてゐるのを、如何に可愛いからと申しまして、かやうに無駭ぶしつけに御暇を願ひますものが、どこの國に居りませう。

これには大腹中の大殿様も聊か御機嫌を損じた見えまして、暫くは唯黙つて良秀の顔を眺めて御居でになりましたが、やがて、

「それはならぬ。」と吐出はきだすやうに仰有ると、急にその儘御立ちになつてしまひました。

かやうな事が、前後四五遍もございましたらうか。今になつて考へて見ますと、大殿様の良秀を御覧になる眼は、その都度にだんだんと冷やかになつていらしたやうでございます。すると又、それにつけても、娘の方は父親の身が案じられるせゐで、もございますか、曹司へ下つてゐる時などは、よく桂うちきの袖を噛んで、しく／＼泣いて居りました。そこで大殿様が良秀の娘に懸想なすつたなどと申す噂が、愈々擴ひろがるやうになつたのでございませ

5、地獄變

う。中には地獄變の屏風の由來も、實は娘が大殿様の御意に従はなかつたからだなどと申すものも居りますが、元よりさやうな事がある筈はございません。

私どもの眼から見ますと、大殿様が良秀の娘を御下げにならなかつたのは、全く娘の身の上を哀れに思召したからで、あのやうに頑かたくなな親の側へやるよりは御邸に置いて、何の不自由なく暮させてやらうと云ふ難有い御考へだつたやうでございます。それは元より氣立ての優しいあの娘を、御鼈けんぎやうふくわい眞になつたのには間違ひございません。が、色を御好みになつたと申しますのは、恐らく牽強附會けんきやうふくわいの説でございます。いや、跡方もない嘘と申した方が、宜しい位でございます。

それは兎も角もと致しまして、かやうに娘の事から良秀の御覺えが大分悪くなつて來た時でございます。どう思召したか、大殿様は突然良秀を御召になつて、地獄變の屏風を描くやうにと、御云ひつけなさいました。

六

地獄變の屏風と申しますと、私はもうあの恐ろしい畫面の景色が、ありありと眼の前へ浮んで來るやうな氣が致します。

同じ地獄變と申しまして、良秀の描きましたのは、外の繪師のに比べますと、第一圖

取りから似て居りません。それは一帖の屏風の片隅へ、小さく十王を始め眷屬たちの姿を描いて、あとは一面に紅蓮大紅蓮の猛火が、劍山刀樹も爛れるかと思ふ程渦を卷いて居りました。でございますから、唐めいた冥官たちの衣裳が、點々と黄や藍を綴つて居ります外は、どこを見ても烈々とした火焰の色で、その中をまるで卍のやうに、墨を飛ばした黒煙と金粉を煽つた火の粉とが、舞ひ狂つて居るのでございます。

こればかりでも、随分人の目を驚かす筆勢でございますが、その上に又、業火に焼かれて、轉々と苦しんで居ります罪人も、殆ど一人として通例の地獄繪にあるものはございません。何故かと申しますと良秀は、この多くの罪人の中に、上は月卿雲客から下も乞食非人まで、あらゆる身分の人間を寫して來たからでございます。束帶のいかめしい殿上人、五つ衣のなまめかしい青女房、珠數をかけた念佛僧、高足駄を穿いた侍學生、細長を着た女の童、幣をかざした陰陽師——一々數へ立てゝ居りましたら、とても際限はございますまい。兎に角さう云ふいろ／＼の人間が、火と煙とが逆捲く中を、牛頭馬頭の獄卒に虐まれて、大風に吹き散らされる落葉のやうに、紛々と四方八方へ逃げ迷つてゐるのでございます。鋼叉に髪をからまれて、蜘蛛よりも手足を縮めてゐる女は、神巫の類でゝもございませうか。手矛に胸を刺し通されて、蝙蝠のやうに逆になつた男は、生受領か何かに相違ございますまい。その外或は鐵の筈に打たれるもの、或は千曳の磐石に押され

5、地獄變

るもの、或は怪鳥けてうの嘴にかけられるもの、或は又毒龍あぎとの顎に噛まれるもの、—— 呵責
も亦罪人の數に應じて、幾通りあるかわかりません。

が、その中でも殊に一つ目立つて凄じく見えるのは、まるで獸けものの牙のやうな刀樹の頂きを半ばかすめて（その刀樹の梢にも、多くの亡者がるゐく、五體を貫つらぬかれて居りましたが）中空なかぞらから落ちて來る一輛の牛車でございませう。

地獄の風に吹き上げられた、その車の簾すだれの中には、女御、更衣にもまがふばかり、綺羅びやかに装つた女房が、丈の黒髪を炎の中になびかせて、白い頸うなじを反そらせながら、悶え苦しんで居りますが、その女房の姿と申し、又燃えしきつてゐる牛車と申し、何一つとして炎熱地獄の責苦を偲おもばせないものはございません。

云はゞ廣い畫面の恐ろしさが、この一人の人物にあつま轉つてゐるとでも申しませうか。これを見るものゝ耳の底には、自然と物凄い叫喚の聲が傳はつて來るかと思ふ程、入神の出來映えてございました。

あゝ、これでございます、これを描く爲めに、あの恐ろしい出來事が起つたのでございます。又さもなければ如何に良秀でも、どうしてかやうに生々いきくと奈落の苦艱が畫かれませう。あの男はこの屏風の繪を仕上げた代りに、命さへも捨てるやうな、無慘な目に出遇ひました。云はゞこの繪の地獄は、本朝第一の繪師良秀が、自分で何時か墮ちて行く地獄だ

つたのでございます。……

私はあの珍しい地獄變の屏風の事を申し上げますのを急いだあまりに、或は御話の順序を顛倒致したかも知れません。が、これから又引き續いて、大殿様から地獄繪を描けと申す仰せを受けた良秀の事に移りませう。

七

良秀はそれから五六箇月の間、まるで御邸へも伺はないで、屏風の繪にばかりかゝつて居りました。あれ程の子煩悩がいざ繪を描くと云ふ段になりますと、娘の顔を見る氣もなくなると申すのではございますから、不思議なものではございませんか。先刻申し上げました弟子の話では、何でもあの男は仕事にとりかゝりますと、まるで狐でも憑ついたやうになるらしいでございます。いや實際當時の風評に、良秀が畫道で名を成したのは、福德おほの大神かみに祈誓をかけたからで、その證據にはあの男が繪を描いてゐる所を、そつと物陰ものかげから覗いて見ると必ず陰々として靈狐の姿が、一匹ならず前後左右に、群つてゐるのが見えるなどと申す者もございました。その位でございますから、いざ畫筆を取るとなると、その繪を描き上げると云ふより外は、何も彼も忘れてしまふのでございませう。晝も夜も一間に閉ぢこもつたきりで、滅多に日の目も見た事はございません。――殊に地獄變の屏風を

5、地獄變

描いた時には、かう云ふ夢中になり方が、甚しかつたやうでございます。

と申しますのは何もあの男が、晝もしとみ蔭も下した部屋の中で、結燈臺ゆひとうだいの火の下に、祕密の繪の具を合せたり、或は弟子たちを、水干やら狩衣やら、さまざまに着飾らせて、その姿を、一人づゝ丁寧に寫したり、——さう云ふ事ではございません。それ位の變つた事なら、別にあの地獄變の屏風を描かかなくとも、仕事にかゝつてゐる時とさへ申しますと、何時でもやり兼ねない男なのでございます。いや、現に龍蓋寺の五趣生死しゅしゃうじの圖を描きました時などは、當り前の人間なら、わざと眼を外そらせて行くあの往來の屍骸の前へ、悠々と腰を下ろして、半ば腐れかつた顔や手足を、髪の毛一すちも違へずに、寫して參つた事がございました。では、その甚だしい夢中になり方とは、一體どう云ふ事を申すのか、流石に御わかりにならない方もいらつしやいませう。それは唯今詳しい事は申し上げてゐる暇もございませんが、主な話を御耳に入れますと、大體先かやうな次第なのでございます。

良秀の弟子の一人が（これもやはり、前に申した男でございますが）或日繪の具を溶いて居りますと、急に師匠が參りまして、

「己は少し午睡ひるねをしようと思ふ。がどうもこの頃は夢見が悪い。」とかう申すのでございます。別にこれは珍しい事でも何でもございせんから、弟子は手を休めずに、唯、「さやうでございますか。」と一通りの挨拶を致しました。

所が、良秀は、何時になく寂しさうな顔をして、

「就いては、己が午睡ひるねをしてゐる間中、枕もとに坐つてゐて貰ひたいのだが。」

と、遠慮がましく頼むではございませんか。弟子は何時になく、師匠が夢なぞを氣にするのは、不思議だと思ひましたが、それも別に造作のない事でございますから、

「よろしうございます。」と申しますと、師匠はまだ心配さうに、

「では直に奥へ来てくれ。尤も後で外の弟子が來ても、己の睡つてゐる所へは入れないやうに。」

と、ためらひながら云ひつけました。奥と申しますのは、あの男が畫を描きます部屋で、その日も夜のやうに戸を立て切つた中に、ぼんやりと灯をともしながら、まだ焼筆やきふでで圖取りだけしか出來てゐない屏風が、ぐるりと立て廻してあつたさうでございます。さてこゝへ參りますと、良秀は肘を枕にして、まるで疲れ切つた人間のやうに、すやく、睡入つてしまひましたが、ものゝ半時はんときとたちません中に、枕もとに居ります弟子の耳には、何とも彼とも申しやうのない、氣味の悪い聲がはいり始めました。

5、地獄變

それが始めは唯、聲でございましたが、暫くしますと、次第に切れぐな語になつて、云はゞ溺れかゝつた人間が水の中で呻るやうに、かやうな事を申すのでございます。

「なに、己に來いと云ふのだな。——どこへ——どこへ來いと？ 奈落へ來い。

炎熱地獄へ來い。——誰だ。さう云ふ貴様は。——貴様は誰だ——誰だと思つ

たら」

弟子は思はず繪の具を溶く手をやめて、恐る／＼師匠の顔を、覗くやうにして透して見ますと、皺だらけな顔が白くなつた上に大粒な汗を滲ませながら、脣の干いた、齒の疎な口を喘ぐやうに大きく開けて居ります。さうしてその口の中で、何か糸でもつけて引張つてゐるかと疑ふ程、目まぐるしく動くものがあると思ひますと、それがあの男の舌だつたと申すではございませんか。切れ切れな語は元より、その舌から出て來るのでございます。

「誰だと思つたら——うん、貴様だな。己も貴様だらうと思つてゐた。なに、迎へに來たと？ だから來い。奈落へ來い。奈落には——奈落には己の娘が待つてゐる。」

その時、弟子の眼には、朦朧とした異形の影が、屏風の面をかすめてむらむらと下りて來るやうに見えた程、氣味の悪い心もちが致したさうでございませう。勿論弟子はすぐに良秀に手をかけて、力のあらん限り揺り起しましたが、師匠は猶夢現に獨り語を云ひつゞけて、容易に眼のさめる氣色はございません。そこで弟子は思ひ切つて、側にあつた筆洗の

水を、ざぶりとあの男の顔へ浴びせかけました。

「待つてゐるから、この車へ乗つて来い——この車へ乗つて、奈落へ来い——」と

云ふ語がそれと同時に、喉をしめられるやうな呻き聲に變つたと思ひますと、やつと良秀は眼を開いて、針で刺されたよりも慌しく、矢庭にそこへ匆ね起きしましたが、まだ夢の中の異類異形が、いるみいぎやう 眶まぶたの後を去らないのでございませう。暫くは唯恐ろしさうな眼つきをして、やはり大きく口を開きながら、空を見つめて居りましたが、やがて我に返つた容子で「もう好いから、あちらへ行つてくれ」と、今度は如何にも素そつ氣けなく、云ひつけるのでございます。弟子はかう云ふ時に逆ふと、何時でも大小おほこごと云を云はれるので、勿々師匠の部屋から出て參りましたが、まだ明い外の日の光を見た時には、まるで自分が惡夢から覺めた様な、ほつとした氣が致したとか申して居りました。

しかしこれなどはまだよい方なので、その後一月ばかりたつてから、今度は又別の弟子が、わざわざ奥へ呼ばれますと、良秀はやはりうす暗い油火の光りの中で、繪筆を嚙んで居りましたが、いきなり弟子の方へ向き直つて、

「御苦勞だが、又裸はだかになつて貰はうか。」と申すのでございます。これはその時までにも、どうかすると師匠が云ひつけた事でございますから、弟子は早速衣類をぬぎすてて、赤裸あかはだかになりますと、あの男は妙に顔をしかめながら、

5、地獄變

「わしは鎖くさりで縛られた人間が見たいと思ふのだが、氣の毒でも暫くの間、わしのする通りになつてゐてはくれまいか。」と、その癖少しも氣の毒らしい容子などは見せずに、冷然とかう申しました。元來この弟子は畫筆などを握るよりも、太刀でも持った方が好きさうな、逞しい若者でございましたが、これには流石に驚いたと見えて、後々までもその時の話を致しますと、「これは師匠が氣が違つて、私を殺すのではないかと思ひました」と繰返して申したさうでございます。が、良秀の方では、相手の愚圖々々してゐるのが、燥じれつたくなつて參つたのでございませう。どこから出したか、細い鐵の鎖をざら／＼と手繰たぐりながら、殆ど飛びつくやうな勢ひで、弟子の背中へ乗りますと、否應なしにその儘兩腕を捻ぢあげて、ぐる／＼卷きに致してしまひました。

さうして又その鎖の端を邪慳にぐいと引きましたからたまりません。弟子の體ははづみを食つて、勢よく床ゆかを鳴らしながら、ごろりとそこへ横倒しに倒れてしまつたのでございます。

九

その時の弟子の恰好は、まるで酒甕さかめを轉ころがしたやうだとも申しませうか。何しろ手も足も慘たらしく折り曲げられて居りますから、動くのは唯首ばかりでございます。そこへ

肥^{ふと}つた體^{からだ}中の血が、鎖^{くさり}に循環^{めぐり}を止められたので、顔と云はず胴と云はず、一面に皮膚の色が赤み走つて參るではございせんか。が、良秀にはそれも格別氣にならないと見えまして、その酒甕のやうな體のまはりを、あちこちと廻つて眺めながら、同じやうな寫眞の圖を何枚となく描いて居ります。その間、縛られてゐる弟子の身が、どの位苦しかつたかと云ふ事は、何もわざ／＼取立て、申し上げるまでもございますまい。

が、もし何事も起らなかつたと致しましたら、この苦しみは恐らくまだその上にも、つゞけられた事でございませう。幸（と申しますより、或は不幸にと申した方がよろしいかも知れません。）暫く致しますと、部屋の隅にある壺の蔭から、まるで黒い油のやうなものが、一すぢ細くうねりながら、流れ出して參りました。それが始の中は餘程粘り氣のあるものゝやうに、ゆつくり動いて居りましたが、だん／＼滑らかに迂り始めて、やがてちら／＼光りながら、鼻の先まで流れ着いたのを眺めますと、弟子は思はず、息を引いて、「蛇が——蛇が。」と喚^{わめ}きました。その時は全く體中の血が一時に凍るかと思つたと申しますが、それも無理はございせん。

蛇は實際もう少して、鎖の食ひこんでゐる、頸の肉へその冷い舌の先を觸れようとしてゐたのでございます。この思ひもよらない出來事には、いくら横道な良秀でも、ぎよつと致したのでございませう。慌てて畫筆を投げ棄てながら、咄嗟に身をかがめたと思ふと、

5、地獄變

素早く蛇の尾をつかまへて、ぶらりと逆に吊り下げました。蛇は吊り下げられながらも、頭を上げて、きり／＼と自分の體へ巻きつきましたが、どうしてもあの男の手の所まではとどきません。

「おのれ故に、あつたら一筆を仕損じたぞ。」

良秀は忌々しさうにかう呟くと、蛇はその儘部屋の隅の壺の中へ抛りこんで、それからさも不承無承に、弟子の體へかゝつてゐる鎖を解いてくれました。それも唯解いてくれたと云ふ丈で、肝腎の弟子の方へは、優しい言葉一つかけてはやりません。大方弟子が蛇に噛まれるよりも、寫眞の一筆を誤つたのが、業腹だつたのでございませう。――後で聞きますと、この蛇もやはり姿を寫す爲にわざ／＼あの男が飼つてゐたのださうでございませう。

これだけの事を御聞きになつたのでも、良秀の氣違ひじみた、薄氣味の悪い夢中になり方が、略御わかりになつた事でございませう。所が最後に一つ、今度はまだ十三四の弟子が、やはり地獄變の屏風の御かげで、云はば命にも關り兼ねない、恐ろしい目に出遇ひました。その弟子は生れつき色の白い女のやうな男でございましたが、或夜の事、何氣なく師匠の部屋へ呼ばれて参りますと、良秀は燈臺の火の下で掌てのひらに何やら腥なまぐさい肉をのせながら、見慣れない一羽の鳥を養つてゐるのでございます。大きさは先、世の常の猫ほども

ございませうか。さう云へば、耳のやうに兩方へつき出た羽毛と云ひ、琥珀のやうな色をした、大きな圓い眼まなこと云ひ、見た所も何となく猫に似て居りました。

十

元來良秀と云ふ男は、何でも自分のしてゐる事に嘴を入れられるのが大嫌ひで、先刻申し上げた蛇などもさうでございますが、自分の部屋の中に何があるか、一切さう云ふ事は弟子たちにも知らせた事がございせん。でございますから、或時は机の上に髑髏されかうべがのつてゐたり、或時は又、銀しろがねの椀や蒔繪の高坏たかつぎが並んでゐたり、その時描いてゐる晝次第で、随分思ひもよらない物が出て居りました。が、ふだんはかやうな品を、一體どこにしまつて置くのか、それは又誰にもわからなかつたさうでございます。あの男が福德の大神の冥助を受けてゐるなど、申す噂も、一つは確かにさう云ふ事が起りになつてゐたのでございませう。

そこで弟子は、机の上のその異様な鳥も、やはり地獄變の屏風を描くのに入用なのに違ひないと、かう獨り考へながら、師匠の前へ畏まつて、「何か御用でございますか」と、恭々しく申しますと、良秀はまるでそれが聞えないやうにあの赤い脣へ舌なめずりをして、「どうだ。よく馴れてゐるではないか。」と、鳥の方へ頤をやります。

5、地獄變

「これは何と云ふものでございませう。私はついぞまだ、見た事がございせんが。」

弟子はかう申しながら、この耳のある、猫のやうな鳥を、氣味惡さうにじろじろ眺めますと、良秀は不相變あひかはらず何時もの嘲笑あざわらふやうな調子で、

「なに、見た事がない？ 都育みやこそだちの人間はそれだから困る。これは二三日前に鞍馬の獵

師がわしにくれた耳木兔みづづと云ふ鳥だ。唯、こんなに馴れてゐるのは、澤山あるまい。」

かう云ひながらあの男は、徐に手をあげて、丁度餌を食べてしまつた耳木兔みづづの背中の毛を、そつと下から撫で上げました。

するとその途端でございます。

鳥は急に鋭い聲で、短く一聲啼いたと思ふと、忽ち机の上から飛び上つて、兩脚の爪を張りながら、いきなり弟子の顔へとびかゝりました。

もしその時、弟子が袖をかざして、慌てゝ顔を隠さなかつたなら、きつともう疵の一つや二つは負はされて居りましたらう。あつと云ひながら、その袖を振つて、逐ひ拂はうとする所を、耳木兔は蓋にかかつて、嘴を鳴らしながら、又一突き——弟子は師匠の前も忘れて、立つては防ぎ、坐つては逐ひ、思はず狭い部屋の中を、あちらこちらと逃げ惑ひました。怪鳥けてうも元よりそれにつれて、高く低く翔りながら、隙さへあれば驀地まつしでらに眼を目がけて飛んで來ます。その度にばさ／＼と、凄じく翼を鳴すのが、落葉の匂だか、瀧の水沫しなめと

も或は又猿酒の饅^すたいきれだか何やら怪しげなもの、けはひを誘つて、氣味の悪さと云つたらございません。

さう云へばその弟子も、うす暗い油火の光さへ朧げな月明りかと思はれて、師匠の部屋がその儘遠い山奥の、妖氣に閉された谷のやうな、心細い氣がしたとか申したさうでございます。

しかし弟子が恐しかつたのは、何も耳木兎に襲はれると云ふ、その事ばかりではございません。

いや、それよりも一層身の毛がよだつたのは、師匠の良秀がその騒ぎを冷然と眺めながら、徐に紙を展べ筆を舐つて、女のやうな少年が異形な鳥に虐^{さいな}まれる、物凄^{おびや}い有様を寫してゐた事でございます。弟子は一目それを見ますと、忽ち云ひやうのない恐ろしさに脅^{おびや}かされて、實際一時は師匠の爲に、殺されるのではないかとさへ、思つたと申して居りました。

十一

實際師匠に殺されると云ふ事も、全くないとは申されません。現にその晩わざわざ弟子を呼びよせたのでさへ、實は耳木兎を唆^{けし}かけて、弟子の逃げまはる有様を寫さうと云ふ魂膽^{おんたん}らしかつたのでございます。

5、地獄變

でございますから、弟子は、師匠の容子を一目見るが早いか、思はず兩袖に頭を隠しながら、自分にも何と云つたかわからないやうな悲鳴をあげて、その儘部屋の隅の遣戸やりどの裾へ、居すくまつてしまひました。

とその拍子に、良秀も何やら慌てたやうな聲をあげて、立上つた氣色でございましたが、忽ち耳木兎の羽音が一層前よりもはげしくなつて、物の倒れる音や破れる音が、けたゝましく聞えるではございせんか。

これには弟子も二度、度を失つて、思はず隠してゐた頭を上げて見ますと部屋の中は何時かまつ暗になつてゐて、師匠の弟子たちを呼び立てる聲が、その中で苛立しさうにして居ります。

やがて弟子の一人が、遠くの方で返事をして、それから灯をかざしながら、急いでやつて參りましたが、その煤臭すすくさい明りあかで眺めますと、結燈臺ゆひとうだいが倒れたので、床も疊も一面に油だらけになつた所へ、さつきの耳木兎が片方の翼ばかり苦しさうにはためかしながら、轉げまはつてゐるのでございます。

良秀は机の向うで半ば體を起した儘、流石に呆氣あつけにとられたやうな顔をして、何やら人にはわからない事を、ぶつ／＼呟つぶいて居りました。――それも無理ではございせん。

あの耳木兎の體には、まつ黒な蛇へびが一匹、頸から片方の翼へかけて、きりきりと捲きつい

てゐるのでございます。大方これは弟子が居すくまる拍子に、そこにあつた壺をひつくり返して、その中の蛇が這ひ出したのを、耳木兎がなまじひに掴みかゝらうとしたばかりに、とう／＼かう云ふ大騒ぎが始まつたのでございませう。

二人の弟子は互に眼と眼とを見合せて、暫くは唯、この不思議な光景をぼんやり眺めて居りましたが、やがて師匠に默禮をして、こそ／＼部屋へ引き下つてしまひました。蛇と耳木兎とがその後どうなつたか、それは誰も知つてゐるものはございません。――

かう云ふ類たぐひの事は、その外まだ、幾つとなくございました。

前には申し落しましたが、地獄變の屏風を描けと云ふ御沙汰があつたのは、秋の初でございまして、それ以來冬の末まで、良秀の弟子たちは、絶えず師匠の怪しげな振舞おびやに脅おそかされてゐた譯でございまして。

が、その冬の末に良秀は何か屏風の畫で、自由にならない事が出来たのでございませう、それまでよりは、一層容子も陰氣になり、物云ひも目に見えて、荒々しくなつて参りました。と同時に又屏風の畫も、下畫が八分通り出来上つた儘、更に捗はかどる模様はございません。いや、どうかすると今までに描いた所さへ、塗り消してもしまひ兼ねない氣色なのでございます。

その癖、屏風の何が自由にならないのだから、それは誰にもわかりません。又誰もわから

うとしたものもございますまい。前のいろ／＼な出来事に懲りてゐる弟子たちは、まるで虎狼と一つ檻をりにでもゐるやうな心もちで、その後師匠の身のまはりへは、成る可く近づかない算段をして居りましたから。

十二

従つてその間の事に就いては、別に取り立てゝ申し上げる程の御話もございません。もし強ひて申上げると致しましたら、それはあの強情な老爺おやぢが、何故なぜか妙に涙脆くなつて、人のゐない所では時々獨りで泣いてゐたと云ふ御話位なものでございませう。

殊に或日、何かの用で弟子の一人が、庭先へ參りました時などは廊下に立つてぼんやり春の近い空を眺めてゐる師匠の眼が、涙で一ぱいになつてゐたさうでございます。

弟子はそれを見ますと、反つてこちらが恥しいやうな氣がしたので、黙つてこそ／＼引き返したと申す事でございますが、五趣生死しゅしやうじの圖を描く爲には、道ばたの死骸さへ寫したと云ふ、傲慢なあゝの男が屏風の畫が思ふやうに描けない位の事で、子供らしく泣き出すなどと申すのは随分異なるものでございせんか。

所が一方良秀がこのやうに、まるで正氣の人間とは思はれない程夢中になつて、屏風の繪を描いて居ります中に、又一方ではあの娘が、何故かだん／＼氣鬱になつて、私どもに

さへ涙を堪へてゐる容子が、眼に立つて參りました。

それが元來愁顔うれひがほの、色の白い、つゝましやかな女だけに、かうなると何だか睫毛まつげが重くなつて、眼のまはりに隈がかゝつたやうな、餘計寂しい氣が致すのでございます。

初はやれ父思ひのせむだの、やれ戀煩ひをしてゐるからだの、いろ／＼臆測を致したものでございますが、中頃から、なにあれば大殿様が御意に従はせようとしていらつしやるのだと云ふ評判が立ち始めて、夫からは誰も忘れた様に、ぱつたりとあの娘の噂をしなくなつて了ひました。

丁度その頃の事でございませう。

或夜、更かうが闌たけてから、私が獨り御廊下を通りかゝりますと、あの猿の良秀がいきなりどこから飛んで參りまして、私の袴の裾を頻りにひつぽるのでございます。確、もう梅の匂でも致しさうなうすい月の光のさしてゐる、暖い夜でございましたが、其明りですかして見ますと、猿はまつ白な齒をむき出しながら、鼻の先へ皺をよせて、氣が違はないばかりにけたゝましく啼き立てゝゐるではございせんか。

私は氣味の悪いのが三分と、新しい袴をひつぱられる腹立たしさが七分とで、最初は猿を蹴放して、その儘通りすぎようかとも思ひましたが、又思ひ返して見ますと、前にこの猿を折檻して、若殿様の御不興を受けた侍やむひつひの例もございます。

5、地獄變

それに猿の振舞が、どうも唯事とは思はれません。そこでとう／＼私も思ひ切つて、そのひつぱる方へ五六間歩くともなく歩いて参りました。

すると御廊下が一曲り曲つて、夜目にもうす白い御池の水が枝ぶりのやさしい松の向うにひろ／＼と見渡せる、丁度そこ迄参つた時の事でございます。

どこか近くの部屋の中で人の争つてゐるらしいけはひが、慌^{あわただ}しく、又妙にひつそりと私の耳を脅しました。あたりはどこも森^{しん}と静まり返つて、月明りとも靄^もともつかないものゝ中で、魚の跳る音がする外は、話し聲一つ聞えません。そこへこの物音でございますから。私は思はず立止つて、もし狼籍者でゝもあつたなら、目にもの見せてくれようと、そつとその遣戸^{やりど}の外へ、息をひそめながら身をよせました。

十三

所が猿は私のやり方がまだるかつたのでございませう。

良秀はさもさもどかしさうに、二三度私の足のまはりを駆けまはつたと思ひますと、まるで咽を絞められたやうな聲で啼きながら、いきなり私の肩のあたりへ一足飛に飛び上りました。

私は思はず頸を反らせて、その爪にかけられまいとする、猿は又水干^{すゐかん}の袖にかじりついて、

私の體からだから這り落ちまいとする、

—— その拍子に、私はわれ知らず二足三足よろめいて、その遣り戸へ後ぎまに、したゝか私の體を打ちつけました。

かうなつてはもう一刻も躊躇してゐる場合ではございません。私は矢庭に遣り戸を開け放して、月明りのとどかない奥の方へ跳りこまうと致しました。

が、その時私の眼を遮つたものは —— いや、それよりもつと私は、同時にその部屋の中から、彈かれたやうに駈け出さうとした女の方に驚かされました。女は出合頭に危く私に衝き當らうとして、その儘外へ轉び出しましたが、何故なぜかそこへ膝をついて、息を切らしながら私の顔を、何か恐ろしいものでも見るやうに、戦をのき／＼見上げてゐるのでございます。

それが良秀の娘だつたことは、何もわぎ／＼申し上げるまでもございますまい。が、その晩のあの女は、まるで人間が違つたやうに、生々いき／＼と私の眼に映りました。眼は大きくかゞやいて居ります。頬も赤く燃えて居りましたらう。

そこへしどけなく亂れた袴や桂うちぎが、何時もの幼さとは打つて變つた艶なまめしささへも添へてをります。

これが實際あの弱々しい、何事にも控へ目勝な良秀の娘でございませうか。 —— 私は遣り戸に身を支へて、この月明りの中にある美しい娘の姿を眺めながら、慌しく遠のいて行

5、地獄變

くもう一人の足音を、指させるものゝやうに指さして、誰ですと靜に眼で尋ねました。すると娘は唇を噛みながら、黙つて首をふりました。その容子が如何にも亦口惜しさうなのでございます。

そこで私は身をかゞめながら、娘の耳へ口をつけるやうにして、今度は「誰です」と小聲で尋ねました。

が、娘はやはり首を振つたばかりで、何とも返事を致しません。

いや、それと同時に長い睫毛まつげの先へ、涙を一ぱいためながら、前よりも緊く唇を噛みしめてゐるのでございます。

性得愚しやとくおろかな私には、分りすぎてゐる程分つてゐる事の外は、生憎何一つ呑みこめません。でございますから、私は言のかけやうも知らないで、暫くは唯、娘の胸の動悸に耳を澄ませるやうな心もちで、ちつとそこに立ちすくんで居りました。

尤もこれは一つには、何故なぜかこの上問たづひ訊すのが悪いやうな、氣咎めが致したからでもございます。――

それがどの位續いたか、わかりません。が、やがて明け放した遣り戸を閉しながら少しは上氣の褪めたらしい娘の方を見返つて、「もう曹司そうじへ御歸りなさい」と出来る丈やさしく申しました。

さうして私も自分ながら、何か見てはならないものを見たやうな、不安な心もちに脅されて、誰にともなく恥しい思ひをしながら、そつと元來の方へ歩き出しました。

所が十歩と歩かない中に、誰か又私の袴の裾を、後から恐るゝ、引き止めるではございませんか。

私は驚いて、振り向きました。あなた方はそれが何だつたと思召します？

見るとそれは私の足もとにあの猿の良秀が、人間のやうに兩手をついて、黄金の鈴を鳴しながら、何度となく丁寧に頭を下げてゐるのでございました。

十四

するとその晩の出來事があつてから、半月ばかり後の事でございます。

或日良秀は突然御邸へ参りまして、大殿様へ直の御眼通りを願ひました。

卑しい身分のものでございますが、日頃から格別御意に入つてゐたからでございます。

誰にでも容易に御會ひになつた事のない大殿様が、その日も快く御承知になつて、早速御前近くへ御召しになりました。

あの男は例の通り、香染めの狩衣に萎えた烏帽子を頂いて、何時もよりは一層氣むづかしさうな顔をしながら、恭しく御前へ平伏致しましたが、やがて噎れた聲で申しますには

5、地獄變

「兼ねぐ御云ひつけになりました地獄變の屏風でございますが、私も日夜に丹誠を抽んで、筆を執りました甲斐が見えまして、もはやあらましは出来上つたのも同前でございします。」

「それは目出度い。予も満足ぢや。」

しかしかう仰有る大殿様の御聲には、何故か妙に力の無い、張合のぬけた所がございしました。

「いえ、それが一向目出度くはござりませぬ。」

良秀は、稍腹立しさうな容子でちつと眼を伏せながら、「あらましは出来上りましたが、唯一つ、今以て私には描けぬ所がございします。」

「なに、描けぬ所がある？」

「さやうでございます。私は總じて、見たものでなければ描けませぬ。よし描けても、得心が参りませぬ。それでは描けぬも同じ事でございませぬか。」

これを御聞きになると、大殿様の御顔には、嘲るやうな御微笑が浮びました。

「では地獄變の屏風を描かうとすれば、地獄を見なければなるまいな。」

「さやうでござります。が、私は先年大火事がございました時に、炎熱地獄の猛火にもまがふ火の手を、眼のあたりに眺めました。「よぢり不動」の火焰を描きましたのも、實は

あの火事に遇つたからでございます。御前もあの繪は御承知でございませう。」

「しかし罪人はどうぢや。獄卒は見た事があるまいな。」大殿様はまるで良秀の申す事が御耳にはいらなかつたやうな御容子で、かう疊みかけて御尋ねになりました。

「私は鐵くろがねの鎖くさりに縛いましめられたものを見た事がございます。怪鳥に惱まされるものゝ姿も、具つぎに寫うつしとりました。されば罪人の呵責に苦しむ様も知らぬと申されませぬ。又獄卒は——」と云つて、良秀は氣味の悪い苦笑を洩しながら、

「又獄卒は、夢現ゆめうつに何度となく、私の眼に映りました。

或は牛頭ごづ、或は馬頭めづ、或は三面六臂の鬼の形が、音のせぬ手を拍き、聲の出ぬ口を開いて、私を虐みに參りますのは、殆ど毎日毎夜のことに申してもよろしうございませう。——

私の描かうとして描けぬのは、そのやうなものではございませぬ。」

それには大殿様も、流石に御驚きになつたでございませう。暫くは唯苛いらだ立たしさうに、

良秀の顔を睨めて御出になりましたが、やがて眉を險しく御動かしになりながら、

「では何が描けぬと申すのぢや。」と打捨るやうに仰有いました。

十五

5、地獄變

「私は屏風の唯中に、檳榔毛びらうげの車が一輛空から落ちて來る所を描かうと思つて居ります。」

良秀はかう云つて、始めて鋭く大殿様の御顔を眺めました。あの男は晝の事を云ふと、氣違ひ同様になるとは聞いて居りましたが、その時の眼のくばりには確にさやうな恐ろしさがあつたやうでございます。

「その車の中には、一人のあでやかな上臈が、猛火の中に黒髪を亂しながら、悶え苦しんでゐるのでございます。顔は煙に咽びながら、眉を顰ひそめて、空ざまに車蓋やかたを仰いで居りませう。手は下簾したすだれを引きちぎつて、降りかゝる火の粉の雨を防がうとしてゐるかも知れませぬ。さうしてそのまはりには、怪しげな鷺鳥が十羽となく、二十羽となく、嘴を鳴らして紛々と飛び繞まどつてゐるのでございます。—— あゝ、それが、牛車の中の上臈が、どうしても私には描かけませぬ。」

「さうして —— どうぢや。」

大殿様はどう云ふ譯か、妙に悦ばしさうな御氣色で、かう良秀を御促しになりました。が、良秀は例の赤い脣を熱でも出た時のやうに震はせながら、夢を見てゐるのかと思ふ調子で、

「それが私には描けませぬ。」

と、もう一度繰返しましたが、突然噛みつくやうな勢ひになつて、

「どうか檳榔毛びらうげの車を一輛、私の見てゐる前で、火をかけて頂きたうございます。さうしてもし出來まするならば――」

大殿様は御顔を暗くなすつたと思ふと、突然けたたましく御笑ひになりました。さうしてその御笑ひ聲に息をつまらせながら、仰有いますには、

「おゝ、萬事その方が申す通りに致して遣はさう。出來る出來ぬの詮議は無益むやくの沙汰ぢや。」

私はその御言を伺ひますと、蟲の知らせか、何となく凄じい氣が致しました。

實際又大殿様の御容子も、御口の端には白く泡がたまつて居りますし、御眉のあたりにはびく／＼と電いなづまが走つて居りますし、まるで良秀のもの狂ひに御染みなすつたのかと思ふ程、唯ならなかつたのでございます。

それがちよいと言を御切りになると、すぐ又何かが爆はぜたやうな勢ひで、止め度なく喉を鳴らして御笑ひになりながら、

「檳榔毛びらうげの車にも火をかけよう。又その中にはあでやかな女を一人、上臈よそはひの装よそはひをさせて乗せて遣はさう。炎と黒煙とに攻められて、車の中の女が、悶え死をする――それを描かうと思ひついたのは、流石に天下第一の繪師ぢや。褒めてとらす。おゝ、褒めてとら

5、地獄變

すぞ。」

大殿様の御言葉を聞きますと、良秀は急に色を失つて喘ぐやうに唯、脣ばかり動して居りましたが、やがて體中の筋が緩んだやうに、べたりと疊へ兩手をつくつと、

「難有い仕合でございまする。」

と、聞えるか聞えないかわからない程低い聲で、丁寧に御禮を申し上げました。

これは大方自分の考へてゐた目ろみの恐ろしさが、大殿様の御言葉につれてありくと目の前へ浮んで來たからでございませうか。

私は一生の中に唯一度、この時だけは良秀が、氣の毒な人間に思はれました。

十六

それから二三日した夜の事でございます。

大殿様は御約束通り、良秀を御召しになつて、檳榔毛びらうげの車の焼ける所を、目近く見せて御やりになりました。

尤もこれは堀河の御邸であつた事ではございません。

俗に雪解ゆきげの御所と云ふ、昔大殿様の姉君がいらした洛外の山莊で、御焼きになつたのでございます。

この雪解の御所と申しますのは、久しくどなたにも御住ひにはならなかつた所で、廣い御庭も荒れ放題荒れ果てて居りましたが、大方この人氣のない御容子を拜見した者の當推量でございませう。

こゝで御歿おなくなりになつた妹君の御身の上にも、兎角の噂が立ちまして、中には又月のない夜毎々々に、今でも怪しい御袴の緋の色が、地にもつかず御廊下を歩むなどと云ふ取沙汰を致すものもございました。

——
それも無理ではございません。

晝でさへ寂しいこの御所は、一度日が暮れたとなりますと、遣り水の音が一際陰に響いて、星明りに飛ぶ五位鷺も、怪形けぎやうの物かと思ふ程、氣味が悪いのでございますから。

丁度その夜はやはり月のない、まつ暗な晩でございましたが、大殿油おほとのあぶらの灯影で眺めますと、縁に近く座を御占めになつた大殿様は、淺黄なほしの直衣に濃い紫の浮紋うきもんの指貫さしぬぎを御召しになつて、白地の錦の縁をとつた圓座わらふたに、高々とあぐらを組んでいらつしやいました。

その前後左右に御側の者どもが五六人、恭しく居並んで居りましたのは、別に取り立てて申し上げるまでもございますまい。

が、中に一人、眼だつて事ありげに見えたのは、先年陸奥みちのくの戦ひに餓ゑて人の肉を食つて以來、鹿いきづのの生角さへ裂くやうになつたと云ふ強力ちからの侍が、下に腹巻を着こんだ容子で、太刀

5、地獄變

を鴟^{かめじり}尻^はに佩^そき反らせながら、御縁の下に厳^{いかめ}しくつくばつてゐた事でございます。――
それが皆、夜風に靡^なく灯の光で、或は明るく或は暗く、殆^{ゆめうつ}ど夢現を分たない氣色で、何故
かもの凄く見え渡つて居りました。

その上に又、御庭に引き据ゑた檳榔毛の車が、高い車蓋^{やかた}にのつしりと暗を抑へて、牛は
つけず黒い轅^{ながえ}を斜^{しち}に榻へかけながら、金物^{かなもの}の黄金^{きん}を星のやうに、ちらちら光らせてゐるの
を眺めますと、春とは云ふものゝ何となく肌寒い氣が致します。

尤もその車の内は、浮線綾^{ふち}の縁をとつた青い簾が、重く封じこめて居りますから、軒^{はこ}には
何がいつてゐるか判りません。

さうしてそのまはりには仕丁たちが、手ん手に燃えさかる松明^{まつ}を執つて、煙が御縁の方へ
靡くのを氣にしながら、仔細らしく控へて居ります。

當の良秀は稍離れて、丁度御縁の眞向に、跪いて居りましたが、これは何時もの香染め
らしい狩衣に萎えた揉烏帽子^{もみゑぼし}を頂いて、星空の重みに壓されたかと思ふ位、何時もよりは
猶小さく、見すばらしげに見えました。

その後、又一人同じやうな烏帽子狩衣の蹲つたのは、多分召し連れた弟子の一人でもござ
いませうか。

それが丁度二人とも、遠いうす暗がりの中に蹲つて居りますので、私のゐた御縁の下から

は、狩衣の色さへ定かにはわかりません。

十七

時刻は彼是眞夜中にも近かつたでございませう。

林泉をつゝんだ暗がひつそりと聲を呑んで、一同のする息を窺つてゐると思ふ中には、唯かすかな夜風の渡る音がして、松明の煙がその度に煤臭い匂を送つて参ります。

大殿様は暫く黙つて、この不思議な景色をぢつと眺めていらつしやいましたが、やがて膝を御進めになりますと、

「良秀」と、鋭く御呼びかけになりました。

良秀は何やら御返事を致したやうでございますが、私の耳には唯、唸るやうな聲しか聞えて参りません。

「良秀。今宵はその方の望み通り、車に火をかけて見せて遣はさう。」

大殿様はかう仰有つて、御側の者たちの方を流し^{なが}眊^めに御覧になりました。

その時何か大殿様と御側の誰彼との間には、意味ありげな微笑が交されたやうにも見うけましたが、これは或は私の氣のせみかも分りません。

すると良秀は畏る畏る頭を擧げて御縁の上を仰いだらうございますが、やはり何も申し

5、地獄變

上げずに控へて居ります。

「よう見い。それは予が日頃乗る車ぢや。その方も覚えがあらう。―― 予はその車にこれから火をかけて、目のあたりに炎熱地獄を現ぜさせる心算ぢやが。」

大殿様は又言を御止めになつて、御側の者たちにめくば胸せをなさいました。それから急に苦々しい御調子で、

「その内には罪人の女房が一人、縛めた儘、乗せてある。されば車に火をかけたら、必定その女めは肉を焼き骨を焦して、四苦八苦の最期を遂げるであらう。その方が屏風を仕上げるには、又とないよい手本ぢや。雪のやうな肌が燃え爛れるのを見のがすな。黒髪が火の粉になつて、舞ひ上るさまもよう見て置け。」

大殿様は三度口を御おつぐ噤みになりましたが、何を御思ひになつたのか、今度は唯肩を揺つて、聲も立てずに御笑ひなさりながら、

「末代までもない觀物ぢや。予もここで見物しよう。」

それ／＼、簾みすを揚げて、良秀に中の女を見せて遣さぬか。」

仰を聞くと仕丁の一人は、片手に松明の火を高くかざしながら、つか／＼と車に近づくと、矢庭に片手をさし伸ばして、簾をさらりと揚げて見せました。

けたゝましく音を立てて燃える松明まつの光は、一しきり赤くゆらぎながら、忽ち狭いはこ軒の中

を鮮かに照し出しましたが、輓とこの上に慘むじらしく、鎖にかけられた女房は――あゝ、誰か見違へを致しませう。

きらびやかな繡のある櫻の唐衣にすべらかしの黒髪が艶やかに垂れて、うちかたむいた黄金の釵さつし子も美しく輝いて見えました。身なりこそ違へ、小造りな體つきは、色の白い頸のあたりは、さうしてあの寂しい位つゝましやかな横顔は、良秀の娘に相違ちがひありません。私は危く叫び聲を立てようと致しました。

その時でございます。私に向ひあつてゐた侍は慌しく身を起して、柄頭つかがしらを片手に抑へながら、屹と良秀の方を睨にらみました。

それに驚いて眺めますと、あの男はこの景色に、半ば正氣を失つたのでございませう。

今まで下に蹲うづくまつてゐたのが、急に飛び立つたと思ひますと、兩手を前へ伸した儘、車の方へ思はず知らず走りかゝらうと致しました。

唯生憎前にも申しました通り、遠い影の中に居りますので、顔貌かほかたちははつきりと分りません。

しかしさう思つたのはほんの一瞬間で、色を失つた良秀の顔はいや、まるで何か目に見えない力が、宙へ吊り上げたやうな良秀の姿は、忽ちうす暗がりを切り抜いてあり／＼と眼前へ浮び上りました。

5、地獄變

娘を乗せた檳榔毛の車が、この時、「火をかけい」と云ふ大殿様の御言と共に、仕丁たちが投げる松明の火を浴びて炎々と燃え上つたのでございます。

十八

火は見る／＼中に、車蓋やかたをつゝみました。庇についた紫の流蘇ふさが、煽られたやうにきつと靡くと、その下から濛々と夜目にも白い煙が渦を巻いて、或は簾すだれ、或は袖、或は棟の金物ものが、一時に碎けて飛んだかと思ふ程、火の粉が雨のやうに舞ひ上る――その凄じさと云つたらございません。

いや、それよりもめらめらと舌を吐いて袖格子そでがうしに搦みながら、半空なかぞらまでも立ち昇る烈々とした炎の色はまるで日輪が地に落ちて、天火が迸つたやうだとも申しませうか。前に危く叫ぼうとした私も、今は全く魂たましひを消して、唯茫然と口を開きながら、この恐ろしい光景を見守るより外はございませんでした。

しかし親の良秀は――

良秀のその時の顔つきは、今でも私は忘れません。思はず知らず車の方へ駆け寄らうとしたあの男は、火が燃え上ると同時に、足を止めて、やはり手をさし伸した儘、食ひ入るばかりの眼つきをして、車をつゝむ焰煙を吸ひつけられたやうに眺めて居りましたが、満

身に浴びた火の光で、皺だらけな醜い顔は、髭の先までもよく見えます。

が、その大きく見開いた眼の中と云ひ、引き歪めた唇のあたりと云ひ、或は又絶えず引き攣つてゐる頬の肉の震へと云ひ、良秀の心に交々往來する恐れと悲しみと驚きとは、歴々と顔に描かれました。首を刎ねられる前の盗人でも、乃至は十王の廳へ引き出された、十逆五惡の罪人でもあゝまで苦しきうな顔は致しますまい。

これには流石にあの強力がうりきの侍でさへ、思はず色を變へて、畏る／＼大殿様の御顔を仰ぎました。

が、大殿様は緊く唇を御噛みになりながら、時々氣味悪く御笑ひになつて、眼を放さずぢつと車の方を御見つめになつていらつしやいます。

さうしてその車の中には――あゝ、私はその時、その車にどんな娘の姿を眺めたか、それを詳しく申し上げる勇氣は、到底あらうとも思はれません。

あの煙に咽んで仰向あふむけた顔の白さ、焰はらを掃つてふり亂れた髪はらの長さ、それから又見る間に火と變つて行く、櫻の唐衣の美しさ、――何と云ふ慘むじたらしい景色でございましたらう。

殊に夜風が一下ひとおろしして、煙が向うへ靡いた時、赤い上に金粉を撒いたやうな、焰の中から浮き上つて、髪を口に噛みながら、縛いましめの鎖も切れるばかり身悶えをした有様は、地獄の

5、地獄變

業苦を目のあたりへ寫し出したかと疑はれて、私始め強力の侍までおのづと身の毛がよだちました。

するとその夜風が又一渡り、御庭の木々の梢にさつと通ふ——と誰でも、思ひましたらう。

さう云ふ音が暗い空を、どことも知らず走つたと思ふと、忽ち何か黒いものが、地にもつかず宙にも飛ばず、鞠のやうに躍りながら、御所の屋根から火の燃えさかる車の中へ、一文字にとびこみました。

さうして朱塗のやうな袖格子が、ばら／＼と焼け落ちる中に、のけ反つた娘の肩を抱いて、帛を裂くやうな鋭い聲を、何とも云へず苦しきやうに、長く煙の外へ飛ばせました。續いて又、二聲三聲——私たちは我知らず、あつと同音に叫びました。

壁代のやうな焰を後にして、娘の肩に縋つてゐるのは、堀河の御邸に繋いであつた、あの良秀と諱名のある、猿だつたのでございますから。

その猿が何處をどうしてこの御所まで、忍んで來たか、それは勿論誰にもわかりませんが、日頃可愛がつてくれた娘なればこそ、猿も一しよに火の中へはひつたのでございませう。

十九

が、猿の姿が見えたのは、ほんの一瞬間でございました。金梨子^{きんなしぢ}地のやうな火の粉がしきり、ぱつと空へ上つたかと思ふ中に、猿は元より娘の姿も、黒煙の底に隠されて、御庭のまん中には唯、一輛の火の車が凄じい音を立てながら、燃え沸^{もたぎ}つてゐるばかりでございます。いや、火の車と云ふよりも、或は火の柱と云つた方が、あの星空を衝いて煮^にえ返る、恐ろしい火焰の有様にはふさはしいかも知れません。

その火の柱を前にして、凝り固まつたやうに立つてゐる良秀は、—— 何と云ふ不思議な事でございませう。

あのさつきまで地獄の責苦に悩んでゐたやうな良秀は、今は云ひやうのない輝きを、さながら恍惚とした法悦の輝きを、皺だらけな満面に浮べながら、大殿様の御前も忘れたのか、兩腕をしつかり胸に組んで、佇んでゐるではございせんか。

それがどうもあの男の眼の中には、娘の悶え死ぬ有様が映つてゐないやうなのでございます。

唯美しい火焰の色と、その中に苦しむ女人の姿とが、限りなく心を悦ばせる —— さう云ふ景色に見えました。

5、地獄變

しかも不思議なのは、何もあの男が一人娘ひとりむすめの斷末魔を嬉しうに眺めてゐた、そればかりではございません。その時の良秀には、何故か人間とは思はれない夢に見る獅子王の怒りに似た、怪しげな嚴おごそかさがございました。

でございますから不意の火の手に驚いて、啼き騒ぎながら飛びまはる數の知れない夜鳥でさへ、氣のせむか良秀の揉鳥帽子のまはりへは、近づかなかつたやうでございます。

恐らくは無心の鳥の眼にも、あの男の頭の上に、圓光の如く懸つてゐる、不可思議な威嚴が見えたのでございませう。

鳥でさへさうでございます。

まして私たちは仕丁までも、皆息をひそめながら、身の内も震へるばかり、異様な隨喜の心に充ち満ちて、まるで開眼の佛でも見るやうに、眼も離さず、良秀を見つめました。

空一面に鳴り渡る車の火とそれに魂を奪はれて、立ちすくんでゐる良秀と—— 何と云ふ莊嚴、何と云ふ歡喜でございませう。

が、その中でたつた、御縁の上の大殿様だけは、まるで別人かと思はれる程、御顔の色も青ざめて、口元に泡を御ためになりながら、紫の指貫さしぬきの膝を兩手にしつかり御つかみになつて、丁度喉の渴いた獸のやうに喘ぎつゞけていらつしやいました。……

二十

その夜雪解の御所で、大殿様が車を御焼きになつた事は、誰の口からともなく世上へ洩れましたが、それに就いては随分いろ／＼な批判を致すものも居つたやうでございます。

先第一に何故大殿様が良秀の娘を御焼き殺しなすつたか、——これは、かなはぬ戀の恨みからなすつたのだと云ふ噂が、一番多うございました。

が、大殿様の思召しは、全く車を焼き人を殺してまでも、屏風の畫を描かうとする繪師根性の曲よこしまなのを懲らす御心算おつもりだつたのに相違ちがひございません。現に私は、大殿様が御口づからさう仰有るのを伺つた事さへございます。

それからあの良秀が、目前で娘を焼き殺されながら、それでも屏風の畫を描きたいと云ふその木石のやうな心もちが、やはり何かとあげつらはれたやうでございます。

中にはあの男を罵つて、畫の爲には親子の情愛も忘れてしまふ、人面獸心の曲者だなどと申すものもございました。

あの横川よがはの僧都様などは、かう云ふ考へに味方をなすつた御一人で、「如何に一藝一能に秀でやうとも、人として五常を辨へねば、地獄に墮ちる外はない」などと、よく仰有つたものでございます。

5、地獄變

所がその後一月ばかり経つて、愈々地獄變の屏風が出来上りますと良秀は早速それを御邸へ持つて出て、恭しく大殿様の御覽に供へました。

丁度その時は僧都様も御居合はせになりましたが、屏風の畫を一目御覽になりますと、流石にあの一帖の天地に吹き荒んでゐる火の嵐の恐しさに御驚きなすつたのでございませう。それまでは苦い顔をなさりながら、良秀の方をじろく睨めつけていらしたのが、思はず知らず膝を打つて、「出かし居つた」と仰有おつしやいました。この言を御聞になつて、大殿様が苦笑なすつた時の御容子も、未だに私は忘れません。

それ以來あの男を悪く云ふものは、少くとも御邸の中だけでは、殆ど一人もゐなくなりました。

誰でもあの屏風を見るものは、如何に日頃良秀を憎く思つてゐるにせよ、不思議に嚴おごそかな心もちに打たれて、炎熱地獄の大苦艱を如實に感じるからでもございませうか。

しかしさうなつた時分には、良秀はもうこの世に無い人の數にはいつて居りました。それも屏風の出来上つた次の夜に、自分の部屋の梁はりへ繩をかけて、縊くびれ死んだのでございませう。

一人娘ひとりむすめを先立てたあの男は、恐らく安閑として生きながらへるのに堪へなかつたのでございませう。屍骸は今でもあの男の家の跡に埋まつて居ります。尤も小さな標しるしの石は、その

後何十年かの雨風あめかぜに曝さらされて、
とうの昔誰の墓とも知れないやうに、
苔蒸こけむしてゐるにちが
ひございません。

6、藪の中

藪
の
中

（旧字旧仮名）

芥川龍之介

大正十一年一月
新潮

檢非違使に問はれたる木樵りの物語

さやうでございます。あの死骸しがいを見つけたのは、わたしに違ひちがございません。

わたしは今朝けさい何時いつもの通り、裏山うらやまの杉すぎを伐きりに参まゐりました。

すると山陰やまかげの藪やぶの中に、あの死骸しがいがあつたのでございます。

あつた所ところでございますか？

それは山科やましなの驛路えきろからは、四五町ちやうへだ程隔たつて居をりませう。

竹たけの中に痩せ杉やすぎの交まじつた、人氣ひとけのない所ところでございます。

死骸しがいは縋はなだの水干すみかんに、都風みやこふうのさび烏帽子ゑぼうしをかぶつた儘まま、仰向あをむけに倒たふれて居をりました。

何しろ一ひと刀かたなとは申まをすものの、胸むなもとの突き傷きずでございますから、死骸しがいのまはりの竹たけの落葉おちば

は、蘇芳すほうに滲しみたやうでございます。

いえ、血ちはもう流ながれては居をりません。傷口きずぐちも乾かわいて居をつたやうでございます。

おまけに其處そこには、馬蠅うまばへが一匹びき、わたしの足音あしおとも聞きこえないやうに、べつたり食くひついて居を

りましたつけ。

太刀たちか何なにかは見みえなかつたか？

いえ、何なにもございませぬ。唯ただその側そばの杉すぎの根ねがたに、繩なはが一筋落ひとすぢおちて居をりました。

6、藪の中

それから、—— さうさう、繩の外にも櫛が一つございました。

死骸のまはりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、餘程手痛い働きでも致したのに違いございません。

何、馬はゐなかつたか？

あそこは一體馬などには、はひれない所でございます。何しろ馬の通ふ路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

檢非違使に問はれたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。

昨日の、—— さあ、午頃でございませう。

場所は關山から山科へ、參らうと言ふ途中でございます。

あの男は馬に乗つた女と一しよに、關山の方へ歩いて參りました。女は牟子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。

見えたのは唯萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。

馬は月毛の、—— 確か法師髪の馬のやうでございました。

丈でございますか？

丈は四寸もございましたか？

何しろ沙門の事でございますから、その邊はつきり存じません。

男は、—— いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携へて居りました。

殊に黒い塗り箆へ、二十あまり征矢をさしたのは、唯今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかやうになろうとは、夢にも思はずに居りましたが、まことに人間の命なぞは、如露亦如電に違ひございません。

やれやれ、何とも申しやうのない、氣の毒な事を致しました。

檢非違使に問はれたる放免の物語

わたしが搦め取つた男でございますか？

これは確かに多襄丸と言ふ、名高い盗人でございます。

尤もわたしが搦め取つた時には、馬から落ちたのでございませう、栗田口の石橋の上に、うんうん呻つて居りました。

時刻でございますか？ 時刻は昨夜の初更頃でございます。

何時ぞやわたしが捉へ損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。

6、藪の中

唯今はその外にも御覽の通り、弓矢の類さへ携へて居ります。

さやうでございますか？ あ之死骸の男が持つてゐたのも、——では人殺しを働いた

のは、この多襄丸に違ひございませぬ。

革を巻いた弓、黒塗りの箆、鷹の羽の征矢が十七本、——これは皆、あの男が持つてゐ

たものでございませう。

はい、馬も仰有る通り、法師髪の月毛でございます。

その畜生に落されるとは、何かの因縁に違ひございませぬ。

それは石橋の少し先に、長い端綱を引いた儘、路ばたの青芒を食つて居りました。

この多襄丸と言ふやつは、洛中に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございます。

昨年の秋鳥部寺の寶頭廬の後の山に、物詣でに來たらしい女房が一人、女の童と一しよに殺されてゐたのは、こいつの仕業だとか申して居りました。

その月毛に乗つてゐた女も、こいつがあを男を殺したとなれば、何處へどうしたかわかりませぬ。

差出がましうございますが、それも御詮議下さいまし。

檢非違使に問はれたる媼の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございます。

が、都のものではございませぬ。

若狭の國府の侍でございます。

名は金澤の武弘、年は二十六歳でございました。

いえ、優しい氣立でございますから、遺恨なぞ受ける筈はございませぬ。

娘でございますか？

娘の名は眞砂、年は十九歳でございます。

これは男にも劣らぬ位勝氣の女でございますが、まだ一度も武弘の外には、男を持つた事はございませぬ。

顔は色の淺黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜實顔でございます。

武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立つたのでございますが、こんな事になりますとは、何と言ふ因果でございませう。

しかし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめましても、これだけは心配でなりませぬ。

どうかこの姥が一生の願ひでございますから、たとひ草木を分けましても、娘の行方

をお尋ね下さいまし。

何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございます。
婿ばかりか、娘までも、……………

（跡は泣き入りて言葉なし。）

多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。
では何處へ行つたのか？ それはわたしにもわからないのです。

まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されません。

その上わたしもかうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出會ひました。その時風の吹いた拍子に、牢子の垂絹が上つたものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。

ちらりと、—— 見えたと思ふ瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはその爲もあつたのでせう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のやうに見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとひ男は殺しても、女は奪はうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思つてゐるやうに、大した事ではありません。
どうせ女を奪ふとなれば、必、男は殺されるのです。唯わたしは殺す時に、腰の太刀を使ふのですが、あなた方は太刀を使はない、唯權力で殺す、金で殺す、どうかするとお爲ごかしの言葉だけでも殺すでせう。成程血は流れない、男は立派に生きてゐる、——
しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考へて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪い
か、どちらが悪いかわかりません。

(皮肉なる微笑)

しかし男を殺さずとも、女を奪ふ事が出来れば、別に不足はない譯です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪はうと決心したのです。

が、あの山科の驛路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚がある、その古塚を發いて見たら、鏡や太刀が澤山出た、わたしは誰も知らないやうに、山の陰の藪の中へ、さう言ふ物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に賣り渡したい、——と言ふ話をしたのです。男は何時かわたしの話に、だんだん心を動かし初めました。それから、—— どうです、慾と言ふものは、恐しいではありません

6、藪の中

か？ それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けてゐたのです。

わたしは藪の前へ来ると、寶はこの中に埋めてある、見に来てくれと言ひました。

男は慾に渴いてゐますから、異存のある筈はありません。

が、女は馬も下りずに、待つていると言ふのです。

又あの藪の茂つてゐるのを見ては、さう言ふのも無理はありますまい。

わたしはこれも實を言へば、思ふ壺にはまつたのですから、女一人を残した儘、男と藪の中へはひりました。

藪は少時の間は竹ばかりです。

が、半町程行つた所に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂ぐるのには、これ程都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、寶は杉の下に埋めてあると、尤もらしい謠をつきました。男はわたしにさう言はれると、もう痩せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が竝んでゐる、——わたしは其處へ来るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩いてゐるだけに、力は相當にあつたやうですが、不意を打たれてはたまりません。忽ち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまひました。縄ですか？ 縄は盗人の難有

さに、何時^{いつ}塀^{へい}を越^こえるかわかりませんから、ちやんと腰^{こし}につけてゐたのです。勿^{もちろん}論^{ろん}聲^{こゑ}を出^ださせない爲^{ため}にも、竹^{たけ}の落^{おち}葉^ばを頬^ほ張^ばらせれば、外^{ほか}に面^{めん}倒^{だう}はありません。

わたしは男^{をとこ}を片^{かた}附^づけてしまふと、今^{こん}度^どは又^{また}女^{をんな}の所^{ところ}へ、男^{をとこ}が急^{きふ}病^{びやう}を起^{おこ}したらしいから、見^みに來^きてくれと言^いひに行^ゆきました。これも圖^づ星^{ぼし}に當^{あた}つたのは、申^{まを}し上^あげるまでもありますまい。女^{をんな}は市^{いち}女^め笠^がを脱^ぬいだ儘^{まま}、わたしに手^てをとられながら、藪^{やぶ}の奥^{おく}へはひつて來^きました。

所^{ところ}が其^{そこ}處^きへ來^きて見^みると、男^{をとこ}は杉^{すぎ}の根^ねに縛^{しば}られてゐる、——女^{をんな}はそれを一^{ひと}目^め見^みるなり、何^{いつ}時^まの間に懷^{ふところ}から出^だしてゐたか、きらりと小^さ刀^がを引^ひき拔^ぬきました。

わたしはまだ今^{いま}までに、あ^{くら}の位^ゐ氣^き性^{しやう}の烈^{はげ}しい女^{をんな}は、一^{ひと}人^りも見^みた事^{こと}がありません。

もしその時^{とき}でも油^ゆ斷^{だん}してゐたらば、一^{ひと}突^つきに脾^ひ腹^{ばら}を突^つかれたでせう。いや、それは身^みを躲^{かは}した所^{ところ}が、無^む二^む無^む三^{さん}に斬^きり立^たてられる内^{うち}には、どんな怪^け我^がも仕^{しか}兼^かねなかつたのです。

が、わたしも多^{たじやう}襄^{まる}丸^{まる}ですから、どうにかかうにか太^た刀^ちも拔^ぬかず、とうとう小^さ刀^がを打^うち落^{おと}しました。いくら氣^きの勝^かつた女^{をんな}でも、得^え物^{もの}がなければ仕^{しか}方^たがありません。わたしはとうとう思^{おも}ひ通^{とほ}り、男^{をとこ}の命^{いのち}は取^とらずとも、女^{をんな}を手^てに入れる事^{こと}は出^で來^きたのです。

男^{をとこ}の命^{いのち}は取^とらずとも、——さうです。

わたしはその上^{うへ}にも、男^{をとこ}を殺^{ころ}すつもりはなかつたのです。

6、藪の中

ところが泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのやうに縋りつきました。

しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと言ふのです。

いや、その内どちらにしろ、生き残つた男につれ添ひたい、——
さうも喘ぎ喘ぎ言ふのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。

(陰鬱なる興奮)

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷な人間に見えるでせう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるやうな瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとひ神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい、——わたしの念頭にあつたのは、唯かう言ふ一事だけです。

これはあなた方の思ふやうに、卑しい色慾ではありません。もしその時色慾の外に、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでせう。男もさうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。
が、薄暗い藪の中に、ちつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、此處は去

るまいと覺悟かくごしました。

しかし男をとこを殺すにしても、卑怯ひけふな殺し方はしたくありません。

わたしは男をとこの縄なはを解いた上うへ、太刀打ちたちうをしろと言いひました。

(杉すぎの根ねがたに落おちてゐたのは、その時捨ときすて忘れた縄なはなのです。)

男をとこは血相けつそうを變かへた儘まま、太ふとい太刀たちを引ひき拔ぬきました。

と思おもふと口くちも利きかずに、憤然ふんぜんとわたしへ飛とびかかりました。――

たかは、申まをし上あげるまでもありますまい。

わたしの太刀たちは二十三合目がふめに、相手あひての胸むねを貫つらぬきました。

二十三合目がふめに、――どうかそれを忘わすれずに下ください。

わたしは今いまでもこの事ことだけは、感心かんしんだと思おもつてゐるのです。

わたしと二十合斬がふぎり結むすんだものは、天下てんかにあの男をとこ一人ひとりだけですから。

(快活くわいくわつなる微笑びせう)

わたしは男をとこが倒たふれると同時にどうじに、血ちに染そまつた刀かたなを下さげたなり、女をんなの方ほうを振ふり返かへりまし

た。

すると、―― どうです、あの女をんなは何處どこにもゐないではありませんか？ わたしは女をんなが

どちらへ逃にげたか、杉すぎむらの間あいだを探さがして見みました。が、竹たけの落葉おちばの上うへには、それらしい跡あと

6、藪の中

も残つてゐません。

又耳を澄ませて見ても、聞えるのは唯男の喉に、斷末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早い、人の助けでも呼ぶ爲に、藪をくぐつて逃げたのかも知れない。――わたしはさう考へると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪つたなり、すぐに又もとの山路へ出ました。

其處にはまだ女の馬が、靜かに草を食つてゐます。その後の事は申し上げるだけ、無用の口數に過ぎますまい。唯、都へはいる前に、太刀だけはもう手放してゐました。――わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は樗の梢に、懸ける首と思つてゐますから、どうか極刑に遇はせて下さい。

(昂然たる態度)

清水寺に來れる女の懺悔

――その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまふと、縛られた夫を眺めながら、嘲るやうに笑ひました。

夫はどんなに無念だつたでせう。

が、いくら身悶えをしても、體中にかかつた縄目は、一層ひしひしと食ひ入るだけです。

わたしは思はず夫の側へ、轉ぶやうに走り寄りしました。いえ、走り寄らうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしを其處へ蹴倒しました。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも言ひやうのない輝きが、宿つてゐるのを覺りました。何とも言ひやうのない、——わたしはあの眼を思ひ出すと、今でも身震ひが出ずにはゐられません。口さへ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を傳へたのです。しかも其處に閃いてゐたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——唯わたしを蔑んだ、冷たい光だつたではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたやうに、我知らず何か叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまひました。

その内にやつと氣がついて見ると、あの紺の水干の男は、もう何處かへ行つてゐました。跡には唯杉の根がたに、夫が縛られてゐるだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと體を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと變りません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せてゐるのです。恥しき、悲しき、腹立たしき、——その時のわたしの心の中は、何と言へば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りしました。

「あなた。もうかうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思ひに死ぬ覺悟です。」

6、藪の中

しかし、—— しかしあなたもお死になすつて下さい。
あなたはわたしの恥を御覽になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す譯には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を言ひました。

それでも夫は忌はしきうに、わたしを見つめてゐるばかりなのです。わたしは裂けさうな胸を抑へながら、夫の太刀を探しました。

が、あの盗人に奪はれたのでせう、太刀は勿論弓矢さへも、藪の中には見當りません。

しかし幸ひ小刀だけは、わたしの足もとに落ちてゐるのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にかう言ひました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やつと唇を動かししました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまつてゐますから、聲は少しも聞えませんが、わたしはそれを見ると、忽ちその言葉を感じました。夫はわたしを蔑んだ儘、「殺せ」と一言言つたのです。

わたしは殆ど、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、ずぶりと小刀を刺し通しました。わたしは又この時も、氣を失つてしまつたのでせう。やつとあたりを見まはした時には、夫はもう縛られた儘、とうに息が絶えてゐました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交

つた杉むらの空から、西日が一すぢ落ちてゐるのです。わたしは泣き聲を呑みながら、死骸の縄を解き捨てました。さうして、―― さうしてわたしがどうなつたか？ それだけはどうわたしには、申し上げる力もありません。兎に角わたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにかうしてゐる限り、これも自慢にはなりません。

（寂しき微笑）

わたしのやうに腑甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れません。

しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわたしは、一體どうすれば好いのでせう？

一體わたしは、―― わたしは、――

（突然烈しき歎歎）

巫女の口を借りたる死靈の物語

―― 盗人は妻を手ごめにすると、其處へ腰を下した儘、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。體も杉の根に縛られてゐる。

6、藪の中

が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の言ふ事を眞に受けるな、何を言つても嘘と思へ、—— おれはそんな意味を傳へたいと思つた。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、ぢつと膝へ目をやつてゐる。それがどうも盗人の言葉に、聞き入つてゐるやうに見えるではないか？ おれは妬しさに身悶えをした。

が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めてゐる。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合ふまい。

そんな夫に連れ添つてゐるより、自分の妻になる氣はないか？ 自分はいとしいと思へばこそ、大それた眞似も働いたのだ、

—— 盗人はとうとう大膽にも、さう言ふ話さへ持ち出した。

盗人にかう言はれると、妻はうつとりと顔を擡げた。

おれはまだあの時程、美しい妻は見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？

おれは中有に迷つてゐても、妻の返事を思ひ出す毎に、嗔恚に燃えなかつたためしはない。

妻は確にかう言つた、

「では何處へでもつれて行つて下さい。」

(長き沈黙)

妻の罪はそれだけではない。

それだけならばこの闇の中に、今程おれも苦しみはしまい。

しかし妻は夢のやうに、盗人に手をとられながら、藪の外へ行かうとすると、忽ち顔色を失つたなり、杉の根のおれを指さした。

「あの人を殺して下さい。」

わたしはあの人が生きてゐては、あなたと一しよにはゐられません。」

妻は氣が狂つたやうに、何度もかう叫び立てた。

「あの人を殺して下さい。」

この言葉は嵐のやうに、今でも遠い闇の底へ、まつ逆様におれを吹き落さうとする。

一度でもこの位憎むべき言葉が、人間の口を出た事があらうか？

一度でもこの位呪はしい言葉が、人間の耳に觸れた事があらうか？

一度でもこの位、

(突然迸る如き嘲笑)

その言葉を聞いた時は、盗人さへ色を失つてしまった。

6、藪の中

「あの人を殺して下さい。」

妻はさう叫びながら、盗人の腕に縋つてゐる。

盗人はぢつと妻を見た儘、殺すとも殺さぬとも返事をしない。

と思ふか思はない内に、妻は竹の落葉の上へ、唯、一蹴りに蹴倒された、

(再、進る如き嘲笑)

盗人は靜かに兩腕を組むと、おれの姿へ眼をやつた。

「あの女はどうするつもりだ？」

殺すか、それとも助けてやるか？

返事は唯頷けば好い。

殺すか？」

おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい。

(再、長き沈黙)

妻はおれがためらふ内に、何か一聲叫ぶが早い、忽ち藪の奥へ走り出した。

盗人も咄嗟に飛びかかったが、これは袖さへ捉へなかつたらしい。

おれは唯、幻のやうに、さう言ふ景色を眺めてゐた。

盗人は妻が逃げ去つた後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄を切つた。

「今度はおれの身の上だ。」

—— おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまう時に、かう呟いたのを覚えてゐる。

その跡は何處も静かだった。

いや、まだ誰かの泣く聲がする。

おれは縄を解きながら、ちつと耳を澄ませて見た。

が、その聲も氣がついて見れば、おれ自身の泣いてゐる聲だったではないか？

(三度、長き沈黙)

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた體を起した。

おれの前には妻が落した、小刀が一つ光つてゐる。

おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。

何か腥い塊がおれの口へこみ上げて来る。

が、苦しみは少しもない。

唯胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまつた。

ああ、何と言ふ静かさだらう。

この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに來ない。

唯杉や竹の杪に、寂しい日影が漂つてゐる。

6、藪の中

日影^{ひかげ}が、——それも次第^{しだい}に薄^{うす}れて來^くる。

もう杉^{すぎ}や竹^{たけ}も見^みえない。

おれは其處^{そこ}に倒^{たふ}れた儘^{まま}、深^{ふか}い靜^{しづ}かさに包^まれてゐる。

その時誰^{ときだれ}か忍^{しの}び足^{あし}に、おれの側^{そば}へ來^きたものがある。

おれはそちらを見^みようとした。

が、おれのまはりには、何時^{いつ}か薄闇^{うすやみ}が立^たちこめてゐる。

誰^{たれ}か、——その誰^{たれ}かは見^みえない手^てに、そつと胸^{むね}の小刀^{さす}を抜^ぬいた。

同時^{どうじ}におれの口^{くち}の中^{なか}には、もう一度血潮^{どちほ}が溢^{あふ}れて來^くる。

おれはそれぎり永久^{えいきう}に、中^{ちゆう}有^うの闇^{やみ}へ沈^{しづ}んでしまつた。……

(大正十年十二月)

河童

(新字旧仮名)

芥川龍之介

昭和二年三月

改造

第九卷第三号

序

これは或精神病院の患者、——第二十三号が誰にでもしやべる話である。彼はもう三十を越してゐるであらう。が、一見した所は如何にも若々しい狂人である。彼の半生の経験は、——いや、そんなことはどうでも善い。彼は唯ちつと両膝をかかへ、時々窓の外へ目をやりながら、（鉄格子をはめた窓の外には枯れ葉さへ見えない檜の木が一本、雪曇りの空に枝を張つてゐた。）院長のS博士や僕を相手に長々とこの話をしやべりつづけた。尤も身ぶりはしなかつた訣ではない。彼はたとへば「驚いた」と言ふ時には急に顔をのけ反^ぞらせたりした。……

僕はかう云ふ彼の話を可なり正確に写したつもりである。若し又誰か僕の筆記に飽き足らない人があるとすれば、東京市外**村のS精神病院を尋ねて見るが善い。年よりも若い第二十三号はまづ丁寧に頭を下げ、蒲団のない椅子を指さすであらう。それから憂鬱な微笑を浮かべ、静かにこの話を繰り返すであらう。最後に、——僕はこの話を終つた時の彼の顔色を覚えてゐる。彼は最後に身を起すが早いか、忽ち拳骨をふりまはしながら、誰にでもかう怒鳴りつけるであらう。

——「出て行け！　この悪党めが！　貴様も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、図々しい、

うぬ惚れきつた、残酷な、虫の善い動物なんだらう。出て行け！　この悪党めが！」

一

三年前の夏のことです。僕は人並みにリュック・サックを背負ひ、あの上高地の温泉宿から穂高山へ登らうとしました。穂高山へ登るのには御承知の通り梓川を溯る外はありません。僕は前に穂高山は勿論、槍ヶ岳にも登つてゐましたから、朝霧の下りた梓川の谷を案内者もつれずに登つて行きました。朝霧下りた梓川の谷を——しかしその霧はいつまでたつても晴れる気色は見えません。のみならず反つて深くなるのです。僕は一時間ばかり歩いた後、一度は上高地の温泉宿へ引き返すことにしようかと思ひました。けれども上高地へ引き返すにしても、兎に角霧の晴れるのを待った上にしなければなりません。と云つて霧は一刻毎にずんずん深くなるばかりなのです。「ええ、一そ登つてしまへ。」——僕はかう考へましたから、梓川の谷を離れないやうに熊笹の中を分けて行きました。

しかし僕の目を遮るものはやはり深い霧ばかりです。尤も時々霧の中から太い毛生櫟^ぶや樅^{もみ}の枝が青あをと葉を垂らしたのも見えなかつた訣ではありません。それから又放牧の馬や牛も突然僕の前へ顔を出しました。けれどもそれ等は見えたと思ふと、忽ち又濛々とした霧の中に隠れてしまふのです。そのうちに足もくたびれて来れば、腹もだんだん減りは

7、河童

じめる、—— おまけに霧に濡れ透つた登山服や毛布なども並み大抵の重さではありません。僕はとうとう我を折りましたから、岩にせかれてゐる水の音を便りに梓川の谷へ下りることにしました。

僕は水ぎはの岩に腰かけ、とりあへず食事にとりかかりました。コオンド・ビイフの缶を切つたり、枯れ枝を集めて火をつけたり、—— そんなことをしてゐるうちに彼は十分はたつたでせう。その間にどこまでも意地の悪い霧はいつかほのぼのと晴れかかりました。僕はパンを嚙じりながら、ちよつと腕時計を覗いて見ました。時刻はもう一時二十分過ぎです。が、それよりも驚いたのは何か気味の悪い顔が一つ、円い腕時計の硝子の上へちらりと影を落したことです。僕は驚いてふり返りました。すると、—— 僕が河童と云ふものを見たのは実にこの時が始めてだつたのです。僕の後ろにある岩の上には画にある通りの河童が一匹、片手は白樺の幹を抱へ、片手は目の上にかざしたなり、珍らしさうに僕を見おろしてゐました。

僕は呆つ氣にとられたまま、暫くは身動きもしずにゐました。河童もやはり驚いたと見え、目の上の手さへ動かしません。そのうちに僕は飛び立つが早いか、岩の上の河童へ躍りかかりました。同時に又河童も逃げ出しました。いや、恐らくは逃げ出したのでせう。実はひらりと身を反したと思ふと、忽ちどこかへ消えてしまつたのです。僕は愈驚きなが

ら、熊笹の中を見まはしました。すると河童は逃げ腰をしたなり、二三メートル隔つた向うに僕を振り返つて見てゐるのです。それは不思議でも何でもありません。しかし僕に意外だつたのは河童の体の色のことです。岩の上に僕を見てゐた河童は一面に灰色を帯びてゐました。けれども今は体中すっかり緑いろに変つてゐるのです。僕は「畜生！」とおほ声を挙げ、もう一度河童へ飛びかかりました。河童が逃げ出したのは勿論です。それから僕は三十分ばかり、熊笹を突きぬけ、岩を飛び越え、遮二無二河童を追ひつづけました。

河童も亦足の早いことは決して猿などに劣りません。僕は夢中になつて追ひかける間に何度もその姿を見失はうとしました。のみならず足を^{すべ}込らして転がつたことも度たびです。が、大きい橡^{とち}の木が一本、太ぶとと枝を張つた下へ来ると、幸ひにも放牧の牛が一匹、河童の往く先へ立ち塞がりました。しかもそれは角の太い、目を血走らせた牡牛なのです。河童はこの牡牛を見ると、何か悲鳴を挙げながら、一きは高い熊笹の中へもんどりを打つやうに飛び込みました。僕は、——僕も「しめた」と思ひましたから、いきなりそのあとへ追ひすぎりました。するとそこには僕の知らない穴でもあいてゐたのでせう。僕は滑かな河童の背中にやつと指先がさはつたと思ふと、忽ち深い闇の中へまつ逆さまに転げ落ちました。が、我々人間の心はかう云ふ危機一髪の際にも途方もないことを考へるものです。僕は「あつ」と思ふ拍子にあの上高地の温泉宿の側に「河童橋」と云ふ橋があるのを思ひ

出しました。それから、——それから先のことは覚えてゐません。僕は唯目の前に稲妻に似たものを感じたぎり、いつの間にか正気を失つてゐました。

二

そのうちにやつと気がついて見ると、僕は仰向けに倒れたまま、大勢の河童にとり囲まれてゐました。のみならず太いくちばし嘴の上に鼻眼鏡をかけた河童が一匹、僕の側へ跪きながら、僕の胸へ聴診器を当ててゐました。その河童は僕が目をあいたのを見ると、僕に「静かに」と云ふ手真似をし、それから誰か後ろにゐる河童へ Quax quax と声をかけました。するとどこからか河童が二匹、担架を持つて歩いて来ました。僕はこの担架にのせられたまま、大勢の河童の群がつた中を静かに何町か進んで行きました。僕の両側に並んでゐる町は少しも銀座通りと違ひありません。やはり毛生櫓の並み木のかげにいろいろの店が日除けを並べ、その又並み木に挟まれた道を自動車が何台も走つてゐるのです。

やがて僕を載せた担架は細い横町を曲つたと思ふと、或家の中へ昇ぎこまれました。それは後に知つた所によれば、あの鼻眼鏡をかけた河童の家、——チャックと云ふ医者のだつたのです。チャックは僕を小綺麗なベッドの上へ寝かせました。それから何か透明な水菓を一杯飲ませました。僕はベッドの上に横たはたつたなり、チャックのするままにな

つてゐました。實際又僕の体は碌に身動きも出来ないほど、節々が痛んでゐたのですから。チャツクは一日に二三度は必ず僕を診察に來ました。又三日に一度位は僕の最初に見かけた河童、—— バッグと云ふ漁師も尋ねて來ました。河童は我々人間が河童のことを知つてゐるよりも遙かに人間のことを知つてゐます。それは我々人間が河童を捕獲することよりもずっと河童が人間を捕獲することが多い為でせう。捕獲と云ふのは当らないまでも、我々人間は僕の前にも度々河童の国へ來てゐるのです。のみならず一生河童の国に住んでゐたものも多かつたのです。なぜと言つて御覽なさい。僕等は唯河童ではない、人間であると云ふ特権の為に働かずに食つてゐられるのです。現にバッグの話によれば、或若い道路工夫などはやはり偶然この国へ來た後、雌の河童を妻に娶^{めと}り、死ぬまで住んでゐたと云ふことです。尤もその又雌の河童はこの国第一の美人だつた上、夫の道路工夫を誤魔化すのにも妙を極めてゐたと云ふことです。

僕は一週間ばかりたつた後、この国の法律の定める所により、「特別保護住民」としてチャツクの隣に住むことになりました。僕の家は小さい割に如何にも瀟洒と出来上つてゐました。勿論この国の文明は我々人間の国の文明—— 少くとも日本の文明などと余り大差はありません。往來に面した客間の隅には小さいピアノが一台あり、それから又壁には額縁へ入れたエツティングなども懸つてゐました。唯肝腎の家をはじめ、テーブルや椅子の寸

7、河童

法も河童の身長に合はせてありますから、子供の部屋に入れられたやうにそれだけは不便に思ひました。

僕はいつも日暮れがたになると、この部屋にチャックやバッグを迎へ、河童の言葉を習ひました。いや、彼等ばかりではありません。特別保護住民だつた僕に誰も皆好奇心を持つてゐましたから、毎日血圧を調べて貰ひに、わざわざチャックを呼び寄せるゲエルと云ふ硝子会社の社長などもやはりこの部屋へ顔を出したものです。しかし最初の半月ほどの間に一番僕と親しくしたのはやはりあのバッグと云ふ漁夫だつたのです。

或生暖かい日の暮です。僕はこの部屋のテーブルを中に漁夫のバッグと向ひ合つてゐました。するとバッグはどう思つたか、急に黙つてしまつた上、大きい目を一層大きくしてぢつと僕を見つめました。僕は勿論妙に思ひましたから、「Quax, Bag, quo quel quan?」と言ひました。これは日本語に翻訳すれば、「おい、バッグ、どうしたんだ?」と云ふことです。が、バッグは返事をしません。のみならずいきなり立ち上ると、べろりと舌を出したなり、丁度蛙の^は刎ねるやうに飛びかかる気色さへ示しました。僕は愈^{いよく}無気味になり、そつと椅子から立ち上ると、一足飛びに戸口へ飛び出さうとしました。丁度そこへ顔を出したのは幸ひにも医者^{いしや}のチャックです。

「こら、バッグ、何をしてゐるのだ?」

チャックは鼻眼鏡をかけたまま、かう云ふバッグを睨みつけました。するとバッグは恐れ入つたと見え、何度も頭へ手をやりながら、かう言つてチャックにあやまるのです。

「どうもまことに相すみません。実はこの旦那の気味悪がるのが面白かつたものですから、つい調子に乗つて悪戯をしたのです。どうか旦那も堪忍して下さい。」

三

僕はこの先を話す前にちよつと河童と云ふものを説明して置かなければなりません。河童は未だに実在するかどうかも疑問になつてゐる動物です。が、それは僕自身が彼等の間に住んでゐた以上、少しも疑ふ余地はない筈です。では又どう云ふ動物かと云へば、頭に短い毛のあるのは勿論、手足に水掻きのついてゐることも「水虎考略」などに出てゐるのと著しい違ひはありません。身長もぎつと一メートルを越えるか越えぬ位でせう。体重は医者 of チャックによれば、二十ポンドから三十ポンドまで、——稀には五十何ポンド位の大河童もゐると言つてゐました。それから頭のまん中には楕円形の皿があり、その又皿は年齢により、だんだん固さを加へるやうです。現に年をとつたバッグの皿は若いチャックの皿などとは全然手ざりも違ふのです。しかし一番不思議なのは河童の皮膚の色のことでせう。河童は我々人間のやうに一定の皮膚の色を持つてゐません。何でもその周囲の色

7、河童

と同じ色に変つてしまふ、——たとへば草の中にある時には草のやうに緑色に変わり、岩の上にある時には岩のやうに灰色に変わるのです。これは勿論河童に限らず、カメレオンにもあることです。或は河童は皮膚組織の上に何かカメレオンに近い所を持つてゐるのかも知れません。僕はこの事実を発見した時、西国の河童は緑色であり、東北の河童は赤いと云ふ民俗学上の記録を思ひ出しました。のみならずバツグを追ひかける時、突然どこへ行つたのか、見えなくなつたことを思ひ出しました。しかも河童は皮膚の下に余程厚い脂肪を持つてゐると見え、この地下の国の温度は比較的低いものにも関らず、（平均華氏五十度前後です。）着物と云ふものを知らずにゐるのです。勿論どの河童も目金をかけたり、巻煙草の箱を携へたり、金入れを持つたりはしてゐるのでせう。しかし河童はカンガルウのやうに腹に袋を持つてゐますから、それ等のものをしまふ時にも格別不便はしないのです。唯僕に可笑しかつたのは腰のまはりさへ蔽はないことです。僕は或時この習慣をなぜかとバツグに尋ねて見ました。するとバツグはのけぞつたまま、いつまでもげらげら笑つてゐました。おまけに「わたしはお前さんの隠してゐるのが可笑しい」と返事をしました。

四

僕はだんだん河童の使ふ日常の言葉を覚えて来ました。従つて河童の風俗や習慣ものみこめるやうになつて来ました。その中でも一番不思議だつたのは河童は我々人間の真面目に思ふことを可笑しがる、同時に我々人間の可笑しがることを真面目に思ふ——かう云ふとんちんかな習慣です。たとえば我々人間は正義とか人道とか云ふことを真面目に思ふ、しかし河童はそんなことを聞くと、腹をかかへて笑ひ出すのです。つまり彼等の滑稽と云ふ觀念は我々の滑稽と云ふ觀念と全然標準を異にしてゐるのでせう。僕は或時医者の子ヤツクと産児制限の話をしてゐました。すると子ヤツクは大口をあいて、鼻眼鏡の落ちるほど笑ひ出しました。僕は勿論腹が立ちましたから、何が可笑しいかと詰問しました。何でも子ヤツクの返答は大体かうだつたやうに覚えてゐます。尤も多少細かい所は間違つてゐるかも知れません。何しろまだその頃は僕も河童の使ふ言葉をすっかり理解してゐなかつたのですから。

「しかし両親の都合ばかり考へてゐるのは可笑的ですからね。どうも余り手前勝手ですからね。」

その代りに人間から見れば、實際又河童のお産位、可笑しいものではありません。現に僕

7、河童

は暫くたつてから、バツグの細君のお産をする所をバツグの小屋へ見物に行きました。河童もお産をする時には我々人間と同じことです。やはり医者や産婆などの助けを借りてお産をするのです。けれどもお産をするとなると、父親は電話でもかけるやうに母親の生殖器に口をつけ、「お前は这个世界へ生れて来るかどうか、よく考へた上で返事をしろ。」と大きな声で尋ねるのです。バツグもやはり膝をつきながら、何度も繰り返してかう言ひました。それからテエブルの上にあつた消毒用の水薬で嗽^{うが}ひをしました。すると細君の腹の中の子は多少気兼でもしてゐると見え、かう小声に返事をしました。

「僕は生れたくはありません。第一僕のお父さんの遺伝は精神病だけでも大へんです。その上僕は河童的存在を悪いと信じてゐますから。」

バツグはこの返事を聞いた時、てれたやうに頭を掻いてゐました。が、そこにゐ合せた産婆は忽ち細君の生殖器へ太い硝子の管を突きこみ、何か液体を注射しました。すると細君はほつとしたやうに太い息を洩らしました。同時に又今まで大きかつた腹は水素瓦斯を抜いた風船のやうにへたへたと縮んでしまひました。

かう云ふ返事をする位ですから、河童の子供は生れるが早いのか、勿論歩いたりしやべつたりするのです。何でもチャツクの話では出産後二十六日目に神の有無に就いて講演をした子供もあつたとか云ふことです。尤もその子供は二月目には死んでしまつたと云ふこと

ですが。

お産の話をした次手ですから、僕がこの国へ来た三月目に偶然或街の角で見かけた、大きいポスタアの話をしませう。その大きいポスタアの下には喇叭を吹いてゐる河童だの剣を持つてゐる河童だのが十二三匹描いてありました。それから又上には河童の使ふ、丁度時計のゼンマイに似た螺旋文字らせんもじが一面に並べてありました。この螺旋文字を翻訳すると、大体かう云ふ意味になるのです。これも或は細かい所は間違つてゐるかも知れません。が、兎に角僕としては僕と一しよに歩いてゐた、ラツプと云ふ河童の学生が大声に読み上げてくれる言葉を一々ノオトにとつて置いたのです。

遺伝的義勇隊を募る

健全なる男女の河童よ

悪遺伝を撲滅する為に

不健全なる男女の河童と結婚せよ

僕は勿論その時にもそんなことの行はれないことをラツプに話して聞かせました。するとラツプばかりではない、ポスタアの近所にゐた河童はこつこつ悉くげらげら笑ひ出しました。

7、河童

「行はれない？　だつてあなたの話ではあなたがたもやはり我々のやうに行つてゐると思ひますがね。あなたは令息が女中に惚れたり、令嬢が運転手に惚れたりするのは何の為だと思つてゐるのです？　あれは皆無意識的に悪遺伝を撲滅してゐるのですよ。第一この間あなたの話したあなたがた人間の義勇隊よりも、――一本の鉄道を奪ふ為に互に殺し合ふ義勇隊ですね、――ああ云ふ義勇隊に比べれば、ずつと僕たちの義勇隊は高尚ではないかと思ひますがね。」

ラツプは真面目にかう言ひながら、しかも太い腹だけは可笑しさうに絶えず浪立たせてゐました。が、僕は笑ふどころか、慌てて或河童を掴つかまへようと思いました。それは僕の油断を見すまし、その河童が僕の万年筆を盗んだことに気がついたからです。しかし皮膚の滑かな河童は容易に我々には掴まりません。その河童もぬらりと迂り抜けるが早いか一散に逃げ出してしまひました。丁度蚊のやうに瘦せた体を倒れるかと思ふ位のめらせながら。

五

僕はこのラツプと云ふ河童にバツグにも劣らぬ世話になりました。が、その中でも忘れられないのはトツクと云ふ河童に紹介されたことです。トツクは河童仲間の詩人です。詩人が髪を長くしてゐることは我々人間と変わりません。僕は時々トツクの家へ退屈し凌しのぎに遊

びに行きました。トツクはいつも狭い部屋に高山植物の鉢植ゑを並べ、詩を書いたり煙草をのんだり、如何にも気楽さうに暮らしてゐました。その又部屋の隅には雌の河童が一匹、（トツクは自由恋愛家ですから、細君と云ふものは持たないのです。）編み物か何かをしてゐました。トツクは僕の顔を見ると、いつも微笑してかう言ふのです。（尤も河童の微笑するのは余り好いものではありません。少くとも僕は最初のうちは寧ろ無気味に感じたものです。）

「やあ、よく来たね。まあ、その椅子にかけ給へ。」

トツクはよく河童の生活だの河童の芸術だの話をしました。トツクの信ずる所によれば、当り前の河童の生活位、莫迦^{こゝろ}げてゐるものはありません。親子夫婦兄弟などと云ふのは悉^{ことごと}く互に苦しめ合ふことを唯一の楽しみにして暮らしてゐるのです。殊に家族制度と云ふものは莫迦^{こゝろ}げてゐる以上にも莫迦^{こゝろ}げてゐるのです。トツクは或時窓の外を指さし、「見給へ。あの莫迦^{こゝろ}げさ加減を！」と吐き出すやうに言ひました。窓の外の往来にはまだ年の若い河童が一匹、両親らしい河童を始め、七八匹の雌雄の河童を頸のまはりへぶら下げながら、息も絶え絶えに歩いてゐました。しかし僕は年の若い河童の犠牲的精神に感心しましたから、反つてその健気さを褒め立てました。

「ふん、君はこの国でも市民になる資格を持つてゐる。……時に君は社会主義者かね？」

僕は勿論 *qua*（これは河童の使ふ言葉では「然り」と云ふ意味を現すのです。）と答へました。

「では百人の凡人の為に甘んじて一人の天才を犠牲にすることも顧みない筈だ。」

「では君は何主義者だ？　誰かトツク君の信条は無政府主義だと言つてゐたが、……」

「僕か？　僕は超人（直訳すれば超河童です。）だ。」

トツクは昂然と言ひ放ちました。かう云ふトツクは芸術の上にも独特な考へを持つてゐます。トツクの信ずる所によれば、芸術は何ものの支配をも受けない、芸術の為の芸術である、従つて芸術家たるものは何よりも先に善悪を絶した超人でなければならぬと云ふのです。尤もこれは必しもトツク一匹の意見ではありません。トツクの仲間の詩人たちは大抵同意見を持つてゐるやうです。現に僕はトツクと一しよに度たび超人倶楽部へ遊びに行きました。超人倶楽部に集まつて来るのは詩人、小説家、戯曲家、批評家、画家、音楽家、彫刻家、芸術上の素人等です。しかしいづれも超人です。彼等は電燈の明るいサロンにいつも快活に話し合つてゐました。のみならず時には得々と彼等の超人ぶりを示し合つてゐました。たとへば或彫刻家などは大きい鬼羊齒おにしかだの鉢植おにしかだの間に年の若い河童をつかまへながら、頻に男色を弄んでゐました。又或雌の小説家などはテエブルの上に立ち上つたなり、アブサントを六十本飲んで見せました。尤もこれは六十本目にテエブルの下へ転げ落ちる

が早い、忽ち往生してしまひましたが。

僕は或月の好い晩、詩人のトツクと肘を組んだまま、超人倶楽部から歸つて来ました。トツクはいつになく沈みこんで一ことも口を利かずにゐました。そのうちに僕等は火かげのさした、小さい窓の前を通りかかりました。その又窓の向うには夫婦らしい雌雄の河童が二匹、三匹の子供の河童と一しよに晚餐のテエブルに向つてゐるのです。するとトツクはため息をしながら、突然かう僕に話しかけました。

「僕は超人的戀愛家だと思つてゐるがね、ああ云ふ家庭の容子を見ると、やはり羨しさを感ずるんだよ。」

「しかしそれはどう考へても、矛盾してゐると思はないかね？」

けれどもトツクは月明りの下にぢつと腕を組んだまま、あの小さい窓の向うを、——平和な五匹の河童たちの晚餐のテエブルを見守つてゐました。それから暫くしてかう答へました。

「あすこにある王子焼は何と言つても、恋愛などよりも衛生的だからね。」

六

7、河童

實際又河童の戀愛は我々人間の戀愛とは余程趣を異にしてゐます。雌の河童はこれぞと云ふ雄の河童を見つけるが早いか、雄の河童を捉へるのに如何なる手段も顧みません。一番正直な雌の河童は遮二無二雄の河童を追ひかけるのです。現に僕は氣違ひのやうに雄の河童を追ひかけてゐる雌の河童を見かけました。いや、そればかりではありません。若い雌の河童は勿論、その河童の両親や兄弟まで一しよになつて追ひかけるのです。雄の河童こそ見じめです。何しろさんざん逃げまはつた揚句、運好くつかまらずにすんだとしても、二三箇月は床についてしまふのですから。僕は或時僕の家にとツクの詩集を読んでゐました。するとそこへ駈けこんで来たのはあのラツプと云ふ学生です。ラツプは僕の家へ転げこむと、床の上へ倒れたなり、息も切れ切れにかう言ふのです。

「大変だ！　とうとう僕は抱きつかれてしまつた！」

僕は咄嗟^{とつさ}に詩集を投げ出し、戸口の錠をおろしてしまひました。しかし鍵穴から覗いて見ると、硫黄の粉末を顔に塗つた、背の低い雌の河童が一匹、まだ戸口にうろついてゐるのです。

ラツプはその日から何週間か僕の床の上に寝てゐました。のみならずいつかラツプの嘴はすつかり腐つて落ちてしまひました。

尤も又時には雌の河童を一生懸命に追ひかける雄の河童もないわけではありません。し

かしそれもほんたうの所は追ひかけずにはゐられないやうに雌の河童が仕向けるのです。僕はやはり氣違ひのやうに雌の河童を追ひかけてゐる雄の河童も見かけました。雌の河童は逃げて行くうちにも、時々わざと立ち止まつて見たり、四つん這ひになつたりして見せるのです。おまけに丁度好い時分になると、さもがっかりしたやうに楽々とつかまつてしまふのです。僕の見かけた雄の河童は雌の河童を抱いたなり、暫くそこに転がつてゐました。が、やつと起き上つたのを見ると、失望と云ふか、後悔と云ふか、兎に角何とも形容出来ない、氣の毒な顔をしてゐました。しかしそれはまだ好いのです。これも僕の見かけた中に小さい雄の河童が一匹、雌の河童を追ひかけてゐました。雌の河童は例の通り、誘惑的遁走をしてゐるのです。するとそこへ向うの街から大きい雄の河童が一匹、鼻息を鳴らせて歩いて来ました。雌の河童は何かの拍子にふとこの河童を見ると、「大変です！助けて下さい！あの河童はわたしを殺さうとするのです！」と金切り声を出して叫びました。勿論大きい雄の河童は忽ち小さい河童をつかまへ、往來のまん中へねぢ伏せました。小さい河童は水掻きのある手に二三度空を掴んだなり、とうとう死んでしまひました。けれどももうその時には雌の河童はにやにやしなから、大きい河童の頸つ玉へしつかりしがみついてしまつてゐたのです。

僕の知つてゐた雄の河童は誰も皆言ひ合はせたやうに雌の河童に追ひかけられました。

7、河童

勿論妻子を持つてゐるバツグでもやはり追ひかけられたのです。のみならず二三度はつかまつたのです。唯マツグと云ふ哲学者だけは（これはあのトツクと云ふ詩人の隣にゐる河童です。）一度もつかまつたことはありません。これは一つにはマツグ位、醜い河童も少ない為でせう。しかし又一つにはマツグだけは余り往来へ顔を出さずに家にばかりゐる為です。僕はこのマツグの家へも時々話しに出かけました。マツグはいつも薄暗い部屋に七色の色硝子のランタアンをともし、脚の高い机に向ひながら、厚い本ばかり読んでゐるので、僕は或時かう云ふマツグと河童の恋愛を論じ合ひました。

「なぜ政府は雌の河童が雄の河童を追ひかけるのをもつと嚴重に取り締らないのです？」

「それは一つには官吏の中に雌の河童の少ない為ですよ。雌の河童は雄の河童よりも一層嫉妬心は強いものですからね。雌の河童の官吏さへ殖ゑれば、きつと今よりも雄の河童は追ひかけられずに暮せるでせう。しかしその効力も知れたものですね。なぜと言つて御覧なさい。官吏同志でも雌の河童は雄の河童を追ひかけますからね。」

「ぢやあなたのやうに暮してゐるのは一番幸福な訣ですね。」

するとマツグは椅子を離れ、僕の両手を握つたまま、ため息と一しよにかう言ひました。「あなたは我々河童ではありませんから、おわかりにならないのも尤もです。しかしわたしもどうかすると、あの恐ろしい雌の河童に追ひかけられたい氣も起るのですよ。」

七

僕は又詩人のトツクと度たび音楽会へも出かけました。が、未だに忘れられないのは三度目に聴きに行つた音楽会のことです。尤も会場の容子などは余り日本と變つてゐません。やはりだんだんせり上つた席に雌雄の河童が三四百匹、いづれもプログラムを手にしながら、一心に耳を澄ませてゐるのです。僕はこの三度目の音楽会の時にはトツクやトツクの雌の河童の外にも哲学者のマツグと一しよになり、一番前の席に坐つてゐました。するとセロの独奏が終つた後、妙に目の細い河童が一匹、無造作に譜本を抱へたまま、壇の上へ上つて来ました。この河童はプログラムの教へる通り、名高いクラバツクと云ふ作曲家です。プログラムの教へる通り、——いや、プログラムを見るまでもありません。クラバツクはトツクが属してゐる超人倶楽部の会員ですから、僕も亦顔だけは知つてゐるのです。

「Tried — Craback」 (この国のプログラムも大抵は独逸語^{ドイツ語}を並べてゐました。)

クラバツクは盛んな拍手の中にちよつと我々へ一礼した後、静にピアノの前へ歩み寄りました。それからやはり無造作に自作のリイドを弾きはじめました。クラバツクはトツクの言葉によれば、この国の生んだ音楽家中、前後に比類のない天才ださうです。僕はクラバツクの音楽は勿論、その又余技の抒情詩にも興味を持つてゐましたから、大きい弓なり

7、河童

のピアノの音に熱心に耳を傾けてゐました。トツクやマツグも恍惚^{うつとり}としてゐたことは或は僕よりも勝つてゐたでせう。が、あの美しい（少くとも河童たちの話によれば）雌の河童だけはしつかりプログラムを握つたなり、時々さも苛ら立たしきうに長い舌をべろべろ出してゐました。これはマツグの話によれば、何でも彼は十年前にクラバツクを掴まへそこなつたものですから、未だにこの音楽家を目の敵にしてゐるのだとか云ふことです。

クラバツクは全身に情熱をこめ、戦ふやうにピアノを弾きつづけました。すると突然会場の中に神鳴りのやうに響渡つたのは「演奏禁止」と云ふ声です。僕はこの声にびつくりし、思はず後をふり返りました。声の主は紛れもない、一番後の席にゐる身の丈抜群の巡查です。巡查は僕がふり向いた時、悠然と腰をおろしたまま、もう一度前よりもおほ声に「演奏禁止」と怒鳴りました。それから、――

それから先は大混乱です。「警官横暴!」「クラバツク、弾け!」
弾け!」「莫迦!」「畜生!」「ひつこめ!」「負けるな!」――
かう云ふ声の湧き上つた中に椅子は倒れる、プログラムは飛ぶ、おまけに誰が投げけるのか、サイダアの空鑊や石ころや噛ぢりかけの胡瓜さへ降つて来るのです。僕は呆つ氣にとられましたから、トツクにその理由を尋ねようと思いました。が、トツクも興奮したと見え、椅子の上に突つ立ちながら、「クラバツク、弾け!」と喚きつづけてゐます。のみならずトツクの雌の河童もいつの間に敵意を忘れ

たのか、「警官横暴」と叫んでゐることは少しもトツクに変わりません。僕はやむを得ずマツグに向かひ、「どうしたのです？」と尋ねて見ました。

「これですか？　これはこの国ではよくあることですよ。元来画だの文芸だのは……」

マツグは何か飛んで来る度にちよつと頸を締めながら、不相変靜に説明しました。「元来画だの文芸だのは誰の目にも何を表はしてゐるかは兎に角ちやんとわかる筈ですから、この国では決して発売禁止や展覽禁止は行はれません。その代りにあるのが演奏禁止です。何しろ音楽と云ふものだけはどんなに風俗を壊乱する曲でも、耳のない河童にはわかりませんからね。」

「しかしあの巡査は耳があるのですか？」

「さあ、それは疑問ですね。多分今の旋律を聞いてゐるうちに細君と一しよに寝てゐる時の心臓の鼓動でも思ひ出したのでせう。」

かう云ふ間にも大騒ぎは愈盛んになるばかりです。クラブックはピアノに向つたまま、傲然と我々をふり返つてゐました。が、いくら傲然としてゐても、いろいろのものの飛んで来るのはよけない訣に行きません。従つてつまり二三秒置きに折角の態度も變つた訣です。しかし兎に角大体としては大音楽家の威嚴を保ちながら、細い目を凄まじく赫かがやかせてゐました。僕は――僕も勿論危険を避ける為にトツクを小楯にとつてゐたものです。

7、河童

が、やはり好奇心に駆られ、熱心にマツグと話しつつづけました。「そんな検閲は乱暴ぢやありませんか？」

「何、どの国の検閲よりも却つて進歩してゐる位ですよ。たとへば日本を御覧なさい。現につひ一月ばかり前にも、……」

丁度かう言ひかけた途端です。マツグは生憎脳天に空鑢が落ちたものですから、quack（これは唯間投詞です）と一声叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまひました。

八

僕は硝子会社の社長のゲエルに不思議にも好意を持つてゐました。ゲエルは資本家中の資本家です。恐らくはこの国の河童の中でも、ゲエルほど大きい腹をした河童は一匹もゐなかつたのに違ひありません。

しかし荔枝れいしに似た細君や胡瓜に似た子供を左右にしながら、安樂椅子に坐つてゐる所は殆ど幸福そのものです。僕は時々裁判官のペツプや医者の子ヤツクにつれられてゲエル家の晚餐へ出かけました。又ゲエルの紹介状を持つてゲエルやゲエルの友人たちが多少の關係を持つてゐるいろいろの工場も見て歩きました。そのいろいろの工場の中でも殊に僕に面白かつたのは書籍製造会社の工場です。僕は年の若い河童の技師とこの工場の中へはいり、

水力電氣を動力にした、大きい機械を眺めた時、今更のやうに河童の国の機械工業の進歩に驚嘆しました。何でもそこでは一年間に七百万部の本を製造するさうです。が、僕を驚かしたのは本の部数ではありません。それだけの本を製造するのに少しも手数のかからないことです。何しろこの国では本を造るのに唯機械の漏斗形ろうとがたの口へ紙とインクと灰色をした粉末とを入れるだけなのですから。それ等の原料は機械の中へはいると、殆ど五分とたたないうちに菊版、四六版、菊半截版などの無数の本になつて出て来るのです。僕は瀑たきのやうに流れ落ちるいろいろの本を眺めながら、反り身になつた河童の技師にその灰色の粉末は何と云ふものかと尋ねて見ました。すると技師は黒光りに光つた機械の前に佇んだまま、つまらなさうにかう返事をしました。

「これですか？　これは驢馬の脳髓ですよ。ええ、一度乾燥させてから、ざつと粉末にただけのものです。時価は一噸とん二三錢ですがね。」

勿論かう云ふ工業上の奇蹟は書籍製造会社にばかり起つてゐる訣ではありません。絵画製造会社にも、音楽製造会社にも、同じやうに起つてゐるのです。實際又ゲエルの話によれば、この国では平均一箇月に七八百種の機械が新案され、何でもずんずん人手を待たずに大量生産が行はれるさうです。従つて又職工の解雇されるのも四五万匹を下らないさうです。その癖まだこの国では毎朝新聞を読んでゐても、一度も罷業と云ふ字に出会ひませ

7、河童

ん。僕はこれを妙に思ひましたから、或時又ペップやチャックとゲエル家の晚餐に招かれた機会にこのことをなぜかと尋ねて見ました。

「それはみんな食つてしまふのですよ。」

食後の葉巻を啣へたゲエルは如何にも無造作にかう言ひました。しかし「食つてしまふ」と云ふのは何のことだかわかりません。すると鼻眼金をかけたチャックは僕の不審を察したと見え、横あひから説明を加へてくれました。

「その職工をみんな殺してしまつて、肉を食料に使ふのです。ここにある新聞を御覧なさい。今月は丁度六万四千七百六十九匹の職工が解雇されましたから、それだけ肉の値段も下つた訣ですよ。」

「職工は黙つて殺されるのですか？」

「それは騒いでも仕かたはありません。職工屠殺法があるのですから。」

これは山桃の鉢植ゑを後に苦い顔をしてゐたペップの言葉です。僕は勿論不快を感じました。しかし主人公のゲエルは勿論、ペップやチャックもそんなことは当然と思つてゐるらしいのです。現にチャックは笑ひながら、嘲るやうに僕に話しかけました。

「つまり餓死したり自殺したりする手数を国家的に省略してやるのですね。ちよつと有毒瓦斯を嗅がせるだけですから、大した苦痛はありませんよ。」

「けれどもその肉を食ふと云ふのは、……………」

「常談を言つてはいけません。あのマツグに聞かせたら、さぞ大笑ひに笑ふでせう。あなたの国でも第四階級の娘たちは売笑婦になつてゐるではありませんか？　職工の肉を食ふことなどに憤慨したりするのは感傷主義ですよ。」

かう云ふ問答を聞いてゐたゲエルは手近いテエブルの上にあつたサンド・ウィッチの皿を勧めながら、恬然^{てんぜん}と僕にかう言ひました。

「どうです？　一つとりませんか？　これも職工の肉ですがね。」

僕は勿論辟易しました。いや、そればかりではありません。ペツプやチャツクの笑ひ声を後にゲエル家の客間を飛び出しました。それは丁度家々の空に星明りも見えない荒れ模様之夜です。僕はその闇の中を僕の住居へ帰りながら、のべつ幕なしに嘔吐^{へど}を吐きました。夜目にも白じらと流れる嘔吐を。

九

しかし硝子会社の社長のゲエルは人懐こい河童だつたのに違ひありません。僕は度たびゲエルと一しよにゲエルの属してゐる倶楽部へ行き、愉快に一晚を暮らしました。それは一つにはその倶楽部はトツクの属してゐる超人倶楽部よりも遙かに居心の善かつた為です。

7、河童

のみならず又ゲエルの話は哲学者のマグの話のやうに深みを持つてゐなかつたにせよ、僕には全然新らしい世界を、—— 広い世界を覗かせました。ゲエルは、いつもの純金の匙カッフェに珈琲の茶碗をかきまはしながら、快活にいろいろの話をしたものです。

何でも或霧の深い晩、僕は冬薔薇を盛つた花瓶を中にゲエルの話聞いてゐました。それは確か部屋全体は勿論、椅子やテエブルも白い上に細い金の縁をとつたセセツシヨン風の部屋だつたやうに覚えてゐます。

ゲエルはふだんよりも得意さうに顔中に微笑を漲みなぎらせたまま、丁度その頃天下を取つてゐた Quorax 党内閣のことなどを話しました。クオラックスと云ふ言葉は唯意味のない間投詞ですから、「おや」とでも訳す外はありません。が、兎に角何よりも先に「河童全体の利益」と云ふことを標榜してゐた政党だつたのです。

「クオラックス党を支配してゐるものは名高い政治家のロツペです。『正直は最良の外交である』とはビスマルクの言つた言葉でせう。しかしロツペは正直を内治の上にも及ぼしてゐるのです。……」

「けれどもロツペの演説は……」

「まあ、わたしの言ふことをお聞きなさい。あの演説は勿論悉く嘘です。が、嘘と云ふことは誰でも知つてゐますから、畢竟正直と変らないでせう、それを一概に嘘と云ふのはあ

なたがただけの偏見ですよ。我々河童はあなたがたのやうに、……しかしそれはどうでもよろしい。わたしの話したいのはロツペのことです。ロツペはクオラツクス党を支配してゐる、その又ロツペを支配してゐるものは Pou-Fou 新聞の（この『プウ・フウ』と云ふ言葉もやはり意味のない間投詞です。若し強いて訳すれば、『ああ』とでも云ふ外はありません。）社長のクイクイです。が、クイクイも彼自身の主人と云ふ訣には行きません。クイクイを支配してゐるものはあなたの前にゐるゲエルです。」

「けれども——これは失礼かも知れませんが、プウ・フウ新聞は労働者の味かたをする新聞でせう。その社長のクイクイもあなたの支配を受けてゐると云ふのは、……」

「プウ・フウ新聞の記者たちは勿論労働者の味かたです。しかし記者たちを支配するものはクイクイの外はありますまい。しかもクイクイはこのゲエルの後援を受けずにはゐられないのです。」

ゲエルは不相変微笑しながら、純金の匙をおもちやにしてゐます。僕はかう云ふゲエルを見ると、ゲエル自身を憎むよりも、プウ・フウ新聞の記者たちに同情の起るのを感じました。するとゲエルは僕の無言に忽ちこの同情を感じたと見え、大きい腹を膨ませてかう言ふのです。

「何、プウ・フウ新聞の記者たちも全部労働者の味かたではありませんよ。少くとも我々河

7、河童

童と云ふものは誰の味かたをするよりも先に我々自身の味かたをしますからね。……しかし更に厄介なことにはこのゲエル自身さへやはり他人の支配を受けてゐるのです。あなたはそれを誰だと思ひますか？　それはわたしの妻ですよ。美しいゲエル夫人ですよ。」

ゲエルはおほ声に笑ひました。

「それは寧ろ仕合せでせう。」

「兎に角わたしは満足してゐます。しかしこれもあなたの前だけに、——河童でないあなたの前だけに手放して吹聴出来るのです。」

「するとつまりクオラツクス内閣はゲエル夫人が支配してゐるのですね。」

「さあ、さうも言はれますかね。……しかし七年前の戦争などは確かに或雌の河童の為に始まつたものに違ひありません。」

「戦争？　この国にも戦争はあつたのですか？」

「ありましたとも。将来もいつあるかわかりません。何しろ隣国のある限りは、……」

僕は實際この時始めて河童の国も国家的に孤立してゐないことを知りました。ゲエルの説明する所によれば、河童はいつもかはうそ鰻を仮設敵にしてゐると云ふことです。しかも鰻は河童に負けない軍備を具へてゐると云ふことです。僕はこの鰻を相手に河童の戦争した話に少からず興味を感じました。

（何しろ河童の強敵に獺のゐるなどと云ふことは「水虎考略」の著者は勿論、「山島民譚集」の著者柳田国男さんさへ知らずにゐたらしい新事実ですから。）

「あの戦争の起る前には勿論両国とも油断せずにちつと相手を窺つてゐました。と云ふのはどちらも同じやうに相手を恐怖してゐたからです。そこへこの国にゐた獺が一匹、或河童の夫婦を訪問しました。その又雌の河童と云ふのは亭主を殺すつもりでゐたのです。何しろ亭主は道楽者でしたからね。おまけに生命保険のついてゐたことも多少の誘惑になつたかも知れません。」

「あなたはその夫婦を御存じですか？」

「ええ、—— いや、雄の河童だけは知つてゐます。わたしの妻などはこの河童を悪人のやうに言つてゐますがね。しかしわたしに言はせれば、悪人よりも寧ろ雌の河童に掴まることを恐れてゐる被害妄想の多い狂人です。…… そこでその雌の河童は亭主のココアの茶碗の中へ青化加里を入れて置いたのです。それを又どう間違へたか、客の獺に飲ませてしまつたのです。獺は勿論死んでしまひました。それから……」

「それから戦争になつたのですか？」

「ええ、生憎その獺は勲章を持つてゐたものですからね。」

「戦争はどちらの勝になつたのですか？」

7、河童

「勿論この国の勝になつたのです。三十六万九千五百匹の河童たちはその為に健気にも戦死しました。しかし敵国に比べれば、その位の損害は何ともありません。この国にある毛皮と云ふ毛皮は大抵獺の毛皮です。わたしもあの戦争の時には硝子を製造する外にも石炭殻を戦地へ送りました。」

「石炭殻を何にするのですか？」

「勿論食糧にするのです。我々河童は腹さへ減れば、何でも食ふにきまつてゐますからね。」

「それは——どうか怒らずに下さい。それは戦地にゐる河童たちには……我々の国では醜聞ですがね。」

「この国でも醜聞には違ひありません。しかしわたし自身かう言つてゐれば、誰も醜聞にはしないものです。哲学者のマツグも言つてゐるでせう。『汝の悪は汝自ら言へ。悪はおのづから消滅すべし。』……しかもわたしは利益の外にも愛国心に燃え立つてゐたのですからね。」

丁度そこへはいつて来たのはこの倶楽部の給仕です。給仕はゲエルにお時宜をした後、朗読でもするやうにかう言ひました。

「お宅のお隣に火事がございます。」

「火——火事！」

ゲエルは驚いて立ち上りました。僕も立ち上つたのは勿論です。が、給仕は落ち着き払つて次の言葉をつけ加へました。

「しかしもう消し止めました。」

ゲエルは給仕を見送りながら、泣き笑ひに近い表情をしました。僕はかう云ふ顔を見ると、いつかこの硝子会社の社長を憎んでゐたことに気づきました。が、ゲエルはもう今では大資本家でも何でもない唯の河童になつて立つてゐるのです。僕は花瓶の中の冬薔薇の花を抜き、ゲエルの手へ渡しました。

「しかし火事は消えた」と云つても、奥さんはさぞお驚きでせう。さあ、これを持つてお帰りなさい。」

「難有う。」

ゲエルは僕の手を握りました。それから急ににやりと笑ひ、小声にかう僕に話しかけました。

「隣はわたしの家作ですからね。火災保険の金だけはとれるのですよ。」

僕はこの時のゲエルの微笑を——軽蔑することも出来なければ、憎悪することも出来ないゲエルの微笑を未だにありありと覚えてゐます。

十

「どうしたね？　けふは又妙にふさいでゐるぢやないか？」

その火事のあつた翌日です。僕は巻煙草を啣へながら、僕の客間の椅子に腰をおろした学生のラップにかう言ひました。實際又ラップは右の脚の上へ左の脚をのせたまま、腐つた嘴も見えないほど、ぼんやり床の上ばかり見てゐたのです。

「ラップ君、どうしたね」と言へば、

「いや、何、つまらないことなのですよ。――」

ラップはやつと頭を挙げ、悲しい鼻声を出しました。「僕はけふ窓の外を見ながら、『おや虫取り堇が咲いた』と何気なしに呟いたのです。すると僕の妹は急に顔色を変へたと思ふと、『どうせわたしは虫取り堇よ』と当り散らすぢやありませんか？　おまけに又僕のおふくろも大の妹蠱屑ですから、やはり僕に食つてかかるのです。」

「虫取り堇が咲いたと云ふことはどうして妹さんには不快なのだね？」

「さあ、多分雄の河童を掴まへると云ふ意味にでもとつたのでせう。そこへおふくろと仲悪い叔母も喧嘩の仲間入りをしたのですから、愈大騒動になつてしまひました。しかも年中酔つ払つてゐるおやぢはこの喧嘩を聞きつけると、誰彼の差別なしに殴り出したのです。」

それだけでも始末のつかない所へ僕の弟はその間におふくろの財布を盗むが早い、キネマか何かを見に行つてしまひました。僕は…… ほんたうに僕はもう、……」

ラツプは両手に顔を埋め、何も言はずに泣いてしまひました。僕の同情したのは勿論です。同時に又家族制度に対する詩人のトツクの軽蔑を思ひ出したのも勿論です。僕はラツプの肩を叩き、一生懸命に慰めました。

「そんなことはどこでもあり勝ちだよ。まあ勇気を出し給へ。」

「しかし…… しかし嘴でも腐つてゐなければ、……」

「それはあきらめる外はないさ。さあ、トツク君の家へでも行かう。」

「トツクさんは僕を軽蔑してゐます。僕はトツクさんのやうに大胆に家族を捨てる事が出来ませんから。」

「ぢやクラバツク君の家へ行かう。」

僕はあの音楽会以来、クラバツクとも友だちになつてゐましたから、兎に角この大音楽家の家へラツプをつれ出すことにしました。クラバツクはトツクに比べれば、遙かに贅沢に暮らしてゐます。と云ふのは資本家のゲエルのやうに暮らしてゐると云ふ意味ではありません。唯いろいろの骨董を、—— タナグラの人形やペルシアの陶器を部屋一ぱいに並べた中にトルコ風の長椅子を据ゑ、クラバツク自身の肖像画の下にいつも子供たちと遊ん

7、河童

でゐるのです。

が、けふはどうしたのか両腕を胸へ組んだまま、苦い顔をして坐つてゐました。のみならずその又足もとには紙屑が一面に散らばつてゐました。ラップも詩人のトツクと一しよに度たびクラバツクには会つてゐる筈です。しかしこの容子に恐れたと見え、けふは丁寧にお辞宜をしたなり、黙つて部屋の隅に腰をおろしました。

「どうしたね？　クラバツク君。」

僕は殆ど^{ほとんど}挨拶の代りにかう大音楽家へ問かけました。

「どうするものか？　批評家の阿呆め！　僕の抒情詩はトツクの抒情詩と比べものにならないと言やがるんだ。」

「しかし君は音楽家だし、……」

「それだけならば我慢も出来る。僕はロツクに比べれば、音楽家の名に値しないとやがるぢやないか？」

ロツクと云ふのはクラバツクと度たび比べられる音楽家です。が、生憎超人倶楽部の会員になつてゐない関係上、僕は一度も話したことはありません。尤も嘴の反り上つた、一癖あるらしい顔だけは度たび写真でも見かけてゐました。

「ロツクも天才には違ひない。しかしロツクの音楽は君の音楽に溢れてゐる近代的情熱を

持つてゐない。」

「君はほんたうにさう思ふか？」

「さう思ふとも。」

するとクラバツクは立ち上るが早いか、タナグラの人形をひつ掴み、いきなり床の上に叩きつけました。ラツプは余程驚いたと見え、何か声を挙げて逃げようと思いました。が、クラバツクはラツプや僕にちよつと「驚くな」と云ふ手真似をした上、今度は冷やかにかう言ふのです。

「それは君も亦俗人のやうに耳を持つてゐないからだ。僕はロツクを恐れてゐる。……」

「君が？　謙遜家を氣どるのはやめ給へ。」

「誰が謙遜家を氣どるものか？　第一君たちに氣どつて見せる位ならば、批評家たちの前に氣どつて見せてゐる。僕は——クラバツクは天才だ。その点ではロツクを恐れてゐない。」

「では何を恐れてゐるのだ？」

「何か正体の知れないものを、——言はばロツクを支配してゐる星を。」

「どうも僕には腑に落ちないがね。」

「ではかう言へばわかるだらう。ロツクは僕の影響を受けない。が、僕はいつの間にかロ

7、河童

ツクの影響を受けてしまふのだ。」

「それは君の感受性の……。」

「まあ、聞き給へ。感受性などの問題ではない。ロックはいつも安んじてあいつだけに来る仕事をしてゐる。しかし僕は苛ら々々するのだ。それはロックの目から見れば、或は一步の差かも知れない。けれども僕には十哩^{マイル}も違ふのだ。」

「しかし先生の英雄曲は……。」

クラバツクは細い目を一層細め、忌々しさうにラップを睨みつけました。

「黙り給へ。君などに何がわかる？　僕はロックを知つてゐるのだ。ロックに平身低頭する犬どもよりもロックを知つてゐるのだ。」

「まあ少し静かにし給へ。」

「若し静かにしてゐられるならば、……　僕はいつもかう思つてゐる。――　僕等の知らない何ものかは僕を、――　クラバツクを嘲る為にロックを僕の前に立たせたのだ。哲学者のマツグはかう云ふことを何も彼も承知してゐる。いつもあの色硝子のランタアンの下に古ぼけた本ばかり読んでゐる癖に。」

「どうして？」

「この近頃マツグの書いた『阿呆の言葉』と云ふ本を見給へ。――　」

クラブツクは僕に一冊の本を渡す——と云ふよりも投げつけました。それから又腕を組んだまま、突けんどんにかう言ひ放ちました。

「ぢやけふは失敬しよう。」

僕は悄気返つたラップと一しよにもう一度往来へ出ることにしました。人通りの多い往来は不相変毛生櫨の並み木のかげにいろいろの店を並べてゐます。僕等は何と云ふこともなしに黙つて歩いて行きました。するとそこへ通りかかつたのは髪の長い詩人のトツクです。トツクは僕等の顔を見ると、腹の袋から半巾を出し、何度も額を拭ひました。

「やあ、暫らく会はなかつたね。僕はけふは久しぶりにクラブツクを尋ねようと思ふのだが、……」

僕はこの芸術家たちを喧嘩させては悪いと思ひ、クラブツクの如何にも不機嫌だつたことを婉曲にトツクに話しました。

「さうか。ぢややめにしよう。何しろクラブツクは神経衰弱だからね。……僕もこの二三週間は眠られないのに弱つてゐるのだ。」

「どうだね、僕等と一しよに散歩をしては？」

「いや、けふはやめにしよう。おや！」

トツクはかう叫ぶが早い、しつかり僕の腕を掴みました。しかもいつか体中に冷や汗

を流してゐるのです。

「どうしたのだ？」

「どうしたのです？」

「何、あの自動車の窓の中から緑いろの猿が一匹首を出したやうに見えたのだよ。」

僕は多少心配になり、兎に角あの医者 of チヤツクに診察して貰ふやうに勧めました。しかしトツクは何と言つても、承知する気色さへ見せません。のみならず何か疑はしきうに僕等の顔を見比べながら、こんなことさへ言ひ出すのです。

「僕は決して無政府主義者ではないよ。それだけはきつと忘れずにゐてくれ給へ。——ではさやうなら。チヤツクなどは真平御免だ。」

僕等はぼんやり佇んだまま、トツクの後ろ姿を見送つてゐました。僕等は——いや、「僕等は」ではありません。学生のラツプはいつの間にか往来のまん中に脚をひろげ、しつかりない自動車や人通りを股目に覗いてゐるのです。僕はこの河童も発狂したかと思ひ、驚いてラツプを引き起しました。

「常談ぢやない。何をしてゐる？」

しかしラツプは目をこすりながら、意外にも落ち着いて返事をしました。

「いえ、余り憂鬱ですから、逆さに世の中を眺めて見たのです。けれどもやはり同じこと

ですね。」

十一

これは哲学者のマツグの書いた「阿呆の言葉」の中の何章かです。

*

阿呆はいつも彼以外のものを阿呆であると信じてゐる。

*

我々の自然を愛するのは自然は我々を憎んだり嫉妬したりしない為もないことはない。

*

最も賢い生活は一時代の習慣を軽蔑しながら、しかもその又習慣を少しも破らないやうに暮らすことである。

*

我々の最も誇りたいものは我々の持つてゐないものだけである。

*

何びとも偶像を破壊することに異存を持つてゐるものはない。同時に又何びとも偶像になることに異存を持つてゐるものはない。しかし偶像の台座の上に安んじて坐つてゐられる

7、河童

ものは最も神々に恵まれたもの、——阿呆か、悪人か、英雄かである。

（クラバツクはこの章の上へ爪の痕をつけてゐました。）

*

我々の生活に必要な思想は三千年前に尽きたかも知れない。我々は唯古い薪に新らしい炎を加へるだけであらう。

*

我々の特色は我々自身の意識を超越するのを常としてゐる。

*

幸福は苦痛を伴ひ、平和は倦怠を伴ふとすれば、——？

*

自己を弁護することは他人を弁護することよりも困難である。疑ふものは弁護士を見よ。

*

矜誇、愛慾、疑惑——あらゆる罪は三千年來、この三者から発してゐる。同時に又恐らくはあらゆる徳も。

*

物質的欲望を減ずることは必しも平和を齎《もたら》さない。我々は平和を得る為には精

神的欲望も減じなければならぬ。

（クラバツクはこの章の上にも爪の痕を残してゐました。）

*

我々は人間よりも不幸である。人間は河童ほど進化してゐない。

（僕はこの章を読んだ時思はず笑つてしまひました。）

*

成すことは成し得ることであり、成し得ることは成すことである。畢竟我々の生活はかう云ふ循環論法を脱することは出来ない。——即ち不合理に終始してゐる。

*

ボオドレエルは白痴になつた後、彼の人生觀をたつた一語に、——女陰の一語に表白した。しかし彼自身を語るものは必しもかう言つたことではない。寧ろ彼の天才に、——彼の生活を維持するに足る詩的天才に信頼した為に胃袋の一語を忘れたことである。

（この章にもやはりクラバツクの爪の痕は残つてゐました。）

*

若し理性に終始するとすれば、我々は当然我々自身の存在を否定しなければならぬ。理性を神にしたヴオルテエルの幸福に一生を了つたのは即ち人間の河童よりも進化してゐない

ことを示すものである。

十二

或割り合に寒い午後です。僕は「阿呆の言葉」も読み飽きましたから、哲学者のマツグを尋ねに出かけました。すると或寂しい町の角に蚊のやうに痩せた河童が一匹、ぼんやり壁によりかかつてゐました。しかもそれは紛れもない、いつか僕の万年筆を盗んで行つた河童なのです。僕はしめたと思ひましたから、丁度そこへ通りかかった、逞しい巡査を呼びとめました。

「ちよつとあの河童を取り調べて下さい。あの河童は丁度一月ばかり前にわたしの万年筆を盗んだのですから。」

巡査は右手の棒をあげ、（この国の巡査は劍の代りに水松いちみの棒を持つてゐるのです。）「おい、君」とその河童へ声をかけました。僕は或はその河童は逃げ出しはしないかと思つてゐました。が、存外落ち着き払つて巡査の前へ歩み寄りました。のみならず腕を組んだまま、如何にも傲然と僕の顔や巡査の顔をじろじろ見てゐるのです。しかし巡査は怒りもせず、腹の袋から手帳を出して早速尋問にとりかかりました。

7、河童

「お前の名は？」

「グルツク。」

「職業は？」

「つひ二三日前までは郵便配達夫をしてゐました。」

「よろしい。そこでこの人の申し立てによれば、君はこの人の万年筆を盗んで行つたと云ふことだね。」

「ええ、一月ばかり前に盗みました。」

「何の為に？」

「子供の玩具にしようと思つたのです。」

「その子供は？」

「巡査は始めて相手の河童へ鋭い目を注ぎました。」

「一週間前に死んでしまひました。」

「死亡証明書を持つてゐるかね？」

「痩せた河童は腹の袋から一枚の紙をとり出しました。巡査はその紙へ目を通すと、急にやにや笑ひながら、相手の肩を叩きました。」

「よろしい。どうも御苦労だつたね。」

「僕は呆氣にとられたまま、巡査の顔を眺めてゐました。しかもそのうちに痩せた河童は

7、河童

何かぶつぶつ呟きながら、僕等を後ろにして行つてしまふのです。僕はやつと氣をとり直し、かう巡査に尋ねて見ました。

「どうしてあの河童を掴まへないのです？」

「あの河童は無罪ですよ。」

「しかし僕の万年筆を盗んだのは……」

「子供の玩具にする為だつたのでせう。けれどもその子供は死んでゐるのです。若し何か御不審だつたら、刑法千二百八十五条をお調べなさい。」

巡査はかう言ひすてたなり、さつさとどこかへ行つてしまひました。僕は仕かたがありませんから、「刑法千二百八十五条」を口の中に繰り返し、マツグの家へ急いで行きました。哲学者のマツグは客好きです。現にけふも薄暗い部屋には裁判官のペツプや医者の子ヤツクや硝子会社の社長のゲエルなどが集り、七色の色硝子のランタアンの下に煙草の煙を立ち昇らせてゐました。そこに裁判官のペツプが来てゐたのは何よりも僕には好都合です。僕は椅子にかけるが早いのか、刑法第千二百八十五条を検べる代りに早速ペツプへ問ひかけました。

「ペツプ君、甚だ失礼ですが、この国では罪人を罰しないのですか？」

ペツプは金口の煙草の煙をまづ悠々と吹き上げてから、如何にもつまらなさうに返事を

しました。「罰しますとも。死刑さへ行はれる位ですからね。」

「しかし僕は一月ばかり前に、……」

僕は委細を話した後、例の刑法千二百八十五条のことを尋ねて見ました。

「ふむ、それはかう云ふのです。——『如何なる犯罪を行ひたりと雖も、該犯罪を行はしめたる事情の消失したる後は該犯罪者を処罰することを得ず』つまりあなたの場合で言へば、その河童は嘗ては親だつたのですが、今はもう親ではありませんから、犯罪も自然と消滅するのです。」

「それはどうも不合理ですね。」

「常談を言つてはいけません。親だつた河童も親である、河童も同一に見るのこそ不合理です。さうさう、日本の法律では同一に見ることになつてゐるのですね。それはどうも我々には滑稽です。ふふふふふ、ふふふふふ。」

ペツプは巻煙草を抛り出しながら、氣のない薄笑ひを洩らしてゐました。そこへ口を出したのは法律には縁の遠いチャツクです。チャツクはちよつと鼻眼金を直し、かう僕に質問しました。

「日本にも死刑がありますか？」

「ありますとも。日本では絞罪です。」

7、河童

僕は冷然と構えこんだペップに多少反感を感じてゐましたから、この機会に皮肉を浴せてやりました。

「この国の死刑は日本よりも文明的に出来てゐるでせうね？」

「それは勿論文明的です。」

ペップはやはり落ち着いてゐました。

「この国では絞罪などは用ひません。稀には電氣を用ひることもあります。しかし大抵は電氣も用ひません。唯その犯罪の名を言つて聞かせるだけです。」

「それだけで河童は死ぬのですか？」

「死にますとも。我々河童の神経作用はあなたがたのよりも微妙ですからね。」

「それは死刑ばかりではありません。殺人にもその手を使ふのがあります。――」

社長のゲエルは色硝子の光に顔中紫に染りながら、人懐っこい笑顔をして見せました。

「わたしはこの間も或社会主義者に『貴様は盗人だ』と言はれた為に心臓麻痺を起しかかつたものです。」

「それは案外多いやうですね。わたしの知つてゐた或弁護士などはやはりその為に死んでしまつたのですからね。」

僕はかう口を入れた河童、――哲学者のマツグをふりかへりました。マツグはやはりい

つものやうに皮肉な微笑を浮かべたまま、誰の顔も見ずにしやべつてゐるのです。

「その河童は誰かに蛙だと言はれ、—— 勿論あなたも御承知でせう、この国で蛙だと言はれるのは人非人と云ふ意味になること位は。—— 己は蛙かな？　蛙ではないかな？　と毎日考へてゐるうちにとうとう死んでしまつたものです。」

「それはつまり自殺ですね。」

「尤もその河童を蛙だと言つたやつは殺すつもりで言つたのですがね。あなたがたの目から見れば、やはりそれも自殺と云ふ……」

丁度マツグがかう云つた時です。突然その部屋の壁の向うに、—— 確かに詩人のトツクの家鋭いピストルの音が一発、空気を反ね返へすやうに響き渡りました。

僕等はトツクの家へ駆けつけました。トツクは右の手にピストルを握り、頭の皿から血を出したまま、高山植物の鉢植ゑの中に仰向けになつて倒れてゐました。その又側には雌の河童が一匹、トツクの胸に顔を埋め、大声を挙げて泣いてゐました。僕は雌の河童を抱き起しながら、（二体僕はぬらぬらする河童の皮膚に手を触れることを余り好んではゐないので。）「どうしたのです？」と尋ねました。

「どうしたのだから、わかりません。唯何か書いてゐたと思ふと、いきなりピストルで頭を打つたのです。ああ、わたしはどうしませう？」

qur-r-r-r-r, qur-r-r-r-r」

（これは河童の泣き声です。）

「何しろトツク君は我儘だつたからね。」

硝子会社の社長のゲエルは悲しさうに頭を振りながら、裁判官のペツプにかう言ひました。しかしペツプは何も言はずに金口の巻煙草に火をつけてゐました。すると今まで跪いて、トツクの創口《きずぐち》などを調べてゐたチャツクは如何にも医者らしい態度をしたまま、僕等五人に宣言しました。（実は一人と四匹とです。）

「もう駄目です。トツク君は元来胃病でしたから、それだけでも憂鬱になり易かつたので

す。」

「何か書いてゐたと云ふことですが。」

哲学者のマツグは弁解するやうにかう独り語を洩らしながら、机の上の紙をとり上げました。僕等は皆頸をのぼし、（尤も僕だけは例外です。）幅の広いマツグの肩越しに一枚の紙を覗きこみました。

「いざ、立ちて行かん。娑婆界を隔つる谷へ。

岩むらはこごしく、やま水は清く、

薬草の花はにほへる谷へ。」

マツグは僕等をふり返りながら、微笑と一しよにかう言ひました。

「これはゲエテの『ミニヨンの歌』の剽窃へうせつですよ。するとトツク君の自殺したのは詩人としても疲れてゐたのですね。」

そこへ偶然自動車を乗りつけたのはあの音楽家のクラブバックです。クラブバックはかう云ふ光景を見ると、暫く戸口に佇んでゐました。が、僕等の前へ歩み寄ると、怒鳴りつけるやうにマツグに話かけました。

7、河童

「それはトツクの遺言状ですか？」

「いや、最後に書いてゐた詩です。」

「詩？」

やはり少しも騒がないマツグは髪を逆立てたクラバツクにトツクの詩稿を渡しました。クラバツクはあたりには目もやらずに熱心にその詩稿を読み出しました。しかもマツグの言葉には殆ど返事さへしないのです。

「あなたはトツク君の死をどう思ひますか？」

「いざ、立ちて、…… 僕も亦いつ死ぬかわかりません。…… 娑婆界を隔つる谷へ。……」

「しかしあなたはトツク君とはやはり親友の一人だつたのでせう？」

「親友？ トツクはいつも孤独だつたのです。…… 娑婆界を隔つる谷へ、…… 唯ト

ツクは不幸にも、…… 岩むらはこごしく……」

「不幸にも？」

「やま水は清く、…… あなたがたは幸福です。…… 岩むらはこごしく。……」

僕は未だに泣き声を絶たない雌の河童に同情しましたから、そつと肩を抱へるやうにし、部屋の隅の長椅子へつれて行きました。そこには二歳か三歳かの河童が一匹、何も知らず

に笑つてゐるのです。僕は雌の河童の代りに子供の河童をあやしてやりました。するといつか僕の目にも涙のたまるのを感じました。僕が河童の国に住んでゐるうちに涙と云ふものをこぼしたのは前にも後にもこの時だけです。

「しかしかう云ふ我儘な河童と一しよになつた家族は氣の毒ですね。」

「何しろあとのことも考へないのですから。」

裁判官のペツプは不相変、新しい巻煙草に火をつけながら、資本家のゲエルに返事をしてゐました。すると僕等を驚かせたのは音楽家のクラバツクのおほ声です。クラバツクは詩稿を握つたまま、誰にともしに呼びかけました。

「しめた！　すばらしい葬送曲が出来るぞ。」

クラバツクは細い目を赫やかせたまま、ちよつとマツグの手を握ると、いきなり戸口へ飛んで行きました。

勿論もうこの時には隣近所の河童が大勢、トツクの家の戸口に集まり、珍らしさうに家中を覗いてゐるのです。しかしクラバツクはこの河童たちを遮二無二左右へ押しつけるが早いか、ひらりと自動車へ飛び乗りました。同時に又自動車は爆音を立てて忽ちどこかへ行つてしまひました。

「こら、こら、さう覗いてはいかん。」

7、河童

裁判官のペツプは巡査の代りに大勢の河童を押し出した後、トツクの家の戸をしめてしまひました。部屋の中はそのせみか急にひつそりなつたものです。僕等はかう云ふ静かさの中に――高山植物の花の香に交つたトツクの血の匂の中に後始末のことなどを相談しました。しかしあの哲学者のマツグだけはトツクの死骸を眺めたまま、ぼんやり何か考へてゐます。僕はマツグの肩を叩き、「何を考へてゐるのです？」と尋ねました。

「河童の生活と云ふものをね。」

「河童の生活がどうなのですか？」

「我々河童は何と云つても、河童の生活を完うする為には、……」

マツグは多少羞^{はづか}しさうにかう小声でつけ加へました。

「兎に角我々河童以外の何ものかの力を信ずることですね。」

十四

僕に宗教と云ふものを思ひ出させたのはかう云ふマツグの言葉です。僕は勿論物質主義者ですから、真面目に宗教を考へたことは一度もなかつたのに違ひありません。

が、この時はトツクの死に或感動を受けてゐた為に一体河童の宗教は何であるかと考へ出したのです。

僕は早速学生のラツプにこの問題を尋ねて見ました。

「それは基督教、仏教、モハメット教、拝火教なども行はれてゐます。まづ一番勢力のあるものは何と言つても近代教でせう。生活教とも言ひますがね。」

（「生活教」と云ふ訳語は当つてゐないかも知れません。この原語は Quemoocha です。cha は英吉利語の ism と云ふ意味に当るでせう。quenoo の原形 quenal の訳は単に「生きる」と云ふよりも「飯を食つたり、酒を飲んだり、交合を行つたり」する意味です。）

「ぢやこの国にも教会だの寺院だのはある訣なのだね？」

「常談を言つてはいけません。近代教の大寺院などはこの国第一の大建築ですよ。どうです、ちよつと見物に行つては？」

或生温い曇天の午後、ラツプは得々と僕と一しよにこの大寺院へ出かけました。

成程それはニコライ堂の十倍もある大建築です。

のみならずあらゆる建築様式を一つに組み上げた大建築です。僕はこの大寺院の前に立ち、高い塔や円屋根を眺めた時、何か無気味にさへ感じました。

実際それ等は天に向つて伸びた無数の触手のやうに見えたものです。

僕等は玄関の前に佇んだまま、（その又玄関に比べて見ても、どの位僕等は小さかつたでせう！）暫らくこの建築よりも寧ろ途方もない怪物に近い稀代の大寺院を見上げてゐました。

7、河童

大寺院の内部も亦広大です。そのコリント風の円柱の立つた中には参詣人が何人も歩いてゐました。

しかしそれ等は僕等のやうに非常に小さく見えたものです。

そのうちに僕等は腰の曲つた一匹の河童に出合ひました。するとラツプはこの河童にちよつと頭を下げた上、丁寧にかう話しかけました。

「長老、御達者なのは何よりもです。」

相手の河童もお時宜をした後、やはり丁寧に返事をしました。

「これはラツプさんですか？　あなたも不相変、——（と言ひかけながら、ちよつと言葉をつがなかつたのはラツプの嘴の腐つてゐるのにやつと気がついた為だつたでせう。）

—— ああ、兎に角御丈夫らしいやうですね。が、けふはどうして又……」

「けふはこの方のお伴をして来たのです。この方は多分御承知の通り、——」

それからラツプは滔々と僕のことを話しました。どうも又それはこの大寺院へラツプが滅多に來ないことの弁解にもなつてゐたらしいのです。

「就いてはどうかこの方の御案内を願ひたいと思ふのですが。」

長老は大様に微笑しながら、まづ僕に挨拶をし、静かに正面の祭壇を指さしました。

「御案内と申しても、何も御役に立つことは出来ません。我々信徒の礼拝するのは正面の

祭壇にある『生命の樹』です。『生命の樹』には御覽の通り、金と緑との果がなつてゐます。あの金の果を『善の果』と云ひ、あの緑の果を『惡の果』と云ひます。……」

僕はかう云ふ説明のうちにもう退屈を感じ出しました。

それは折角の長老の言葉も古い比喻のやうに聞えたからです。

僕は勿論熱心に聞いてゐる容子を装つてゐました。

が、時々は大寺院の内部へそつと目をやるのを忘れずにゐました。

コリント風の柱、ゴシック風の穹窿きゆうりゆう、アラビアじみた市松模様の床、セセツシヨン紛ひの祈祷机、——かう云ふものの作つてゐる調和は妙に野蠻な美を具へてゐました。

しかし僕の目を惹いたのは何よりも両側の龕がんの中にある大理石の半身像です。

僕は何かそれ等の像を見知つてゐるやうに思ひました。それも亦不思議ではありません。

あの腰の曲つた河童は「生命の樹」の説明を了ると、今度は僕やラツプと一しよに右側の龕の前へ歩み寄り、その龕の中の半身像にかう云ふ説明を加へ出しました。

「これは我々の聖徒の一人、——あらゆるものに反逆した聖徒ストリントベリーです。

この聖徒はさんざん苦しんだ揚句、スウエデンボルグの哲学の為に救はれたやうに言はれてゐます。

が、実は救はれなかつたのです。この聖徒は唯我々のやうに生活教を信じてゐました。

7、河童

——と云ふよりも信じる外はなかつたのでせう。

この聖徒の我々に残した『伝説』と云ふ本を読んで御覧なさい。

この聖徒も自殺未遂者だつたことは聖徒自身告白してゐます。」

僕はちよつと憂鬱になり、次の龕へ目をやりました。

次の龕にある半身像は口髭の太い独逸人です。

「これはツアラトストラの詩人ニイチエです。その聖徒は聖徒自身の造つた超人に救ひを求めました。が、やはり救はれずに氣違ひになつてしまつたのです。若し氣違ひにならなかつたとすれば、或は聖徒の数へはひることも出来なかつたかも知れません。……」

長老はちよつと黙つた後、第三の龕の前へ案内しました。

「三番目にあるのはトルストイです。この聖徒は誰よりも苦行をしました。

それは元來貴族だつた為に好奇心の多い公衆に苦しみを見せることを嫌つたからです。

この聖徒は事実上信ぜられない基督を信じようと努力しました。

いや、信じてゐるやうにさへ公言したこともあつたのです。

しかしとうとう晩年には悲壯な諷つきだつたことに堪へられないやうになりました。

この聖徒も時々書齋の梁に恐怖を感じたのは有名です。

けれども聖徒の数にははひつてゐる位ですから、勿論自殺したのではありません。」

第四の龕の中の半身像は我々日本人の一人です。

僕はこの日本人の顔を見た時、さすがに懐しさを感じました。

「これは国木田独歩です。轢死する人足の心もちをはつきり知つてゐた詩人です。しかしそれ以上の説明はあなたには不必要に違いありません。では五番目の龕の中を御覧下さい。

――

「これはワグネルではありませんか？」

「さうです。国王の友だちだつた革命家です。聖徒ワグネルは晩年には食前の祈祷さへしてゐました。

しかし勿論基督教よりも生活教の信徒の一人だつたのです。

ワグネルの残した手紙によれば、娑婆苦は何度この聖徒を死の前に駆りやつたかわかりません。」

僕等はもうその時には第六の龕の前に立つてゐました。

「これは聖徒ストリントベリーの友だちです。

子供の大勢ある細君の代りに十三四のタイテイの女を娶つた商売人上りの仏蘭西の画家です。

この聖徒は太い血管の中に水夫の血を流してゐました。

7、河童

が、唇を御覧なさい。砒素か何かの痕が残つてゐます。

第七の龕の中にあるのは……もうあなたはお疲れでせう。ではどうかこちらへお出で下さい。」

僕は実際疲れてゐましたから、ラツプと一しよに長老に従ひ、香の匂のする廊下伝ひに或部屋へはひりました。

その又小さい部屋の隅には黒いヴェヌスの像の下に山葡萄が一ふさ献じてあるのです。

僕は何の装飾もない僧房を想像してゐただけにちよつと意外に感じました。

すると長老は僕の容子にかう云ふ氣もちを感じたと見え、僕等に椅子を薦める前に半ば氣の毒さうに説明しました。

「どうか我々の宗教の生活教であることを忘れずに下さい。

我々の神、——『生命の樹』の教へは『旺盛に生きよ』と云ふのですから。……

ラツプさん、あなたはこのかたに我々の聖書を御覧に入れましたか？」

「いえ、……実はわたし自身も殆ど読んだことはないのです。」

ラツプは頭の皿を搔きながら、正直にかう返事をしました。

が、長老は不相変靜かに微笑して話しつづけました。

「それではおわかりになりますまい。我々の神は一日のうちにこの世界を造りました。

（『生命の樹』は樹と云ふものの、成し能はないことはないのです。）

のみならず雌の河童を造りました。

すると雌の河童は退屈の余り、雄の河童を求めました。

我々の神はこの歎きを憐み、雌の河童の脳髓を取り、雄の河童を造りました。

我々の神はこの二匹の河童に『食へよ、交合せよ、旺盛に生きよ』と云ふ祝福を与へました。……」

僕は長老の言葉のうちに詩人のトツクを思ひ出しました。

詩人のトツクは不幸にも僕のやうに無神論者です。

僕は河童ではありませんから、生活教を知らなかつたのも無理はありません。

けれども河童の国に生まれたトツクは勿論「生命の樹」を知つてゐた筈です。

僕はこの教へに従はなかつたトツクの最後を憐みしましたから、長老の言葉を遮るやうにトツクのことを話し出しました。

「ああ、あの気の毒な詩人ですね。」

長老は僕の話聞き、深い息を洩らしました。

「我々の運命を定めるものは信仰と境遇と偶然とだけです。

（尤もあなたがたはその外に遺伝をお教へなさるでせう。）

7、河童

トツクさんは不幸にも信仰をお持ちにならなかったのです。」

「トツク君はあなたを羨んでゐたでせう。いや、僕も羨んでゐます。ラツプ君などは年も若いし、……」

「僕も嘴さへちやんとしてゐれば或は楽天的だつたかも知れません。」

長老は僕等にかう言はれると、もう一度深い息を洩らしました。

しかもその目は涙ぐんだまま、ぢつと黒いヴェヌスを見つめてゐるのです。

「わたしも実は、——これはわたしの秘密ですから、どうか誰にも仰有らずに下さい。

わたしも実は我々の神を信ずる訣に行かないのです。

しかしいつかわたしの祈祷は、——」

丁度長老のかう言つた時です。

突然部屋の戸があいたと思ふと、大きい雌の河童が一匹、いきなり長老へ飛びかかりました。

僕等がこの雌の河童を抱きとめようとしたのは勿論です。

が、雌の河童は咄嗟の間に床の上へ長老を投げ倒しました。

「この爺め！　けふも又わたしの財布から一杯やる金を盗んで行つたな！」

十分ばかりたつた後、僕等は實際逃げ出さないばかりに長老夫婦をあとに残し、大寺院の玄関を下りて行きました。

「あれではあの長老も『生命の樹』を信じない筈ですね。」

暫く黙つて歩いた後、ラツプは僕にかう言ひました。

が、僕は返事をするよりも思はず大寺院を振り返りました。

大寺院はどんより曇つた空にやはり高い塔や円屋根を無数の触手のやうに伸ばしてゐます。何か沙漠の空に見える蜃気楼の無気味さを漂はせたまま。……

十五

それから彼は一週間の後、僕はふと医者の子ヤツクに珍らしい話を聞きました。

と云ふのはあのトツクの家には幽霊の出ると云ふ話なのです。

その頃にはもう雌の河童はどこか外へ行つてしまひ、僕等の友だちの詩人の家も写真師のステュデイオに變つてゐました。

何でも子ヤツクの話によれば、このステュデイオでは写真をとると、トツクの姿もいつの間にか必ず朦朧と客の後ろに映つてゐるとか云ふことです。

尤も子ヤツクは物質主義者ですから、死後の生命などを信じてゐません。

7、河童

現にその話をした時にも悪意のある微笑を浮かべながら、「やはり靈魂と云ふものも物質的存在と見えますね」などと註釈めいたことをつけ加へてゐました。

僕も幽霊を信じないことはチャックと余り変わりません。

けれども詩人のトックには親しみを感じてゐましたから、早速本屋の店へ駆けつけ、トックの幽霊に関する記事やトックの幽霊の写真の出てゐる新聞や雑誌を買つて来ました。成程それ等の写真を見ると、どこかトックらしい河童が一匹、老若男女の河童の後ろにぼんやりと姿を現してゐました。

しかし僕を驚かせたのはトックの幽霊の写真よりもトックの幽霊に関する記事、——殊にトックの幽霊に関する心霊学協会の報告です。

僕は可也逐語的にその報告を訳して置きましたから、下に大略を掲げることにしませう。但し括弧の中にあるのは僕自身の加へた註釈なのです。——

詩人トック君の幽霊に関する報告。（心霊学協会雑誌第八千二百七十四号所載）

わが心霊学協会は先般自殺したる詩人トック君の旧居にして現在は〇〇写真師のステュディオなる〇〇街第二百五十一号に臨時調査会を開催せり。

列席せる会員は下の如し。（氏名を略す。）

我等十七名の会員は心靈学協会々長ペック氏と共に九月十七日午前十時三十分、我等の最も信賴するメデイアム、ホップ夫人を同伴し、該ステュディオの一室に参集せり。

ホップ夫人は該ステュディオに入るや、既に心靈的空氣を感じ、全身に痙攣を催しつつ、嘔吐すること数回に及べり。

夫人の語る所によれば、こは詩人トツク君の強烈なる煙草を愛したる結果、その心靈的空氣も亦ニコティンを含有する為なりと云ふ。

我等会員はホップ夫人と共に円卓を繞りて黙坐したり。

夫人は三分二十五秒の後、極めて急劇なる夢遊状態に陥り、且詩人トツク君の心靈の憑依する所となれり。

我等会員は年齢順に従ひ、夫人に憑依せるトツク君の心靈と左の如き問答を開始したり。

問 君は何故に幽靈に出づるか？

答 死後の名声を知らんが為なり。

問 君——或は心靈諸君は死後も尚名声を欲するや？

答 少くとも予は欲せざる能はず。然れども予の邂逅したる日本の一詩人の如きは死後

7、河童

問 答 問 答 問 答 問 答 問 答

の名声を輕蔑し居たり。

君はその詩人の姓名を知れりや？

予は不幸にも忘れたり。唯彼の好んで作れる十七字詩の一章を記憶するのみ。

その詩は如何？

「古池や蛙飛びこむ水の音」。

君はその詩を佳作なりと做すや？

予は必しも悪作なりと做さず。唯「蛙」を「河童」とせん乎、更に光彩陸離たるべし。

然らばその理由は如何？

我等河童は如何なる芸術にも河童を求むること痛切なればなり。

会長ペック氏はこの時に当り、我等十七名の会員にこは心靈学協会の臨時調査会にして合評会にあらざるを注意したり。

心靈諸君の生活は如何？

諸君の生活と異ること無し。

然らば君は君自身の自殺せしを後悔するや？

必しも後悔せず。予は心靈的生活に倦まば、更にピストルを取りて自活すべし。

問 自活するは容易なりや否や？

トツク君の心霊はこの間に答ふるに更に問を以てしたり。こはトツク君を知れるものには頗^{すこぶ}る自然なる応酬なるべし。

自殺するは容易なりや否や？

諸君の生命は永遠なりや？

我等の生命に関しては諸説紛々として信ずべからず。幸ひに我等の間にも基督教、仏教、モハメツト教、拝火教等の諸宗あることを忘るる勿れ。

君自身の信ずる所は？

予は常に懷疑主義者なり。

然れども君は少くとも心霊の存在を疑はざるべし？

諸君の如く確信する能はず。

君の交友の多少は如何？

予の交友は古今東西に亘り、三百人を下らざるべし。その著名なるものを挙げれば、クライスト、マイレンデル、ワイニンゲル、……

君の交友は自殺者のみなりや？

必しも然りとせず。自殺を弁護せるモンテエニユの如きは予が畏友の一人なり。

7、河童

問 答

唯予は自殺せざりし厭世主義者、—— ショオペンハウエルの輩とは交際せず。
ショオペンハウエルは健在なりや？

彼は目下心靈的厭世主義を樹立し、自活する可否を論じつつあり。然れどもコレ
ラも黴菌病ばいきんびやうなりしを知り、頗る安堵せるものの如し。我等会員は相次いでナポレ
オン、孔子、ドストエフスキイ、ダアウイン、クレオパトラ、釈迦、デモステネス、
ダンテ、千の利休等の心靈の消息を質問したり。然れどもトツク君は不幸にも詳細
に答ふことを做さず、反つてトツク君自身に関する種々のゴシップを質問したり。
予の死後の名声は如何？

問 答 問

或批評家は「群小詩人の一人」と言へり。
彼は予が詩集を贈らざりしに怨恨を含める一人なるべし。予の全集は出版せられし
や？

問 答

君の全集は出版せられたれども、売行甚だ振はざるが如し。
予の全集は三百年の後、—— 即ち著作権の失はれたる後、万人の購ふ所となるべ
し。予の同棲せる女友だちは如何？

問 答

彼女は書肆ラツク君の夫人となれり。
彼女は未だ不幸にもラツクの義眼なるを知らざるなるべし。予が子は如何？

答 国立孤児院にありと聞けり。

トツク君は暫く沈黙せる後、新たに質問を開始したり。

問 予が家は如何？

答 某写真師のステュデイオとなれり。

問 予の机は如何になれるか？

如何なれるかを知るものなし。

問 予は予の机の抽斗に予の秘蔵せる一束の手紙を――然れどもこは幸ひにも多忙な

る諸君の関する所にあらず。今やわが心霊界は徐に薄暮に沈まんとす。予は諸君と

訣別すべし。さらば。諸君。さらば。わが善良なる諸君。

ホップ夫人は最後の言葉と共に再び急劇に覚醒したり。

我等十七名の会員はこの問答の真なりしことを上天の神に誓つて保証せんとす。

（尚又我等の信賴するホップ夫人に対する報酬は嘗て夫人が女優たりし時の日当に従ひて支弁したり。）

十六

僕はいかう云ふ記事を読んだ後、だんだんこの国にゐることも憂鬱になつて來ましたから、どうか我々人間の国へ歸ることになつたと思ひました。

しかしいくら探して歩いて、僕の落ちた穴は見つかりません。

そのうちにあのバツグと云ふ漁師の河童の話には、何でもこの国の街はづれに或年をとつた河童が一匹、本を読んだり、笛を吹いたり、静かに暮らしてゐると云ふことです。

僕はこの河童に尋ねて見れば、或はこの国を逃げ出す途もわかりはしないかと思ひましたから、早速街はづれへ出かけて行きました。

しかしそこへ行つて見ると、如何にも小さい家の中に年をとつた河童どころか、頭の皿も固まらない、やつと十二三の河童が一匹、悠々と笛を吹いてゐました。

僕は勿論間違つた家へはひつたではないかと思ひました。

が、念の為に名をきいて見ると、やはりバツグの教へてくれた年よりの河童に違ひないのです。

「しかしあなたは子供のやうですが……」

「お前さんはまだ知らないのかい？」

わたしはどう云ふ運命か、母親の腹を出た時には白髪頭をしてゐたのだよ。

それからだんだん年が若くなり、今ではこんな子供になつたのだよ。

けれども年を勘定すれば、生まれる前を六十としても、彼は百十五六にはなるかも知れない。」

僕は部屋の中を見まはしました。そこには僕の気のせゐか、質素な椅子やテーブルの間に何か清らかな幸福が漂つてゐるやうに見えるのです。

「あなたはどうもほかの河童よりも仕合せに暮らしてゐるやうですね？」

「さあ、それはさうかも知れない。

わたしは若い時は年よりだつたし、年をとつた時は若いものになつてゐる。

従つて年よりのやうに慾にも渴かず、若いもののやうに色にも溺れない。

兎に角わたしの生涯はたとひ仕合せではないにしろ、安らかだつたのには違ひあるまい。」

「成程それでは安らかでせう。」

「いや、まだそれだけでは安らかにはならない。

わたしは体も丈夫だつたし、一生食ふに困らぬ位の財産を持つてゐたのだよ。

しかし一番仕合せだつたのはやはり生まれて来た時に年よりだつたことだと思つてゐる。」

7、河童

僕は暫くこの河童と自殺したトツクの話だの毎日医者に見て貰つてゐるゲエルの話だのをしてゐました。

が、なぜか年をとつた河童は余り僕の話などに興味のないやうな顔をしてゐました。

「ではあなたはほかの河童のやうに格別生きてゐることに執着を持つてはゐらないのですね？」

年をとつた河童は僕の顔を見ながら、静かにかう返事をしました。

「わたしもほかの河童のやうにこの国へ生まれて来るかどうか、一応父親に尋ねられてから母親の胎内を離れたのだよ。」

「しかし僕はふとした拍子に、この国へ転げ落ちてしまつたのです。どうか僕にこの国から出て行かれる路を教へて下さい。」

「出て行かれる路は一つしかない。」

「と云ふのは？」

「それはお前さんのここへ来た路だ。」

僕はこの答を聞いた時になぜか身の毛がよだちました。

「その路が生憎見つからないのです。」

年をとつた河童は水々しい目にちつと僕の顔を見つめました。

それからやつと体を起し、部屋の隅へ歩み寄ると、天井からそこに下つてゐた一本の綱を引きました。

すると今まで気のつかなくつた天窓が一つ開きました。

その又円い天窓の外には松や檜が枝を張つた向うに大空が青あをと晴れ渡つてゐます。いや、大きい鏝やじりに似た槍ヶ岳の峯も聳えてゐます。

僕は飛行機を見た子供のやうに實際飛び上つて喜びました。

「さあ、あすこれから出て行くが好い。」

年をとつた河童はかう言ひながら、さつきの綱を指さしました。

今まで僕の綱と思つてゐたのは実は綱梯子に出来てゐたのです。

「ではあすこれから出さして貰ひます。」

「唯わたしは前以て言ふがね。出て行つて後悔しないやうに。」

「大丈夫です。僕は後悔などはしません。」

僕はかう返事をするが早いのか、もう綱梯子を攀ぢ登つてゐました。年をとつた河童の頭の皿を遙か下に眺めながら。

十七

僕は河童の国から帰つて来た後、暫くは我々人間の皮膚の匂に閉口しました。我々人間に比べれば、河童は実に清潔なものです。

のみならず我々人間の頭は河童ばかり見てゐた僕には如何にも気味の悪いものに見えました。

これは或はあなたにはおわかりにならないかも知れません。

しかし目や口は兎も角も、この鼻と云ふものは妙に恐しい気を起させるものです。

僕は勿論出来るだけ、誰にも会はない算段をしました。

が、我々人間にもいつか次第に慣れ出したと見え、半年ばかりたつうちにどこへでも出るやうになりました。

唯それでも困つたことは何か話をしてゐるうちにうつかり河童の国の言葉を口に出してしまふことです。

「君はあしたは家にゐるかね？」

「Qua」

「何だつて？」

「いや、ゐると云ふことだよ。」

大体かう云ふ調子だったものです。

しかし河童の国から帰つて来た後、丁度一年ほどたつた時、僕は或事業の失敗した為に……………

（S博士は彼がかう言つた時、「その話はおよしなさい」と注意をした。何でも博士の話によれば、彼はこの話をする度に看護人の手にも了へない位、乱暴になるとか云ふことである。）

ではその話はやめませう。

しかし或事業の失敗した為に僕は又河童の国へ帰りたいと思ひ出しました。

さうです。「行きたい」ではありません。「帰りたい」と思ひ出したのです。

河童の国は当時の僕には故郷のやうに感ぜられましたから。

僕はそつと家を脱け出し、中央線の汽車へ乗らうとしました。

そこを生憎あいにく巡査につかまり、とうとう病院へ入れられたのです。

僕はこの病院へはひつた当座も河童の国のことを想ひつづけました。

医者のチャックはどうしてゐるでせう？

哲学者のマツグも不相変七色の色硝子のランタアンの下に何か考へてゐるかも知れません。

7、河童

殊に僕の親友だつた、嘴の腐つた学生のラップは、――

或けふのやうに曇つた午後です。

こんな追憶に耽つてゐた僕は思はず声を挙げようと思いました。

それはいつの間にはひつて来たか、バツグと云ふ漁師の河童が一匹、僕の前に佇みながら、何度も頭を下げてゐたからです。

僕は心を取り直した後、――泣いたか笑つたかも覚えてゐません。

が、兎に角久しぶりに河童の国の言葉を使ふことに感動してゐたことは確かです。

「おい、バツグ、どうして来た？」

「へい、お見舞ひに上つたのです。何でも御病氣だとか云ふことですから。」

「どうしてそんなことを知つてゐる？」

「ラデイオのニュースで知つたのです。」

バツグは得意さうに笑つてゐるのです。

「それにしてもよく来られたね？」

「何、造作はありません。東京の川や堀割りは河童には往来も同様ですから。」

僕は河童も蛙のやうに水陸両棲の動物だつたことに今更のやうに気がつきました。

「しかしこの辺には川はないがね。」

「いえ、こちらへ上つたのは水道の鉄管を抜けて来たのです。

それからちよつと消火栓をあけて ……………」

「消火栓をあけて？」

「檀那はお忘れなすつたのですか？ 河童にも機械屋のゐると云ふことを。」

それから僕は二三日毎にいろいろの河童の訪問を受けました。

僕の病はS博士によれば早発性痴呆症と云ふことです。

しかしあの医者のチャックは（これは甚だあなたにも失礼に当るのに違ひありません。）

僕は早発性痴呆症患者ではない、早発性痴呆症患者はS博士を始め、あなたがた自身だと
言つてゐました。

医者のチャックも来る位ですから、学生のラップや哲学者のマツグの見舞ひに来たことは
勿論です。

が、あの漁師のバツグの外に昼間は誰も尋ねて来ません。殊に二三匹一しよに来るのは夜、
——それも月のある夜です。

僕はゆうべも月明りの中に硝子会社の社長のゲエルや哲学者のマツグと話をしました。
のみならず音楽家のクラバツクにもヴァイオリンを一曲弾いて貰ひました。

そら、向うの机の上に黒百合の花束がのつてゐるでせう？

7、河童

あれもゆうベクラバックが土産に持つて来てくれたものです。……………

（僕は後を振り返つて見た。が、勿論机の上には花束も何ものつてゐなかつた。）

それからこの本も哲学者のマツグがわざわざ持つて来てくれたものです。

ちよつと最初の詩を読んで御覧なさい。

いや、あなたは河童の国の言葉を御存知になる筈はありません。

では代りに読んで見ませう。

これは近頃出版になつたトツクの全集の一冊です。――

（彼は古い電話帳をひろげ、かう云ふ詩をおほ声に読みはじめた。）

―― 椰子の花や竹の中に

仏陀はとうに眠つてゐる。

路ばたに枯れた無花果と一しよに

基督ももう死んだらしい。

しかし我々は休まなければならぬ

たとひ芝居の背景の前にも。

（その又背景の裏を見れば、継ぎはぎだらけのカンヴァスばかりだ。！）――
けれども僕はこの詩人のやうに厭世的ではありません。

河童たちの時々来てくれる限りは、――

ああ、このことは忘れてゐました。

あなたは僕の友だちだった裁判官のペツプを覚えてゐるでせう。

あの河童は職を失つた後、ほんたうに発狂してしまいました。

何でも今は河童の国の精神病院にゐると云ふことです。

僕はS博士さへ承知してくれれば、見舞ひに行つてやりたいのですがね
……………

（昭和二・二・十二）

8、齒車

齒車

(新字旧仮名)

芥川龍之介

昭和二年 遺稿

一 レエン・コウト

僕は或知り人の結婚披露式ひろうしきにつらなる為に鞆かばんを一つ下げたまま、東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばした。自動車の走る道の両がはは大抵松ばかり茂つてゐた。上り列車に間に合ふかどうかは可也怪かなりしいのに違ひなかつた。自動車には丁度僕の外に或理髪店の主人も乗り合せてゐた。彼は棗なつめのやうにまるまると肥つた、短い鬚あごひげの持ち主だつた。僕は時間を気にしながら、時々彼と話をした。

「妙なこともありますね。＊＊さんの屋敷には昼間でも幽霊が出るつて云ふんですが。」
「昼間でもね。」

僕は冬の西日の当つた向うの松山を眺めながら、善い加減に調子を合せてゐた。

「尤も天気もちとの善い日には出ないさうです。一番多いのは雨のふる日だつて云ふんですが。」

「雨のふる日に濡れに来るんじゃないか？」

「御常談ごじやうだんで。……しかしレエン・コウトを着た幽霊だつて云ふんです。」

自動車はラツパを鳴らしながら、或停車場へ横着けになつた。僕は或理髪店の主人に別れ、停車場の中へはひつて行つた。すると果して上り列車は二三分前に出たばかりだつた。待合室のベンチにはレエン・コウトを着た男が一人ぼんやり外を眺めてゐた。僕は今聞い

8、齒車

たばかりの幽霊の話を思ひ出した。が、ちよつと苦笑したぎり、兎に角^{とかく}次の列車を待つ為に停車場前のカツフェへはひることにした。

それはカツフェと云ふ名を与へるのも考へものに近いカツフェだった。

僕は隅のテエブルに坐り、ココアを一杯注文した。テエブルにかけたオイル・クロオスは白地に細い青の線を荒い格子に引いたものだつた。しかしもう隅々には薄汚いカンヴァスを露^{あらは}してゐた。僕は膠^{にかは}臭いココアを飲みながら、人げのないカツフェの中を見まはした。埃^{ほこり}じみたカツフェの壁には「親子井」だの「カツレツ」だのと云ふ紙札が何枚も貼つてあった。

「地^い玉^い子^い、オムレツ」

僕はかう云ふ紙札に東海道線に近い田舎^{みなか}を感じた。それは麦畠やキヤベツ畠の間に電氣機関車の通る田舎だつた。……

次の上り列車に乗つたのはもう日暮に近い頃だつた。僕はいつも二等に乗つてゐた。が、何かの都合上、その時は三等に乗ることにした。

汽車の中は可^{かなり}也こみ合つてゐた。しかも僕の前後にゐるのは大磯かどこかへ遠足に行つたらしい小学校の女生徒ばかりだつた。僕は巻煙草に火をつけながら、かう云ふ女生徒の群れを眺めてゐた。彼等はいづれも快活だつた。のみならず殆どしやべり続けだつた。

「写真屋さん、ラヴ・シインつて何？」

やはり遠足について来たらしい、僕の前にもた「写真屋さん」は何とかお茶を濁してゐた。しかし十四五の女生徒の一人はまだいろいろのことを問ひかけてゐた。僕はふと彼女の鼻に蓄膿症のあることを感じ、何か頬笑^{ほほえ}まずにはゐられなかつた。それから又僕の隣りにゐた十二三の女生徒の一人は若い女教師の膝の上に坐り、片手に彼女の頸を抱きながら、片手に彼女の頬をさすつてゐた。しかも誰かと話す合ひ間に時々かう女教師に話しかけてゐた。

「可愛いわね、先生は。可愛い目をしていらつしやるわね。」

彼等は僕には女生徒よりも一人前の女と云ふ感じを与へた。林檎^{りんご}を皮ごと嚙^かじつてゐたり、キヤラメル^むの紙を剥いてゐることを除けば。……しかし年かさらしい女生徒の一人は僕の側を通る時に誰かの足を踏んだと見え、「御免なさいまし」と声をかけた。

彼女だけは彼等よりもませてゐるだけに反^{かへ}つて僕には女生徒らしかつた。僕は巻煙草を啣^{くは}へたまま、この矛盾を感じた僕自身を冷笑しない訣^{わけ}には行かなかつた。

いつか電燈をともした汽車はやつと或郊外の停車場へ着いた。僕は風の寒いプラツトフオオムへ下り、一度橋を渡つた上、省線電車の来るのを待つことにした。すると偶然顔を合せたのは或会社にあるT君だつた。僕等は電車を待つてゐる間に不景氣のことなどを話

8、齒車

し合つた。T君は勿論僕などよりもかう云ふ問題に通じてゐた。が、^{たくま}遅しい彼の指には余り不景気には縁のない^{トルコ}土耳其石の指環も^は嵌まつてゐた。

「大したものを嵌めてゐるね」

「これか？　これはハルピンへ商売に行つてゐた友だちの指環を買はされたんだよ。それも今は往生してゐる。コオペラティヴと取引が出来なくなつたものだから。」

僕等の乗つた省線電車は幸ひにも汽車ほどこんでゐなかつた。僕等は並んで腰をおろし、いろいろのことを話してゐた。T君はついこの春に^{パリ}巴里にある勤め先から東京へ歸つたばかりだつた。従つて僕等の間には巴里の話も出勝ちだつた。カイヨオ夫人の話、^{かに}蟹料理の話、御外遊中の或殿下の話、……

「^{フランス}仏蘭西は存外困つてはゐないよ。唯元来仏蘭西人と云ふやつは税を出したがらない国民だから、内閣はいつも倒れるがね。……」

「だつてフランは暴落するしさ。」

「それは新聞を読んでゐればね。しかし向うにゐて見給へ。新聞紙上の日本なるものはのべつに大地震や大洪水があるから。」

するとレエン・コオトを着た男が一人僕等の向うへ来て腰をおろした。僕はちよつと無気味になり、何か前に聞いた幽霊の話をT君に話したい心もちを感じた。が、T君はその

前に杖の柄えをくるりと左へ向け、顔は前を向いたまま、小声に僕に話しかけた。

「あすこに女が一人ゐるだらう？　鼠色の毛糸のシヨオルをした、……」

「あの西洋髪に結ゆつた女か？」

「うん、風呂敷包みを抱へてゐる女さ。あいつはこの夏は軽井沢にゐたよ。ちよつと洒落れた洋装などをしてね。」

しかし彼女は誰の目にも見すばらしいなりをしてゐるのに違ひなかつた。僕はT君と話しながら、そつと彼女を眺めてゐた。彼女はどこか眉の間に氣違ひらしい感じのする顔をしてゐた。しかもその又風呂敷包みの中から豹へうに似た海綿をはみ出させてゐた。

「軽井沢にゐた時には若い亜米利加人アメリカ人と踊つたりしてゐたつけ。モダアン　……何と云ふやつかね。」

レエン・コートを着た男は僕のT君と別れる時にはいつかそこにゐなくなつてゐた。僕は省線電車の或停車場からやはり鞆をぶら下げたまま、或ホテルへ歩いて行つた。往來の両側に立つてゐるのは大抵大きいビルディングだつた。僕はそこを歩いてゐるうちにふと松林を思ひ出した。のみならず僕の視野のうちに妙なものを見つけ出した。妙なものを？

——と云ふのは絶えずまはつてゐる半透明の齒車だつた。僕はかう云ふ經驗を前にも何度か持ち合せてゐた。齒車は次第に数を殖ふやし、半ば僕の視野を塞ふさいでしまふ、が、それも

8、齒車

長いことではない、暫らくの後には消え失^うせる代りに今度は頭痛を感じはじめ、——それはいつも同じことだった。眼科の医者はこの錯覚（？）の為に度々僕に節煙を命じた。しかしかう云ふ齒車は僕の煙草に親まない二十前^{はたち}にも見えないことはなかった。僕は又はじまつたなと思ひ、左の目の視力をためす為に片手に右の目を塞いで見た。左の目は果して何ともなかった。しかし右の目の瞼^{まぶた}の裏には齒車が幾つもまはつてゐた。僕は右側のビルディングの次第に消えてしまふのを見ながら、せつせと往來を歩いて行つた。

ホテルの玄関へはひつた時には齒車もう消え失せてゐた。が、頭痛はまだ残つてゐた。僕は外套や帽子を預ける次手^{ついで}に部屋を一つとつて貰ふことにした。それから或雜誌社へ電話をかけて金のことを相談した。

結婚披露式の晚餐^{ばんさん}はとうに始まつてゐたらしかった。僕はテエブルの隅に坐り、ナイフやフォークを動かし出した。正面の新郎や新婦をはじめ、白い凹^{あふ}字形のテエブルに就いた五十人あまりの人びとは勿論いづれも陽氣だった。が、僕の心もちは明るい電燈の光の下にだんだん憂鬱になるばかりだった。僕はこの心もちを遁^{のが}れる為に隣にゐた客に話しかけた。彼は丁度獅子のやうに白い頬髯^{ほほひげ}を伸ばした老人だった。のみならず僕も名を知つてゐた或名高い漢学者だった。従つて又僕等の話はいつか古典の上へ落ちて行つた。

「麒麟^{きりん}はつまり一角獸^{いっかくじう}ですね。それから鳳凰^{ほうわう}もフェニックスと云ふ鳥の、……」

この名高い漢学者はかう云ふ僕の話にも興味を感じてゐるらしかった。僕は機械的にしやべつてゐるうちにだんだん病的な破壊慾を感じ、堯舜げうしゆんを架空の人物にしたのは勿論、「春秋」の著者もずつと後の漢代の人だつたことを話し出した。するとこの漢学者は露骨に不快な表情を示し、少しも僕の顔を見ずに殆ど虎の唸るやうに僕の話はなを切り離した。「もし堯舜もゐなかつたとすれば、孔子は諡うそをつかれたことになる。聖人の諡うそをつかれる筈はずはない。」

僕は勿論黙つてしまつた。それから又皿の上の肉へナイフやフォークを加へようとした。すると小さい蛆うじが一匹静かに肉の縁うしろめに蠢うごめいてゐた。蛆は僕の頭の中に Worm と云ふ英語を呼び起した。それは又麒麟や鳳凰のやうに或伝説的動物を意味してゐる言葉にも違ひなかつた。僕はナイフやフォークを置き、いつか僕の杯にシャンパアニユのつがれるのを眺めてゐた。

やつと晚餐のすんだ後、僕は前にとつて置いた僕の部屋へこもる為に人気のない廊下を歩いて行つた。

廊下は僕にはホテルよりも監獄らしい感じを与へるものだつた。しかし幸ひにも頭痛だけはいつの間にか薄らいでゐた。

僕の部屋には鞆は勿論、帽子や外套も持つて来てあつた。僕は壁にかけた外套に僕自身

8、齒車

の立ち姿を感じ、急いでそれを部屋の隅の衣裳戸棚の中へ抛りこんだ。それから鏡台の前へ行き、ぢつと鏡に僕の顔を映した。鏡に映った僕の顔は皮膚の下の骨組みを露はしてゐた。蛆はかう云ふ僕の記憶に忽ち^{たちま}はつきり浮かび出した。

僕は戸をあけて廊下へ出、どこと云ふことなしに歩いて行つた。するとロツビイへ出る隅に緑いろの笠をかけた、背の高いスタンドの電燈が一つ硝子戸に鮮^{あざや}かに映つてゐた。それは何か僕の心に平和な感じを与へるものだつた。僕はその前の椅子に坐り、いろいろのことを考へてゐた。が、そこにも五分とは坐つてゐる訣^{わけ}に行かなかつた。レエン・コオトは今度も亦僕の横にあつた長椅子の背中に如何にもだらりと脱ぎかけてあつた。

「しかも今は寒中だと云ふのに。」

僕はこんなことを考へながら、もう一度廊下を引き返して行つた。廊下の隅の給仕だまりには一人も給仕は見えなかつた。しかし彼等の話し声はちよつと僕の耳をかすめて行つた。それは何とか言はれたのに答へた All right と云ふ英語だつた。

「オオル・ライト」？ —— 僕はいつかこの対話の意味を正確に掴^{つか}まうとあせつてゐた。

「オオル・ライト」？ 「オオル・ライト」？ 何が一体オオル・ライトなのであらう？

僕の部屋は勿論ひつそりしてゐた。が、戸をあけてはひることは妙に僕には無気味だつた。僕はちよつとためらつた後、思ひ切つて部屋の中へはひつて行つた。それから鏡を見

ないやうにし、机の前の椅子に腰をおろした。椅子は蜥蜴とかげの皮に近い、青いマロツク皮の安楽椅子だつた。僕は鞆をあけて原稿用紙を出し、或短篇を続けようとした。けれどもインクをつけたペンはいつまでたつても動かなかつた。のみならずやつと動いたと思ふと、同じ言葉ばかり書きつづけてゐた。

All right …… All right …… All right, si r…… All right ……

そこへ突然鳴り出したのはベッドの側わきにある電話だつた。僕は驚いて立ち上り、受話器を耳へやつて返事をした。

「どなた？」

「あたしです。あたし ……」

相手は僕の姉の娘だつた。

「何だい？　どうかしたのかい？」

「ええ、あの大へんなことが起つたんです。ですから、……大へんなことが起つたもんですから、今叔母さんにも電話をかけたんです。」

「大へんなこと？」

「ええ、ですからすぐに来て下さい。すぐにですよ。」

電話はそれぎり切れてしまった。僕はもとのやうに受話器をかけ、反射的にベルの鈕ボタンを

8、齒車

押した。しかし僕の手の震へてゐることは僕自身はつきり意識してゐた。給仕は容易にやつて来なかつた。僕は苛^{いら}立たしきよりも苦しきを感じ、何度もベルの鈕を押した、やつと運命の僕に教へた「オオル・ライト」と云ふ言葉を了解しながら。

僕の姉の夫はその日の午後、東京から余り離れてゐない或田舎に轢^れ死^ししてゐた。しかも季節に縁のないレエン・コオトをひつけてゐた。

僕はいまもそのホテルの部屋に前の短篇を書きつづけてゐる。真夜中の廊下には誰も通らない。が、時々戸の外に翼の音の聞えることもある。どこかに鳥でも飼つてあるのかも知れない。

二 復讐

僕はこのホテルの部屋に午前八時頃に目を醒^さました。が、ベッドをおりようとすると、スリツペアは不思議にも片つぽしかなかつた。それはこの一二年の間、いつも僕に恐怖だの不安だのを与へる現象だつた。のみならずサンダルを片つぽだけはいた希臘^{ギリシヤ}神話の中の王子を思ひ出させる現象だつた。僕はベルを押して給仕を呼び、スリツペアの片つぽを探して貰ふことにした。給仕はけいげんな顔をしながら、狭い部屋の中を探しまはつた。

「ここにありました。このバスの部屋の中に。」

「どうして又そんな所に行つてゐたのだらう？」

「さあ、鼠かも知れません。」

僕は給仕の退いた後、牛乳を入れない珈琲コオヒイを飲み、前の小説を仕上げにかかった。凝灰岩ぎようくわいがんを四角に組んだ窓は雪のある庭に向つてゐた。僕はペンを休める度にぼんやりとこの雪を眺めたりした。雪は荅つばみを持つた沈丁花ちんぢやうけの下に都会の煤煙ばいえんによごれてゐた。それは何か僕の心に傷いたましさを与へる眺めだつた。僕は巻煙草をふかしながら、いつかペンを動かさずにいろいろのことを考へてゐた。妻のことを、子供たちのことを、就中姉なかんづくの夫のことを。……

姉の夫は自殺する前に放火の嫌疑かうむを蒙つてゐた。

それも亦實際仕かたはなかつた。彼は家の焼ける前に家の価格に二倍する火災保険に加入してゐた。

しかも偽証罪を犯した為に執行猶予中の体になつてゐた。

けれども僕を不安にしたのは彼の自殺したことよりも僕の東京へ帰る度に必ず火の燃えるのを見たことだつた。

僕は或は汽車の中から山を焼いてゐる火を見たり、或は又自動車の中から（その時は妻子とも一しよだつた。）常磐橋界限ときわはしかいわいの火事を見たりしてゐた。

8、齒車

それは彼の家の焼けない前にもおのづから僕に火事のある予感を与へない訣には行かなかった。

「今年は家が火事になるかも知れないぜ。」

「そんな縁起の悪いことを。……それでも火事になつたら大変ですね。保険は碌についてゐないし、……」

僕等はそんなことを話し合つたりした。

しかし僕の家は焼けずに、――僕は努めて妄想を押しつけ、もう一度ペンを動かさうとした。

が、ペンはどうしても一行とは楽に動かなかつた。

僕はとうとう机の前を離れ、ベッドの上に転がつたまま、トルストイの Polikouchka を読みはじめた。この小説の主人公は虚栄心や病的傾向や名誉心の入り交つた、複雑な性格の持ち主だつた。しかも彼の一生の悲喜劇は多少の修正を加へさへすれば、僕の一生の力リカテユアだつた。殊に彼の悲喜劇の中に運命の冷笑を感じるのは次第に僕を無気味にし出した。僕は一時間とたたないうちにベッドの上から飛び起きるが早いのか、窓かけの垂れた部屋の隅へ力一ぱい本を抛りつけた。

「くたばつてしまへ！」

すると大きい鼠が一匹窓かけの下からバスの部屋へ斜めに床の上を走つて行つた。僕は一足飛びにバスの部屋へ行き、戸をあけて中を探しまはつた。が、白いタツブのかげにも鼠らしいものは見えなかつた。僕は急に無気味になり、慌あわててスリツパアを靴に換へると、人気のない廊下を歩いて行つた。

廊下はけふも不相変あひかはらず牢獄のやうに憂鬱うゑふだつた。僕は頭を垂れたまま、階段を上つたり下りたりしてゐるうちにいつかコツク部屋へはひつてゐた。コツク部屋は存外明るかつた。が、片側に並んだ竈かまどは幾つも炎を動かしてゐた。僕はそこを通りぬけながら、白い帽をかぶつたコツクたちの冷やかに僕を見てゐるのを感じた。同時に又僕の墮おちた地獄を感じた。「神よ、我を罰し給へ。怒り給ふこと勿なれ。恐らくは我滅びん。」——かう云ふ祈祷もこの瞬間にはおのづから僕の唇にのぼらない訣には行かなかつた。

僕はこのホテルの外へ出ると、青ぞらの映つた雪解けの道をせつせと姉の家へ歩いて行つた。

道に沿うた公園の樹木は皆枝や葉を黒くろませてゐた。のみならずどれも一本ごとに丁度僕等人間のやうに前や後ろを具へてゐた。

それも亦僕には不快よりも恐怖に近いものを運んで来た。僕はダンテの地獄の中にある、樹木になつた魂を思ひ出し、ビルディングばかり並んでゐる電車線路の向うを歩くことに

8、齒車

した。しかしそこも一町とは無事に歩くことは出来なかった。

「ちよつと通りがかりに失礼ですが、……」

それは金鈕きんボタンの制服を着た二十二三の青年だった。僕は黙つてこの青年を見つめ、彼の鼻の左の側わきに黒子ほくろのあることを発見した。彼は帽を脱いだまま、怯おづ怯おづかう僕に話しかけた。

「Aさんではいらつしやいませんか？」

「さうです。」

「どうもそんな気がしたものですから、……」

「何か御用ですか？」

「いえ、唯お目にかかりただけです。僕も先生の愛読者の……」

僕はもうその時にはちよつと帽をとつたぎり、彼を後ろに歩き出してゐた。先生、A先生、——それは僕にはこの頃では最も不快な言葉だった。僕はあらゆる罪惡を犯してゐることを信じてゐた。しかも彼等は何かの機会に僕を先生と呼びつづけてゐた。僕はそこに僕を嘲あざける何ものかを感じずにはゐられなかった。

何ものかを？ ——しかし僕の物質主義は神秘主義を拒絶せずにはゐられなかった。

僕はつい二三箇月前にも或小さい同人雑誌にかう云ふ言葉を發表してゐた。——「僕は芸

術的良心を始め、どう云ふ良心も持つてゐない。僕の持つてゐるのは神経だけである。」

……

姉は三人の子供たちと一しよに露地の奥のバラックに避難してゐた。褐色の紙を貼つたバラックの中は外よりも寒いくらゐだつた。僕等は火鉢に手をかざしながら、いろいろのことを話し合つた。

体の遅^{たくま}しい姉の夫は人一倍痩せ細つた僕を本能的に軽蔑してゐた。

のみならず僕の作品の不道德であることを公言してゐた。

僕はいつも冷やかにかう云ふ彼を見おろしたまま、一度も打ちとけて話したことはなかつた。

しかし姉と話してゐるうちにだんだん彼も僕のやうに地獄に墮^おちてゐたことを悟り出した。彼は現に寝台車の中に幽霊を見たとか云ふことだつた。が、僕は巻煙草に火をつけ、努めて金のことばかり話しつづけた。

「何しろかう云ふ際だしするから、何も彼売^{かも}つてしまはうと思ふの。」

「それはさうだ。タイプライタアなどは幾らかになるだらう。」

「ええ、それから画などもあるし。」

「次^{ついで}手にNさん（姉の夫）の肖像画も売るか？　しかしあれは……」

8、齒車

僕はバラツクの壁にかけた、額縁のない一枚のコンテ画を見ると、迂濶^{うくわつ}に常談も言はれないのを感じた。

轢死^{れきし}した彼は汽車の為に顔もすつかり肉塊になり、僅かに唯口髭^{くちひげ}だけ残つてゐたとか云ふことだつた。この話は勿論話自身も薄気味悪いのに違ひなかつた。

しかし彼の肖像画はどこも完全に描いてあるものの、口髭だけはなぜかぼんやりしてゐた。僕は光線の加減かと思ひ、この一枚のコンテ画をいろいろの位置から眺めるやうにした。

「何をしてゐるの？」

「何でもないよ。……唯あの肖像画は口のまはりだけ、……」

姉はちよつと振り返りながら、何も気づかないやうに返事をした。

「髭だけ妙に薄いやうでせう。」

僕の見たものは錯覚ではなかつた。しかし錯覚ではないとすれば、——僕は午飯^{ひるめし}の世話にならないうちに姉の家を出ることにした。

「まあ、善い^いでせう。」

「又あしたでも、……けふは青山まで出かけるのだから。」

「ああ、あすこ？　まだ体の具合は悪いの？」

「やつぱり葉ばかり嚙^{くは}んでゐる。催眠薬だけでも大変だよ。ヴェロナアル、ノイロナアル、

トリオナル、ヌマル ……」

三十分ばかりたつた後、僕は或ビルディングへはひり、昇降機リフトに乗つて三階へのぼつた。それから或レストオランの硝子戸を押してはひらうとした。が、硝子戸は動かなかつた。のみならずそこには「定休日」と書いた漆塗りうるしの札も下つてゐた。

僕は愈いよいよ不快になり、硝子戸の向うのテエブルの上に林檎りんごやバナナを盛つたのを見たまま、もう一度往来へ出ることにした。

すると会社員らしい男が二人何か快活にしゃべりながら、このビルディングへはひる為に僕の肩をこすつて行つた。

彼等の一人はその拍子に「イライラしてね」と言つたらしかつた。

僕は往来に佇たたずんだなり、タクシイの通るのを待ち合せてゐた。タクシイは容易に通らなかつた。のみならずたまに通つたのは必ず黄いろい車だつた。（この黄いろいタクシイはなぜか僕に交通事故の面倒をかけるのを常としてゐた。）そのうちに僕は縁起の好い緑いろの車を見つけ、兎に角青山の墓地に近い精神病院へ出かけることにした。

「イライラする、—— tantalizing —— Tantalus —— Inferno ……」

タンタルスは實際硝子戸越しに果物を眺めた僕自身だつた。

僕は二度も僕の目に浮かんだダンテの地獄を詛のろひながら、ちつと運転手の背中を眺めてゐ

8、齒車

た。

そのうちに又あらゆるものの^{うそ}嘘であることを感じ出した。

政治、実業、芸術、科学、—— いづれも皆かう云ふ僕にはこの恐しい人生を隠した雑色のエナメルに外ならなかった。僕はだんだん息苦しさを感じ、タクシイの窓をあけ放つたりした。が、何か心臓をしめられる感じは去らなかった。

緑いろのタクシイはやつと神宮前へ走りかかった。

そこには或精神病院へ曲る横町が一つある筈だった。しかしそれもけふだけはなぜか僕にはわからなかった。僕は電車の線路に沿ひ、何度もタクシイを往復させた後、とうとうあきらめておりることにした。

僕はやつとその横町を見つけ、ぬかるみの多い道を曲つて行つた。

するといつか道を間違へ、青山斎場の前へ出てしまった。

それは彼^{かれこれ}是十年前にあつた夏目先生の告別式以来、一度も僕は門の前さへ通つたことのない建物だった。

十年前の僕も幸福ではなかった。しかし少くとも平和だった。僕は砂利を敷いた門の中を眺め、「漱石^{そうせき}山房」の芭蕉を思ひ出しながら、何か僕の一生も一段落のついたことを感じない訣^{わけ}には行かなかつた。のみならずこの墓地の前へ十年目に僕をつれて来た何ものかを感じ

じない訣にも行かなかつた。

或精神病院の門を出た後、僕は又自動車に乗り、前のホテルへ帰ることにした。

が、このホテルの玄関へおけると、レエン・コオトを着た男が一人何か給仕と喧嘩をしてゐた。

給仕と？　――　いや、それは給仕ではない、緑いろの服を着た自動車掛りだつた。

僕はこのホテルへはひることに何か不吉な心もちを感じ、さつさともとの道を引き返して行つた。

僕の銀座通りへ出た時には彼是日かれこれの暮も近づいてゐた。

僕は両側に並んだ店や目まぐるしい人通りに一層憂鬱にならずにはゐられなかつた。

殊に往來の人々の罪などと云ふものを知らないやうに輕快に歩いてゐるのは不快だつた。

僕は薄明るい外光に電燈の光のまじつた中をどこまでも北へ歩いて行つた。

そのうちに僕の目を捉とらへたのは雑誌などを積み上げた本屋だつた。

僕はこの本屋の店へはひり、ぼんやりと何段かの書棚を見上げた。

それから「希臘ギリシヤ神話」と云ふ一冊の本へ目を通すことにした。黄いろい表紙をした「希臘神話」は子供の為に書かれたものらしかつた。けれども偶然僕の讀んだ一行は忽たちまち僕を打ちのめした。

8、齒車

「一番偉いツオイスの神でも復讐ふくしうの神にはかなひません。……」

僕はこの本屋の店を後ろに人ごみの中を歩いて行つた。

いつか曲り出した僕の背中に絶えず僕をつけ狙ねらつてゐる復讐の神を感じながら。……

三 夜

僕は丸善の二階の書棚にストリントベルグの「伝説」を見つけ、二三頁づつ目を通した。それは僕の経験と大差のないことを書いたものだつた。のみならず黄いろい表紙をしてゐた。

僕は「伝説」を書棚へ戻し、今度は殆ど手当り次第に厚い本を一冊引きずり出した。

しかしこの本も挿し画の一枚に僕等人間と変りのない、目鼻のある齒車ばかり並べてゐた。

(それは或独逸ドイツ人の集めた精神病者の画集だつた。)

僕はいつか憂鬱ウツの中に反抗的精神の起るのを感じ、やぶれかぶれになつた賭博狂のやうにいろいろの本を開いて行つた。

が、なぜかどの本も必ず文章か挿し画かの中に多少の針を隠してゐた。

どの本も？ —— 僕は何度か読み返した「マダム・ボヴァリイ」を手にとつた時さへ、

畢竟ひつきやう僕自身も中産階級のムツシウ・ボヴァリイに外ならないのを感じた。……

日の暮に近い丸善の二階には僕の外に客もないらしかった。僕は電燈の光の中に書棚の間をさまよつて行つた。

それから「宗教」と云ふ札を掲げた書棚の前に足を休め、緑いろの表紙をした一冊の本へ目を通した。

この本は目次の第何章かに「恐しい四つの敵、——疑惑、恐怖、驕慢^{けうまん}、官能的欲望」と云ふ言葉を並べてゐた。

僕はかう云ふ言葉を見るが早いか、一層反抗的精神の起るのを感じた。

それ等の敵と呼ばれるものは少くとも僕には感受性や理智の異名に外ならなかつた。が、伝統的精神もやはり近代的精神のやうにやはり僕を不幸にするのは愈^{いよいよ}僕にはたまらなかつた。

僕はこの本を手にしたまま、ふといつかペン・ネームに用ひた「寿陵余子^{じゆりようよし}」と云ふ言葉をおぼへ出した。

それは邯鄲^{かんたん}の歩みを学ばないうちに寿陵の歩みを忘れてしまひ、蛇行匍匐^{だかうほふく}して帰郷したと云ふ「韓非子^{かんびし}」中の青年だつた。

今日の僕は誰の目にも「寿陵余子」であるのに違ひなかつた。

しかしまだ地獄へ堕ちなかつた僕もこのペン・ネームを用ひてゐたことは、——僕は大き

8、齒車

い書棚を後ろに努めて妄想を払ふやうにし、丁度僕の向うにあつたポスターの展覧室へはひつて行つた。

が、そこにも一枚のポスターの中には聖ヂヨオヂらしい騎士が一人翼のある竜を刺し殺してゐた。

しかもその騎士は兜かぶとの下に僕の敵の一人に近いし、かめ面かめつらを半ば露あらはしてゐた。

僕は又「韓非子」の中の屠竜とりゆうの技ぎの話を思ひ出し、展覧室へ通りぬけずに幅の広い階段を下つて行つた。

僕はもう夜になつた日本橋通りを歩きながら、屠竜と云ふ言葉を考へつづけた。

それは又僕の持つてゐる硯すずりの銘にも違ひなかつた。

この硯を僕に贈つたのは或若い事業家だつた。

彼はいろいろの事業に失敗した揚句、とうとう去年の暮に破産してしまつた。

僕は高い空を見上げ、無数の星の光の中にどのくらゐこの地球の小さいかと云ふことを、

—— 従つてどのくらゐ僕自身の小さいかと云ふことを考へようとした。

しかし昼間は晴れてゐた空もいつかもうすつかり曇つてゐた。僕は突然何ものかの僕に敵意を持つてゐるのを感じ、電車線路の向うにある或カツフエへ避難することにした。

それは「避難」に違ひなかつた。

僕はこのカツエの薔薇色の壁に何か平和に近いものを感じ、一番奥のテーブルの前にやつと楽々と腰をおろした。そこには幸ひ僕の外に二三人の客のただけだつた。僕は一杯のココアを啜り、ふだんのやうに巻煙草をふかし出した。

巻煙草の煙は薔薇色の壁へかすかに青い煙を立ちのぼらせて行つた。この優しい色の調和もやはり僕には愉快だつた。

けれども僕は暫らくの後、僕の左の壁にかけたナポレオンの肖像画を見つけ、そろそろ又不安を感じ出した。ナポレオンはまだ学生だつた時、彼の地理のノート・ブックの最後に「セイント・ヘレナ、小さい島」と記してゐた。それは或は僕等の言ふやうに偶然だつたかも知れなかつた。しかしナポレオン自身にさへ恐怖を呼び起したのは確かだつた。……

僕はナポレオンを見つめたまま、僕自身の作品を考へ出した。

するとまづ記憶に浮かんだのは「侏儒の言葉」の中のアフォリズムだつた。

（殊に「人生は地獄よりも地獄的である」と云ふ言葉だつた。）

それから「地獄変」の主人公、——良秀と云ふ画師の運命だつた。

それから……僕は巻煙草をふかしながら、かう云ふ記憶から逃れる為にこのカツエの中を眺めまはした。

僕のここへ避難したのは五分もたたない前のことだつた。

8、齒車

しかしこのカツエは短時間の間にすっかり容子ようすを改めてゐた。

就中なかんづく僕を不快にしたのはマホガニイまがひの椅子やテーブルの少しもあたりの薔薇色の壁と調和を保つてゐないことだつた。

僕はもう一度人目に見えない苦しみの中に落ちこむのを恐れ、銀貨を一枚投げ出すが早いか、匆々そうそうこのカツエを出ようとした。

「もし、もし、二十銭頂きますが、……」

僕の投げ出したのは銅貨だつた。

僕は屈辱を感じながら、ひとり往来を歩いてゐるうちにふと遠い松林の中にある僕の家を思ひ出した。

それは或郊外にある僕の養父母の家ではない。唯僕を中心にした家族の為に借りた家だつた。

僕は彼かれ是十年前にもかう云ふ家に暮らしてゐた。

しかし或事情の為に軽率にも父母と同居し出した。同時に又奴隷に、暴君に、力のない利己主義者になり出した。……

前のホテルに帰つたのはもう彼は十時だつた。

ずっと長い途を歩いて来た僕は僕の部屋へ帰る力を失ひ、太い丸太の火を燃やした炉の前

の椅子に腰をおろした。

それから僕の計画してゐた長篇のことを考へ出した。

それは推古から明治に至る各時代の民を主人公にし、大体三十余りの短篇を時代順に連ねた長篇だつた。

僕は火の粉の舞ひ上るのを見ながら、ふと宮城の前にある或銅像を思ひ出した。この銅像は甲冑かっちゅうを着、忠義の心そのもののやうに高だかと馬の上に跨またがつてゐた。しかし彼の敵だつたのは、――

「謏！」

僕は又遠い過去から目近い現代へすべり落ちた。

そこへ幸ひにも来合せたのは或先輩の彫刻家だつた。

彼は不相変天鷲絨びろうどの服を着、短い山羊髭やぎひげを反そらせてゐた。

僕は椅子から立ち上り、彼のさし出した手を握つた。

（それは僕の習慣ではない、パリやベルリンに半生を送つた彼の習慣に従つたのだつた。）が、彼の手は不思議にも爬虫類はちゅうるゐの皮膚のやうに湿つてゐた。

「君はここに泊つてゐるのですか？」

「ええ、……」

8、齒車

「仕事をしに？」

「ええ、仕事もしてゐるのです。」

彼はぢつと僕の顔を見つめた。僕は彼の目の中に探偵に近い表情を感じた。

「どうです、僕の部屋へ話しに来ては？」

僕は挑戦的に話しかけた。

（この勇氣に乏しい癖に忽ち挑戦的態度をとるのは僕の悪癖の一つだつた。）

すると彼は微笑しながら、「どこ、君の部屋は？」と尋ね返した。

僕等は親友のやうに肩を並べ、静かに話してゐる外国人たちの中を僕の部屋へ歸つて行つた。

彼は僕の部屋へ来ると、鏡を後ろにして腰をおろした。それからいろいろのことを話し出した。

いろいろのことを？——しかし大抵は女の話だつた。

僕は罪を犯した為に地獄に墮ちた一人に違ひなかつた。

が、それだけに悪徳の話は愈いよいよ僕を憂鬱にした。

僕は一時的清教徒になり、それ等の女を嘲り出した。

「S子さんの唇を見給へ。あれは何人もの接吻の為に、……」

僕はふと口を噤み、鏡の中に彼の後ろ姿を見つめた。

彼は丁度耳の下に黄いろい膏藥を貼りつけてゐた。

「何人もの接吻の為に？」

「そんな人のやうに思ひますがね。」

彼は微笑して頷いてゐた。

僕は彼の内心では僕の秘密を知る為に絶えず僕を注意してゐるのを感じた。

けれどもやはり僕等の話は女のことを離れなかつた。

僕は彼を憎むよりも僕自身の氣の弱いのを恥ぢ、愈憂鬱にならずにはゐられなかつた。

やつと彼の歸つた後、僕はベッドの上に転がつたまま、「暗夜行路」を読みはじめた。

主人公の精神的闘争は一々僕には痛切だつた。僕はこの主人公に比べると、どのくらゐ僕の阿呆だつたかを感じ、いつか涙を流してゐた。

同時に又涙は僕の氣もちにいつか平和を与へてゐた。が、それも長いことではなかつた。

僕の右の目はもう一度半透明の齒車を感じ出した。齒車はやはりまはりながら、次第に数を殖やして行つた。

僕は頭痛のはじまることを恐れ、枕もとに本を置いたまま、○・八グラムのヴェロナアルを嚙み、兎に角ぐつすりと眠ることにした。

8、齒車

けれども僕は夢の中に或プールを眺めてゐた。

そこには又男女の子供たちが何人も泳いだりもぐつたりしてゐた。

僕はこのプールを後ろに向うの松林へ歩いて行つた。

すると誰か後ろから「おとうさん」と僕に声をかけた。

僕はちよつとふり返り、プールの前に立つた妻を見つけた。

同時に又烈しい後悔を感じた。

「おとうさん、タオルは？」

「タオルは入らない。子供たちに気をつけるのだよ。」

僕は又歩みをつづけ出した。が、僕の歩いてゐるのはいつかプラットフオオムに變つてゐた。

それは田舎の停車場だつたと見え、長い生け垣のあるプラットフオオムだつた。

そこには又Hと云ふ大学生や年をとつた女も^{たなず}佇んでゐた。

彼等は僕の顔を見ると、僕の前に歩み寄り、口々に僕へ話しかけた。

「大火事でしたわね。」

「僕もやつと逃げて來たの。」

僕はこの年をとつた女に何か見覚えのあるやうに感じた。

のみならず彼女と話してゐることに或愉快的興奮を感じた。

そこへ汽車は煙をあげながら、静かにプラットフォームへ横づけになつた。

僕はひとりこの汽車に乗り、両側に白い布を垂らした寝台の間を歩いて行つた。

すると或寝台の上にミイラに近い裸体の女が一人こちらを向いて横になつてゐた。

それは又僕の復讐の神、――或狂人の娘に違ひなかつた。……

僕は目を醒さますが早いか、思はずベッドを飛び下りてゐた。

僕の部屋は不相変電燈の光に明るかつた。が、どこかに翼の音や鼠のきしる音も聞えてゐた。

僕は戸をあけて廊下へ出、前の炉の前へ急いで行つた。

それから椅子に腰をおろしたまま、覺束おぼつかない炎を眺め出した。

そこへ白い服を着た給仕が一人焚たき木ぎを加へに歩み寄つた。

「何時？」

「三時半ぐらゐでございます。」

しかし向うのロツビイの隅には亞米利加人らしい女が一人何か本を読みつづけてゐた。

彼女の着てゐるのは遠目に見ても緑いろのドレスに違ひなかつた。

僕は何か救はれたのを感じ、ぢつと夜のあけるのを待つことにした。

長年の病苦に悩み抜いた揚句、静かに死を待つてゐる老人のやうに。……

四 まだ？

僕はこのホテルの部屋にやつと前の短篇を書き上げ、或雑誌に送ることにした。

尤も僕の前稿料は一週間の滞在費にも足りないものだつた。が、僕は僕の仕事を片づけたことに満足し、何か精神的強壯剤を求める為に銀座の或本屋へ出かけることにした。

冬の日の当つたアスファルトの上には紙屑が幾つものころがつてゐた。

それ等の紙屑は光の加減か、いづれも薔薇の花にそっくりだつた。

僕は何ものかの好意を感じ、その本屋の店へはひつて行つた。そこも亦ふだんよりも小綺麗だつた。

唯目金めがねをかけた小娘が一人何か店員と話してゐたのは僕には気がかりにならないことなかつた。

けれども僕は往来に落ちた紙屑の薔薇の花を思ひ出し、「アナトオル・フランスの対話集」や「メリメエの書簡集」を買ふことにした。

僕は二冊の本を抱へ、或カツエへはひつて行つた。

それから一番奥のテエブルの前に珈琲コーヒーの来るのを待つことにした。

僕の向うには親子らしい男女が二人坐つてゐた。その息子は僕よりも若かつたものの、殆ど僕にそっくりだつた。のみならず彼等は恋人同志のやうに顔を近づけて話し合つてゐた。僕は彼等を見てゐるうちに少くとも息子は性的にも母親に慰めを与へてゐることを意識してゐるのに気づき出した。それは僕にも覚えのある親和力の一例に違ひなかつた。同時に又現世を地獄にする或意志の一例にも違ひなかつた。

しかし、――僕は又苦しみに陥るのを恐れ、丁度珈琲の来たのを幸ひ、「メリメエの書簡集」を読みはじめた。

彼はこの書簡集の中にも彼の小説の中のやうに鋭いアフオリズムを閃ひらめかせてゐた。それ等のアフオリズムは僕の気もちをいつか鉄のやうに巖がん畳でふにし出した。

（この影響を受け易いことも僕の弱点の一つだつた。）

僕は一杯の珈琲を飲み了つた後、「何でも来い」と云ふ氣になり、さつさとこのカツフエを後ろにして行つた。

僕は往來を歩きながら、いろいろの飾り窓を覗いて行つた。

或額縁屋の飾り窓はベエトオヴエンの肖像画を掲げてゐた。それは髪を逆立てた天才そのものらしい肖像画だつた。僕はこのベエトオヴエンを滑稽に感ぜずにはゐられなかつた。……

8、齒車

そのうちにふと出合ったのは高等学校以来の旧友だった。

この応用化学の大学教授は大きい中折れ鞆を抱へ、片目だけまつ赤に血を流してゐた。

「どうした、君の目は？」

「これか？　これは唯の結膜炎さ。」

僕はふと十四五年以来、いつも親和力を感じる度に僕の目も彼の目のやうに結膜炎を起すのを思ひ出した。

が何とも言はなかつた。彼は僕の肩を叩き、僕等の友だちのことを話し出した。

それから話をつづけたまま、或カツフエへ僕をつれて行つた。

「久しぶりだなあ。朱舜水しゆしゆんすゐの建碑式以来だらう。」

彼は葉巻に火をつけた後、大理石のテエブル越しにかう僕に話しかけた。

「さうだあのシュシユン　……」

僕はなぜか朱舜水と云ふ言葉を正確に発音出来なかつた。

それは日本語だっただけにちよつと僕を不安にした。しかし彼は無頓着にいろいろのことを話して行つた。

Kと云ふ小説家のことを、彼の買ったブル・ドッグのことを、リウイサイトと云ふ毒瓦斯どくガスのことを。……

「君はちつとも書かないやうだね。『てんきぼ点鬼簿』と云ふのは読んだけれども。…… あれは

君の自叙伝かい？」

「うん、僕の自叙伝だ。」

「あれはちよつと病的だつたぜ。この頃は体は善いいかい？」

「あひかはらず不相変薬ばかり嚥のんでゐる始末だ。」

「僕もこの頃は不眠症だがね。」

「僕も？　——　どうして君は『僕も』と言ふのだ？」

「だつて君も不眠症だつて言ふぢやないか？　不眠症は危険だぜ。……」

彼は左だけ充血した目に微笑に近いものを浮かべてゐた。

僕は返事をする前に「不眠症」のシヤウの発音を正確に出来ないのを感じ出した。

「氣違ひの息子には当り前だ。」

僕は十分とたたないうちにひとり又往来を歩いて行つた。

アスファルトの上に落ちた紙屑は時々僕等人間の顔のやうにも見えないことはなかつた。すると向うから断髪にした女が一人通りかかつた。彼女は遠目には美しかつた。

けれども目の前へ来たのを見ると、小皺こじわのある上に醜い顔をしてゐた。

のみならず妊娠してゐるらしかつた。僕は思はず顔をそむけ、広い横町を曲つて行つた。

8、齒車

が、暫らく歩いてゐるうちに痔の痛みを感じ出した。

それは僕には坐浴より外に癒すことの出来ない痛みだった。

「坐浴、——ベエトオヴエンもやはり坐浴をしてゐた。……」

坐浴に使ふ硫黄の匂ひは忽ち僕の鼻を襲ひ出した。

しかし勿論往来にはどこにも硫黄は見えなかった。

僕はもう一度紙屑の薔薇の花を思ひ出しながら、努めてしつかりと歩いて行つた。

一時間ばかりたつた後、僕は僕の部屋にとどこもつたまま、窓の前の机に向かひ、新しい小説にとりかかつてゐた。

ペンは僕にも不思議だつたくらゐ、ずんずん原稿用紙の上を走つて行つた。

しかしそれも二三時間の後には誰か僕の目に見えないものに抑へられたやうにとまつてしまつた。

僕はやむを得ず机の前を離れ、あちこちと部屋の中を歩きまはつた。

僕の誇大妄想はかう云ふ時に最も著しかつた。

僕は野蛮な遊びの中に僕には両親もなければ妻子もない、唯僕のペンから流れ出した命だけがあると云ふ氣になつてゐた。

けれども僕は四五分の後、電話に向はなければならなかつた。

電話は何度返事をして、唯何か曖昧あいまいな言葉を繰り返して伝へるばかりだった。

が、それは兎も角もモオルと聞えたのに違ひなかった。

僕はとうとう電話を離れ、もう一度部屋の中を歩き出した。

しかしモオルと云ふ言葉だけは妙に気になつてならなかった。

「モオル—— Mole……」

モオルは鼯鼠もぐらと云ふ英語だった。この聯想も僕には愉快ではなかった。

が、僕は二三秒の後、Moleをla mortに綴り直した。

ラ・モオルは、—— 死と云ふ仏蘭西語フランスは忽ち僕を不安にした。

死は姉の夫に迫つてゐたやうに僕にも迫つてゐるらしかった。

けれども僕は不安の中にも何か可笑をかしさを感じてゐた。

のみならずいつか微笑してゐた。

この可笑しさは何の為に起るか？ —— それは僕自身にもわからなかった。

僕は久しぶりに鏡の前に立ち、まともに僕の影と向ひ合つた。僕の影も勿論微笑してゐた。

僕はこの影を見つめてゐるうちに第二の僕のことを思ひ出した。

第二の僕、—— 独逸人ドイツの所謂 Doppelgaengerいはゆる は仕合せにも僕自身に見えたことはなかった。

8、齒車

しかし垂^ア米^メ利^リ加^カの映画俳優になつたK君の夫人は第二の僕を帝劇の廊下に見かけてゐた。
（僕は突然K君の夫人に「先^{せん}達^{だつて}はつい御挨拶もしませんで」と言はれ、当惑したことを覚えてゐる。）

それからもう故人になつた或隻脚の翻譯家もやはり銀座の或煙草屋に第二の僕を見かけてゐた。

死は或は僕よりも第二の僕に来るのかも知れなかつた。

若^もし又僕に来たとしても、――僕は鏡に後ろを向け、窓の前の机へ歸つて行つた。

四角に凝灰岩を組んだ窓は枯芝や池を覗^{のぞ}かせてゐた。僕はこの庭を眺めながら、遠い松林の中に焼いた何冊かのノオト・ブックや未完成の戯曲を思ひ出した。
それからペンをとり上げると、もう一度新らしい小説を書きはじめた。

五 赤光

日の光は僕を苦しめ出した。僕は實際鼯^{もぐらもち}鼠のやうに窓の前へカアテンをおろし、昼間も電燈をともしたまま、せつせと前の小説をつづけて行つた。

それから仕事に疲れると、テエヌの英吉利^{イギリス}文学史をひろげ、詩人たちの生涯に目を通した。彼等はいづれも不幸だつた。

エリザベス朝の巨人たちさへ、——一代の学者だつたベン・ジョンソンさへ彼の足の親指の上に羅馬とカルセエヂとの軍勢の戦ひを始めるのを眺めたほど神経的疲労に陥つてゐた。僕はかう云ふ彼等の不幸に残酷な悪意に充ち満ちた歎びを感じずにはゐられなかつた。

或東かぜの強い夜、（それは僕には善い徴だつた。）僕は地下室を抜けて往来へ出、或老人を尋ねることにした。

彼は或聖書会社の屋根裏にたつた一人小使ひをしながら、祈祷や読書に精進してゐた。

僕等は火鉢に手をかざしながら、壁にかけた十字架の下にいろいろのことを話し合つた。

なぜ僕の母は発狂したか？

なぜ僕の父の事業は失敗したか？

なぜ又僕は罰せられたか？

それ等の秘密を知つてゐる彼は妙に嚴かな微笑を浮かべ、いつまでも僕の相手をした。のみならず時々短い言葉に人生のカリカテュアを描いたりした。

僕はこの屋根裏の隠者を尊敬しない訣には行かなかつた。

しかし彼と話してゐるうちに彼も亦親和力の為に動かされてゐることを発見した。——

「その植木屋の娘と云ふのは器量も善いし、氣立ても善いし、——それはわたしに優しくしてくれるのです。」

8、齒車

「いくつ？」

「ことで十八です。」

それは彼には父らしい愛であるかも知れなかった。

しかし僕は彼の目の中に情熱を感じずにはゐられなかった。

のみならず彼の勧めた林檎りんごはいつか黄ばんだ皮の上へ一角獣の姿を現してゐた。

（僕は木目もくめや珈琲茶碗コオヒイの亀裂ひびに度たび神話的動物を発見してゐた。）

一角獣は麒麟きりんに違ひなかった。

僕は或敵意のある批評家の僕を「九百十年代の麒麟児」と呼んだのを思ひ出し、この十字架のかかった屋根裏も安全地帯ではないことを感じた。

「如何いかがですか、この頃は？」

「不相変あひかはらず神経ばかり苛々いらいらしてね。」

「それは薬では駄目ですよ。信者になる気はありませんか？」

「若もし僕でもなれるものなら……」

「何もむづかしいことはないのです。唯神を信じ、神の子の基督キリストを信じ、基督の行つた奇蹟を信じさへすれば……」

「悪魔を信じることは出来ませんがね。……」

「ではなぜ神を信じないのです？

若し影を信じるならば、光も信じずにはゐられない

でせう？」

「しかし光のない暗やみもあるでせう。」

「光のない暗とは？」

僕は黙るより外はなかつた。彼も亦僕のやうに暗の中を歩いてゐた。

が、暗のある以上は光もあると信じてゐた。僕等の論理の異なるのは唯かう云ふ一点だけだつた。

しかしそれは少くとも僕には越えられない溝に違ひなかつた。……

「けれども光は必ずあるのです。その証拠には奇蹟があるのですから。…… 奇蹟などと云ふものは今でも度たび起つてゐるのですよ。」

「それは悪魔の行ふ奇蹟は。……」

「どうして又悪魔などと云ふのです？」

僕はこの一二年の間、僕自身の経験したことを彼に話したい誘惑を感じた。

が彼から妻子に伝はり、僕も亦母のやうに精神病院にはひることを恐れない訣わけにも行かなかつた。

「あすこにあるのは？」

8、齒車

この逞^{たくま}しい老人は古い書棚をふり返り、何か牧羊神らしい表情を示した。

「ドストエフスキイ全集です。『罪と罰』はお読みですか？」

僕は勿論十年前にも四五冊のドストエフスキイに親しんでゐた。

が、偶然（？）彼の言つた『罪と罰』と云ふ言葉に感動し、この本を貸して貰つた上、前のホテルへ帰ることにした。

電燈の光に輝いた、人通りの多い往来はやはり僕には不快だつた。

殊^{こと}に知り人に遇^あふことは到底堪へられないのに違ひなかつた。

僕は努めて暗い往来を選び、盗人のやうに歩いて行つた。

しかし僕は暫^{しば}らくの後、いつか胃の痛みを感じ出した。

この痛みを止めるものは一杯のウイスキーのあるだけだつた。

僕は或バアを見つけ、その戸を押してはひらうとした。

けれども狭いバアの中には煙草の煙の立ちこめた中に芸術家らしい青年たちが何人も群がつて酒を飲んでゐた。

のみならず彼等のまん中には耳隠しに結^ゆつた女が一人熱心にマンドリンを弾きつづけてゐた。

僕は忽ち当惑を感じ、戸の中へはひらずに引き返した。

するといつか僕の影の左右に揺れてゐるのを発見した。

しかも僕を照らしてゐるのは無気味にも赤い光だった。僕は往来に立ちどまつた。

けれども僕の影は前のやうに絶えず左右に動いてゐた。

僕は怯^おづ怯^おづふり返り、やつとこのバアの軒に吊^つつた色硝子のランタアンを発見した。

ランタアンは烈しい風の為に徐^{おもむ}ろに空中に動いてゐた。……

僕の次にはひつたのは或地下室のレストオランだった。

僕はそのバアの前に立ち、ウイスキーを一杯注文した。

「ウイスキーを？ Black and White ばかりでございですが、……」

僕は曹^{ソオダ}達水の中にウイスキーを入れ、黙つて一口づつ飲みはじめた。

僕の隣には新聞記者らしい三十前後の男が二人何か小声に話してゐた。

のみならず仏蘭西語を使つてゐた。

僕は彼等に背中を向けたまま、全身に彼等の視線を感じた。

それは実際電波のやうに僕の体にこたへるものだつた。

彼等は確かに僕の名を知り、僕の噂^{うはさ}をしてゐるらしかつた。

「Bien……tre's mauvais……pourquoi ?……」

8、齒車

「Pourquoi ?……le diable est mort !……」

「Oui, oui……d'enfer……」

僕は銀貨を一枚投げ出し、（それは僕の持つてゐる最後の一枚の銀貨だった。）この地下室の外へのがれることにした。

夜風の吹き渡る往来は多少胃の痛みの薄らいだ僕の神経を丈夫にした。

僕はラスコルニコフを思ひ出し、何ごととも懺悔ざんげしたい欲望を感じた。

が、それは僕自身の外にも、——いや、僕の家族の外にも悲劇を生じるのに違ひなかった。のみならずこの欲望さへ真実かどうかは疑はしかった。

若し僕の神経さへ常人のやうに丈夫になれば、——けれども僕はその為にはどこかへ行かなければならなかった。

マドリッドへ、リオへ、サマルカンドへ、……

そのうちに或店の軒に吊つた、白い小型の看板は突然僕を不安にした。

それは自動車のタイヤアに翼のある商標を描いたものだつた。

僕はこの商標に人工の翼を手たよりにした古代の希臘ギリシヤ人を思ひ出した。

彼は空中に舞ひ上つた揚句、太陽の光に翼を焼かれ、とうとう海中に溺死してゐた。

マドリッドへ、リオへ、サマルカンドへ、——

僕はかう云ふ僕の夢を嘲笑あざわらはない訣わけには行かなかつた。

同時に又復讐の神に追はれたオレステスを考へない訣にも行かなかつた。

僕は運河に沿ひながら、暗い往来を歩いて行つた。

そのうちに或郊外にある養父母の家を思ひ出した。

養父母は勿論僕の帰るのを待ち暮らしてゐるのに違ひなかつた。

恐らくは僕の子供たちも、——しかし僕はそこへ帰ると、おのづから僕を束縛してしまふ或力を恐れずにはゐられなかつた。

運河は波立つた水の上に達磨船だるまぶねを一艘横づけにしてゐた。

その又達磨船は船の底から薄い光を洩らしてゐた。

そこにも何人かの男女の家族は生活してゐるのに違ひなかつた。

やはり愛し合ふ為に憎み合ひながら。……

が、僕はもう一度戦闘的精神を呼び起し、ウイスキーの酔ひを感じたまま、前のホテルへ帰ることにした。

僕は又机に向ひ、「メリメエの書簡集」を読みつづけた。

それは又いつの間にか僕に生活力を与へてゐた。

しかし僕は晩年のメリメエの新教徒になつてゐたことを知ると、俄にはかに仮面のかげにある

8、齒車

メリメエの顔を感じ出した。

彼も亦やはり僕等のやうに暗やみの中を歩いてゐる一人だつた。

暗の中を？ —— 「暗夜行路」はかう云ふ僕には恐い本に變りはじめた。

僕は憂鬱を忘れる為に「アナトオル・フランスの対話集」を読みはじめた。が、この近代の牧羊神もやはり十字架を荷になつてゐた。……

一時間ばかりたつた後、給仕は僕に一束の郵便物を渡しに顔を出した。

それ等の一つはライプツィツヒの本屋から僕に「近代の日本の女」と云ふ小論文を書けと云ふものだつた。

なぜ彼等は特に僕にかう云ふ小論文を書かせるのであらう？

のみならずこの英語の手紙は「我々は丁度日本画のやうに黒と白の外に色彩のない女の肖像画でも満足である」と云ふ肉筆のP・Sを加へてゐた。

僕はかう云ふ一行に Black and White と云ふウイスキイの名を思ひ出し、ずたずたにこの手紙を破つてしまつた。

それから今度は手当り次第に一つの手紙の封を切り、黄いろい書簡箋しょかんせんに目を通した。

この手紙を書いたのは僕の知らない青年だつた。

しかし二三行も読まないうちに「あなたの『地獄変』は……」と云ふ言葉は僕を苛いら立たせ

ずには措^おかなかつた。

三番目に封を切つた手紙は僕の甥^{をひ}から来たものだつた。

僕はやつと一息つき、家事上の問題などを読んで行つた。

けれどもそれさへ最後へ来ると、いきなり僕を打ちのめした。

「歌集『赤^{しゃく}光^{くわう}』の再版を送りますから……」

赤光！

僕は何ものかの冷笑を感じ、僕の部屋の外へ避難することにした。

廊下には誰も人かげはなかつた。

僕は片手に壁を抑へ、やつとロツビイへ歩いて行つた。

それから椅子に腰をおろし、兎に角巻煙草に火を移すことにした。

巻煙草はなぜかエエア・シツプだつた。

（僕はこのホテルへ落ち着いてから、いつもスタアばかり吸ふことにしてゐた。）

人工の翼はもう一度僕の目の前へ浮かび出した。僕は向うにゐる給仕を呼び、スタアを二箱貰うことにした。

しかし給仕を信用すれば、スタアだけは生憎^{あいにく}品切れだつた。

「エエア・シツプならばございますが、……」

8、齒車

僕は頭を振つたまま、広いロツビイを眺めまはした。

僕の向うには外国人が四五人テエブルを囲んで話してゐた。

しかも彼等の中の一人、—— 赤いワン・ピイスを着た女は小声に彼等と話しながら、時々僕を見てゐるらしかった。

「Mrs. Townshead……」

何か僕の目に見えないものはかう僕に囁いて行つた。ミセス・タウンズヘッドなどと云ふ名は勿論僕の知らないものだつた。たとひ向うにゐる女の名にしても、—— 僕は又椅子から立ち上り、発狂することを恐れながら、僕の部屋へ帰ることにした。

僕は僕の部屋へ帰ると、すぐに或精神病院へ電話をかけるつもりだつた。

が、そこへはひることは僕には死ぬことに変らなかつた。

僕はさんざんためらつた後、この恐怖を紛らす為に「罪と罰」を読みはじめた。

しかし偶然開いた頁は「カラマゾフ兄弟」の一節だつた。

僕は本を間違へたのかと思ひ、本の表紙へ目を落した。

「罪と罰」—— 本は「罪と罰」に違ひなかつた。

僕はこの製本屋の綴ぢ違へに、—— その又綴ぢ違へた頁を開いたことに運命の指の動いてゐるのを感じ、やむを得ずそこを読んで行つた。

けれども一頁も読まないうちに全身が震へるのを感じ出した。

そこは悪魔に苦しめられるイヴァンを描いた一節だった。

イヴァンを、ストリントベルグを、モオパスサンを、或はこの部屋にゐる僕自身を。……

かう云ふ僕を救ふものは唯眠りのあるだけだった。

しかし催眠剤はいつの間にか一包みも残らずになくなつてゐた。

僕は到底眠らずに苦しみつづけるのに堪へなかつた。

が、絶望的な勇氣を生じ、珈琲コオヒイを持つて来て貰つた上、死にもの狂ひにペンを動かすことにした。

二枚、五枚、七枚、十枚、——原稿は見る見る出来上つて行つた。

僕はこの小説の世界を超自然の動物に満たしてゐた。

のみならずその動物の一匹に僕自身の肖像画を描いてゐた。

けれども疲労は徐ろおもむに僕の頭を曇らせはじめた。

僕はとうとう机の前を離れ、ベッドの上へ仰向けになつた。

それから四五十分間は眠つたらしかつた。

しかし又誰か僕の耳にかう云ふ言葉を囁いたのを感じ、忽ち目を醒さまして立ち上つた。

「Le diable est mort」

8、齒車

凝灰岩の窓の外はいつか冷えびえと明けかかつてゐた。

僕は丁度戸の前に佇み、誰もゐない部屋の中を眺めまはした。

すると向うの窓硝子は斑^{まだ}らに外気に曇つた上に小さい風景を現してゐた。

それは黄ばんだ松林の向うに海のある風景に違ひなかつた。

僕は怯^おづ怯^おづ窓の前へ近づき、この風景を造つてゐるものは実は庭の枯芝や池だつたことを発見した。

けれども僕の錯覚はいつか僕の家に対する郷愁に近いものを呼び起してゐた。

僕は九時にでもなり次第、或雑誌社へ電話をかけ、兎に角金の都合をした上、僕の家へ帰る決心をした。

机の上に置いた鞆の中へ本や原稿を押しこみながら。

六 飛行機

僕は東海道線の或停車場からその奥の或避暑地へ自動車を飛ばした。

運転手はなぜかこの寒さに古いレエン・コートをひつかけてゐた。

僕はこの暗合を無気味に思ひ、努めて彼を見ないやうに窓の外へ目をやることにした。

すると低い松の生えた向うに、—— 恐らくは古い街道に葬式が一行通るのを見つけた。

白張りの提灯ちやうちんや竜燈りゆうとうはその中に加はつてはゐないらしかつた。

が、金銀の造花の蓮は静かに輿こしの前後に揺ゆいで行つた。……

やつと僕の家へ歸つた後、僕は妻子や催眠藥の力により、二三日は可かな也平和に暮らした。僕の二階は松林の上にかすかに海を覗のぞかせてゐた。

僕はこの二階の机に向かひ、鳩の声を聞きながら、午前だけ仕事をすることにした。鳥は鳩や鴉からすの外に雀も縁側へ舞ひこんだりした。それも亦僕には愉快だつた。

「喜雀堂きじやくだうに入る。」――僕はペンを持つたまま、その度にこんな言葉を思ひ出した。

或生暖かい曇天の午後、僕は或雜貨店へインクを買ひに出かけて行つた。

するとその店に並んでゐるのはセピア色のインクばかりだつた。

セピア色のインクはどのインクよりも僕を不快にするのを常としてゐた。

僕はやむを得ずこの店を出、人通りの少ない往来をぶらぶらひとり歩いて行つた。

そこへ向うから近眼らしい四十前後の外国人が一人肩を聳そびかせて通りかかつた。

彼はここに住んでゐる被害妄想狂の瑞典人スウェーデンだつた。

しかも彼の名はストリントベルグだつた。僕は彼とすれ違ふ時、肉体的に何かこたへるのを感じた。

この往来は僅わづかに二三町だつた。が、その二三町を通るうちに丁度半面だけ黒い犬は四

8、齒車

度も僕の側を通つて行つた。

僕は横町を曲りながら、ブラック・アンド・ホワイトのウイスキーを思ひ出した。のみならず今のストリントベルグのタイも黒と白だつたのを思ひ出した。

それは僕にはどうしても偶然であるとは考へられなかつた。

若し偶然でないとすれば、――僕は頭だけ歩いてゐるやうに感じ、ちよつと往来に立ち止まつた。

道ばたには針金の柵の中にかすかに虹の色を帯びた硝子ガラスの鉢が一つ捨ててあつた。

この鉢は又底のまはりに翼らしい模様を浮き上らせてゐた。

そこへ松の梢から雀が何羽も舞ひ下つて来た。

が、この鉢のあたりへ来ると、どの雀も皆言ひ合はせたやうに一度に空中へ逃げのぼつて行つた。……

僕は妻の実家へ行き、庭先の籐椅子に腰をおろした。

庭の隅の金網の中には白いレグホオン種の鶏が何羽も静かに歩いてゐた。

それから又僕の足もとには黒犬も一匹横になつてゐた。

僕は誰にもわからない疑問を解かうとあせりながら、兎に角外見だけは冷やかに妻の母や弟と世間話をした。

「静かですね、ここへ来ると。」

「それはまだ東京よりもね。」

「ここでもうるさいことはあるのですか？」

「だつてこれも世の中ですもの。」

妻の母はかう言つて笑つてゐた。

実際この避暑地も亦「世の中」であるのに違ひなかつた。

僕は僅かに一年ばかりの間にどのくらゐここにも罪惡や悲劇の行はれてゐるかを知り悉してゐた。

徐ろに患者を毒殺しようとした医者、養子夫婦の家に放火した老婆、妹の資産を奪はうとした弁護士、——それ等の人々の家を見ることは僕にはいつも人生の中に地獄を見ることに異らなかつた。

「この町には氣違ひが一人ゐますね。」

「Hちゃんでせう。あれは氣違ひぢやないのですよ。莫迦になつてしまつたのですよ。」

「早發性痴呆と云ふやつですね。僕はあいつを見る度に氣味が悪くつてたまりません。あいつはこの間もどう云ふ量見か、馬頭觀世音ばとうくわんぜおんの前にお時宜じぎをしてゐました。」

「氣味が悪くなるなんて、……もつと強くならなければ駄目ですよ。」

8、齒車

「兄さんは僕などよりも強いんだけど、――」
無精髭を伸ばした妻の弟も寢床の上に起き直ったまま、いつもの通り遠慮勝ちに僕等の話に加はり出した。

「強い中に弱いところもあるから。……」

「おやおや、それは困りましたね。」

僕はかう言つた妻の母を見、苦笑しない訣には行かなかつた。

すると弟も微笑しながら、遠い垣の外の松林を眺め、何かうつとりと話しつづけた。

（この若い病後の弟は時々僕には肉体を脱した精神そのもののやうに見えるのだつた。）

「妙に人間離れをしてゐるかと思へば、人間的欲望もずるぶん烈しいし、……」

「善人かと思へば、悪人でもあるしさ。」

「いや、善悪と云ふよりも何かもつと反対なものが、……」

「ぢや大人の中に子供もあるのだらう。」

「さうでもない。僕にははつきりと言へないけれど、…… 電気の両極に似てゐるのかな。」

何しろ反対なものを一しよに持つてゐる。」

そこへ僕等を驚かしたのは烈しい飛行機の響きだつた。

僕は思はず空を見上げ、松の梢に触れないばかりに舞ひ上つた飛行機を発見した。

それは翼を黄いろに塗つた、珍らしい単葉の飛行機だつた。

鶏や犬はこの響きに驚き、それぞれ八方へ逃げまはつた。

殊に犬は吠え立てながら、尾を捲いて縁の下へはひつてしまつた。

「あの飛行機は落ちはしないか？」

「大丈夫。……兄さんは飛行機病と云ふ病氣を知つてゐる？」

僕は巻煙草に火をつけながら、「いや」と云ふ代りに頭を振つた。

「ああ云ふ飛行機に乗つてゐる人は高空の空氣ばかり吸つてゐるものだから、だんだんこの地面の上の空氣に堪へられないやうになつてしまふのだつて。……」

妻の母の家を後ろにした後、僕は枝一つ動かさない松林の中を歩きながら、ぢりぢり憂鬱になつて行つた。

なぜあの飛行機はほかへ行かずに僕の頭の上を通つたのであらう？

なぜ又あのホテルは巻煙草のエエア・シツプばかり売つてゐたのであらう？

僕はいろいろの疑問に苦しみ、人氣のない道を選つて歩いて行つた。

海は低い砂山の向うに一面に灰色に曇つてゐた。

その又砂山にはブランコのないブランコ台が一つ突つ立つてゐた。

僕はこのブランコ台を眺め、忽ち絞首台を思ひ出した。

8、齒車

實際又ブランコ台の上には鴉が二三羽とまつてゐた。

鴉は皆僕を見ても、飛び立つ気色けしきさへ示さなかつた。

のみならずまん中にとまつてゐた鴉は大きい嘴くちばしを空へ挙げながら、確かに四たび声を出した。

僕は芝の枯れた砂土手に沿ひ、別荘の多い小みちを曲ることにした。

この小みちの右側にはやはり高い松の中に二階のある木造の西洋家屋が一軒白じらと立つてゐる筈だつた。

（僕の親友はこの家のことを「春のゐる家」と称してゐた。）が、この家の前へ通りかかると、そこにはコンクリートの土台の上にバス・タツブが一つあるだけだつた。

火事——僕はすぐにかう考へ、そちらを見ないやうに歩いて行つた。

すると自転車に乗つた男が一人まつすぐに向うから近づき出した。

彼は焦茶こげちやいろの鳥打ち帽をかぶり、妙にぢつと目を据ゑたまま、ハンドルの上へ身をかがめてゐた。

僕はふと彼の顔に姉の夫の顔を感じ、彼の目の前へ来ないうちに横の小みちへはひることにした。

しかしこの小みちのまん中にも腐つた鼯鼠もぐらもちの死骸が一つ腹を上にして転がつてゐた。

何ものかの僕を狙つてゐることは一足毎に僕を不安にし出した。

そこへ半透明な齒車も一つづつ僕の視野を遮り出した。僕は愈最後の時の近づいたことを恐れながら、頸すぢをまつ直にして歩いて行つた。

齒車は数の殖えるのにつれ、だんだん急にまはりはじめた。

同時に又右の松林はひつそりと枝をかはしたまま、丁度細かい切子硝子を透かして見るやうになりはじめた。

僕は動悸の高まるのを感じ、何度も道ばたに立ち止まらうとした。

けれども誰かに押されるやうに立ち止まることさへ容易ではなかつた。……

三十分ばかりたつた後、僕は僕の二階に仰向けになり、ちつと目をつぶつたまま、烈しい頭痛をこらへてゐた。

すると僕の眶の裏に銀色の羽根を鱗のやうに畳んだ翼が一つ見えはじめた。

それは実際網膜の上にはつきりと映つてゐるものだつた。

僕は目をあいて天井を見上げ、勿論何も天井にはそんなものないことを確めた上、もう一度目をつぶることにした。

しかしやはり銀色の翼はちやんと暗い中に映つてゐた。

僕はふとこの間乗つた自動車のラデイエエタア・キャップにも翼のついてゐたことを思ひ

8、齒車

出した。……

そこへ誰か梯子段を慌^{あわただ}しく昇つて来たかと思ふと、すぐに又ばたばた駈け下りて行つた。

僕はその誰かの妻だつたことを知り、驚いて体を起すが早いか、丁度梯子段の前にある、薄暗い茶の間へ顔を出した。

すると妻は突つ伏したまま、息切れをこらへてみると見え、絶えず肩を震はしてゐた。

「どうした？」

「いえ、どうもしないのです。……」

妻はやつと顔を擡^{もた}げ、無理に微笑して話しつづけた。

「どうもした訣^{わけ}ではないのですけれどもね、唯何だかお父さんが死んでしまひさうな気がしたものですから。……」

それは僕の一生の中でも最も恐しい経験だつた。――僕はもうこの先を書きつづける力を持つてゐない。かう云ふ氣もちの中に生きてゐるのは何とも言はれない苦痛である。誰か僕の眠つてゐるうちにそつと絞め殺してくれるものはないか？

（昭和二年、遺稿）

杜子春

（新字旧仮名）

芥川龍之介

大正九年六月

或春の日暮です。

唐の都洛陽らくやうの西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる、一人の若者がありました。

若者は名は杜子春とししゆんといつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費つかひ尽つくして、その日の暮しにも困る位、憐あはれな身分になつてゐるのです。

何しろその頃洛陽といへば、天下に並ぶもののない、繁昌を極めた都ですから、往來わうらいにはまだしつきりなく、人や車が通つてゐました。

門一ぱいに当つてゐる、油のやうな夕日の光の中に、老人のかぶつた紗しやの帽子や、土耳其トルコの女の金の耳環や、白馬に飾つた色系の手綱たづなが、絶えず流れて行く容子ようすは、まるで画のやうな美しさです。

しかし杜子春は相変らず、門の壁に身を凭もたせて、ぼんやり空ばかり眺めてゐました。

空には、もう細い月が、うらうらと靡なびいた霞の中に、まるで爪の痕あとかと思ふ程、かすかに白く浮んでゐるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行つても、泊めてくれる所はなささうだし——こんな思ひをして生きてゐる位なら、一そ川へでも身を投げて、死んでしまつた

方がましかも知れない。」

杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないことを思ひめぐらしてゐたのです。するとどこからやつて来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇すがめの老人があります。

それが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落すと、ちつと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考へてゐるのだ。」と、横柄わうへいに言葉をかけました。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考へてゐるのです。」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思はず正直な答をしました。

「さうか。それは可哀さうだな。」

老人は暫しばらく何事か考へてゐるやうでしたが、やがて、往来にさしてゐる夕日の光を指さしながら、

「ではおれが好いことを一つ教へてやろう。今この夕日の中に立つて、お前の影が地に映つたら、その頭に当る所を夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつてゐる筈だから。」

「ほんたうですか。」

杜子春は驚いて、伏せてゐた眼を挙げました。

所が更に不思議なことには、あの老人はどこへ行つたか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。

その代り空の月の色は前よりも猶なほ白くなつて、休みな往来の人通りの上には、もう氣の早い蝙蝠かうもりが二三匹ひらひら舞つてゐました。

二

杜子春とししゆんは一日の内に、洛陽の都でも唯一人といふ大金持になりました。

あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそつと掘つて見たら、大きな車にも余る位、黄金が一山出て来たのです。

大金持になつた杜子春は、すぐに立派な家を買つて、玄宗皇帝げんそうにも負けない位、贅沢ぜいたくな暮しをし始めました。

蘭陵らんりやうの酒を買はせるやら、桂州きゆうの竜眼肉りゆうがんにくをとりよせるやら、日に四度色の変る牡丹ぼたんを庭に植ゑさせるやら、白孔雀しろくけいやくを何羽も放し飼ひにするやら、玉を集めるやら、錦を縫はせるやら、香木かうぼくの車を造らせるやら、象牙の椅子を誂あつらへるやら、その贅沢を一々書いてゐては、いつになつてもこの話がおしまひにならない位です。

するとかういふ噂うはさを聞いて、今までは路で行き合つても、挨拶さへしなかつた友だちなどが、朝夕遊びにやつて来ました。

それも一日毎に数が増して、半年ばかり経つ内には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、一人もない位になつてしまつたのです。

杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りの又盛なことは、中々口には尽されません。

極ごくかいつまんだだけをお話しても、杜子春が金の杯に西洋から来た葡萄酒を汲んで、天竺てんぢく生れの魔法使が刀を呑んで見せる芸に見とれてゐると、そのまはりには二十人の女たちが、十人は翡翠ひすみの蓮の花を、十人は瑪瑙めなうの牡丹の花を、いづれも髪に飾りながら、笛や琴を節面白く奏してゐるといふ景色なのです。

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅沢ぜいたく家の杜子春も、一年二年と経つ内には、だんだん貧乏になり出しました。

さうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通つてさへ、挨拶一つして行きません。

ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになつて見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸さうといふ家は、一軒もなくなつてしまひました。

9、杜子春

いや、宿を貸す所か、今では腕に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立つてゐました。

するとやはり昔のやうに、片目眇すがめの老人が、どこからか姿を現して、

「お前は何を考へてゐるのだ。」と、声をかけるではありませんか。

杜子春は老人の顔を見ると、恥しさうに下を向いた儘まま、暫しばらくは返事もしませんでした。

が、老人はその日も親切さうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じやうに、

「私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考へてゐるのです。」と、恐る恐る返事をしました。

「さうか。それは可哀さうだな、ではおれが好いことを一つ教へてやらう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その胸に当る所を、夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつてゐる筈だから。」

老人はかう言つたと思ふと、今度も亦人またごみの中へ、掻き消すやうに隠れてしまひました。

杜子春はその翌日から、忽ちたちま天下第一の大金持に返りました。と同時に相変らず、仕放しほう題だいな贅沢をし始めました。

庭に咲いてゐる牡丹の花、その中に眠つてゐる白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から来た魔法使——すべてが昔の通りなのです。

ですから車に一ぱいあつた、あの^{おびただ}夥しい黄金も、又三年ばかり経つ内には、すつかりなくなつてしまひました。

三

「お前は何を考へてゐるのだ。」

片目眇の老人は、三度杜子春の前へ来て、同じことを問ひかけました。勿論彼はその時も、洛陽の西の門の下に、ほそぼそと霞を破つてゐる三日月の光を眺めながら、ぼんやり^{たたず}佇んでゐたのです。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思つてゐるのです。」

「さうか。それは可哀さうだな。ではおれが好いことを教へてやらう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その腹に当る所を、夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの——」

老人がここまで言ひかけると、杜子春は急に手を挙げて、その言葉を遮^{おさへ}りました。「いや、お金はもう入らないのです。」

9、杜子春

「金はもう入らない？　　ははあ、では贅沢をするにはとうとう飽きてしまったと見えるな。」

老人は審^{いぶか}しさうな眼つきをしながら、ぢつと杜子春の顔を見つめました。

「何、贅沢に飽きたのぢやありません。人間といふものに愛想がつきたのです。」

杜子春は不平さうな顔をしながら、突慳貪^{つげんどん}にかう言ひました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたのだ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持になつた時には、世辞も追従^{つみしやう}もしますけれど、一旦貧乏になつて御覧なさい。柔^{やさ}しい顔さへもして見せはしません。そんなことを考へると、たとひもう一度大金持になつた所が、何にもならないやうな気がするのです。」

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑ひ出しました。

「さうか。いや、お前は若い者に似合はず、感心に物のわかる男だ。ではこれから貧乏をしても、安らかに暮して行くつもりか。」

杜子春はちよいとためらひました。

が、すぐに思ひ切つた眼を挙げると、訴へるやうに老人の顔を見ながら、

「それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子になつて、仙術の修業をしたと思ふのです。いいえ、隠してはいけません。あなたは道德の高い仙人でせう。仙人で

なければ、一夜の内に私を天下第一の大金持にすることは出来ない筈です。どうか私の先生になつて、不思議な仙術を教へて下さい。」

老人は眉をひそめた儘、暫くは黙つて、何事か考へてゐるやうでしたが、やがて又につこり笑ひながら、

「いかにもおれは峨眉山に棲んでゐる、鉄冠子といふ仙人だ。始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好きさうだつたから、二度まで大金持にしてやつたのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやらう。」と、快く願を容れてくれました。

杜子春は喜んだの、喜ばないのではありません。老人の言葉がまだ終らない内に、彼は大地に額をつけて、何度も鉄冠子に御時宜をしました。

「いや、さう御札などは言つて貰ふまい。いくらおれの弟子にした所で、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第できまることだからな。——が、兎も角もまづおれと一しよに、峨眉山の奥へ来て見るが好い。おお、幸、ここに竹杖が一本落ちてゐる。では早速これへ乗つて、一飛びに空を渡るとしよう。」

鉄冠子はそのこにあつた青竹を一本拾ひ上げると、口の中に呪文を唱へながら、杜子春と一しよにその竹へ、馬にでも乗るやうに跨りました。すると不思議ではありませんか。竹杖は忽ち竜のやうに、勢よく大空へ舞ひ上つて、晴れ渡つた春の夕空を峨眉山の方角へ飛

9、杜子春

んで行きました。

杜子春は胆きもをつぶしながら、恐る恐る下を見下しました。が、下には唯青い山々が夕明りの底に見えるばかりで、あの洛陽の都の西の門は、（とうに霞まぎに紛れたのでせう。）どこを探しても見当りません。その内に鉄冠子は、白い鬢びんの毛を風に吹かせて、高らかに歌を唱ひ出しました。

朝あしたに北海に遊び、暮ぐには蒼そう。

袖裏しうりの青蛇せいだ、胆氣たんき粗そなり。

三たび嶽陽がくやうに入れども、人識じんしらず。

朗吟して、飛過ひくわす洞庭湖。

四

二人を乗せた青竹は、間もなく峨眉山へ舞ひ下りました。

そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、空中に垂れた北斗の星が、茶碗程の大きさに光つてゐました。

元より人跡の絶えた山ですから、あたりはしんと静まり返つて、やつと耳にはひるものは、

後の絶壁に生えてゐる、曲りくねつた一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に来ると、鉄冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、

「おれはこれから天上へ行つて、西王母せいわうぼに御眼にかかつて来るから、お前はその間ここに坐つて、おれの帰るのを待つてゐるが好い。多分おれがゐなくなると、いろいろな魔性まじやうが現れて、お前をたぶらかさうとするだらうが、たとひどんなことが起らうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだと言ひました。覚悟をしろ。好いか。天地が裂けても、黙つてゐるのだぞ。」と言ひました。

「大丈夫です。決して声などは出しはしません。命がなくなつても、黙つてゐます。」

「さうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行つて来るから。」

老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨またがつて、夜目にも削つたやうな山々の空へ、一文字に消えてしまひました。

杜子春はたつた一人、岩の上に坐つた儘、静に星を眺めてゐました。

すると彼是かれこれ半時ばかり経つて、深山の夜気が肌寒く薄い着物に透とほり出した頃、突然空中に声があつて、

「そこにゐるのは何者だ。」と叱りつけるではありませんか。

しかし杜子春は仙人の教通り、何とも返事をしずにはゐました。

9、杜子春

所が又暫くすると、やはり同じ声が響いて、

「返事をしないと立ち所に、命はないものと覚悟しろ。」と、いかめしく嚇おどしつけるのです。

杜子春は勿論黙つてゐました。

と、どこから登つて来たか、爛々らんらんと眼を光らせた虎が一匹、忽然こつぜんと岩の上に躍り上つて、杜子春の姿を睨みながら、一声高く哮たけりました。

のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざわざわ揺れたと思ふと、後の絶壁の頂からは、四斗樽程の白蛇はくだが一匹、炎のやうな舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。

杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐つてゐました。

虎と蛇とは、一つ餌食を狙つて、互に隙でも窺うかがふのか、暫くは睨合ひの体でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が、虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に吞まれるか、杜子春の命は瞬またたく内に、なくなつてしまふと思つた時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さつきの通りこうこうと枝を鳴らしてゐるばかりなのです。

杜子春はほつと一息しながら、今度はどんなことが起るか、心待ちに待つてゐました。

すると一陣の風が吹き起つて、墨のやうな黒雲が一面にあたりをとぎすや否や、うす紫

の稲妻がやにはに闇を二つに裂いて、凄じく雷が鳴り出しました。

いや、雷ばかりではありません。

それと一しよに瀑のやうな雨も、いきなりどうどうと降り出したのです。

杜子春はこの天変の中に、恐れ気もなく坐つてゐました。

風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稲妻の光、――暫くはさすがの峨眉^{がびざん}山も、覆^{くつがへ}るかと思ふ位でしたが、その内に耳をもつんごく程、大きな雷鳴が轟^{とどろ}いたと思ふと、空に渦巻いた黒雲の中から、まつ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思はず耳を抑へて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡つて、向うに聳^{そび}えた山山の上にも、茶碗程の北斗の星が、やはりきらきら輝いてゐます。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じやうに、鉄冠^{てつくわん}子の留守をつけこんだ、魔性の悪戯^{いたづら}に違ひありません。

杜子春は漸^{やうや}く安心して、額の冷汗を拭ひながら、又岩の上に坐り直しました。

が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐つてゐる前へ、金の鎧^{よろひ}を着^き下した、身の丈三丈もあらうといふ、厳かな神将が現れました。神将は手に三叉^{みつまた}の戟^{ほこ}を持つてゐましたが、いきなりその戟の切先を杜子春の胸もとへ向けながら、眼を嗔^{いか}らせて叱りつけるのを聞けば、

9、杜子春

「こら、その方は一体何物だ。この峨眉山といふ山は、天地開闢かいびやくの昔から、おれが住居すまひをしてゐる所だぞ。それも憚はばからずたつた一人、ここへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかつたら、一刻も早く返答しろ。」と言ふのです。

しかし杜子春は老人の言葉通り、默然もくねんと口を噤つぐんでゐました。

「返事をしないか。――しないな。好し。しなければ、しないで勝手にしろ。その代りおれの眷属けんぞくたちが、その方をずたずたに斬つてしまふぞ。」

神将は戟ほこを高く挙げて、向うの山の空を招きました。

その途端に闇がさつと裂けると、驚いたことには無数の神兵が、雲の如く空に充満みちみちて、それが皆槍や刀をきらめかせながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしてゐるのです。

この景色を見た杜子春は、思はずあつと叫びさうにしましたが、すぐに又鉄冠子の言葉を思ひ出して、一生懸命に黙つてゐました。

神将は彼が恐れないのを見ると、怒つたの怒らないのではありません。

「この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとつてやるぞ。」

神将はかう喚わめくが早いか、三叉みつまたの戟ほこを閃ひらめかせて、一突きに杜子春を突き殺しました。

さうして峨眉山もどよむ程、からからと高く笑ひながら、どこともなく消えてしまひまし

た。

勿論この時はもう無数の神兵も、吹き渡る夜風の音と一しよに、夢のやうに消え失せた後だつたのです。

北斗の星は又寒さうに、一枚岩の上を照らし始めました。

絶壁の松も前に変らず、こうこうと枝を鳴らせてゐます。

が、杜子春はとうに息が絶えて、仰向けにそこへ倒れてゐました。

五

杜子春の体は岩の上へ、仰向けに倒れてゐましたが、杜子春の魂は、静に体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には、闇穴道あんけつだうといふ道があつて、そこは年中暗い空に、氷のやうな冷たい風がびゅうびゅう吹き荒すさんでゐるのです。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯木ただの葉のやうに、空を漂つて行きましたが、やがて森羅殿しんらでんといふ額の懸つた立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にゐた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまはりを取り捲いて、

9、杜子春

階きざはしの前へ引き据ゑました。階の上には一人の王様が、まつ黒な袍きものに金の冠かんむりをかぶつて、いかめしくあたりを睨にらんでゐます。

これは兼ねて噂うはさに聞いた、閻魔大王えんまに違いありません。

杜子春はどうなることかと思ひながら、恐る恐るそこへ跪ひざまづいてゐました。

「こら、その方は何の為に、峨眉山の上へ坐つてゐた？」

閻魔大王の声は雷のやうに、階の上から響きました。杜子春は早速その間に答へようとしましたが、ふと又思ひ出したのは、「決して口を利くな。」といふ鉄冠子の戒めの言葉です。そこで唯頭を垂れた儘、唾おしのやうに黙つてゐました。すると閻魔大王は、持つてゐた鉄の笏しやくを挙げて、顔中の鬚ひげを逆立てながら、

「その方はここをどこだと思ふ？ 速すみやかに返答をすれば好し、さもなければ時を移さず、

地獄の呵責かやくに遇あはせてくれるぞ。」と、威丈高ゐただかに罵ののしりました。

が、杜子春は相変らず唇くちびる一つ動かしません。

それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの方を向いて、荒々しく何か言ひつけると、鬼どもは一度に畏かしこまつて、忽ち杜子春を引き立てながら、森羅殿の空へ舞ひ上りました。

地獄には誰でも知つてゐる通り、剣つるぎの山や血の池の外にも、焦熱地獄せうねつといふ焰の谷や極寒地獄かんといふ氷の海が、真暗な空の下に並んでゐます。

鬼どもはさういふ地獄の中へ、代る代る杜子春を抛りこみました。

ですから杜子春は無残にも、剣に胸を貫かれるやら、焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥かれるやら、鉄の杵に撞かれるやら、油の鍋に煮られるやら、毒蛇に脳味噌を吸はれるやら、熊鷹に眼を食はれるやら、――その苦しみを数へ立ててゐては、到底際限がない位、あらゆる責苦に遇はされたのです。

それでも杜子春は我慢強く、ぢつと齒を食ひしばつた儘、一言も口を利きませんでした。

これにはさすがの鬼どもも、呆れ返つてしまつたのでせう。

もう一度夜のやうな空を飛んで、森羅殿の前へ歸つて来ると、さつきの通り杜子春を階の下に引き据ゑながら、御殿の上の閻魔大王に、

「この罪人はどうしても、ものを言ふ氣色がございません。」と、口を揃へて言上しました。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れてゐましたが、やがて何か思ひついたと見え、

「この男の父母は、畜生道に落ちてゐる筈だから、早速ここへ引き立てて来い。」と、一匹の鬼に云ひつけました。

鬼は忽ち風に乗つて、地獄の空へ舞ひ上りました。

9、杜子春

と思ふと、又星が流れるやうに、二匹の獣を駆り立てながら、さつと森羅殿の前へ下りて来ました。

その獣を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。

なぜかといへばそれは二匹とも、形は見すばらしい痩せ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。

「こら、その方は何のために、峨眉山の上に坐つてゐたか、まつすぐに白状しなければ、今度はその方の父母に痛い思ひをさせてやるぞ。」

杜子春はかう嚇おどされても、やはり返答をしずにゐました。

「この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さへ都合が好ければ、好いと思つてゐるのだな。」

閻魔大王は森羅殿も崩れる程、凄じい声で喚きました。

「打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまへ。」

鬼どもは一斉に「はつ」と答へながら、鉄の鞭むちをとつて立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、未練みれん未積みしやくなく打ちのめしました。

鞭はりうりうと風を切つて、所嫌はず雨のやうに、馬の皮肉を打ち破るのです。

馬は、——畜生になつた父母は、苦しさうに身を悶もだえて、眼には血の涙を浮べた儘、見て

もみられない程嘶いみなき立てました。

「どうだ。まだその方は白状しないか。」

閻魔大王は鬼どもに、暫く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。

もうその時には二匹の馬も、肉は裂け骨は碎けて、息も絶え絶えに階きざはしの前へ、倒れ伏してゐたのです。

杜子春は必死になつて、鉄冠子の言葉を思ひ出しながら、緊かたく眼をつぶつてゐました。するとその時彼の耳には、殆ほとん声とはいへない位、かすかな声が伝はつて来ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰おつしやつても、言ひたくないことは黙もくつて御出おいで。」

それは確に懐しい、母親の声に違ひありません。

杜子春は思はず、眼をあきました。

さうして馬の一匹が、力なく地上に倒れた儘、悲しさうに彼の顔へ、ぢつと眼をやつてゐるのを見ました。

母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思ひやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色けしきさへも見せないのです。

大金持になれば御世辞を言ひ、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何

といふ有難い志でせう。

何といふ健気な決心でせう。

杜子春は老人の戒めも忘れて、まろ転ぶやうにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん。」と一声を叫びました。……

六

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇んでゐるのでした。

霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、——すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「どうだな。おれの弟子になつた所が、とても仙人にはなれはすまい。」

片目すがめ眇の老人は微笑を含みながら言ひました。

「なれません。なれませんが、しかし私はなれなかつたことも、反かへつて嬉しい気がするのです。」

杜子春はまだ眼に涙を浮べた儘、思はず老人の手を握りました。

「いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けてゐる父母を見ては、

黙つてゐる訳には行きません。」

「もしお前が黙つてゐたら——」と鉄冠子は急におごそか厳な顔になつて、ぢつと杜子春を見つめました。

「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ。

—— お前はもう仙人になりたいといふ望も持つてゐまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になつたら好いと思ふな。」

「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです。」

杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子がこも罩つてゐました。

「その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇はないから。」

鉄冠子のかう言ふ内に、もう歩き出してゐましたが、急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、「おお、幸さいはひ、今思ひ出したが、おれは泰山の南の麓ふもとに一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まふが好い。今頃は丁度家のまはりに、桃の花が一面に咲いてゐるだらう。」と、さも愉快さうにつけ加へました。

(大正九年六月)

或阿呆の一生

(新字旧仮名)

芥川龍之介

昭和二年六月 遺稿

僕はこの原稿を発表する可否は勿論、発表する時や機関も君に一任したいと思つてゐる。

君はこの原稿の中に出て来る大抵の人物を知つてゐるだらう。しかし僕は発表するとしても、インデキスをつけずに貰ひたいと思つてゐる。

僕は今最も不幸な幸福の中に暮らしてゐる。しかし不思議にも後悔してゐない。唯僕の如き悪夫、悪子、悪親を持つたものたちを如何にも氣の毒に感じてゐる。ではさやうなら。僕はこの原稿の中では少くとも意識的には自己弁護をしなかつたつもりだ。

最後に僕のこの原稿を特に君に托するのは君の恐らくは誰よりも僕を知つてゐると思ふからだ。（都会人と云ふ僕の皮を剥ぎさへすれば）どうかこの原稿の中に僕の阿呆さ加減を笑つてくれ給へ。

昭和二年六月二十日

久米正雄君

芥川龍之介

一 時代

それは或本屋の二階だつた。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子はしごに登り、新らしい本を探してゐた。モオパスサン、ボオドレエル、ストリントベリイ、イブセン、シヨウ、トルストイ、……

そのうちに日の暮は迫り出した。しかし彼は熱心に本の背文字を読みつづけた。そこに並んでゐるのは本といふよりも寧ろむし世紀末それ自身だつた。ニイチエ、ヴェルレエン、ゴックウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプトマン、フロオベエル、……

彼は薄暗がりと戦ひながら、彼等の名前を数へて行つた。が、本はおのづからもの憂い影の中に沈みはじめた。彼はとうとう根氣も尽き、西洋風の梯子を下りようとした。すると傘のない電燈が一つ、丁度彼の頭の上に突然ぽかりと火をともした。彼は梯子の上に佇たたずんだまま、本の間に動いてゐる店員や客を見下みおろした。彼等は妙に小さかつた。のみならず如何にも見すばらしかつた。

「人生は一行のボオドレエルにも若しかない。」

彼は暫く梯子の上からかう云ふ彼等を見渡してゐた。……

二 母

狂人たちは皆同じやうに鼠色の着物を着せられてゐた。

広い部屋はその為に一層憂鬱に見えるらしかつた。彼等の一人はオルガンに向ひ、熱心に讃美歌を弾きつづけてゐた。同時に又彼等の一人は丁度部屋のまん中に立ち、踊ると云ふよりも跳ねまはつてゐた。

彼は血色の善い医者としよにかう云ふ光景を眺めてゐた。彼の母も十年前には少しも彼等と変らなかつた。少しも、——彼は實際彼等の臭氣に彼の母の臭氣を感じた。

「ぢや行かうか？」

医者は彼の先に立ちながら、廊下伝ひに或部屋へ行つた。その部屋の隅にはアルコオルを満した、大きい硝子の壺の中に脳髓が幾つも漬つてゐた。彼は或脳髓の上にかすかに白いものを発見した。それは丁度卵の白味をちよつと滴らしたのに近いものだつた。彼は医者として立ち話をしながら、もう一度彼の母を思ひ出した。

「この脳髓を持つてゐた男は**電燈会社の技師だつたがね。いつも自分を黒光りのする、大きいダイナモだと思つてゐたよ。」

彼は医者の目を避ける為に硝子窓の外を眺めてゐた。そこには空き罎の破片を植ゑた煉

瓦塀ぐわべいの外に何もなかった。しかしそれは薄い苔こけをまだらにぼんやりと白しろらませてゐた。

三家

彼は或郊外の二階の部屋に寝起きしてゐた。それは地盤ゆゑの緩い為に妙に傾いた二階だつた。

彼の伯母はこの二階に度たび彼と喧嘩をした。それは彼の養父母の仲裁を受けることもないことはなかった。しかし彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じてゐた。一生独身だつた彼の伯母はもう彼の二十歳の時にも六十に近い年よりだつた。

彼は或郊外の二階に何度も互に愛し合ふものは苦しめ合ふのかを考へたりした。その間も何か気味の悪い二階の傾きを感じながら。

四 東京

隅田川はどんより曇つてゐた。彼は走つてゐる小蒸汽の窓から向う島の桜を眺めてゐた。花を盛つた桜は彼の目には一列の檻ぼろ樓のやうに憂鬱だつた。が、彼はその桜に、——江戸以来の向う島の桜にいつか彼自身を見出してゐた。

五 我

彼は彼の先輩と一しよに或カツフエの卓子テエブルに向ひ、絶えず巻煙草をふかしてゐた。彼は余り口をきかなかつた。が、彼の先輩の言葉には熱心に耳を傾けてゐた。

「けふは半日自動車に乗つてゐた。」

「何か用があつたのですか？」

彼の先輩は頬杖ほほづえをしたまま、極めて無造作に返事をした。

「何、唯乗つてゐたかつたから。」

その言葉は彼の知らない世界へ、—— 神々に近い「我」がの世界へ彼自身を解放した。

彼は何か痛みを感じた。が、同時に又歓びよろこも感じた。

そのカツフエは極小ごくさかつた。しかしパンの神の額がくの下には赭あかい鉢に植ゑたゴムの樹が一本、肉の厚い葉をだらりと垂らしてゐた。

六 病

彼は絶え間ない潮風の中に大きい英吉利語イギリスの辞書をひろげ、指先に言葉を探してゐた。

Talaria 翼の生えた靴、或はサンダル。

Tale 話。

Talipot 東印度に産する椰子^{やし}。幹は五十呎^{フイート}より百呎の高さに至り、葉は傘、扇、帽等に用ひらる。七十年に一度花を開く。……

彼の想像ははつきりとこの椰子の花を描き出した。すると彼は喉^{のど}もとに今までに知らない痒^{かゆ}さを感じ、思はず辞書の上へ啖^{たん}を落した。啖^{たん}を？ —— しかしそれは啖^{たん}ではなかつた。彼は短い命を思ひ、もう一度この椰子の花を想像した。この遠い海の向うに高だかと聳^{そび}えてゐる椰子の花を。

七 画

彼は突然、—— それは実際突然だつた。彼は或本屋の店先に立ち、ゴオグの画集を見てゐるうちに突然画と云ふものを了解した。勿論そのゴオグの画集は写真版だつたのに違ひなかつた。が、彼は写真版の中にも鮮かに浮かび上る自然を感じた。

この画に対する情熱は彼の視野を新たにした。彼はいつか木の枝のうねりや女の頬^{ほく}の膨^{ふく}らみに絶え間ない注意を配り出した。

或雨を持った秋の日の暮、彼は或郊外のガアドの下を通りかかつた。

ガアドの向うの土手の下には荷馬車が一台止まつてゐた。彼はそこを通りながら、誰か

前にこの道を通つたもののあるのを感じ出した。誰か？

——それは彼自身に今更問ひ

かける必要もなかった。二十三歳の彼の心の中には耳を切つた和蘭人オランダが一人、長いパイプを啣くはへたまま、この憂鬱な風景画の上へちつと鋭い目を注いでゐた。……

八 火花

彼は雨に濡れたまま、アスファルトの上を踏んで行つた。雨は可也かなり烈しかった。彼は水沫ぶきの満ちた中にゴム引の外套の匂を感じた。

すると目の前の架空線が一本、紫いろの火花を発してゐた。彼は妙に感動した。

彼の上着のポケットは彼等の同人雑誌へ発表する彼の原稿を隠してゐた。

彼は雨の中を歩きながら、もう一度後ろの架空線を見上げた。

架空線は不相変あひかはらず鋭い火花を放つてゐた。彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかった。が、この紫色の火花だけは、——凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた。

九 死体

死体は皆親指に針金のついた札をぶら下げてゐた。その又札は名前だの年齢だのを記してゐた。

彼の友だちは腰をかがめ、器用にメスを動かしながら、或死体の顔の皮を剥ぎはじめた。皮の下に広がつてゐるのは美しい黄いろの脂肪だつた。

彼はその死体を眺めてゐた。それは彼には或短篇を、——王朝時代に背景を求めた或短篇を仕上げる為に必要だつたのに違ひなかつた。が、腐敗した杏あんずの匂に近い死体の臭気は不快だつた。彼の友だちは眉間みけんをひそめ、静かにメスを動かして行つた。

「この頃は死体も不足してね。」

彼の友だちはかう言つてゐた。すると彼はいつの間にか彼の答を用意してゐた。——

「己おれは死体に不足すれば、何の悪意もなしに人殺しをするがね。」しかし勿論彼の答は心の中にあつただけだつた。

十 先生

彼は大きい櫛かしの木の下に先生の本を読んでゐた。櫛の木は秋の日の光の中に一枚の葉さへ動さなかつた。どこか遠い空中に硝子の皿を垂れた秤はかりが一つ、丁度平衡を保つてゐる。

——彼は先生の本を読みながら、かう云ふ光景を感じてゐた。……

十一 夜明け

夜は次第に明けて行つた。彼はいつか或町の角に広い市場を見渡してゐた。市場に群つた人々や車はいづれも薔薇色に染まり出した。

彼は一本の巻煙草に火をつけ、静かに市場の中へ進んで行つた。するとか細い黒犬が一匹、いきなり彼に吠えかかつた。が、彼は驚かなかつた。のみならずその犬さへ愛してゐた。

市場のまん中には篠懸すずかけが一本、四方へ枝をひろげてゐた。彼はその根もとに立ち、枝越しに高い空を見上げた。空には丁度彼の真上に星が一つ輝いてゐた。

それは彼の二十五の年、——先生に会つた三月目だつた。

十二 軍港

潜航艇の内部は薄暗かつた。彼は前後左右を蔽おほつた機械の中に腰をかがめ、小さい目金めがねを覗のぞいてゐた。その又目金に映つてゐるのは明るい軍港の風景だつた。「あすこに『金剛』も見えるでせう。」

或海軍将校はかう彼に話しかけたりした。彼は四角いレンズの上に小さい軍艦を眺めな

がら、なぜかふと阿蘭陀^{オランダ}芹を思ひ出した。一人前三十銭のビイフ・ステエクの上にもかすかに匂つてゐる阿蘭陀芹を。

十三 先生の死

彼は雨上りの風の中に或新らしい停車場のプラットフオオムを歩いてゐた。空はまだ薄暗かつた。

プラットフオオムの向うには鉄道工夫が三四人、一斉に鶴^{つる}嘴^{はし}を上下させながら、何か高い声にうたつてゐた。

雨上りの風は工夫の唄や彼の感情を吹きちぎつた。彼は巻煙草に火もつけずに飲^{よろこ}びに近い苦しみを感じてゐた。「センセイキトク」の電報を外套のポケットへ押しこんだまま。……

そこへ向うの松山のかげから午前六時の上り列車が一行、薄い煙を靡^{なび}かせながら、うねるやうにこちらへ近づきはじめた。

十四 結婚

彼は結婚した翌日に「来^き匆^{そう}々無駄費^そひをしては困る」と彼の妻に小言を言つた。しかしそれは彼の小言よりも彼の伯母の「言へ」と云ふ小言だつた。彼の妻は彼自身には勿論、彼の伯母にも詫^わびを言つてゐた。彼の為に買つて来た黄水仙の鉢を前にしたまま。……

十五 彼等

彼等は平和に生活した。大きい芭蕉の葉の広がつたかげに。—— 彼等の家は東京から汽車でもたつぷり一時間かかる或海岸の町にあつたから。

十六 枕

彼は薔薇の葉の匂のする懷疑主義を枕にしながら、アナトオル・フランスの本を読んでゐた。

が、いつかその枕の中にも半身半馬神のゐることには気づかなかつた。

十七 蝶

藻の匂の満ちた風の中に蝶が一羽ひらめいてゐた。彼はほんの一瞬間、乾いた彼の唇の上へこの蝶の翅つばさの触れるのを感じた。が、彼の唇の上へいつか捺なすつて行つた翅の粉だけは数年後にもまだきらめいてゐた。

十八 月

彼は或ホテルの階段の途中に偶然彼女に遭遇した。彼女の顔はかう云ふ昼にも月の光りの中にゐるやうだつた。彼は彼女を見送りながら、（彼等は一面識もない間がらだつた。）今まで知らなかつた寂しさを感じた。……

十九 人工の翼

彼はアナトオル・フランスから十八世紀の哲学者たちに移つて行つた。が、ルツソオには近づかなかつた。それは或は彼自身の一面、——情熱に驅られ易い一面のルツソオに近い為かも知れなかつた。彼は彼自身の他の一面、——冷ひややかな理智に富んだ一面に近い「カンデイイド」の哲学者に近づいて行つた。

人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかつた。が、ヴォルテエルはかう云ふ彼に人工の翼を供給した。

彼はこの人工の翼をひろげ、易^{やす}やすと空へ舞ひ上つた。同時に又理智の光を浴びた人生の歡びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すばらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら、遮^{さへぎ}るもののない空中をまつ直^{すぐ}に太陽へ登つて行つた。丁度かう云ふ人工の翼を太陽の光りに焼かれた為^{ため}にとうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘^{ギリシヤ}人も忘れたやうに。……

二十 械^{かせ}

彼等夫妻は彼の養父母と一つ家に住むことになつた。それは彼が或新聞社に入社することになつた為^{ため}だつた。彼は黄いろい紙に書いた一枚の契約書を力にしてみた。が、その契約書は後になつて見ると、新聞社は何の義務も負はずに彼ばかり義務を負ふものだつた。

二十一 狂人の娘

二台の人力車は人氣のない曇天の田舎道を走つて行つた。その道の海に向つてゐることは潮風の来るのでも明らかだつた。後の人力車に乗つてゐた彼は少しもこのランデ・ブウに興味のないことを怪みながら、彼自身をここへ導いたものの何であるかを考へてゐた。それは決して恋愛ではなかつた。若し^も恋愛でないとすれば、—— 彼はこの答を避ける為^{ため}に「兎^とに角^{かく}我等は対等だ」と考へない訣^{わけ}には行かなかつた。

前の人力車に乗つてゐるのは或狂人の娘だつた。のみならず彼女の妹は嫉妬の為に自殺してゐた。

「もうどうにも仕かたはない。」

彼はもうこの狂人の娘に、—— 動物的本能ばかり強い彼女に或憎惡を感じてゐた。

二台の人力車はその間に磯臭い墓地の外へ通りかかつた。蠣殻かきがらのついた粗朶垣そだがきの中には石塔が幾つも黒くろずんでゐた。彼はそれ等の石塔の向うにかすかにかがやいた海を眺め、何か急に彼女の夫を—— 彼女の心を捉へてゐない彼女の夫を輕蔑し出した。……

二十二 或画家

それは或雑誌の挿し画さゑだつた。が、一羽の雄鶏の墨画すみゑは著しい個性を示してゐた。彼は或友だちにこの画家のことを尋ねたりした。

一週間ばかりたつた後、この画家は彼を訪問した。それは彼の一生のうちでも特に著しい事件だつた。彼はこの画家の中に誰も知らない詩を發見した。のみならず彼自身も知らずにゐた彼の魂を發見した。

或薄ら寒い秋の日の暮、彼は一本の唐黍からきびに忽ちこの画家を思ひ出した。丈の高い唐黍は荒あらしい葉をよろつたまま、盛り土の上には神経のやうに細ぼそと根を露あらはしてゐた。

それは又勿論傷^{きず}き易い彼の自画像にも違ひなかつた。しかしかう云ふ発見は彼を憂鬱にするだけだつた。

「もう遅い。しかしいざとなつた時には……」

二十三 彼女

或広場の前は暮れかかつてゐた。彼はやや熱のある体にこの広場を歩いて行つた。大きいビルディングは幾棟^{むね}もかすかに銀色に澄んだ空に窓々の電燈をきらめかせてゐた。

彼は道ばたに足を止め、彼女の来るのを待つことにした。五分ばかりたつた後、彼女は何かやつれたやうに彼の方へ歩み寄つた。が、彼の顔を見ると、「疲れたわ」と言つて頬笑んだりした。彼等は肩を並べながら、薄明^{うすあかる}い広場を歩いて行つた。それは彼等には始めてだつた。

彼は彼女と一しよにゐる為には何を捨てても善^いい氣もちだつた。

彼等の自動車に乗つた後、彼女はぢつと彼の顔を見つめ、「あなたは後悔なさらない?」と言つた。彼はきつぱり「後悔しない」と答へた。彼女は彼の手を抑^{おさ}へ、「あたしは後悔しないけれども」と言つた。彼女の顔はかう云ふ時にも月の光の中にゐるやうだつた。

二十四 出産

彼は襖側^{ふすまぎは}に佇^{たたず}んだまま、白い手術着を着た産婆^{しんば}が一人、赤児を洗ふのを見下してゐた。赤児は石鹼の目にしみる度にいぢらしい顰^{しか}め顔^{がほ}を繰り返した。のみならず高い声に啼^なきつづけた。彼は何か鼠の仔^こに近い赤児の匂を感じながら、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。――「何の為にこいつも生まれて来たのだらう？　この娑婆^{しやば}苦^くの充ち満ちた世界へ。――何の為に又こいつも己^{おれ}のやうなものを父にする運命^{うしな}を荷^{にな}つたのだらう？」

しかもそれは彼の妻が最初に出産した男の子だつた。

二十五 ストリントベリイ

彼は部屋の戸口に立ち、柘榴^{ざくろ}の花のさいた月明りの中に薄汚い支那人が何人か、麻雀戲^{マアチアン}をしてゐるのを眺めてゐた。それから部屋の中へひき返すと、背の低いランプの下に「痴人の告白」を読みはじめた。が、二頁^{ぺエジ}も読まないうちにいつか苦笑を洩^{うそ}らしてゐた。

―― ストリントベリイも亦情人だつた伯爵夫人へ送る手紙の中に彼と大差のない讞^{うそ}を書いてゐる。……

二十六 古代

彩色の剥はげた仏たちや天人や馬や蓮の華はなは殆ど彼を圧倒した。彼はそれ等を見上げたまま、あらゆることを忘れてゐた。狂人の娘の手を脱した彼自身の幸運さへ。……

二十七 スパルタ式訓練

彼は彼の友だちと或裏町を歩いてゐた。そこへ幌ほろをかけた人力車が一台、まっ直すぐに向うから近づいて来た。しかもその上に乗つてゐるのは意外にも昨夜の彼女だつた。彼女の顔はかう云ふ昼にも月の光の中にゐるやうだつた。彼等は彼の友だちの手前、勿論挨拶さへ交さなかつた。

「美人ですね。」

彼の友だちはこんなことを言つた。彼は往来の突き当りにある春の山を眺めたまま、少しもためらはずに返事をした。

「ええ、中々美人ですね。」

二十八 殺人

田舎道は日の光りの中に牛の糞の臭気を漂はせてゐた。彼は汗を拭ひながら、爪先き上りの道を登つて行つた。道の両側に熟した麦は香ばしい匂を放つてゐた。

「殺せ、殺せ。……」

彼はいつか口の中にかう云ふ言葉を繰り返してゐた。誰を？ — それは彼には明らか

かだつた。彼は如何にも卑屈らしい五分刈の男を思ひ出してゐた。

すると黄ばんだ麦の向うに羅馬カトリック教の伽藍が

一字、いつの間にか円屋根を現し出した。……

二十九 形

それは鉄の銚子だつた。彼はこの糸目のついた銚子にいつか「形」の美を教へられてゐた。

三十 雨

彼は大きいベッドの上に彼女といろいろの話をしてゐた。寢室の窓の外は雨ふりだつた。浜木綿の花はこの雨の中にいつか腐つて行くらしかった。彼女の顔は不相変月の光の中にゐるやうだつた。が、彼女と話してゐることは彼には退屈でないこともなかつた。

彼は腹這ひになつたまま、静かに一本の巻煙草に火をつけ、彼女と一しよに日を暮らすのも七年になつてゐることを思ひ出した。

「おれはこの女を愛してゐるだらうか？」

彼は彼自身にかう質問した。この答は彼自身を見守りつけた彼自身にも意外だつた。

「おれは未だに愛してゐる。」

三十一 大地震

それはどこか熟し切つた杏の匂に近いものだつた。彼は焼けあとを歩きながら、かすかにこの匂を感じ、炎天に腐つた死骸の匂も存外悪くないと思つたりした。が、死骸の重なり重つた池の前に立つて見ると、「酸鼻」と云ふ言葉も感覺的に決して誇張でないことを発見した。殊に彼を動かしたのは十二三歳の子供の死骸だつた。彼はこの死骸を眺め、何か羨ましさに近いものを感じた。「神々に愛せらるるものは夭折す」——かう云ふ言葉なども思ひ出した。彼の姉や異母弟はいづれも家を焼かれてゐた。しかし彼の姉の夫は偽証罪を犯した為に執行猶予中の体だつた。……

「誰も彼も死んでしまへば善い。」

彼は焼け跡に佇んだまま、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。

三十二 喧嘩

彼は彼の異母弟と取り組み合ひの喧嘩をした。彼の弟は彼の為に圧迫を受け易いのに違ひなかつた。同時に又彼も彼の弟の為に自由を失つてゐるのに違ひなかつた。彼の親戚は彼の弟に「彼を見慣へ^{みなら}」と言ひつづけてゐた。しかしそれは彼自身には手足を縛られるのも同じことだつた。

彼等は取り組み合つたまま、とうとう縁先へ転^{ころ}げて行つた。縁先の庭には百日紅^{さるすべり}が一本、――彼は未だに覚えてゐる。――雨を持つた空の下に赤光りに花を盛り上げてゐた。

三十三 英雄

彼はヴォルテエルの家の窓からいつか高い山を見上げてゐた。氷河の懸つた山の上には禿鷹^{はげたか}の影さへ見えなかつた。が、背の低い露西亞人^{ロシア人}が一人、執拗^{しつこく}に山道を登りつづけてゐた。

ヴォルテエルの家も夜になつた後、彼は明るいうランプの下にかう云ふ傾向詩を書いたりした。あの山道を登つて行つた露西亞人の姿を思ひ出しながら。……

——誰よりも十戒を守った君は

誰よりも十戒を破った君だ。

誰よりも民衆を愛した君は

誰よりも民衆を軽蔑した君だ。

誰よりも理想に燃え上った君は

誰よりも現実を知つてゐた君だ。

君は僕等の東洋が生んだ

草花の匂のする電気機関車だ。——

三十四 色彩

三十歳の彼はいつの間か或空き地を愛してゐた。そこには唯苔こけの生えた上に煉瓦や瓦の欠片かけらなどが幾つも散らかつてゐるだけだった。が、それは彼の目にはセザンヌの風景画と変りはなかつた。

彼はふと七八年前の彼の情熱を思ひ出した。同時に又彼の七八年前には色彩を知らなかつたのを発見した。

三十五 道化人形

彼はいつ死んでも悔いがないやうに烈しい生活をするつもりだつた。が、不相^{あひかわらず}変養父母や伯母に遠慮勝ちな生活をつづけてゐた。それは彼の生活に明暗の両面を造り出した。

彼は或洋服屋の店に道化人形の立つてゐるのを見、どの位彼も道化人形に近いかと云ふことを考へたりした。が、意識の外の彼自身は、——言はば第二の彼自身はとうにかう云ふ心もちを或短篇の中に盛りこんでゐた。

三十六 倦怠

彼は或大学生と芒原^{すすきはら}の中を歩いてゐた。

「君たちはまだ生活慾を盛に持つてゐるだらうね？」

「ええ、——だつてあなたでも……」

「ところが僕は持つてゐないんだよ。制作慾だけは持つてゐるけれども。」
それは彼の真情だつた。彼は實際いつの間にか生活に興味を失つてゐた。

「制作慾もやつぱり生活慾でせう。」

彼は何とも答へなかつた。芒原はいつか赤い穂の上にはつきりと噴火山を露し出した。彼はこの噴火山に何か羨望に近いものを感じた。しかしそれは彼自身にもなぜと云ふことはわからなかつた。……

三十七 越し人

彼は彼と才力の上にも格闘出来る女に遭遇した。が、「越し人」等の抒情詩を作り、僅かにこの危機を脱出した。それは何か木の幹に凍つた、かがやかしい雪を落すやうに切ない心もちのするものだつた。

風に舞ひたるすげ笠の

何かは道に落ちざらん

わが名はいかで惜しむべき

惜しむは君が名のみとよ。

三十八 復讐

それは木の芽の中にある或ホテルの露台だつた。彼はそこに画を描きながら、一人の少年を遊ばせてゐた。七年前に絶縁した狂人の娘の一人息子と。

狂人の娘は巻煙草に火をつけ、彼等の遊ぶのを眺めてゐた。彼は重苦しい心もちの中に汽車や飛行機を描きつづけた。少年は幸ひにも彼の子ではなかつた。が、彼を「をぢさん」と呼ぶのは彼には何よりも苦しかつた。

少年のどこかへ行つた後、狂人の娘は巻煙草を吸ひながら、媚びるやうに彼に話しかけた。

「あの子はあなたに似てゐやしない？」

「似てゐません。第一……」

「だつて胎教と云ふこともあるでせう。」

彼は黙つて目を反らした。が、彼の心の底にはかう云ふ彼女を絞め殺したい、残虐な欲望さへない訣ではなかつた。……

三十九 鏡

彼は或カツエの隅に彼の友だちと話してゐた。彼の友だちは焼林檎を食ひ、この頃の寒さの話などをした。彼はかう云ふ話の中に急に矛盾を感じ出した。

「君はまだ独身だつたね。」

「いや、もう来月結婚する。」

彼は思はず黙つてしまつた。カツフエの壁に嵌めこんだ鏡は無数の彼自身を映してゐた。冷えびえと、何か脅^{おびやか}すやうに。……

四十 問答

なぜお前は現代の社会制度を攻撃するか？

資本主義の生んだ悪を見てゐるから。

悪を？ おれはお前は善悪の差を認めてゐないと思つてゐた。ではお前の生活は？

—— 彼はかう天使と問答した。尤^{もつと}も誰にも恥づる所のないシルクハットをかぶつた天使と。……

四十一 病

彼は不眠症に襲はれ出した。のみならず体力も衰へはじめた。何人かの医者は彼の病にそれぞれ二三の診断を下した。—— 胃酸過多、胃アトニー、乾性肋膜炎^{ろくまくえん}、神経衰弱、慢性結膜炎、脳疲労、……

しかし彼は彼自身彼の病源を承知してゐた。それは彼自身を恥ぢると共に彼等を恐れる心もちだつた。彼等を、——彼の輕蔑してゐた社会を！

或雪曇りに曇つた午後、彼は或カツフエの隅に火のついた葉巻を啣^{くは}へたまま、向うの蓄音機から流れて来る音楽に耳を傾けてゐた。それは彼の心もちに妙にしみ渡る音楽だつた。彼はその音楽の了^{をは}るのを待ち、蓄音機の前へ歩み寄つてレコオドの貼り札を検^{しら}べることにした。

Magic Flute——Mozart

彼は咄^{とつ}嗟^やに了解した。十戒を破つたモツツアルトはやはり苦しんだのに違ひなかつた。しかししもや彼のやうに、……彼は頭を垂れたまま、静かに彼の卓^{デエ}子^{フル}へ歸つて行つた。

四十二 神々の笑ひ声

三十五歳の彼は春の日の当つた松林の中を歩いてゐた。二三年前に彼自身の書いた「神々は不幸にも我々のやうに自殺出来ない」と云ふ言葉を思ひ出しながら。……

四十三 夜

夜はもう一度迫り出した。荒れ模様の海は薄明りの中に絶えず水沫しぶきを打ち上げてゐた。彼はかう云ふ空の下に彼の妻と二度目の結婚をした。それは彼等には歓びよろこだつた。が、同時に又苦しみだつた。三人の子は彼等と一しよに沖の稲妻を眺めてゐた。彼の妻は一人の子を抱き、涙をこらへてゐるらしかつた。

「あすこに船が一つ見えるね？」

「ええ。」

「ほばしら櫓この二つに折れた船が。」

四十四 死

彼はひとり寝てゐるのを幸ひ、窓格子に帯をかけて縊死いししようとした。が、帯に頸くびを入れて見ると、俄にはかに死を恐れ出した。それは何も死ぬ刹那せつなの苦しみの為に恐れたのではなかつた。彼は二度目には懷中時計を持ち、試みに縊死を計ることにした。するとちよつと苦しかつた後、何も彼もぼんやりなりはじめた。

そこを一度通り越しさへすれば、死にはひつてしまふのに違ひなかつた。彼は時計の針を

検べ、彼の苦しみを感^しじたのは一分二十何秒かだつたのを発見した。窓格子の外はまつ暗だつた。しかしその暗^{やみ}の中に荒あらしい鶏の声もしてゐた。

四十五 Divan

Divan はもう一度彼の心に新しい力を与へようとした。それは彼の知らずにゐた「東洋的なゲエテ」だつた。彼はあらゆる善悪の彼岸に悠々と立つてゐるゲエテを見、絶望に近い羨ましさを感じた。

詩人ゲエテは彼の目には詩人クリストよりも偉大だつた。この詩人の心にはアクロポリスやゴルゴタの外にアラビアの薔薇さへ花をひらいてゐた。若しこの詩人の足あとを辿^{たど}る多少の力を持つてゐたらば、——彼はデイヴアンを讀^をみ了り、恐しい感動の静まつた後、しみじみ生活的宦官^{くわんぐわん}に生まれた彼自身を輕蔑せずにはゐられなかつた。

四十六 謔

彼の姉の夫の自殺は俄かに彼を打ちのめした。彼は今度は姉の一家の面倒も見なければならなかつた。彼の将来は少くとも彼には日の暮のやうに薄暗かつた。彼は彼の精神的破産に冷笑に近いものを感じながら、（彼の悪徳や弱点は一つ残らず彼にはわかつてゐた。）

不変いろいろな本を読みつづけた。しかしルツソオの懺悔録さへ英雄的な諛うそに充ち満ちてゐた。

殊に「新生」に至つては、——彼は「新生」の主人公ほど老獠らうくわいな偽善者に出会つたことはなかつた。が、フランス・ヴィヨンだけは彼の心にしみ透とほつた。

彼は何篇かの詩の中に「美しい牡」を発見した。

絞罪を待つてゐるヴィヨンの姿は彼の夢の中にも現れたりした。彼は何度もヴィヨンのやうに人生のどん底に落ちようとした。が、彼の境遇や肉体的エネルギーはかう云ふことを許す訣わけはなかつた。彼はだんだん衰へて行つた。丁度昔スウィフトの見た、木末こずえから枯れて来る立ち木のやうに。……

四十七 火あそび

彼女はかがやかしい顔をしてゐた。それは丁度朝日の光の薄氷うすらひにさしてゐるやうだつた。彼は彼女に好意を持つてゐた。しかし恋愛は感じてゐなかつた。のみならず彼女の体には指一つ触さはらずにゐたのだつた。

「死にたがつていらつしやるのですつてね。」

「ええ。—— いえ、死にたがつてゐるよりも生きることあに飽あきてゐるのです。」

彼等はいかう云ふ問答から一しよに死ぬことを約束した。

「プラトニック・スウィサイドですね。」

「ダブル・プラトニック・スウィサイド。」

彼は彼自身の落ちていてゐるのを不思議に思はずにはゐられなかつた。

四十八 死

彼は彼女とは死ななかつた。唯未だに彼女の体に指一つ触つてゐないことは彼には何か満足だつた。彼女は何ごともしなかつたやうに時々彼と話したりした。のみならず彼に彼女の持つてゐた青酸加里を一罈^{ひとびん}渡し、「これさへあればお互に力強いでせう」とも言つたりした。

それは實際彼の心を丈夫にしたのに違ひなかつた。彼はひとり籐椅子に坐り、椎^{しひ}の若葉を眺めながら、度々死の彼に与へる平和を考へずにはゐられなかつた。

四十九 剥製の白鳥

彼は最後の力を尽^{つく}し、彼の自叙伝を書いて見ようとした。が、それは彼自身には存外容易に出来なかつた。それは彼の自尊心や懷疑主義や利害の打算の未だに残つてゐる為だつ

た。彼はかう云ふ彼自身を輕蔑せずにはゐられなかつた。しかし又一面には「誰でも一皮剥いて見れば同じことだ」とも思はずにはゐられなかつた。「詩と眞実と」と云ふ本の名前は彼にはあらゆる自叙伝の名前のやうにも考へられ勝ちだつた。のみならず文芸上の作品に必しも誰も動かされないのは彼にははつきりわかつてゐた。彼の作品の訴へるものは彼に近い生涯を送つた彼に近い人々の外にある筈はない。——かう云ふ氣も彼には働いてゐた。彼はその為に手短かに彼の「詩と眞実と」を書いて見ることにした。

彼は「或阿呆の一生」を書き上げた後、偶然或古道具屋の店に剥製はくせいの白鳥のあるのを見た。それは頸を挙げて立つてゐたものの、黄ばんだ羽根さへ虫に食はれてゐた。彼は彼の一生を思ひ、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだつた。彼は日の暮の往來をたつた一人歩きながら徐ろおもむに彼を滅しに来る運命を待つことに決心した。

五十 俘とりこ

彼の友だちの一人は発狂した。彼はこの友だちにいつも或親しみを感じてゐた。それは彼にはこの友だちの孤独の、——輕快な仮面の下にある孤独の人一倍身にしてみてもわかるのだつた。彼はこの友だちの発狂した後、二三度この友だちを訪問した。

「君や僕は悪鬼につかれてゐるんだね。世紀末の悪鬼と云ふやつにねえ。」

この友だちは声をひそめながら、こんなことを彼に話したりしたが、それから二三日後には或温泉宿へ出かける途中、薔薇の花さへ食つてゐたと云ふことだつた。彼はこの友だちの入院した後、いつか彼のこの友だちに贈つたテラコッタの半身像を思ひ出した。それはこの友だちの愛した「検察官」の作者の半身像だつた。彼はゴオゴリイも狂死したのを思ひ、何か彼等を支配してゐる力を感じずにはゐられなかつた。

彼はすっかり疲れ切つた揚句、ふとラディゲの臨終の言葉を読み、もう一度神々の笑ひ声を感じた。それは「神の兵卒たちは己をつかまへに来る」と云ふ言葉だつた。彼は彼の迷信や彼の感傷主義と闘はうとした。しかしどう云ふ闘ひも肉体的に彼には不可能だつた。「世紀末の悪鬼」は實際彼を虐んでゐるのに違ひなかつた。彼は神を力にした中世紀の人々に羨しさを感じた。しかし神を信ずることは——神の愛を信ずることは到底彼には出来なかつた。あのコクトオさへ信じた神を！

五十一 敗北

彼はペンを執る手も震へ出した。のみならず涎さへ流れ出した。彼の頭は○・八のヴェロナアルを用ひて覚めた後の外は一度もはつきりしたことはなかつた。しかもはつきりし

てゐるのはやつと半時間か一時間だつた。彼は唯薄暗い中にその日暮らしの生活をしてゐた。言はば刃のこぼれてしまった、細い剣を杖にしながら。

（昭和二年六月、遺稿）